

I S /勇者王ガオガイガー—白き翼の戦士と勇気ある者—

オウガ・Ω

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

十数年前、一人の少女が少年の夢を叶えるため、成層圏を超え無限の宇宙へ向かう夢の翼《IS》を産み出した

《夢の翼―IS―》は少女が望んだモノとは全く違う形で世界に広がり数年、世界で初めてISを動かした少年《織斑一夏》が現れた事で歴史の影に潜んでいた犯罪結社《バイオネット》が《亡国機業―ファントムタスク―》をも自ら取り込み動き出し始めた

バイオネットの魔手から皆を守る為、命の宝石《Gストーン》を携えた少年《獅童燐》がIS学園に転入して来た時、黒き鋼の勇者《勇者王ガオファイガー》がその勇姿を顕しバイオネットの野望を打ち砕く！

キャラの一部はかなりイイ人（ファントムタスクの三人）になります

あとコラボも大歓迎です

ナハト・リコリスさんのIS（インフィニット・ストラトス）も楽しく過ごしたい転生者とのコラボを始めました

pixivにも試験投稿開始しました

目次

キャラクター紹介	バイオネット総帥《沙華堂牙儘》編	1
キャラクター紹介		4
世界観及び年代表		16
第一章 勇者王誕生！		
プロローグ		25
第一話 勇者王、IS学園に顕る!!		31
閑話 イタミ―PAIN―		40
第一話 勇者王、IS学園に顕る(二)		44
第二話 獅子の咆哮		62
第三話 出会い		70
第四話 赤と青(前編)		80
第四話 赤と青(後編)		90
第五話 事件後		108
第六話 デート♪		115
第七話 守りの左手		124
第七話(裏) 紫の守護者		142
第二章 兄弟竜／龍顕る！		
第八話 兄妹		147
第八・五話 マドカ		164
第九話 転校生		170
第九・五話 三身一体		185
第十話 緑の髪の少女		195
閑話 覚醒―メザメ―		206

第十・五話	竜崎疾風	213
第十一話	空を征するもの	219
閑話	師と弟子	236
第十二話	クラスメイトの正体（前編）	242
第十二話	クラスメイトの正体（後編）	261
閑話	双龍と甲龍!!	271
第十二・五話	嘲笑する《狂科学の信奉者》、旅立つ若き《黄金の牡羊》	283
第十三話	バイオネットの影	301
第十三・五話	戦士―キオク―	325
閑話	黄金の翼―クルイシキカイノカミ―	332
第十四話	黒兎	342
第十四・五話	受け継がれる獅子の魂、偽りの面に秘めた心	352
第十五話	風と雷（前編）	359
第十五話	風と雷（後編）	379
第十六話	転校生、その名は……	395
第三章	滅ぶべき右腕、破滅の声	
第??話	兆候	409
第十七話	奪われたガオーマシン!!	413
第十八話	異世界より訪れし者、奪われし者との邂逅	431
第十八・五話	不協和音―双龍の決断―	443
第十九話	黒い鋼の悪魔	463
第二十話	弾劾の剣!勇者王復活!	505
GIS―00《G》ガイガーおよびガオガイガー。ボルフォッグ、超		

竜神、撃龍神紹介。AI技術設定	530
第二十一話 訪れた平穩、友の帰還（前編）	544
第二十一話（裏） 嘲うモノ達	567
第二十二話 訪れた平穩、友の帰還（後編）	580
閑話 光なき双龍、その手をとる乙女	594
第二十二・五話 平穩（前編）	600

キャラクター紹介 バイオネット総帥《沙華堂牙儘》 編

沙華堂 牙儘（シャカドウ ガラン）

性別：男

年齢：16？

バイオネット創始者にして、バイオネット総帥。そしていわゆるチート転生者である…しかし転生時におよそ千年前のIS世界に跳ばされ、さらに自分と同じ《転生者》兄弟に歪んだ本心を悟られ裏切られたことに憤慨、転生特典として貰った三体のISの一つ《ゴッドΣグラヴィオン》で地球に存在する解放点から《プラネットエナジー》を吸い上げ滅ぼそうとする

しかし地球の危機を感じ再び空へ上がったアーク級11番艦《J・フォートレス》と戦闘、終始圧倒し大破寸前におい込む。が捨て身のJフェニックスとESミサイルにより宇宙観測点《ボイド》へ転移させられ、千年後に神から貰った転生特典《……》を使いようやく地球へ帰還（本編開始80年前）。自らを裏切った《転生者》兄弟を探しながら《……》を繰り返しバイオネットを設立、同時に亡国機業を取り込み世界規模の闇市場を手に様々な生体兵器、AT兵器、バイオケミカルウェポンの莫大な売り上げを元に自身の父親《……》が経営する会社へ流し規模を拡大させ様々な分野で有名（イカれ度マックス）な人間達を勧誘し組織の地盤を固めゾンダー博士の理論を用いゾンダーメタル精製に着手する

十年前の白騎士事件時には核ミサイル発射を遠隔操作、消滅を目論むも失敗。八年前のモジュールO1襲撃事件、七年前の犬神一族殲滅にも自ら開発したISゲシュペンスト、IS迅雷（両機無人）を指揮していた

夢を極端に嫌い、人が不幸になる様に最高の喜びを感じ自らをクリ

エーターと称し、相手の弱みを確実に握るため常に盗聴およびボイスレコーダ（髪の毛サイズのモノからナノマシンサイズまで牙儘が制作した）を所持している

燐への施術内容をルーレットで決めるなど、人の命をモノ扱いする事を平然とできる人格

転生特典は以下の通り

1：専用P.Sとして超重神ゴッドΣグラヴィオン、太陽の勇者ファイバード、^{?????}。（コアには深いつながりを持つ人物の魂が入っている）

2：ハイゼンベルクの悪魔

クロスアンジュに登場するエンブリヲの能力：白き翼と勇氣ある者世界に存在する牙儘の肉体は《思念端末》にすぎず《本体》はありとあらゆる世界を観測できる《ある世界》に眠らされている。そのため末端である肉体を何度殺そうと、消滅させようとも瞬く間に変わりの身体を生み出し現れる

牙儘を倒すには牙儘本体のある世界を特定し、不動統夜に託された《超重弾劾剣》、《十二人の黄金の魂》の力を借り行くしかない

3：スパロボシリーズ（敵味方含めた）機体を生み出せる知識（現在、真・龍王機、デイス・アストラナガン、ガリルナガン、ネオ・グランゾンも制作済み、しかしデイス・レヴを動かすために負の力が足りず、プラーナ不足、トロニウムエンジンの高出力調整、龍王機稼働のための念者不足に年数が掛かるため他世界への提供をもくろんでいる）

4：シユウ・シラカワと同スペックの頭脳、鍛えれば鍛えるほど強くなる身体（現在、牙儘はジャンさんの作品勇者指令ダグオンA.Sで、南方との戦いで敗れたことがきっかけで身体を鍛え始めた……：現

在は……》》》

5 : ????

6 : 一度でも触れた相手の力（転生者の転生特典）を奪いとり自らのモノとする 《強奪》能力（内容が酷似するモノは除外）

7 : 冥府の王 《ゼオライマーX》

牙儘が持つ知識、バイオネットで培った技術をつぎ込み完成させつつある最強にして最悪の力……この世の理を越えた冥府の王《ゼオライマーX》。その力は無限の力を与え不完全ながら不老不死の恩恵を与えている。

牙儘の本体がある世界にいる少女の子宮内に着床した次元ジョイントから性交という名の陵辱をする事であらゆる理を越えた力を振るう。次元ジョイントが稼働する限り、牙儘は死なないし、少女も死なない。例え肉体が原子レベルに粉碎されても瞬時に再生する

等々……今はGGG殲滅を最優先にしながらIS学園の生徒の誘拐（ゾンダーISコア素体と利用するため）、世界各地を混沌へ導くべく行動する

キャラクター紹介

獅童燐

〔IMG11214〕

性別：男

年齢：15

本編の主人公の一人

真つ直ぐかつ前向き、明るく笑いながら未来を掴もうとする主人公にして勇者王：顔も知らない誰かの為に命がけで戦う一方、IS学園に通う生徒たちの未来、夢を守るために戦い、どんな状況におかれても不屈の精神で切り抜け絶対にあきらめない：そして自身の夢《ISで宇宙の彼方へ向かう》事への努力を惜しまない。その反面、親友である一夏同様に鈍感？

数年前、モジュール01を襲撃したバイオネットに捕らえられ常軌を逸したサイボーグへの改造をされる

二年後に救出され《オリジナルGストーンVII》により命を長らえるも何時、強殖細胞（人体と機械との拒絶反応を抑える万能細胞として生み出された、しかし制御不能）に喰われるかもしれない命。もがき足掻きながらも必死の《生》を歩み、受け継いだ命とGGGの仲間たちと共にバイオネットの野望をくじく為、人を、命を護る為に戦い続ける

好きな食べ物、牛丼・ゴルディオンクラッシュャー盛り、中華料理

嫌いな食べ物はコンニャク（幼少期に喉をつまらせかけた）

趣味

読書（歴史書、宇宙開発、自伝的小説）

特技

徒手空拳

御凰流古武術

???????

サイボーグ燐

{IMG11296}

燐がイークイップした姿。全身を保護するために稼働するGSジエネレーターから生まれる熱を放熱冷却するコート《インタークーラーコート》を展開、その上に《IDアーマー》が付く。常に放熱する燐の体を冷やし生身の部分を守る

左腕の腕部装甲には近接装備《ウィルナイフ》が収納

パンチ力 1. 5トン

キック力 2. 5トン

100メートルを5秒で走破

《ハイパーモード》時は約三倍の力を得ることが可能だが肉体へかかる負担が尋常でないため99.9秒のリミッターを設けている

各種新陳代謝と《強殖細胞》、《特殊形状記憶流体金属ゼノニクス》の制御の半分を《GSTーン》でまかなっているが不完全なものである為に毎戦闘時にアジャスタ必要だった。現在はシャルのお陰でほぼ完全な状態を維持することが可能となった

三年前まで使えた聖闘士としての力は一切使えない：何故ならば

《獅子座のレグルス》の魂と小宇宙が込められた心臓は燐の小宇宙と共に細胞《強殖細胞》の暴走と浸食を全力で押さえ込んでいた。使おうとした場合、Gストーンにより辛うじて制御されている《強殖細胞》が暴走し瞬く間に喰われていき最後には死を迎える

それ以上に、燐は人間同士の戦いには《聖闘士》の力を絶対に使わないと固く決めている……

バイオダイナミクス《RIN》

バイオネットが産み出した要人暗殺用サイボーグの試作タイプ

その正体はバイオネットのゾンダー博士、フリール博士の手により悪辣な遺伝子、サイボーグ手術を施された獅童燐

《誰にも怪しまれない存在である素材〔子供〕をサイボーグ化、要人がいる場所へ送り込み警戒されることなく暗殺任務を遂行する》というコンセプトにより改造された

最大の特徴は骨髄内へ移植された特殊形状記憶流体金属《ゼノニクス》と度重なる遺伝子改造により変質した細胞《強殖細胞》と有機結合し生成展開される《高周波ブレード》、当然全身の筋肉は人工のものへ置き換えられ肝臓、肺、目もエネルギー伝達の為の疑似神経ケーブルの処置をされ完成した

しかし高周波ブレード形成、発動時に生まれる超高温の廃熱が間に合わず肉体が加熱。さらに《強殖細胞》が肉体の健全な部分を侵食し一定期間の栄養をとらないと瞬く間に侵食し命を奪う事が判明するが、ある《遠峰コーポレーション》へ納品を決めていたバイオネットは使い捨ての暗殺用サイボーグとして納めることを決めコールドスリープした日にID5が秘密研究所へ侵入しやむなくコールドスリープを解きマインドコントロールをかけた燐を差し向けるもID5《ホワイトラビット》こと篠ノ之束と接触したことで過去の記憶を取り戻してしまい人体実験していた子供たちも奪還され、研究所は完

全に破壊されてしまう結果になった

強殖細胞

ソレ自体は何の特異性を持たない。しかし生物を取り込むと生態機能強化、進化し無限に増殖し《強殖生物》となる細胞。バイオネットの数ある計画《プロジェクト・B（バイオ・ブーステッド）》で生み出された究極の万能細胞……だった

……生物を無限に取り込み自己進化する細胞は人体に触れば瞬く間に浸食、強化し制御不能の化け物を生み出す

燐はその献体にフリール博士、ウエスト、ゾンダー博士の生体実験に供されるも辛うじて成功。しかし危うい状態には変わらない

過去にバイオネットは燐の体細胞クローンを作ろうと細胞を取り試みるも瞬く間に増殖、バイオハザードが起こり研究所を牙檻自らが生み出したヒュツ☆☆☆☆の☆ラック☆ールキャ☆ンで完全に消滅させた

御鳳蓮

性別：男

年齢：22（享年）

御鳳流古武術継承者にして、超自然科学の権威……しかし両親の死を期に学会から退き富士山麓にある御鳳流古武術道場に妹《御鳳織恵》と共に隠遁生活を送るも、恩師である世界十大頭脳《獅童レイジ》の頼みにより、サイボーグの肉体を受け入れられず《暴走》を繰り返す燐を預かる。切りかかってくるも投げとばし御鳳流古武術を実践形式で学ばせ心身共に鍛え上げた《二人の師》の一人

蓮の家系は身体的ハンデをもって生まれる為《極度の弱視》を患う

も体重150キロある燐を軽くないなし、気を用いた技で何度も投げ飛ばした：時に厳しく、穏やかに諭し燐を人として鍛え上げ、燐からは《世界最強の武術者》《師匠》とよばれて慕われていた

しかし二年前、燐を回収しに来たバイオネットの回収部隊により力及ばず瀕死の重傷をおいながら、瀕死の燐に自らの生命力《神氣》を与えて死亡した

ゆくゆくは妹《織恵（オリエ）》と結ばれて御凰流古武術を正式に継いで欲しいと願っていた

趣味

歴史書および自然がもつ自浄作用についての考察
御凰流古武術を燐へ（妹オリエ）すべてを託す事

御凰オリエ（ごおうおりえ）

性別：女

年齢：13（享年）

御凰蓮の妹で御凰流古武術を学び、兄である蓮には劣るモノのありとあらゆる氣を捉え巡らせ身体能力を強化でき御凰流古武術《刀剣術》なども修めている

しかし：生まれながらにして視力もなく、声も出せないかわりに人の持つ悪意に敏感に反応し極度の対人恐怖症（身内を除く）を患っていた。

燐がサイボーグの肉体の制御ができず怒り任せに蓮に切りかかり逆に投げ飛ばされ気絶した日の晩、うなされ苦しむ燐の手を握った時にみえた《深く傷ついた心》、その奥に包み込むような大きな《宇宙（コスモ）》を感じとってから常に傍にいたようになった

それ以上に、自分の声（心の声、言霊）を初めて聞き応えてくれた燐に惹かれ、レグルスにからかわれながら思慕の念を募らせていった

無論、燐も同じ想いを持っていた

しかし、二年前に突然のバイオネット襲撃により兄をかばう形で左腕右足を失い出血多量によるショックにより儂い命を散らした

その日はレグルスと燐が聖闘士とし最終試練の為に隠っていた富士の風穴からの修行から帰ってくる日に勇気を出して想いを告げようとしていた日だった

好きな食べ物 和食

好きな事 燐と一緒に寝ること

嫌いなもの 人の悪意

獅子座（レオ）のレグルス

性別：男

年齢：十五歳？（享年）

三世紀前？に起きた冥王ハーデスとの聖戦で天に描かれた《ロストキャンパス》内で冥界三巨頭ラダマンティスと戦い死亡した女神アテナ率いる最強の12人の黄金聖闘士の一人にして歴代最強の獅子座にして、燐の《二人の師》の一人

……命を落としたハズのレグルスが目を覚ましたのは、御凰流古武術道場近くの風穴。黄金に輝く《獅子座の聖衣櫃》と共に見つけた織恵に看病され蓮ともいつの間にか意気投合してしまい友誼を結ぶも、世界を知るために一年間放浪し再び戻った際、燐と出会い内に眠る《電光纏う黄金の獅子》を見て御凰流古武術、そして自らの後継者として鍛え始めた

…鍛えれば鍛えるほどに強くなる《電光纏う黄金の獅子》の小宇宙に《ダイヤの原石》以上の才を見いだし燐の頼れる兄貴分と慕われな

がら父イオニアの教えを伝えた。自らが再び生を受けた意味を悟り始めた矢先に御凰流古武術道場がバイオネットにおそわれ織恵が死に、蓮は重傷を負い心臓を潰され瀕死だった燐に自らの《黄金の小宇宙》を込めた心臓を与えて消滅した。

レグルスの黄金聖衣（ゴールドクロス）《獅子座の聖衣》は御凰流古武術道場跡に皆の墓標を護るように未だに鎮座している

犬神霧也（いぬがみきりや）

年齢：16

身長：170センチ

体重：65キロ

白髪にややアルビノ気味の肌、赤い目と首に巻いた白いマフラーに紺色の制服を纏っているのが特徴

身体能力は常人より遥かに高く、物事を冷静に判断する頭脳を併せ持ち、主に要人警護と諜報活動を得意とする。現在は日本政府直属秘密防衛組織諜報部とロシア政府からの依頼により更識家令嬢《更識簪》の護衛を務めている

なお、霧也は古くから伝えられる《犬神流忍術》最後の継承者でもあり乙女座バルゴの黄金聖闘士

過去にバイオネットのゾンダー博士、フリール博士の手により《リミピッドチャンネル》能力を無理矢理開花させられ、常に世界中の間からの意識情報が霧也の脳《記憶中枢》へ流れた結果、イヌガミキリヤという人格を形成された

現在は能力オンオフ機能が内蔵されたマフラーにより制御ができるが、能力解放は30分が限度であり、それを超えると自我が崩壊する

それを制御すべく、《この世でもっとも神に近き者》がいるというインドの奥地にあるアジャンター石窟へ向かうも二百年以上前に亡くなっている事をしり、しかし何かを悟ったハズと信じ坐禅していたが

限界を迎えたときに見えた光へ意識を飛ばした際、ようやく出会いを果たし二年間の師事をへて日本へ帰還、乙女座の黄金聖位がある場所に隠し、纏うべき日《聖戦》を待つ

犬神霧也としての記憶は僅かに残っており、幼き頃に交わした《更識姉妹との約束》だけが鮮明に残されている。ただ二人には極力関わらないように護衛任務を続けている

専用G―I Sは諜報、索敵、要人警護に特化した《ボルフオツグ》、サポートパッケージ《ガンマシン》で任にあたっている

趣味：坐禅、寺社仏閣巡り、鍛錬……あとは秘密

好きなもの：沙羅双樹の花、誕生日に二人から貰った白いマフラー

嫌いなもの：外道、バイオネット

竜崎凍矢（りゅうざきとうや）

年齢：16

身長：165センチ

体重：55キロ

バイオネットI Sが襲撃した際に遅れて現れた隣人の助っ人。黒くやや癖がついた長めな髪に端正な顔立ちで冷静な性格の持ち主

母《竜崎乙女》は数年前に逃亡先のイギリスでバイオネットの手で他界しており身内は一卵性双生児の弟《疾風》だけしかない。いつも弟が道に迷うためどうすれば方向音痴がなおるかが最近の悩みで

もある

宇宙開発公団では特殊災害対策ツール開発主任、GGGではGGGメカニクス副主任を兼任している…ペンシルランチャー、硬化弾、凍結弾などの各種災害時におけるレスキューツール開発の大半が凍也が担当している

好きな女性のタイプは金髪ロングで巨乳、なおかつお嬢様が好みであることがGGGイギリスのボンド捜査官の調べで明らかになっている

趣味：土いじり、完全無農薬農作物栽培（主に野菜）

好きなもの：紅茶、どこまでも広がる畑、氷、セシリアのサンドイッチ

嫌いなモノ：バイオネット、人を人と思わない外道、礼節無きもの

専用G—ISはG—IS—03《炎竜／氷竜》そして合体G—IS—03S《超竜神》

竜崎疾風

凍也の双子の弟。外見、性格、口調は似ているが極度の方向音痴で宇宙開発公団に向かったはずなのに中国、秘境《五老峰》、ドイツまでいってしまふほど

途中、迷い混んだ中国奥地の秘境《五老峰》で編み傘を被った仙人《童虎》より神秘の闘法《小宇宙》を教わり廬山の大瀑布を逆流させ《小宇宙（コスモ）》を会得した

趣味は中華料理全般、老師より教わった廬山昇龍覇、廬山双龍覇、廬山龍飛翔、????、????、漢方薬調合など

好きなモノ 中華料理指南書、中国故事成語、李氏八極拳、世界地
図、ラウラ、鈴

嫌いなモノ、熊、バイオネット、義無き者、男らしくないもの

道に迷ったあげく中国まで来た疾風はバイオネットの気象兵器を破壊。人命救助中に中国代表候補生《凰鈴音》と出会い共に協力した直後に別れ、五老峰、そしてドイツでラウラ・ボーデヴィツヒ率いる部隊に捕まり日本へ連れてこられるがラウラの気紛れで拘束を解かれるが食事をないがしろにする態度に激怒、以降ラウラの為に食事を作ることに

最近、ラウラがご飯を食べる姿をみて可愛いなと思いついてる：（なお兄である凍也とちがいが好みの女性のタイプは微（美）乳でロングであることがGGGドイツ諜報部の調べで明らかになっている）

老師

中国奥地、五老峰と呼ばれる秘境にある廬山の大滝の前に座す老人

五老峰に迷い混み、大熊との戦いで瀕死の重傷を負う疾風を助けようとしたが内に秘めた小宇宙《コスモ》が目覚めさせ危機を乗り越えた姿とその礼儀正しさを気に入る廬山の技と小宇宙を伝授した

その正体は黄金聖闘士、天秤座《ライブラ》の童虎。《冥王ハーデス》との最後の聖戦の後、地上へ出た魂が五老峰に漂う霊気でかりその血肉を得た

疾風を最後の弟子として育て成長を見届けると《在るもの》を残し再びこの世から去った

童虎以外にあと一人この世にとどまる人物がいる

獅童レイジ

世界十大頭脳の一人にしてサイバネテクス・オーガニクス、生体医学、新世代の流体エネルギー、新合金素材、新型動力機関の権威

性格は気さくでお茶目、ライの父にして隣の祖父。天才東の噂を聞き篠ノ之家へ訪れ、その優れた才能を見いだし何度か公団、家へ招き息子夫婦ライ、マヤと引き合わせた。

何もかもに対し諦め、閉塞感に満ちていた東に様々なことを教え見守りながら外宇宙への架け橋となるモジュール01建設とGクリスタル研究を共に進めていった

：過去に国連と日本政府直属対特殊テロ防衛隊《ID5》に所属しコードネーム《ブルーレオン》としてバイオネット、《ある財団》とゴールドタイガー《大河幸太郎》、シルバーピューマー《火麻激》、ブラックウォルフ《織斑千冬》、ホワイトラビット《篠ノ之束》と共に戦いを繰り広げていた

現在、82歳

ガオファイガー専用ツール紹介

《デイバイディング・ドライバー》

都市部への被害を完全になくすために開発されたハイパーツール

原理は地面へ打ち込まれたデイバイディングコアを基点にレプリケーションフィールドの次元干渉反発作用により空間を押し広げアレスティングフィールドで固定、直径10キロの歪曲空間《デイバイディングフィールド》を生み出す。

これにより周辺への被害を完全に押さえることが可能である

なお開発に当たっては別世界から様々な角度からGクリスタル解析の協力に來た束（テツカマン）と束、レイジ、三人が理論を提唱し共同開発し完成を見た

ただダイバイディングフィールドは非常に危ういバランスで構成されているため、現在GGGでは其れへの対策を講じられてい

世界観及び年代表

世界観

原作とほぼ同じ、ただ次世代環境機関《NEO》を母体とした《モーディワープ》が存在していたが、未知の病気《アルジャーノン》が発生、終息へ向かうと同時期にモーディワープ本部がメタンハイドレード採掘中の事故により消滅。その遺産とも言える技術を狙い《バイオネット》と手を組んだ《フアントムタスク》が水面下で暗躍するものの、国連及び日本政府直属「対特殊テロ防衛隊」《IDS》の手により大規模な研究所壊滅により大打撃を受け本編開始まで活動を休止していた

ISの登場で宇宙開発が急速に進むと思われたが、数年前に起こった宇宙開発公団所属衛星軌道上実験施設《モジュール01》の爆発事故で総責任者である獅童ライ、マヤ夫妻、各機関から集められた優秀なスタッフが死亡して以降停滞している

年代表

遙か彼方の銀河、三重連太陽系にある紫の星でストレス消去を目的として産み出されたマスタープログラムが暴走、原種及びゾンダーが発生

赤の星、緑の星からGSTとメカノイド技術を提供されサイボーグ師団《ソルダート》、アーク艦隊、緑の星に生まれたラティオを研究し原種核浄解と対消滅を目的とした生体兵器アルマを産み出すが実戦配備が間に合わず赤の星は機界昇華され生き残ったソルダート師団、アーク艦隊は単独で戦いを挑む

???

緑の星の指導者カイン、機界昇華される寸前ラティオをギャレオンに、もう一つの《Gクリスタル》にラティオと同じ力を有する少女をのせギャレオリア彗星へ送り届けた後、緑の星と運命を共にする

西暦???年、沙華堂牙儘、ジーク、ヒューギ（ジーク、ヒューギは事故で死んだ二人の兄弟が原典キャラに憑依転生）。トラブルにより物語開始前に転生してしまう。

西暦???↓785年。ジーク・エリクマイヤー、ヒューギ・エリクマイヤー兄弟は原作とは違う良い方向に介入を進めるべく動き出す。その最中にヘリオス・オリンパスと出会い友となるも、仮面を脱ぎ捨てた牙儘の本心を知り、ヘリオスと共に戦いを挑むも転生特典であるISを奪われて友ヘリオスの犠牲により拠点を完全破壊し離脱に成功した。牙儘から命を狙われながらも、友が護ろうとした世界を守るべく行動をはじめた

西暦786年

ソルダート師団認識番号J-011、トモロ搭載が間に合ったJアークと共に原種の尖兵と戦いの最中ESワープで移動中、メイン動力炉が不調を起こし未知の空間へ落ち込み、やむ終えずESAウト。三重連太陽系と似た環境を備えた青い惑星《地球》へ到着。

衝撃で目覚めたアルマを育てるため近くにあった小さな社に住むことになる

後に篠ノ之神社と呼ばれ白き甲冑の武士が乗ってきた船は長い信仰の対象となった

西暦794年、都が桓武天皇により平安京へ遷都。

同時期、Jはアルマに見初められた青年と出会うがなぜか真剣勝負に：何度打ち負かしても立ち上がり遂に一太刀当てた事をきっかけにアルマとの仲を認める

西暦799年

謎の異常気象が世界中で発生：惑星規模の危機を感じたJは調査

のため、中破し海に沈んだJアークの修復作業を行うため篠ノ之神社をあとにする

途中立ち寄った京の都で修羅姫と出会い意気投合し互いの剣技を披露した

西暦800年

修復を終えたJアークと共に衛星軌道上に上がり未知の敵……：プラネットエナジーを吸い上げるゴッドΣグラヴィオンと邂逅、メガフュージョンしキングジェイダーで交戦するも追い詰められる

だが必ず守るという信念が込められた捨て身のJフェニックスで牙艦をゴッドΣグラヴィオンごと、ESミサイルでボイドへの撃退に成功するもキングジェイダーは大破……そのまま大気圏に突入し残った残骸は海の底へと沈んでいった

西暦8??年、ジーク、ヒューギはギリシャで女神アテナ、テイターン神族との戦いに巻き込まれた。二人が傷ついた人々を身を挺し助けたのをみた女神アテナはジーク、ヒューギをサンクチュアリに招き入れ事情を聞き、牙艦に対抗しうる神秘鋼《アルカナオリハルコン》精錬方法、自らの血《霊血（イーコール）》を手渡した後、テイターン神族との最期の戦いに生き残った六人の黄金聖闘士と共にテイターン神族の本拠地《次元の狭間》へ向かうのを二人は見届けた

西暦9??年、ジークは《サン・ジェルマン》ヒューギは《ガツシュ・ラ・ノワール》と名前を変えイギリス、ロシア、ドイツ、中国を転々としながら医学知識、農耕、金属精錬技術を伝え人々から《錬金術師》、歳が変わらない事から《時間旅行者》とも呼ばれ始めていた

西暦14??年、五世紀ぶりにサンクチュアリへ訪れる。教皇は客人として招き入れた。若き黄金聖闘士たちと交流を深めながらサン・ジェルマンは建築技術を、ガツシュは旅の途中で見つけた聖衣修復に必要なスターダストサンド、ガマニオンの鉱床を教え数年間、滞在し

再び旅をはじめた

二人は歴史の転換期に緩やかな干渉をしながら、破滅的な危機の回避に力を尽くしていく。そんな中、空に《巨大な絵》が広がる異変が起こったのを見て胸騒ぎを感じサンクチュアリへと向かうも入り口が閉ざされていた。

西暦19??年、ガツシユ（ヒューギ）、サン・ジェルマン（ジーク）の前から姿を消す：何か理由があると感じながら、牙檻に対抗しうる組織の地盤作りを始めるために、《サンジェルマン商会（後のサンジェルマン・ファンデーション）》を設立。

破格の待遇と当時として珍しいフレックスタイム採用、福利厚生、終身雇用、年金、家族手当により社員の勤労意欲は爆発的に向上。経営危機に陥ることは無い事で一躍、政財界のトップに立つ

各国首脳、王族からもサンジェルマン伯爵は『謎は多いが最も信頼に足る人物』と証されている

同時期、ガツシユ（ヒューギ）は、フランスで一人の日本人女性と出会い結ばれる。同時にG因子による永久新陳代謝を解いた……

本編開始8?年前

沙華堂牙檻、ボイドより帰還。同年より危険思想をもち学界から追放された科学者達をスカウトする一方でバイオネットを創設、表での顔としての企業《遠峰コーポレーション》設立。さらにファントムタスク《亡国機業》と手を結ぶ：新兵器開発とバイオネットの新商品《ゾアティック・ウエポン》（旧）《をある暗黒結社《S》に提供、海鳴を実験場を選ぶ

しかし、三人の少女、四人の仮面の戦士たち《D》の手で《ゾアティック・ウエポン計画》は破綻、一時凍結に追い込まれたと同時に《D》たちと少女達は姿を消した

本編開始3?年前

オーボス軍襲来。侵略行為に対し防衛軍《GDE》と戦闘開始、その最中に《青いロボット》が姿を現しオーボス軍を撃破。《隊長》と呼ばれる少年率いるロボット達がオーボス軍から地球を防衛、《ある女性》の言葉 《星の運命を共にする者たちよ……星と想いを共にせよ。星と願いを共にせよ……黄金の光に集いきて、新たな道を照らすであらう》と共に呼びかけることでオーボスを撃破に成功。以降、彼らロボット達を《勇者》と呼び、《隊長》は勇者を率いる《勇気ある者》として長く語られることになった

本編開始25年前

日本政府、国連のバックアップを受け秘密裏に対特殊テロ防衛隊、通称《ID5》を結成。《バイオネット》と手を組む《フアントムタスク》絡みの事件の発生阻止のため日夜戦い続ける

本編開始2?年前

ギャレオリア彗星、地球に接近。その直後、日本近海の無人島に巨大隕石落着。宇宙開発公団から《世界十大頭脳》の獅童レイジ博士、《生体医工学博士》獅童ライ、マヤ夫妻率いるチームがクレーターを調査した結果、その中心から緑色の巨大な原石を発見する

同時期、篠ノ之神社に息も絶え絶えの黄金の箱を背負った一人の少年が現れ、今話の際に宮司と妻に赤子の女の子を託し黄金の箱を残して消え去った

篠ノ之神社の宮司と妻に預けられた女の子は《束》と名付けられた。さらに一年過ぎた頃に神社の前に一人の少年が倒れているのを宮司と妻が見つけた……少年は《吉田松陽》と名乗る少年には身寄りが無いことから宮司夫妻は養子として迎えた

本編開始18年前

宇宙開発公団に持ち帰った緑色の巨大な原石を解析調査した結果、この巨大な原石が無限情報記憶媒体、ナノ単位に分割しても同等の機能とエネルギー発生機関（命の波動に関して伏せられた）としての性質を持つことが判明。エネルギーを発する際《G》とも読める幾何学的模様が見えた原石を《Gクリスタル》、精製後の結晶体を《Gストーン》と命名した

フロントムタスク、バイオネット総帥《沙華堂牙監》に完全に吸収。闇市場を掌握し様々な商品を第三国、紛争地帯へ流通させることで潤沢な資金源を確保と同時に遠峰コーポレーションも飛躍的に規模を拡大していく

サンジェルマンファンデーションに対して、水面下で乗っ取りをたくらむもことごとく潰えている

本編開始15年前

獅童ライ、マヤ夫妻の間に獅童燐誕生

同年、織斑一夏、篠ノ之箒誕生

本編開始12年前

宇宙開発公団、衛星軌道上に外宇宙探査拠点施設《モジュール01》建造に着手

エグゼクティブアドバイザーとして獅童レイジ、宇宙空間における生活において人体にかかる影響を調査研究するため生体医学博士獅童ライ、マヤ夫妻が総責任者として地上と《モジュール01》を往き来する事になる

本編開始11年前

篠ノ之束、獅童レイジ、ライ、マヤ夫妻と出会う。以降、獅童家に
入り浸るようになる

（当初、燐とは余り仲がよくなかったが燐の夢を聞いたことから仲
良くなった）

本編開始10年前

束、世界中のメディア、学会にISを発表

しかし発表直後は学会、各国からは相手にされなかった

だが、その技術が兵器転用可能だと目をつけたバイオネットが篠ノ
之束に接触を図るも拒絶される

同年。獅童博士、新機軸の動力《GSライド》理論を学会に提唱。モ
ジュール01の動力とすべく試験搭載実験を提言する

一月後、世界中の軍事ネット同時ハッキング（バイオネットによる
モノ）によりミサイルが日本に向け打ち出される。だが突然現れた
《白騎士》、新生《ID5》《黄金の翼の射手》の手で海上ですべて撃墜
される。後に白騎士事件と呼ばれISが脚光を浴び有用性が示され
た

同年、バイオネット《亡霊》量産に成功。試験的に紛争地域でテス
ト運用開始

本編開始9年前

篠ノ之束失踪、篠ノ之箒、要人保護プログラムにより引越しを余
儀なくされ幼馴染み一夏と離ればなれになる（一説によれば篠ノ
之束はバイオネットに家族が狙われる可能性があり、ID5メンバー
からの説得をうけやむなく了承した）

本編開始9年前

衛星軌道にある《モジュール01》で原因不明の爆発事故…しか
し真相はバイオネットが開発したISゲシュペンスト、総帥が使うI
Sファイバードによる同施設内に開発されていた第二世代型ISコ

ア奪取、目撃者抹殺と獅童博士夫妻の拉致が目的だった

各国から招聘された100人あまりのスタッフは抵抗するまもなく一方的に殺害され、獅童ライ(52)はバイオネットの勧誘を断り《燐》とマヤの目の前で細切れにされ殺害、(当時七歳)を脱出ポットをのせた時点で焼き殺された

一人生き残りバイオネットに捕らわれた燐は新たな生体兵器開発の素体へきようされた

これ以降の宇宙開発は停滞する事になると同時に世界中の科学者達、特異能力を持つ子供達が拉致、或いは殺害される事件が頻発するようになる

七年前に姿をくらました世界十大頭脳にしてテラフォーミングテクノロニクス権威《竜崎乙女博士》がイギリスで殺害、《善忍》犬神一族が機械仕掛けの何者かに一族郎党皆殺しにされ、絶対音感の持ち主《五反田弾》拉致…すべてバイオネットによるものだと言われている

同時期、燐はバイオネットに捕らわれた疾風、ハヤテ?凍矢、トウヤ?、弾、霧也と出会う…すべてに絶望していたのをみて『あきらめるな、絶対にID5のみんなが必ず助けに来てくれる…絶対にあきらめるな』と言いつづけた

数ヶ月後、バイオネット最高機密計画《X》始動。被験者として燐が選ばれた、各種計画の成果を盛り込みサイバーデザイン。子供の容姿をもつ要人暗殺用バイオデザイン《RIN》へ総帥、フリール、ゾンダー、ドクターウエストがルーレットにより無麻酔で、しかも改造順番担当と改造処置を決められた

B計画、M計画の成果をふんだんに用いバイオネット最高傑作として完成、施設内で獣人(ゾアティックウエポン)を相手に戦闘訓練という名の殺し合いが毎日のように繰り返された…

一年と6ヶ月後、バイオネットへの復讐に身を焦がす東は《Gクリスタル》で自然精製されていたオリジナルGストーンIⅴⅵを用い究

極にして最悪の破壊神《G》……ジエネシックを完成させる。直後に
燐の生存情報が中国軍、ヤン大尉から非合法手段でもたらされた

本編開始7年前

遂にID5は燐達のとらえられた研究所を特定、命令違反しバイオ
ネット施設へ突入、実験に興されていた子供たちを保護へ向かう中、
ID5メンバー《ホワイトラビット》…束はバイオネットの製品へと
変わり果てた燐と再会、戦闘に発展するも土壇場で記憶を燐が取り戻
したことにより戦闘は終わり残された子供達全員を無事救出する事
に成功する。しかし命令違反によりID5は解散、メンバーはそれぞ
れの道を歩むことに

本編開始?年前

第二回モンドグロッソ開催、しかし決勝戦当日に優勝候補であった
織斑千冬が突然辞退する。拉致された倉庫でJ化した一夏を見る。
(一夏が何者かに誘拐されやむおえない事態だったため。その後、ド
イツ軍IS部隊の教官として招かれる)

しかし、一夏の不完全なJ化覚醒した姿をみてしまう

本編開始、1ヶ月前

織斑一夏、偶然さわったISを起動させ《世界ではじめてISを動
かした男子》として世界から注目を浴びる

同時期、宇宙開発公団でテスト中の外宇宙探査多目的作業用G—I
S—01《ガオファー》テスト中、バイオネット襲来 不完全な状態
であるにも関わらずファイナルフュージョンを敢行、G—I S—01
F《ガオファイガー》でバイオネットを撃退に成功

織斑一夏と共に燐、IS学園へ入学する

第一章 勇者王誕生！ プロローグ

20XX年：遅々として進まない宇宙開発においてある画期的な発明が発表された

IS：宇宙空間における多目的作業、船外活動を想定し産み出されたマルチフォーム・スーツ

天才、篠ノ之束によって考案、開発発表されたが問題があった

ISは女性にしか動かせない

その為、女尊男婢の構図が生まれ、さらに《白騎士事件》をきっかけにその流れが加速、ISを保有し操縦者がどれだけいるかによって国の軍事力は決まってしまった

開発者の《本当の願い》を無視した形で、あつという間に世界は変わってしまった、同時にIS技術を狙う組織が闇の中からゆつくりとその姿を顕し始めた

その組織の名は《ファントム・タスク》またの名を《バイオ・ネット》

戦争ある所、必ず存在し争いを起こす者に武器を提供し戦火を拡大、長期化させ莫大な資金と得て巨大化した組織

いわゆる死の商人

巧妙に姿を隠し、歴史の影から世界のバランスを担ってきたと豪語する彼らが次に目を付けたのがIS技術。すぐさま彼らは多額の報酬と研究資材を提示し兵器として開発するように協力を求めた

だが少女は断った

ISは彼女にとって子供も同然、それ以上にまだ見ぬ外宇宙へ進出

するために産み出した《夢》の技術

兵器とし開発するように協力を求めたバイオ・ネットに対し断固として断り、家族に迷惑がかかると判断した彼女は表舞台から姿を消し、恩師である世界十大頭脳と呼ばれた一人《獅童レイジ博士》がいる宇宙開発公団へ身を寄せ《IS》を本来の目的で運用するための研究を始めた

だが《バイオネット》の悪意はそんな思いを嘲笑うかのようにその魔手を伸ばし始めた

それから一年後、日本

アイランドシティ

宇宙開発公団

「リツ君、リツ君♪」

「た、束姉さん？あ、あのあんまり引っ付かないで当たってるから？」

「何が当たってるのかなリツ君♪」

「せ、絶対わざとだああああ〜(や、柔らかいのが当たってる、当たってるう)」

「う〜ん、照れ屋さんだねリツ君は♪」

その豊かな胸にオレの顔を埋めさせながらクンクン匂いを嗅ぎ抱き締めてるのは《IS》を開発した篠ノ之束さん

オレにとつてある意味、お母さん(?)みたいな人だ、なんとか柔らかな胸と腕から抜け出しフウツとため息をついた

「今こうしてる暇はないんだから…」

「ええ、私つまんなくい。じゃあさテスト終わったらハグハグしたらダメ？」

「……終わったらね」

「やったああああ！束さん、頑張っちゃお♪」

笑顔で無数の空間モニターを形成して凄まじい速さで各種調整を進める束姉さん。

今日は試作IS《G・S》コア搭載機〈G〉のテスト飛行の日…日本政府と公団の極秘プロジェクト《GGG（スリージー）》の初試験の日だ

数カ月前、日本で世界で初めてISを動かした男子《織斑一夏》君が現れ世界各国がこぞって注目していた

それに伴いあることが判明した…近い内に《バイオネット》が織斑一夏君と専用ISをさらうであろうという情報をいち早くつかみ急遽テスト開始を早めこうして準備の真つ最中だ

「フンフフフン♪フン♪出来たよ、リツ君」

「ありがとう、束さ…」束でいいよりリツ君…だ、ダメだから！其よりテスト始めるよ」

「むう、ノリ悪いなく、じゃ。獅童先生、用意できたよ」

『わかったわい、束君はこのままデータ取りを頼めるかの…………憐、用意はいいかの？』

「ああ、いつでもいいよ」

カタパルトデッキに上がり各数値を確認、やがて上昇し固定されガコンツと揺れ正面ハッチが音もなく開き現れたのは

ネービーブルーとネービーグレイに塗り分けられた装甲を両手両

足に、独特の形の推進機兼肩部浮遊装甲が両肩左右、そしてヘルメツト状のヘッドギアの額に当たる部分には緑色に輝く五角形の物体がはめられ《G》とも読める幾何学的模様が輝いた

「GBRP-01、プロトガオファー、行きます!!」

叫ぶと同時に両肩浮遊装甲が展開と共に加速し弾かれたようにカタパルトから大空へと舞うプロト・ガオファー

宇宙開発公団で篠ノ之束博士と世界十大頭脳の一人、獅童博士が開発した新機軸のIS

その性能は標準的なIS（打鉄、ラファール・リヴァイブ）とは全く変わらない

だが普通のISと違いがあつた

それは男性でも扱えること、そして新機軸のISコア《IS・GS》コア

このコアは世界にあるISコアと違いある未知の技術が使われていた

数年前、獅童博士達が地球へ落下した隕石から発見した無限情報サーキット

《G・ストーン》

人の心に強く反応しISコアとの驚異の親和性を示した未知の寶石。現在は獅童博士、篠ノ之束が解析するも未だに未知の部分が多かった

「レイジじいちゃん、束さん。テスト飛行は良好…続けて…? 空間センサーに反応多数? まさか!」

空間が歪み現れたのは黒いフルスキン装甲をまとつたIS。そのまますすぐ燐、プロト・ガオファーに向けレールガンを撃ち放つた

「うわ！まさか、コイツらフアントムタスク…いやバイオネットか！！」

『リツ君逃げて！今のガオファーにはプログラム・リング形成はできても反撃は無理だよ!!』

「でも見逃してくれそうもないみたいだ、ぐあああ！」

何時の間にかに囲まれ周囲から集中砲火を浴びる…絶対防御のお陰でダメージはないけど内部にかかる衝撃は半端じゃない

「どうすれば、獅童博士！リツ君を助けて!!」

「東君、F・Fを使うしかない…バイオネットの目的は君とGストーン、一夏君…燐とガオファーも奴らの目標になつとる…」

「でも、一次移行したばかりのガオファーじゃ耐えきれないよ！」

『東さん、ファイナル・フュージョンを…今、コイツらに《Gストーン》が奴らの手に渡ったら…東さんの《本当の願い》が…グアアアア!!』

集中砲火は止むこと無くガオファーにダメージを与えていく…燐の言葉が何度も何度も東の心に響きわたる

「わかったよ、でも約束して…必ず戻ってきて。リツ君にいつ君と篝ちゃんを会わせるって、私約束したから…必ず！」

『わかったよ、東…いくぞファイナル・フュージョン!!』

「フ、ファイナル・フュージョン……………」

初めて『東』と呼ばれたことに心が暖かくなりドキドキしながら、無数に展開したモニターパネルを凄まじい早さで打ち込みに数値の羅列が目にも止まらない早さで流れ

「…プログラアアム」

大きく手を振り上げ中心にある一際大きなモニター目掛け…

「…ドラアアアアイブウウ!!」

声と共に降り下ろされた手がモニターの横にあるパネルを砕くと文字が流れた

—G A O F I G H G A R—

次の瞬間、宇宙開発公団の上空でまばゆい光が溢れた

—————

数日後、IS学園に一人の少年が教室前にいる

腰まで延びた赤い髪に優しい眼差し、やや日に焼けた肌の少年の名は獅童燐（シドウ・リン）

『獅童燐』と『織斑一夏』…《勇氣ある者》と《白き騎士》二人が出会いを果たす時、物語は始まる

これは少女と、その妹の《本当の願い》を守る『誰よりも優しい剣を振るう騎士』と『勇氣ある者』の物語……………

IS 《インフィニット・ストラトス》—優しき剣の騎士と勇氣ある者—

次回。勇者王、IS学園に顕る!!

第一話 勇者王、IS学園に顕る!!

居づらい…なぜそう思うかって？

目の前にはたくさん女の子、女の子、女の子…左、右、正面からじゅつとオレと隣で冷や汗をかく一夏くんを穴が開くんじやないかってくらい見てる

「え、えくと。織斑一夏です。よろしく願いします」

「は、はじめまして獅童燐（しどうりん）だ。一年間よろしく願いします!!」

一夏君の後で元気よく自分の名前を言う…でも水を打ったように静かだ

ううう耐えきれない…それに目もつとしゃべってって言ってる気がするし

オレが所属してた宇宙開発公団にも女の子は居たけどこんなに大勢から見られるのはマジきついですよね!?

「い、以上です!」

い、一夏君?さすがにそれは不味いよ!?

この状況を打ち破るには…あれしかない!!

「き、嫌いな食べ物は何にやくだす!以上でスツ!!」

…ヤバい外しちまった…隣を見ると一夏君と山田先生がポカポカしながら見てるし皆の反応が全くないし!?

どうし…

パァン!パァン!!

突然響く音と痛み思わず蹲りながら見上げると黒いスーツにスラツとした体に見覚えある狼みたいなつり眼…

「ア、アクセラレ…」

「げっ、関羽!」

パァン！パァン！！

「誰がアクセラレータ（一方通行）に三国志の英雄か、宇宙バカ、馬鹿者…」

少しあきれながら声を出すのはオレにとって《命の恩人》になる怖い怖

「ほう、まだどうか？宇宙バカ」

何でわかるんだ千冬さんは…まさかサイコドラ…

パァン！！

「いったあああああ!!」

「誰がサイコドライバーだ…ったく…」

深くため息をつくと回りからサイコヴォイス？並の黄色い歓声が沸き起こった

まあ千冬さんって第一回モンド・グロツソの優勝者だし今でも有名な…東さんとは親友だって聞いている

そのせいか分からないけど一夏君が誘拐された事件が起きたけど無事に解決した。その影ではアイツラ《バイオネット》が動いていたのを東さんが知ったときはすごく後悔して泣いてたのを今でも覚えてる

そう考えてるうちにクラスの皆に一夏君と千冬さんが姉弟だという事実がわかりさらにサイコヴォイス？が沸き起こった

「あう〜」

「だ、大丈夫かい一夏くん」

「ああ、燐はどうなんだよ…」

「実をいうと俺もなんだ…こう見られちゃなあ」

「そうだよなあ…なあ燐、千冬姉のことよく知ってるみたいだけど知り合いなのか？」

「…ん、じいちゃん繋がりがかな…ほら獅童レイジって言うんだけどさ…」

「…ああ！獅童レイジって世界十大頭脳の一人だったよな？確か新世代の技術と動力を産み出した」

「じいちゃんと千冬さんって知り合いなんだ…ん？一夏くん、お客さんだよ」

クイクイツと指差す方には黒髪をポニーテールにした強気な目をした女の子、束さんの妹《篠ノ之箒》さんがいる

「…箒？」

「…ちよつといいか」

と言われて一夏くんはオレにすまないって目を向け廊下へ向かうのを見ながら回りのクラスの女の子の視線に耐えた

「ちよつと、よろしくて？」

二時間目の授業を終えたオレと一夏くんに声がかけられる

金髪に青く透き通った瞳の女の子が腰に手を当て立っている。確かここに来る前に見た資料にあった《イギリス代表候補生セシリア・オルコット》だったかと考えてると一夏くんがとんでもない事を口にした

「悪いな。俺、君が誰か知らないし」

「わたくしを知らない？」

一夏くん。知らないっていったらダメだろ…でも話を聞いて

るうちに本当に知らなかったらしい

ついには入試の時の話にまで至った：オレの場合、試験は日本政府、公団とIS委員会に『大河さん』とじいちゃんが手を回してくれたお陰で入試&実技パスで入ったから詳しいことは知らないけど二人とも試験官を倒したらしい

それを聞いたオルコットさんはさらに声をあげようとした時ちよ
うどいい具合にチャイムがなり、この話は決着がついた……………
と思つてました！

授業開始前に千冬：織斑先生から今度のクラス代表戦に出る代表
者を決めるって事らしい

たぶん一夏くとオレは出ないだろうと考えてたら

「はい！織斑君を推薦します!!」

「私は、獅童君を!!」

WHY?今なんて言いました!…一夏くんの名前の他にオレまで
?

「ほう、織斑一夏、獅童燐…………候補者はこの二人の他にいないのか。な
ら…」

「お、俺!？」

「ち、ちよつと待つてください千…織斑先生！オレは」

「自薦他薦は問わないと言つた。他薦されたものに拒否権などない」

悩む間もなく織斑先生がオレと一夏くんに決めると言おうとした
瞬間、バンツと音が響く

「待つてください！納得がいきませんわ!……………だいたい男か二人で
クラス代表なんていい恥さらしです!」

矢継ぎ早に言葉を並べていく…まあ無理もないかな。今は女尊男
婢の流れが主流、当然オルコットさんもその風潮に染まつてる

でもそれは『あの人』の願いが歪められた結果だと思おうと胸がいたくなる

「だいたい文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、私にとって耐え難い苦痛で」

「イギリスだってたいしてお国自慢はないだろ。世界一不味い料理で何年覇者だよ」

い、一夏くん!? 止めようとするけどもう遅かった…結局、クラス代表をハンデなしで戦うことになったんだけど、何故かオレもその面子に入ってるしなんだかなあ

とりあえず授業を受けながらオルコットさんとの戦いをどうするかを考えてたら二回も千…織斑先生の出席簿アタックを食らいました

それから時間が過ぎ職員室で千冬さんから寮のパスをもらったオレは一夏くんにもオルコットさんどう戦うかの対策について寮の長い廊下をたくさんさんの女の子たちな視線を浴びながら話ながら歩いてきた

「一夏くん、とにかくにもI Sを動かして癖を掴まないで…」

「それなんだけどさ、箒に聞いてみようかって考えてるんだ…束さんの妹だしさ」

「それはそうだけどなあ…ってここがオレの部屋みたいだな」

「俺は隣みたいだな…隣、とりあえず後で話さないか？荷物ほどかないといけないし」

まあ確かにな…今日はいろんなことがあったし正直辛い。そのまま

ま一夏くと別れ部屋へ入るとそのままベッドへダイブする

「今日は疲れたな…ん？」

なにかが振動するのを感じ左手首を見ると緑色の宝石が嵌まったリングが輝いてる

迷わずリングの内側にある小さなへこみに指を添えると空間モニターが形成され見慣れた顔が写し出された

『やつほくリツ君だけのアイドル束さんだよ♪』

「た、束さん!?!通常通信は不味いんじや」

『大丈夫、大丈夫♪多次元コンピュータを介してあるからね〜で、イツ君とちくちゃん、箒ちゃん元気だったかな?』

「う、うん、元気だったよ…束さん。箒さんとオレを介して話が」

『……ダメだよ……箒ちゃん、私と話したがないに決まってるよ…』

少しうつむきながら言葉を漏らす…本当は話したくて仕方ないのに意地を張ってる…でもすぐに顔をあげた

『…リツ君、GSジェネレーターの稼働効率は落ちてないよね』

「え?落ちてないよ…前に比べると大分らくだから…」

『そつかくでも少しでもおかしいなって感じたらすぐに連絡してね〜24時間何時でもリツ君のそばに駆けつけてあげる♪あと添い寝もサービスでつけてあげ…る?』

「うう〜た、束さん〜／／／そんなことより自分のことも心配してよ…ちゃんと寝てる?」

『………寝てるよ…ってリツ君!そんな怖い顔しないで!?!』

「東さん、お願いだから寝てよ…」

『わかりました〜…じゃソロソロ、私寝るね…あ、リツ君』

「なに？」

『浮気しちやダメだよ♪リツ君の初めてもらうのはこの東さんだからねえ〜〜ではさくらば!!』

「あ、ちよ…切られちゃった…《初めて》ってもう色々見られてるから浮気できないと思うんだけど…お風呂入……／ズドン！／な、なんだこの音!!」

あわてて部屋の外に出ると一夏くんが扉を背にしやがみこんでる

「い、一夏くん、何があったの？」

「と、とりあえずノーコメントで…なんとか解決するから」

「わ、わかった。健闘を祈る!!」

ビッグボス並みに見事な敬礼をしオレは部屋へ戻りシャワーを浴びてそのまま眠りについた

「どうしました？お嬢様…今日転入してきた織斑一夏君と獅童燐君のデータですよね…なにか不備でも」

少女が見つめるのは織斑一夏と獅童燐のデータ…何故がわからな

いがじつと目を通しやがてフウツとため息をつく

「何でもないわよ、ただ面白い子が入ったわね〜フフフ」

「そうですか、ではあまり遅くまで起きてると体に毒ですから早くおやすみくださいね」

眼鏡をかけた少女《布仏虚》は軽く頭を下げ部屋から出ていくと先程とは全く違う表情を浮かべ、まるで猛禽の目で獅童燐のデータを見る

「…獅童燐、世界十大頭脳の一人《獅童レイジ》の孫…でも彼《獅童燐》は…」

獅童燐のデータとは別のデータが展開。下へスクロールされやがて止まり表示されたのは一行の文

2XXX年 ○月△日

獅童ライ博士、マヤ夫妻と一子、燐

衛星軌道上に建設途中の《モジュール01》に視察中、爆発事故に巻き込まれ同伴したスタッフ共々死亡

生存は絶望的…テロの可能性大？

白騎士事件が起きてから起こった《衛星軌道上モジュール01》爆発事故

いつしか風化した事件…その事件の被害者達の中にあつた獅童燐の名前

「数年前に死んだはずの獅童燐…彼の目的は一体何かしら…今は様子見するしかないか」

端末を閉じ彼女は椅子をたつ：IS学園最強の名を冠する生徒会
長《更識楯無》は扇子をパタンと閉じ歩き出した

第一話 勇者王、IS学園に頭れる!! (二) に続く

閑話 イタミ―PAIN―

痛い…

最初に感じたのはそれだった

目に入るのは無機質な壁：薄暗い部屋にいるってのがわかる
四方の壁から大小彩り様々なケーブルがナニかに繋がってる

「ア〜ツハハハハハ〜今日も楽しい実験の始・ま・り・だよ〜」

奇抜なフアツションに身をまとったピエロが笑いながらズイツと
無機質な仮面から覗く瞳で顔を見てくる

怖い：ただそう感じる：今日も『痛い』ことをやるんだろうか

―やめて―

声を出そうとするけど口が動かない…

何でここにいるんだろう？

名前も思い出せない。覚えてるのは《熱》を伴った《痛み》と誰か
に抱き抱えられる感覚だけ

ぼんやりと思い出した瞬間、視界に火花が散り身体がビクンツと跳
ね痛みが走る

「うあああああ！あああああああ！！」

「おやおやくまだ声をあげる元気があつたみたいですねえ〜《痛覚遮
断》はうまくいかなかつたみたいですねえ♪」

「あ、ああ…や、やめ…ああああああああ！」

「更に倍増し♪いやあイイ声ですねえ〜最高ですよお〜——く

ん…ア…ツハハハハハハ…♪」

リモコンを片手に無機質な仮面から笑い声をあげてる

やめてよ…痛いよ…イタイ…イタイ…

「ギムレットくん、あまりお遊びしたらいけないだろ…せつかくの作品を壊したら元も子もない」

「ああ…コレはいけませんねえ…失礼しました…」

「…さて痛覚遮断手術を始めるか…さあ出て行きたまえ、ギムレットくう…くん」

「アツハハハハハハ…では失礼…フヒヒヒヒ」

仰々しく頭を下げスツと部屋を出る彼を見届け、にんまりと笑顔を浮かべる小太りな男性が手をあげると暗い室内に光がつく、壁や床に黒い染み状のナニかが飛散している

「フッフ、今日は君にとって最高の日かもね…我が《バイオネット》最高傑作として私自らが改造するのだからね…まあ麻酔なしだが…ねえ」

両手をかざすと指がワキワキ動く…いや裂け始め中からメスや鉗子がガシャガシャと近づいてくる

イヤだ

やめてよ…イタイのは…

そんな願いも虚しく痛みが走る…メスがスウツと入るのが目に見えた

「あああああああああ！あああああああああ！！」

「ああ〜イイ声だ／＼／＼内臓もピンク色で中々の健康体だ…」

「あああああああああ！！あつ！あああああああああ！！」

「さあ、もつと聞かせておくれ…さしずめ第九といった方がイイ声だああねえ〜」

「う、うう…うあああああああ！！」

叫び声が壁に反響し響くも外へは一切漏れない…男性が腕を動かす度、ナニかが砕け、削るような音と共に床にはおびただしいほど赤いナニかが無機質な床とテーブルへ垂れ落ちてくのは真っ赤な血

近くの台には赤いナニかがのせられその数を増やしていき彼の手が止まる

「痛覚遮断完了…フヒヒ…綺麗な心臓だ…リズムよく動くのはまさに芸術品。そう思うだろ、ん？気絶したか…残念だなああ…じゃあ電気ショック！！」

白衣が膨れ上がり破け、その背中から二つの電極が円上の手術台の年端もいかない子供の手に刺さった瞬間、カッと目を見開き再びビクンと身体が跳ね上がり叫んだ

『ウワ、ウアアアアアアアアアア！！ウアアアアアアアアアアア！！』

『ふむ、痛覚遮断手術は完璧ではないようだ…再手術開始といこうか…』

『うぐあああああああ！うあああああああ！！』

「…あんまりやり過ぎたらダメですよおおくでないと死んでしま…壊れちゃいますからねえ〜ああ、私も言えた義理じゃないですねえ〜こ

れが上手くいけば世界中の紛争地域と各国の軍から注文が殺到するでしょう♪」

『神経節、切除…む、まだ切れないか…だがこの神経節見れば見るほど美しいなああああ』

メス、鉗子、レーザーメスが舞うと叫びは増し、血が飛び散り壁や床に染みを作る様子を分厚いガラス越しから椅子に座り眩くギムレットは用意された血よりも赤い紅茶が注がれたカップに口をつけ飲み干した

「…最高の音楽と楽しむ紅茶は最高ですねえ〜アツハハハハハハハハ」

『う、うう…ウアアアアアアアアアア!!』

無機質な仮面から覗く狂気に彩られた瞳は泣き叫びながら手術される姿をただ眺めるギムレットの狂気にも似た声に必死の叫びはかきけされた

閑話 イタミ―PAIN―(一)
了

第一話 勇者王、IS学園に顕る（二）

「……一夏くん、あと少しだ」

「……99、100！つはあ！き、キツいなコレ…って燐は平気なのかよ？」

「ああ、これぐらいで音をあげたら夢が遠退いてしまうからな」

「夢？」

竹刀を降ろし肩で息を切らしながら不思議そうに聞いてくる一夏くんと篠ノ之さん。いまオレと篠ノ之さんと一夏くんは武道館でいよいよ三日後に迫ったクラス代表をかけた戦いに向け特訓していた。ほんとうはISを使えばよかったんだけど、中々使用許可が降りなかったのと

—三日前—

—中学では何部に所属していた—中学からずっと帰宅部だったけど—

—……なおす、IS以前の問題だ！これから毎日、放課後三時間、私が稽古をつけてやる！—

以前、一夏くんが剣道をやっていただけで三年のブランクはかなりヤバイ。

先ほど模擬試合をみてもそれが手に取るようにわかる。足さばき、体重移動、竹刀を振るうスピード、踏み込みの速さ…一夏くんよりも篠ノ之さんが早い

—確かに、IS以前の問題かな—

—り、燐まで…でもお前も不味いんじゃない？—

—…そ、そうだった、オレもオルコットさんとやるんだった…燐

ノ之さん、オレもその特訓に参加していいか？―

―な、何故、獅童が参加する必要があるんだ！―

―いや、オレもまだ専用機が宇宙開発公団から届かないし：体を動かさないと鈍るから：―

―マジか、燐！箒もいいだろ？来週は燐もアイツと戦わなきゃいけないんだ、このとおり！！―

―う、わかった：一夏が言うなら仕方ない：特別に獅童も参加させてやろう！―

てな感じで特訓に参加してるんだけどオレにとって剣道は初めての経験ばかりだった

他の格闘技は束さんと火麻さんに教えてもらったりしていたからできるけど…

「なあ、燐の夢ってなんなんだ？」

「オレの夢？……………宇宙飛行士になることかな

「宇宙飛行士？」

「まだ月にしかいけないだろ？」

「…オレは月よりも先にある場所へ行ってみたいんだ：その為にはI Sが必要なんだ」

「……………獅童、I Sがなんでお前の夢に必要なになるんだ？」

篠ノ之さんと一夏くんがじつとオレを見て答えるのを待ってる

「……………I Sは宇宙空間での活動を想定して作られてるからだよ。たば、I Sを製作した人はこうも言ってるんだ。《まだ見ぬ外宇宙への

夢を込めて産み出したんだよ』つとね……どうしたの二人とも」

「いや、すっかりしてんなって思ってた……」

「……」夏にも見習ってほしいくらいだ……休憩はここまでだあと数本してから今日の特訓は終わりにしよう」

軽く水を飲み、再び竹刀を構え稽古を再開するオレ達……竹刀を構え振るうとある人の言葉が浮かんだ

—どうしました燐?—

—師匠、何でそんなに強いんだよ……目が見えないのにさ……何回も投げ飛ばしたり出来るんだ?—

—燐、気を感じなさい……—

—気?……で、でもオレ、オレは……—

—……例え身体が——であろうが関係ない……大切なのは他人の痛みを感じる心を持つ君の魂だ、なら気を感じることも出来る——

—燐お兄ちゃん、蓮童（れんどう）お兄ちゃん、ご飯できたよ——

—燐、今日の鍛練はここまでにしましょう……織杖を怒らせるとあとが怖いです——

—そ、そうだな師匠（せんせい）——

……：：気の流れは生身の体でなくともある、例えば川、木々、大地、風……すべての自然界にみちあふれている

竹刀を振るうたびに体に流れる《気》の流れを感じるよう集中し振

るう、この五年間ずっと続けてきたことだから

「今日はここまでだ！一夏、獅童」

そう考えてるうちに百本の素振りを終えたオレ達は軽く汗をふきそのまま寮へと帰った

でも終始、篠ノ之さんの機嫌が悪かったのは何故なんだろうか？

「山田先生、まだ白式は届かないのか？」

「は、はい…それが一時間前に倉持技研から出たって聞いたんですけど…な、何かあったのでしょうか」

オルコットさんと試合当日、倉持技研から届くはずの白式を載せたトレーラーが今だにこない

まさかと思ったとき、左手の甲が震える。慌てて一夏くん達がいる場所から離れ耳に近づけた

— 燐、聞こえますか？—

「どうしたんだ犬神？お前から連絡くれるなんて珍し…」

— 《奴ら》が動き出しました—

奴ら…その言葉を聞いた瞬間、その場から駆け出した

— 現在の白式を載せたトレーラーが襲われています。サテライトサーチによる位置座標を送ります…あと《アレ》も束様が届けに来ます！どうか無理だけは…—

「…わかった…イーク！イップ!!」

IS学園のゲートを抜けると同時に叫ぶ…光が体を包む
金色の鋭角的な肩当て、強固なプレートアーマー、脚部装甲、額に
V字形ブレードアンテナに左目にバイザーが現れ《アルティメット
アーマー》が装着される 「ガンドーベル!!」
空間が歪み現れたのは白いバイク《ガンドーベル》に跨がりアクセル
を全開に回しそのまま白式を載せたトレーラーの所在地まで風を
纏ったかのように走らせた

「副主任、これ以上降りきれません!」

「まさか白式を狙ってるのか?」

黒い鳥を模したメカが無数に白式を載せたトレーラーを囲むよう
に展開しミサイル、アサルトライフルを撃ち放ってくる

「あと少してIS学園に着くのに」

「ダメだ!…このままIS学園から離れるんだ、彼処には学生達がい
る!!」

副主任の言葉に従いハンドルを切るが一発のミサイルが運転席へ
迫る

「……………っ!」

もうダメだと目を閉じた…がナニかがよぎった

「ウィルナイフ!はああああ!!」

乾いた音と同時にミサイルが切り裂かれ爆発するなか彼らが見た
のは金の装甲を纏った赤い髪が目立つ一人の少年の姿

「き、君は」

「ここはオレに任せて早くIS学園に！」

「だが君一人では！」

「いいから急ぐんだ！」

「わ、わかった」

副主任は頷くとトレーラーを走らせ遠退くの見届け黒い鳥型のメカを見据える

「…こい、バイオネット!!」

叫びが合図といわんばかりに黒い鳥型のメカが一斉に襲いかかる

「はあっ！」

ウィルナイフを横風ぎに切り払うと泣き別れになり爆散、続けて背後から迫る一体を袈裟斬りにし爆散していき数が残りひとつになった

「アツハハハハハハこれはいけませんねえ」

厭らしい声が響き空を見上げると紫色のトンガリ帽子にマント、ピエロのマスクを被った人物が巨大な傘を広げ浮いている

「ギ、ギムレット…」

「おや、おやおやおひさしぶりですねえ」

「…オレはあいたくもなかったよギムレット！オレは、お前達バイオネットを許さない!!」

「いつてくれますねえ目的の白式はとりのがしてしまいました！ですがコレは再会を祝して私からのプレゼントです！受け取って

くださるい♪♪」

傘を振るうと破壊したはずの鳥型メカの破片が浮きケーブルが延び引き寄せ合体、現れたのは巨大なカラス型メカが翼を大きく広げ羽ばたきする

「クッ！待てギムレット!!」

「ではさらば♪フヒヒヒ♪♪」

そのまま傘を閉じブースターから火を噴きながら彼方へ消えていくギムレット、追いかけてようとした燐にカラス型メカが無数の羽を飛ばしてくる。咄嗟にウィルナイフで切り払う

次の瞬間、爆発がおき燐を襲う…アルティメットアーマーを纏つてるとはいえダメージは通る

『カアアアアアアア!』

「う、うわあああああ!」

爆風を受け無防備状態の燐にカラスの叫び声…ソニックバスターが襲いかかる

アーマー内では血が沸き立つ苦しみに必死に耐えたその時だった

「リッ君!」

「こ、この声は…束さん!?!」

顔を向けた先には巨大なニンジン型ロケット…その下にあるハッチが開きナニかが飛び出す

獅子を模したナツクルガードがそのまま燐の左腕に装着されその目が輝く

「遅れてごめんねリッ君。ガオファアとガオーマシンの調整はバツチリだよ!!」

「…わかった。来いファントムガオー!!」

燐の叫びに答えるようにファントムガオーが現れバラバラに分解、アルティメットアーマーがパージされた燐の体に各部装甲が装着され最後にヘッドギアが付き額にGストーンが輝く

「ガオファー!はあ!!」

怪音波攻撃から逃れるや否や接近、胴回し蹴りを頭に決め、さらにジャブ、右ストレートを顔面へ叩き込む

『カ、カアアアアアアア!!』

あまりの猛攻にたまらずソニックバスターを放つも回避される：だがカラス型メカが更に変化を起こす

各部装甲が展開し破壊され散らばっていたカラス型メカを更に集めISより三回り大型化、頭も二つに増え羽からはレールガンらしきものが見える

「巨大化した?ならガオーマシン!!」

叫ぶと同時に近くを走るリニアからH2Aロケットを模した人間大サイズの《ライナーガオーII》が、その近くを流れる川から地を突き破り《ドリルガオーII》が、山の中から《ステルスガオーIII》が音無く姿を見せ空を飛翔する

『カ、カアア!』

突然現れたマシンからの突撃を喰らいカラス型メカはたまらず体勢を崩し地上へ落ちた

同じ頃

???

「長官、燐からファイナルフュージョン要請シグナルだ」

「うむ、ファイナルフュージョン承認!!」

「わかった、東君。シグナルをそちらへ委任するぞ」
『わかったよ』

「いくよりツ君、ファイナル・フュージョン：」

ニンジン型ロケット内で承認シグナルを受けとるや否や、コンソールを目にも止まらない速さで操作し画面が切り替わり大きく右腕を振り上げ東は大きく息を吸い込み

「プログラアアアム・ドラアアアアイブ!!」

カシャンと乾いた音と共にパネルを砕いた瞬間、プログラムが走り新たな文字が大きく映り点滅し流れた

— G A O F I G H G A R —

「いくぞ、ファイナル・フュージョオオオンツ！」

叫ぶと同時に胸部装甲のシャツターが上下に開き光と共に金色の幾何学的紋様《プログラム・リング》が伸び再び立ち上がろうとする巨大カラス型メカを弾き飛ばす

プログラムリング上にドリル戦車、ステルス戦闘機、H2Aロケット?を人間大にしたマシンが顕れ進行方向上に走るとリングが吸い込まれるように消えると合体が始まる

先ずはドリル戦車《ドリルガオーII》が装着、続けてH2Aロケット《ライナーガオーII》の小型ブースターがパージ、そのまま左肩から右肩へ侵入：いや量子変換され肩部装甲へ最後にステルス戦闘機《ステルスガオーIII》が装着、ガオファー時肩部装甲となっていたのが胸部全面へ移動しエンジンユニットが火花を散らし両腕へドツキング、シャツターが開き勢いよく顕れ、最後にヘッドギアが頭へ装着し

口許が空いたマスクがつき金色に輝くアンテナの中央にGストーンが輝いた

『ガアアオッ！』

左腕にGとも読める刻印が輝き

『フアアイッ！』

両腕を大きく広げその手から緑の稲妻が迸り

『ガアアアッ!!』

再び大きく交差し両腕を腰辺りに構えると同時にステルスガオーⅢの左右の翼が一部スライド展開、緑に輝きウルテク・エンジンが展開した

それは黒き鋼の巨人

バイオネットの驚異からすべてを守るため

ISとGストーンが融合し生まれた新たなIS…

その名も

勇者王ガオファイガー!!

『いくぞ、バイオネット!!』

《カアアアアアアア！》

大きく翼を広げ威嚇すると同時に二つに増えた頭部の内一つのカラスの頭が真ん中から割れ砲頭が競りだし光が集まる

「ウォームリング！」

胸部シャッターが開き光の輪が展開する、それと同時にカラスの頭から強い光と熱量を伴った光線が放たれた

「プロテクト・ウォール!!」

左手を輪の中心につき出すと不可視のフィールドが発生し光線を

塞ぐと同時に乱反射させ五芒星状に偏向させまっすぐ弾き返した

《カアアアア!?》

弾かれた光線を受け碎けるもすぐさま再生するカラス型メカは翼を向け無数のミサイルとレールガンらしきも撃ち放とうとする

「うおおおー!」

ウルテクエンジンを全開にし間合いを摘め体重をのせた膝蹴り：高速回転させたドリルニーを胴体めがけ撃ち貫く、背後にまでドリルが穿たれパイルバンカー状に伸縮し大きな穴が開く

《カアアアアアア!?》

しかしすぐさま再生し元に戻り胴体部に巨大なレンズが構成、光が集まる

「ファントム・リング!!」

再びシャッターが開きリングが形成されガオファイガーは腰を僅かに沈め右腕をゆっくり回転させ始めやがて赤いエネルギーを帯び始めその速度を増していく

「ブロオオオクウウン・ファアアアアントオオオム!!」

勢いよく高速回転する右腕が勢いよくリングの中心目掛け打ち出され巨大なカラスメカの胴体、レンズ部分をとらえ貫き穿ち、辺りに金属の破片とオイルを撒き散らし倒れる

「今までのバイオネットのメカと違う：ならば！ヘル・アンド・ヘブン!!」

両腕を交差し大きく左右に広げた腕、その拳に光が溢れだす

「ゲム・ギル・ガン・ゴー・グフォオ……ムン！」

呪文を唱えながら攻撃のGエネルギー、防御のGエネルギー溢れさせる右手と左手を徐々に近づけ胸の前で突きだした形で組んだ瞬間、緑色の竜巻《EMT》が発生。カラス型メカを包み動きを止める

「うおおおおおお!!」

ウルテクエンジンを展開し四基のGSライド最大出力で地を抉りながら突進、そのまま両拳をバイオネットロボの胴を貫き、金属片とオイルを撒き散らしながらコアを抉り

「…ムウウン、セヤアアアア!!」

抜き取った瞬間コアが光に包まれ爆発、凄まじいまでの爆風が辺りに溢れやがて晴れると、ガオファイガーが無傷で姿をあらわした

『リツ君！大丈夫？怪我はない!?!』

「ああ、大丈夫だ…其よりIS学園にトレーラーは無事ついたかな」

『う、うん…今、最適化し始めてるよ…』

「そつか…じゃオレ戻らないと…束さん、ガオフアアを届けに来てくれてありがとう…こんどお礼するね」

『い、いいんだよ、お礼なんて／＼／＼そ、其より早く戻らないと』

「そうだった…フュージョンアウト!」

ガオファイガーの体が光に包まれアルティメットアーマーに陣羽織みみたいなコートを纏った燐の姿が現れる

「…じゃあ束さん、夜にデータを送るけど」

『うん、また後でねリツ君！束さんと熱い夜をすごそうね♪』

そういうと束さんが乗ったニンジンミサイルが空に溶けるように姿が消えるのを見てガンダーベルを呼び出すとそのままIS学園へ向け走らせた

もちろん着く前にイクイップを解除して…

「獅童、どこにいった?」

「じ、実は公団からオレのISを直に届けるって連絡があつて：さつきまで公団のトレーラーで最適化作業してたんです」

「公団からのトレーラーですか？確かにありますね」

山田先生が目を向けた先には公団からのトレーラー：カムフラージュのために束さんが手配してくれたらしいけどコンテナロゴにエンジンにウサギのマークは不味いんじゃない

「…そういう理由なら仕方がない。あと少ししたら織斑とオルコットの試合も終わる：次はお前の番だから今のうちしつかりと見ておくといい」

じつとオレを見て軽いため息をつくのは一夏くんの姉であり教師の織斑先生：姿を消したオレを山田先生と一緒に探してたらしい

そして今アリーナでは一夏くとオルコットさんの試合が繰り広げられている

オルコットさんが駆るIS《ブルーティアーズ》はイギリスが開発した第三世代機で特殊誘導兵装、通称BITのテスト運用機

ファーストシフトへ移行していなく、装備が近接ブレードのみの一夏くんにはかなり不利だ

「…一夏」

「篠ノ之さん、一夏くんなら大丈夫だ」

「……………」

オレの言葉にただ無言でうなずいた、その時試合が動いた

「このブルー・ティアーズを前にして、初見でここまで耐えたのはあなたをはじめですわね……ではファイナーレと参りましょう」

試合が始まって27分、なんとか致命傷は耐えたんだがシールドエネルギー残量は67…実体ダメージは中破

かなりヤバイってのはわかる

ここまで持ったのは箒と燐が特訓してくれたお陰だとおもう

「くっー」

四基のビットが交錯しながらレーザーの雨を降らしてくる。なんとか体を捻りかわすがシールドエネルギー残量はどんどん減っていく中、あることに気づいた

(もしかしたら…)

俺は自分の直感を信じスラスタ全開で間合いをつめ正面からぶっかる

「なっ?!無茶苦茶しますわね。けれど、無駄な足掻きですわ!!」

左手を振るうと浮遊していたビットが迫りレーザーが放たれる…それを紙一重で交わしすり抜け様に一閃。手応えを感じた瞬間爆散する

「なんですって!?!…くっ?!」

再びブレードを構え斬りかかる俺に向けて右手を振るう…光が砲口に集まる寸前一気に加速、すり抜け様ビットを二基撃墜する

あまりの事に開いた口が塞がらないみたいだ

「お前はビットを動かすのに毎回指示を送らなければならない」
「!」

…凶星だったみたいだな…手を動かした方向へビットは移動して俺の死角、遠い距離から狙う

手の動きから予測すれば簡単なことだ！

さらにもう一基のビットを切り裂く…これでアイツの武器はライフルだけだ

一気に加速し間合いを詰め右下段に構えた近接ブレードで逆袈裟に切り払おうとする俺に笑みを浮かべたセシリアの腰部に広がるアーマー、その突起が外れたまっすぐ突っ込んできた

「かかりましたわ。おあいにくさま、ブルーティアーズは六基あつてよ！」

回避する間もなく赤よりも白い閃光に包まれた

「一夏！」

「落ち着くんだ、篠ノ之さん」

「何を言う獅童！一夏が…」

「落ち着いて。モニターを見て」

画面には黒煙が広がるがやがて晴れそこにいたのは純白の機体…千冬は軽く鼻を鳴らすも安堵した表情を浮かべ見ている

「……………（白騎士……………あの時以来かな…………）」

—しっかりとしろ！熱ッ!?《ゴールドタイガー》、《アリス》に連絡を

!!—

—わかった、千冬君。ここは私と《シルバーピューマー》に任せていくんだ!!—

—おう、こいつらの相手はオレらがやる!早くその子を《アリス》の元に連れてけ!!—

—わかった(だが、何てむごいことを…一夏と同じ年じゃないか。バイオネットめ)—

—またアナタ達ですかあああ〜ID5?〜フヒヒヒ。プロトタイプを返してもらいましょうか♪—

—…熱…い…あ…つ…い…あ…つ…い…あ…つ…い…あ…つ…い…よ—

どこか懐かしく辛そうな表情を燐は浮かべながら再び画面へ目を向ける

「ま、まさか…一次移行!?あなた今まで初期設定だけの機体で戦っていたって言うの!?!」

セシリアの驚きの声を聞きながら迷わず確認と表示されたウインドウを選択すると様々な情報が流れようやく理解した

この機体がやっと俺専用になったと言うことを、そして手に持つ近接ブレード、かつて千冬姉が振るっていた《雪片》を正眼に構える

「俺は最高の姉さんを持ったよ…俺も、俺の家族を守る」

「……は？あなた何を言って……」

「とりあえずは千冬姉の名前を守るさ！」

雪片を強く握りしめる、再装填したビット二基が俺に向かってくるのをそのまま横一閃に風ぎ払い、爆発すると同時に突撃

「おおおお！」

懐へ入りそのまま逆袈裟払いを放つ。がその直後ブザーがアリーナに鳴り響いた

『試合終了。勝者、セシリア・オルコット』

「あれ？」

なんでさ？と言う疑問が頭を駆け巡らせながら試合は終了。つまり、結果を言う俺は負けたってことだった

「ま、負けちゃった……」

「結構いいところ行ってたじゃないか、一夏くん」

「ありがとうな……でも負けちゃったからな。とりあえず千冬姉の所いってくる……隣、頑張れよ!!」

「ああ、じゃいつてくる！」

軽くハイタッチし織斑先生の所へ向かう一夏くんを見送ると、ピットに立ち左腕のブレスを掲げる

「ファントムガオー！」

背後にファントムガオーが現れ分解、体に装着され頭にバイザーが着きGストーンが緑色に輝いた

「ガオフアー！」

G—I S—01 《ガオフアー》を装着し前屈みになりながら構える

今度はオレの番だ

カウントが0になった瞬間、オルコットさんがいるアリーナの空へ
まるで弾丸の様に飛翔した

第一話 勇者王、I S学園に頭れる(二) 了

第二話 獅子の咆哮

「それがアナタのISですか?」

「ああ、宇宙開発公団次世代深宇宙探査多目的作業用IS…ガオファード」

「見たところ武器はついて…」

「まあ武器はないけど」

拳を正面に構えるとジャキンと金色に輝く隕石破碎切断爪《ファントムクロウ》を展開する

「まさかと思えますけど、それだけで戦うきですか?」

「ああ、これだけだ…ていうかこれしかないんだよね…ガオファードにはさ」

「そ、そうですか…でも手は抜きませんわよ」

「ならこつちも全力で」

「行くぞ／＼いきますわよ!」

掛け声と共にガオファードとブルーティアーズは空を駆けた

第二話 獅子の咆哮

「ハア!」

「!やりますわね、ならこれはどうです!!」

ブルーティアーズのビッドのレーザーを回避、ファントムクロウで受け流し飛翔、両肩のウルテクスラスターを全快にし間合いを摘め守

るように立ちはだかるビット二基を切り払い

(…ビットはあと二つ…でも一夏くと戦ってた時より攻撃が鋭いし正確だ…シールドエネルギー残量80…キツいかな…いや!)

「はあああ!」

弱気な考えを振り払うと同時に背後に迫ったビットを駒のように回転しながらファントムクロードで切り払った

「さすがですわね!」

「オルコットさん…こそ!」

声と共に最後のビットを切り払い、続けてオルコットさんにファントムクロードを構え迫る。オルコットさんは二つの誘導型ミサイル、スターライトMk-IIIを構えエネルギー弾を弾幕のように撃ち放つ

「グア!」

そう簡単に懐に潜らせてくれないか…仕方ないアレを使うしかない!!

「プロテクト・リング!」

胸部シャッターが開き光輪が頭れ迷わず左手のファントムクロードを突き出す

「プロテクト!クロオオオオ!!」

ウルテクスラスターから光がほとぼしり左腕にプロテクト・リングを纏ったファントムクロードが円錐上にバリアを展開しレーザー弾、ミサイルから身を守りながら突っ込む

「な、何ですの!絶対防御?いえバリアなのですか!?!」

「うおおお!ファントム・リング!ブrouクウウン…ファントム・クロオオオオ!!」

弾幕の雨を抜けるとすでに展開していたファントムリングをファントムクローに纏わせ加速する

「す、すごいな燐のやつ」

「ああ、まるで」

息を飲んで見守る一夏と箒の目には金色に輝く獅子が咆哮をあげながら突撃する姿とガオファーが重なる

「まるでライオンだ」

二人同時に口に出したのに気づき照れ隠しと言わんばかりに箒からそっぽを向かれ落ち込む一夏

気を取り直し二人の試合を見守る

「ハアアアアアッ！」

ブロウクン・ファントム・クローがオルコットさんのスターライト Mk-IIIごと殴り抜くと余りの衝撃にオルコットさんの体勢が崩れた

「きゃああああ!?!」

今のでシールドエネルギーは削れたはず、再びファントム・リングを展開し追撃しようとした瞬間

「あ、アレ?」

突然目の前が真っ暗になりそのまま地上へ落ちていく

それにGSライドのパワーが上がらない

(し、しまった熱暴走起こしてる…)

身体の奥から熱さが込み上げ意識が遠退いていく…地面がどんどん近づいてくる

(少しだけでいい動いてく…動けよ…オレはまだ…諦めるわけにはいかないんだああ!!)

GSライド、GSジェネレータが最大稼働し始め力が戻る。地面すれすれでウルテクスラスターで滑空し地上へ降り立つ

「はあ、はあ、はあ…」

「だ、大丈夫ですのアナタ？」

「ああ、それよりも決着を…」

再び飛翔しフロントムリング展開と同時にブザーが鳴り響いた

『試合終了。勝者——セシリア・オルコット』

そのアナウンスを聞いて慌ててウインドウを開くとさつき展開したプログラムリングがSEを消費した結果らしい

「あはは、負けちゃ…った…」

グラリと視界が歪みそのままゆっくりアリーナの地面へ降下するなか、誰かの声を最後に意識を失った

「獅童!?!熱っ!?!(熱暴走起こしてる…)」

「お、織斑先生、何でここに」

「……気にするなオルコット、すぐにピットに戻り公団へ連絡を繋いでくれ。今すぐに」

「は、はい」

ピットに戻るオルコットを見届けすぐに獅童のISSガオファーを解除すると待機状態のガオファーのアジャスターシステムを起動させる

(GSジェネレーター稼働率40、熱暴走警告イエロー：冷却ジャケット展開)

冷却ジャケットを展開すると同時に各部の異常を示すパラメーターが正常値へ戻るのを見て安堵する

おそらくバイオネットから移送中の白式を守るためガオファイガーで戦い、終えてからこちらに来た

つたくコイツは昔から無茶する：《あの日》からずつとな

少しため息をつきながら連絡が来るのを待った

「ん？ここは」

「お？気がついたみたいだな」

「一夏くん？」

「試合が終わってから倒れるなんて、俺心配したんだぜ：でも千冬姉がここまで運んでくれたんだから後でお礼言ったほうがいいかもな」
「(ち、千冬さんがオレを!?)：そうなんだ。一夏くん。オレ負けちまった：あと少しだったんだけどな」

「俺も同じさ、千冬姉や箒にさんざん言われたけどさ…でも」これから強くなればいい」……え？」

「オレや一夏くんはまだIS初心者だ。ならこれから強くなればいって思うんだ」

「おう！互いに頑張ろうぜ…あと少ししたら飯だから一緒に食いにいこうぜ」

「わかった、じゃまたあとで」

そう言い一夏くんは医務室からでて行く、オレは体を起こしベッドの外に立つ

「…なんかオレに用ですか？」

カーテンが開かれると、水色の髪に上級生が着る制服を纏った子が扇子を広げ立ってる

「あら、気づいたの…まあ別に用と言うわけじゃないんだけど(じくくくくく)」

「？」

「ふんふん……いい体つきしてるね」

「あ、あの何か？」

「……じゃ機会があったらまた会おうね♪獅童燐くん♪」

体をあちこちさわりじつと見ながら、やがてパタンと扇子を閉じ医務室から去っていく…

いったい何がしたかったんだろ？

『ちーちゃん！リツ君は、リツ君は大丈夫なの!？』

「落ち着け束、燐ならさつき目を覚まして一夏と篠ノ之と食堂に
いってる」

『そ、そうなんだ…束さんのせいだよね…あの時、アジャスタして
れば』

今二人が会話してる場所は公園から来たトレーラーの中にある通
信室…先ほど燐が倒れたと聞いた束との通話の真っ最中だ

「燐は束に心配をかけさせたくなかったんだ…それに束、お前最近寝
てないだろ」

『う、そ、それは…その…だって今作ってるG-I-S-03、04の調
整が上手くいなくて…』

「燐の為に何かするのはいいが…お前が倒れたら燐はすぐに公園に
戻って看病するぞ」

『でも、これ以上無茶をしたら…したら…リツ君が…』

「…束、私も出来る限りのサポートをする…大河さんと火麻さん
にもそう伝えてくれ…それと元気を出せ束。燐は元気がないお前を
見たら何かあったのかって気づくぞ、今日は燐と話すんだろ？ならい
つもみたいに無駄に元気な束に早くもどれ」

『う、うん！そうだねちーちゃん。タイガーさんとピューマさんにそう伝えておくね。じゃあね♪』

元気よく手を振りながら通信が切れたのを見てフウツとため息をつく

「やれやれ…昔の束だったら考えられなかったな…ライさん、マヤさん、燐と出会ってからか…」

そう呟くと千冬は公団のトレーラーから出る、トレーラーは静かにIS学園ゲートに向かうのを見届け、そのまま教員寮へと歩いていった

第二話 獅子の咆哮 了

第三話 出会い

「あ、あの〜束さん？何でそんなに怒ってるの」

『…別に怒ってませんよ〜（黒笑み）』

食堂でご飯を食べ終え一夏くと別れてすぐ部屋に戻ったオレは束さんと話してるんだけど、なんかすごく不機嫌なんですけど

「あ、あの〜」

『何かなく無茶ばかりするリツ君？』

や、やっぱりおこってるし！たぶん今日倒れた事を千冬さん経由で聞いたんだ…

「ご、ごめんない束さん！もう無茶しないから!？」

『…ふくんホンとかな〜』

「…できるだけ守ります…ダメかな？」

『……………仕方ないなあ〜』

なんとか機嫌直してくれた。束さん、昔から怒ると機嫌を直すまで時間がかかる

でも何か嫌な予感が

『で、でもだよ!!今回の無茶ばかりは見逃せないから罰として束さんと…デ、』

「…デ？」

『デートしよう!詳しい日にちと場所はあとで!ではさくら〜ば〜だ〜よ〜』

「あ、ちよ…束さん?…切れちゃった……………罰だから仕方ないよなあ…」

モニターを閉じベットに倒れゴロンと寝返りをうち天井を見る

「…でも…デートってなんだろう…うんわからん！とりあえず寝るか。明日も授業だし」

明かりを消しそのまま目を閉じやがて夢の世界へと落ちていった

—フヒヒヒツ…さあ今日も——しましよるかアハツ!!—

影よりも暗い無数の異形

小さな影…いや十歳にも満たない子供に爛々と輝く瞳を向け地を蹴り襲いかかる

あと数センチと鋭い爪、牙がその体へ触れようとしたとき異形の動きが石像のように止まった

ズルリ…と音が響き異形の体はあらゆる方向へ崩れ落ち、回りにいるソレも同様に崩れ水音と共に落ちる

残されたのは小さな子供と異形の成れの果て、子供の体から薄く鋭い刃が血に濡れている

やがて刃をゆっくり振るい血を飛ばすと同時に体の中へと何もなかったように吸い込まれ消え、子供が頭をあげ見えた顔は……

第三話 出会い

「…とということでクラス代表は織斑君に決まりました！」

「え？ち、ちよっ？待ってくれ！俺負けたのになんで!？」

「それは私が辞退したからですわ！」

元氣よく立ち上がるのは先日、オレと一夏くんが戦い負けた相手のオルコットさん

それになんかテンション高いし？

「まあ勝負はあなた達の負けでしたが、しかしそれは考えてみれば当然のこと。なにせわたくしセシリア・オルコットが相手だったのですから」

まあ、IS初心者のおレや一夏くんじゃ勝てないしな…

「それで、まあ、わたくしも大人げなく怒ったことを反省しまして」

あれ、なんか態度が柔らかいな…それにあの熱が宿った目は恋する乙女が目だ

それに気づいたのか篠ノ之さんがにらんでるし

「一夏さんにクラス代表を…「すまないがあと一人追加となった」…はい？」

言葉の遮るのは一方…いや担任の織斑先生、あと一人って？

「特例として獅童、お前も代表となった…」

「はいいい!? 千、千冬さ…ったあ!？」

「…織斑先生と呼べ…オルコットもいいな？」

「わ、わたくしはべつにかまいませんわ」

「いやあセシリアわかつてるう〜」

「しかも二人も代表なんだから美味しいね〜」

う、なんかもう確定事項って感じでクラスのみんなに認識されてる？でもバイオネットの連中の件もあるし今まで以上に気を付けない

といけないし渡りに船って感じていいかな

「そ、それですわね。わたくしが一夏さんにISを教えて…」

「あいにくだが。一夏の教官は足りてる。わ・た・し・が、直接頼まれたからな」

「あら、ISランクCの篠ノ之さん。Aのわたくしに何かようかしら」「ら、ランクは関係ない！頼まれたのは私だ！い、一夏がどうしても懇願するからだ！獅童についてやればいいだろう!!」

「し、獅童さんはなんというか…放っておいても強くなるって気がするんですの」

一夏くんのコーチは私だと互いに譲らない二人…でもオレも代表なんだけどさ

「…座れ、バカども」

「…つたあ？」

「お前達のランクなどゴミだ。わたしからしたらどれも平等にひよつこだ。まだ殻もとれてない段階で優劣をつけようとするな」

二人を叩いた煙が立ち上る出席簿を片手にそういうといまだに痛み頭を押さえるオレにさりげなく小さな何かを素早くわたし歩き教壇にたつ

「クラス代表は織斑一夏、獅童燐。異存はないな」

クラス全員の「はい」って声を聞き少し肩をおとしながらさつきに渡されたのを見ると一枚の紙切れ

とりあえず授業を受けてからみるか

「…来たか」

「あ、あの…いったい何のようですか？」

「燐、服を脱げ」

「え？」

早朝、まだ日も上がらないうちにISアリーナへ呼び出されに来ていきなりソレですか？

昨日は代表決定パーティーで散々取材されたり、写真とられたりで少し眠い

それに写真撮影の時……………

「ふん」

篠ノ之さんがなんか機嫌が悪い、視線の先には女の子に質問攻めされる一夏くんの姿…最近の様子を見て篠ノ之さんが一夏くんに好意を寄せてるって気づいた

なら少し助け船だしてみるか

(篠ノ之さん、少しいい?)

(…なんだ)

やっぱり機嫌悪い、でも言わなきゃいけないかな

(篠ノ之さん、一夏くんのこと好きなんだよね)

(な!!)

(しっ! 気づかれるよ…篠ノ之さん、一夏くんが好きなら今のうちがチャンスだ)

(な、何故だ?)

みんなに気づかれないように、ただしはつきりと口にする

(同じ部屋にいるのに何時もみたいにツンケンしてたら篠ノ之さんの気持ちは伝わらない。だから少しだけ素直になつてみたらどうか

？じゃないと他の女の子に取られるよ)

(うう…だが…)

(篠ノ之さん、オレも協力するからさ、今日からでも素直に、ね)

(ど、努力する)

強くうなずき女の子に囲まれ困惑する一夏くんのいる場所へ歩いてく

まあ二人がうまくいくように協力するか

コップを手に取り中に入ったオレンジジュースを一気に飲み干した

「どうした獅童？早く脱げ」

「あ、あの何で」

「…いいから脱げ！時間もないからな」

凄みがある目で見てくるから仕方なく上着を脱いだ…正直あまり見せたくないんだけど…

「…左腕を出せ」

有無を言わせないと感じさせる目に左腕を出すと何処から出したかわからない機械を左手首にあるGストーンに付けて端末を操作していく

「あ、あの…：燐、少し黙ってる」…：はい」

長い沈黙、やがて小さな電子音が響いた

「GSジェネレーター正常稼働…よし、いいぞ」

「あ、あのまさかこれってアジャスタシステム？」

「東から頼まれたからな…無茶するお前を見張ってくれとな」

「あははは、なんかすごく心配かけてるんだね…ありがとう千冬さ…織斑先生」

「かまわないさ…だが東にあまり心配をかけさせるなよ…お前のこと

になると眠らずに何でもするのが目に見えてるからな」

「…は、はい」

軽く頭を下げオレはその場をあとにし皆がいる食堂へ向かった

「まさかアジャスタシステム渡してたなんてな…なんか千冬さんと東さんに助けられっぱなしだな」

誰もいない廊下を歩きながら呟く…オレの体をよく知るのは千冬さん、東さん、レイジじいちゃん、師匠、織江、犬神、疾風、凍也、弾ぐらいだなと考えてたとき

「きゃっ!?!」

出会い頭にぶつかり倒れそうになるのをあわてて手を掴んだ

「あ、大丈夫か?」

「…別に」

セミロングで水色の髪、メガネをかけた女の子が左手をジツとみてる

「わ、わりい痛かったか?」

「……(フルフル)」

体勢を直してから手を離す…でもメガネ越しにまだチラチラみてる…なんだろうと思いい視線の先を見る、袖がまくり上がりGストーンが露になってる、あわてて袖を戻した

「あ、あの…今見たのはできるだけ人に言わないでくれるかな…」

「……………」

う、なんかすごく無口な子だな…でもこの子どこかで見た気がするな?

「………わかった」

「ありがとうな…あ、オレの名前は…:獅童燐…:…? 何でオレの名前を!?!」

「…昨日イギリス代表候補生との試合見てた…」

「そ、そうなんだ…じゃあ負けたことも見てたんだ」

「…うん…ひとつあなたに聞きたいことがある。あの時の《光》はナニ？」

光…多分オルコットさんとの戦いでGストーンが活性化した際に起こる発光現象のことだ、機密に関わらない程度ならはいいかな

「アレはエネルギーの余剰出力が放出されたせいなんだ…」

「…余剰出力？」

「まあ、簡単に言えば《火事場のクソ力》みたいな感じだ…じ、じゃあオレ急いでるから」

「あ…」

これ以上は機密に関わると感じ女の子を残しその場を走りさった

あの女の子とは違うウィルナイフ、参式斬艦刀、プラズマソード、ダブル・リム・オングル、シエルブルーの雨が無数に突き刺さるよう視線を背中にビシビシ感じながら

「まだ聞きたいことあったのに…」

一人残された少女は眩き、第二整備室へ歩いていった
そこから少し離れた場所では

「お、お嬢様？落ち着いてください!!」

「フフフ、私の愛しの簪ちゃんから逃げるなんて…フフフフ…」

「だ、だから落ち着いてください！お嬢様あああ?？」

なにやら八墓村的？な服装に身を包んだ生徒会長を必死に押さええる一人の少女があったとかななかつたとか

「ぎ、ギリギリセーフ…」

「燐、早く座った方がいいぜ」

「そ、そうだな」

いそいそと自分の席に座り机に突っ伏せる燐、俺よりも先に寮を出たはずなただけだな

「織斑くん、獅童くん。おはよう。ねえ、転校生の噂聞いた？」

「転校生？今の時期に？」

詳しく聞くとどうやら中国の代表候補生らしい…ふと数年前に転校した幼馴染みの顔が浮かぶ

「あら、わたくしの存在を今更ながら危ぶんでの転入かしら」

「このクラスに転入してくるわけではないのだろうか？」

まあ箒の言う通りかもしれない…っていつの間にも隣の隣にいるんだ？でも中国の代表候補生か、みんなの会話から専用機持ちがいるのは一年では俺と燐、セシリアがいる一組、名前は知らないけど四組しかないって事だ

まあ同じ一年なわけないだろうな。このクラス対抗戦はクラス代表同士の戦いであると同時に本格的なIS教育を始める前の実力を図り指標を作るものらしいって燐から聞いた

クラス単位での団結力を強くするためのものもあるらしいけど、代表になったからには箒や千冬姉に無様な試合を見せないように特訓をするしかないな

「その情報、古いよ」

学食デザートのフリーパス獲得に燃えるクラスメイトの声を遮るように声が響き目を向けた先には

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できなから」

腕を組み、ツインテールの少女が小さな笑みを浮かべて俺を見ている

「鈴……？お前鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音。今日は宣戦布告にきたってわけ」

ツインテールを軽く左右に揺らしながら堂々と宣言した

第三話 出会い 了

第四話 赤と青（前編）

「何格好つけてるんだ鈴？！すげえ似合わないぞ」

「な、何てこと言うのよ、あんたは?!」

やっと普通にしゃべったコイツは俺のセカンド幼馴染み《凰鈴音》。少しだけ引いたぞ…

「ふあつ…一夏くん、呼んだ?」

「あ、鈴《リン》、燐《リン》違いだから気にするなよ…」

寝ぼけ眼で見ながら体を起こしたのは数少ない俺と同じ境遇の世界で二番目にISを動かした男子で友達の獅童燐、眠そうな目で鈴をじつと見てる

「…あ、はじめまして獅童燐だ。えと」

「凰鈴音よ。っていうかさ」

第四話 赤と青（一）

「?」

「あんた名前被るから名前変えなさい!」

「え? いやいきなり名前変えられないし…変えるなら凰さんの方がな? 鈴って《スズ》って読めるし」

「だ、誰が家なき子よ!」

「待て燐、双海亜美何てどうだ?」

「それいいな一夏くん」

「ア、アイドルマ○ターじゃないわよ! スク水なんか着ないからね!!」
おくい燐、あんまし挑発するなつて。鈴って怒ると怖い…半分俺にも責任あるか、ってか鈴の背後に雄叫びをあげる猫が見えて…

バシンッ！バシンッ！！

「ツたあ!？」

「ツタタ!!」

聞きなれた音と黒い鈍器…いや出席簿《黒い凶器》を片手に持った鬼が…

バシンッ！

「ツたあ!？」

「誰が鬼だ、もうSHRの時間だ。教室にもどれ」

「ち、千冬さん……」

「織斑先生と呼べ。さっさともどれ」

「す、すみません……またあとで来るからね！逃げないでよ、一夏!!」

ドアから離れそれだけ言い残し二組へダツシユ…昔から鈴って千冬姉が苦手だな、さっきの態度みたらわかんだけど

「つていうかアイツ。

IS操縦者だったのか。初めて知った」

「……一夏、今のは誰だ？知り合いか？偉く親しそうだったな？」

「い、一夏さん!?!あの子とはどういう関係で——」

口にしたのが不味かった。クラスメイトから質問集中砲火…ああバカ……

「席につけバカども」

鈍い音と共に黒い凶器が火を噴いた…俺のせいかな?…そうだよなやっぱり

でも、ISを動かせるようになってココにに来てから知り合いとばっかり再会するな。それに同じ境遇の隣ともあったしまあ悪くないかな。

さて今日も頑張りますか。

「お前のせいだ！」

「あなたのせいですわ！」

昼御飯を食べに向かおうとしたオレの目の前で一夏君に文句を言う二人。授業中にぼーつとして山田先生から注意数回、千冬さんからは三回叩かれてる

二人がぼーつとしてた原因は中国代表候補生の凰鈴音さん。凰さんが一夏君と話すさいに感じられた熱っぽさを感じたんだろう

中国か：疾風のヤツ元気してっかな

「まあ、話ならメシ食いながら聞くから。とりあえず学食いこうぜ」と、一夏君に言われ篠ノ之さん、オルコットさん、クラスメイト数名、オレは学食へ移動する

券売機で一夏君は日替わり、篠ノ之さんはきつねうどん、オルコットさんは洋食ランチ：でもココの学食はすごいな

「な、なあ燐。そんなに食えるのか？」

「え？普通じゃないかな…」

オレのトレイをみて冷や汗流しながら尋ねてきた…ご飯が見えないぐらいギツシリと肉、肉、肉が盛られた特大どんぶり《牛丼・ゴルデイオンクラッシュャー盛り》が圧倒的存在感でのつてる

「そ、そんなに食べて大丈夫なのか？」

「え、うーん…：オレ、太らないんだ」

ビシッ!!って音が篠ノ之さん、オルコットさんから聞こえた気が：

(ふ、太らないだと！)

(な、何てうらやましいんですの!?)

「そ、そうなのか…ん、俺のもきたし行く…」

「待つてたわよ一夏！」

声が響きみると今朝一夏くんの前に現れた凰さんがトレイにラーメンをのせ立ちふさがつてる…同時に篠ノ之さん、オルコットさんから何か見えた気が…

「とりあえず、席に座ろうか？皆の迷惑だしさ」

皆をそう促し丁度五人が座れる席へ座る…でも凰さんがオレの牛丼を見て冷や汗かいてる…

「あんた、そんなに食べられるわけ？」

「ん？まあこれぐらいが普通じゃないかな？」

「……………なんか、あたしの知り合いに似てるかも…んな事より、一夏。あんたなにIS使えつてるのよ。ニュース見たときビックリしたじゃない」

少しため息ついてからポンポンと会話を弾ませる一夏くと凰さん。なんか昔から知ってるって感じだ

そんな様子を見て二人からスーパーサイヤ人4並みのすごい気が垂れ流し状態なんですけど!?

「一夏、そろそろどういう関係か教えてもらいたいんだが」

「そうですね！一夏さん、まさかその方と、つ、つ、付き合ってるっしやるの!？」

「べ、別にあたしは付き合ってるわけじゃ」

「そうだぞ。なんでそんな話になるんだ。ただの幼なじみだよ」

「……………」

「なに睨んでるんだ？」

「何でもないわよ！」

なるほど、幼馴染みだったのか…クラスの皆もなるほどって顔してる。でもこれではつきりした、凰さんは一夏くんの事が好きなんだね。それを察した二人からさらに《気》が溢れだしてるし

それから食事をしながら一夏くんが篠ノ之さんの事を凰さんに話し、互いに挨拶を交わしオルコットさんも自己紹介したんだけど「他の国とか興味ないし」って言われて怒り出したりそれをまあまあと一夏くんと一緒に宥めながら先に戻ると言い食堂から去った凰さんのやり取りを思い出しながら賑やかながら色んな意味で戦場な昼食を終えた

もちろん《牛丼ゴルディオン・クラッシュャー盛り》を完食して…

「あれ？」

「え？」

放課後、ISアリーナでオルコットさんを交えた特訓（正確に言えば護衛）に付き合うオレたちの前に純国産第二世代IS《打鉄》を纏った篠ノ之さんがアリーナに立ち待っている

「ど、どうしてココにいますの!？」

「い、一夏に頼まれたからだ…それに近接格闘の訓練が足りてないだろう。だ、だから私が相手してやる」

（な、なんでこうも簡単に許可が降りましたの…で、でも負けられませんか！）

「では一夏、はじめるとしよう。刀を抜け」

「お、おう！」

「で、では——参……」

「お待ちなさい！一夏さんのお相手をするのは……」

「あの少しいいかな？」

「なん／＼ですよ／＼だ？」

一夏くと篠ノ之さん、間に入ろうとしたオルコットさん呼び止める……でもギロツて睨まれた。何かしたオレ!?

「て、提案なんだけどき、このままやると二人同時になるよね……そこで篠ノ之さんは近接格闘を、オルコットさんは遠近戦のレクチャーを交代でしてみたらどうか？（さすがに二対一はキツイし）」

「確かに良い案ですわね……でも一人余ってしまいますわ」

「それまでオレに特訓をつけるってのはどうかな？そうすれば交互に一夏くんを鍛えられるし」

「……わかった、さすがに二対一は今の一夏には酷だな（要するにマンツーマンで一夏と特訓が出来るわけか……）」

「そうですね（一夏さんとマンツーマン……ふふ獅童さんも良いことを考えますわね）。では誰が最初に……」

「ここはジャンケンで決めようか」

そう言う二人は少し離れた場所でジャンケンを始める

「サンキューな隣」

「良いってことさ、でも特訓相手は代表候補生に現役の剣道選手だ。」

「気を抜かないで頑張ろうか」

「ああ！互いに頑張ろうぜ!!」

軽く拳をぶつける、しばらくしてジャンケンを征し最初の一夏くんの相手になるのは篠ノ之さん、オレはオルコットさんになった

「では仕切り直していくか」

「おう！いくぜ箒」

近接ブレードを構え地を蹴り切り結ぶ二人：篠ノ之さん何処と無く嬉しそうだな

「獅童さん、準備はよろしくて？」

「オルコットさん今日はよろしくお願いします。あ、あと新しい技を試していいかな？」

「ええ、かまいませんわ。ではいきましょうか」

スターライトMk-IIIを構え飛翔するのを見てオレも続けて飛翔…さって今のうちに使いこなして見せるか

「ううう疲れた」

「お疲れ様く確かに疲れたな」

「一夏は無駄な動きが多すぎる。だから疲れるのだ」

特訓を終えISを解除したオレと一夏くんはピットに戻った：篠ノ之さんも着いてきて開口一番にこれはきついよ、一番手、篠ノ之さん、二番手、オルコットさんの特訓は熾烈を極めた

でも短期間であそこまで動けるようになるなんてスゴいよ

「まあまあ、一夏くんもよく頑張った方だから…それにお腹空いたな」

(あれだけ食べてもうお腹がすいただど!?)

(隣、お前ってやつはすごいよ…それに汗かいてないし…)

心の中で盛大にシャウトする二人…牛丼ゴルディオンクラツ
シャワー盛りを完食するのを間近に見てたから仕方なかった

「ま、まあシャワー浴びてから飯食いにいこうぜ…箒、今日シャワー
先に使わせてくれよ」

「だ、ダメだ！まずは私が…」

「一夏っ！」

バシユって音が響く、目を向けると嵐さんが立ちその手にスポーツ
ドリンクとタオルを持ち駆け寄ってきた

「お疲れ。はい、タオルとスポーツドリンク」

「サンキュ。あく生き返る…」

ゴクゴクと飲む一夏くんをみたその時、胸に入れていた通信端末が
鳴り慌てて取り出しみる

「ご、ごめん、オレ先に寮に戻るけどいいかな？」

「ああ、別にいいぜ。後で食堂で待ち合わせな」

「ああ、じ、じゃ後で」

制服の上着を羽織りそのままアリーナの外へ駆け出しそのまま人
がいないかどうかを伺いながら端末画面に目を向けると暗号化され
た文章が流れる

《…バイオネットに動きあり、おそらく数週間以内に動くと言想される…詳細が判明次第報告します…犬神霧也》

「バイオネットが動くか…ん？」

《追記。近々一人、燐の応援へ向かいます…ですがくれぐれも無茶をなさらないように》

「そうか…くるのか…出来れば巻き込みたくなかったな…誰だ！！」

気配を感じ辺りを見回す…でも気配の主はもうそこにいなかった

いったい誰なんだ？

「ふう間一髪…でもはつきりしたかな」

「あの何がわかったんですか？」

「まあ、色々かな…虚、国連事務総長ロゼおば様に繋いでくれるかしら？…私の名前を出していいから」

「は、はい…」

慌てて国連へのホットライン回線を繋ぐ虚を見ながら考える
数年前のモジュール01爆発事故、

死んだはずの人間《獅童燐》の突然の転入
白式移送時にトレーラーを襲ったアンノウン

それを撃退した赤い髪の少年と所属不明のIS。

新幹線？ステルス戦闘機？、ドリル戦車と合体した黒いISと一ヶ月前に宇宙開発公団にも現れた所属不明の黒いISとの酷似点

更識、各国の情報網を駆使しうすもやかかっていたバラバラのピースが繋がりが得た《ひとつの答え》

すべては宇宙開発公団、その上層組織《国連》へ繋がる

「つ、繋がりましたお嬢様」

空間投影スクリーンが開き高齢の女性が顔を見せた

―久しぶりだね刀奈嬢ちゃん。なんのようだい？―

「お久しぶりですロゼさん。単刀直入に言います……」「黒いISついてだろ」……え？」

少し笑いながら言うロゼさん…その目からは強い意思を感じる、それ以上にこうして聞きに来ることを予見していた

昔っからかなわなないなあ…もう…互いの腹の探り合いは無理か

わたしは覚悟を決めすべてをロゼおば様から聞くことにした

―いいかい、コレから話すことは更識の当主である嬢ちゃんだから話すんだ。くれぐれも他言無用だよ―

真剣な眼差しを向けながらロゼおば様から語られた事実にはわたしは驚くことしかできなかった

第四話 赤と青（一）

（二）へ続く

第四話 赤と青（後編）

「最っつ低！女の子との約束をちゃんと覚えてないなんて、男の風上に置けないやつ！犬に噛まれて死ね!!」

叫ぶ声と勢いよく扉がしまる音、そして涙目になり走り出しオレの隣を駆け抜けるのは中国代表候補生凰鈴音さん。その目に涙が光つてる

出てきたのは一夏くんの部屋：まさかと思いつながら扉を軽くノックしようとするが声が漏れてきた

「一夏」

「お、おう、なんだ箒」

「馬に蹴られて死ね」

ノックする手を止めそのまま部屋へ入りベッドに大の字に倒れこみ深くため息をつく

涙目になり走り去る凰さん、ドアの前で聞いた二人の言葉から推測してナニかあったんだろう（……一夏くん、凰さんと何かあったみたいだな……仕方ない少し手助けするか……）

と考えながらGストーンにアジャスタシステムを接続し横になりやがて眠りに誘われ目を閉じた…

第四話 赤と青（後編）

「あのく凰さんっているかな？」

「凰さん？さつき出ていくのを見たけど…何かようかしら？」

「そっか…いないんじゃないか…時間とらせて悪かったな」

「い、いいんだよ。あ、あの獅童くん、今度の試合頑張つてね」

「？ああ、もちろん頑張るけど」

なぜか慌てて離れる二組の女子を見ながら歩き出す。あの日の翌

日、一夏くんからあの騒ぎについて聞いたんだけど内容を聞いて少しため息をついた

(料理の腕があがったら毎日酢豚をおごってくれる………これっておもいつきりプロポーズだよな、それを忘れるなんてなあ)

鳳さんとの喧嘩の理由を聞き頭を抱える俺を心配してくれる前にどうやったらかう解釈するんだろう………んでこうして鳳さんに会いに合間を見ては二組まで足を伸ばすんだけど全部入れ違い。一夏くんも鳳さんと廊下や学食で顔を会わせたりするんだけどすぐに逃げたりするから会話は全然できず数週間がたち五月に入ってしまった

どうしたら二人が仲直りできるんだろうと悩みながら今日もクラス対抗戦に向けての最後の特訓をしようと先に行った篠ノ之さんとオルコットさん、一夏くんが待つ第三アリーナのAピットの扉のセンサーに触れ中に入ったときだ

「あたしは関係者よ。一夏関係者。だから問題なしね」

「ほほう、どういう関係かじっくり聞きたいものだな」

「盗人猛々しいとはまさにこの事ですね」

目と耳に飛び込んできたのは一夏くと喧嘩していた腕を組みつつ鳳さん、それに対抗心むき出しで怒気が馱々漏れな篠ノ之さんとオルコットさん

慌てて止めようとするけどとりつくしまもないと言わんばかりに会話が進んでいくにつれ皆ヒートアップしていき遂にそれは訪れてしまった

「バカとはなによバカとは！この朴念仁！まぬけ！アホ！バカはあんたよ!!」

「うるさい、貧乳！」

「一夏くん!!」

叫んだ瞬間、なにかが砕ける破砕音、衝撃で部屋が揺れた。見ると鳳さんが指先から肩までIS装甲化してその拳が壁に触れる寸前で

止まってる周囲からでも妙な力場を感じる

「い、言ったわね………いってはいらないことを言ったわね!!」

「い、いや、悪い。今のは俺が悪かった。すまん」

「今の《は》!?今の《も》いつだってあんたが悪いのよ!!」
ギンツと一夏くんを見ながら言葉を並べていく…もうこうなったら收拾がつかない

「ちよつとは手加減してあげようかと思っただけど…どうやら死にたいらしいわねいいわよ、希望通りにしてあげる——全力で叩きのめしてあげる!!」

それだけ言うとピットから走り出す凰さんを一夏くんは重々しい表情を浮かべていた

「一夏くん、今のは一夏くんが悪い…」

「………燐…俺どうしたらいいんだ」

……今の凰さんに謝ったとしても聞いてはくれないだろう…多分対抗戦が始まる迄一夏くんを避けるのが目に見える

ならどうすればいいか…方法はひとつだけある

「一夏くん、クラス対抗戦の相手は確か凰さんだったよね」

「ああ、そうだけ……まさか燐」

「そう、試合中に謝るしかない…ただ、凰さんのISの攻撃を受けずに接近してになるけど…オルコットさん、篠ノ之さん」

「な、なんだ?」

「なんででしょうか」

「試合までのあと六日間、オレが一夏くんの特訓をつけていいかな？」

「な、なに！獅童がやるのか！」

「獅童さんがですか？でも……」

「……お願いだ……このままだと一夏くんは謝るところか凰さんに近づけず確実に負ける。不安なら近くで見てもいい。それじゃダメかな？」

少し間が空きやがて頷く二人に感謝しながら早速特訓を始める……これを覚えれば勝率は跳ね上がる

対抗戦まであと六日。それまでに習得させなきや

試合当日 第二アリーナ第一試合

試合会場、その上空で俺は鈴と対峙しながらこの六日間を思い出す。マジで地獄だった……でも今は試合に集中するべく目を閉じ心を落ち着かせゆつくりと開いた

「一夏、今謝るなら少しくらい痛めつけるレベルを……いや手加減なしだ……え？」

「……全力の鈴に俺は必ず勝つ……だから手加減はなしだ」

「へえ〜いうわね……一応いっておくけどISの絶対防御も完璧じゃないのよ。S・Eを突破する攻撃力があるのよ……そこまで言うなら手加減なんかしてやらないわ」

ブザーとアナウンスが鳴り響くと俺と鈴は動いた

甲高い金属音が木霊する。瞬時に展開した雪片式型で鈴の青竜刀？を二つ繋げた刃を防ぐも弾かれそうになる、セシリアに教えてもらった軌道をこなし再び鈴と向き合う

「ふうん、言うだけのことはあるわね…けど」

再び切りかかってくるがそれを逸らしきり払いながらいなしていきが鈴からは余裕の表情。耳にバカつと音が響き肩の装甲がスライドし中心に配置した球体が輝く

目には見えない透明なナニかが迫り触れようとした瞬間、一夏の姿が消える

「え?」

「はあああ!」

頭上から上段に構え加速と共に雪片を降り下ろすも寸前でかわされる…いったい何が起こったかって表情を浮かべる

「な、なんで、なんでかわせるのアンタ!」

「さあな、企業秘密ってとこかな!!」

再び切り結びながら俺は燐との特訓を思い出していた

—一夏くん、今からやるのは鳳さんのIS対策の特訓だけど先ずはコレで目隠ししてくれないかな—

手渡されたのは黒いはちまき…少し戸惑いながら目を隠す…なにも見えない、ただ感じるのは風と箒やセシリア、燐の気配

—今からやるのは《気》を感じる特訓だ。《気》ってのはオレたちが今いる場所にも少なからず存在する自然エネルギーだ…先ずは自然の脈動を感じるために視界を閉ざしてもらったんだ…—

—でもこれがなんで鈴のISの対策になるんだ?—

—詳しく説明したいけど今は時間がないから実践的にやるよいいね—

—ち、ちよ? 待て!? うわ!—

鈴との試合の日まで目隠しした状態で攻撃の気を感じかわす訓練

が続いた…それはマジで地獄だった

手本に燐が実際にセシリアのブルーティアーズのビット全方位攻撃をハイパーセンサーをカット、さらに目隠しした状態ですべてかわしたのを見て驚いたぜ

なぜこんなことができるんだって俺やセシリアと箒が聞いたら昔、お世話になった人から教わったと聞いた

—すごく強くて優しい師匠だったんだ…—

そう話す燐の瞳の奥に懐かしさとほんの僅かな怒りの色が見えた

「すごいですわね一夏さん」

「ああ、燐の教えかたもすごかったからな…」

ピットからリアルタイムモニターで観戦する二人の眼前では衝撃砲をなんなくかわす一夏の姿に少し熱がこもった目で見る二人

「でも、燐さんは衝撃砲の事を知っていたんでしょっか？そもそも最近になって採用された兵装のはずなんですけど」

「わ、私に聞くなーそれより二人の試合を見るぞ」

「そうですわね」

再びリアルタイムモニターに視線を移した次の瞬間、アリーナに激しい振動に包まれたモニターにアラート表示が流れた

「な、なんだ？ナニが起こって…」

いきなりの事に混乱する一夏の目の前…ステージの中央に土煙が

もくもくたつてる

さっきの衝撃はどうやらソレが遮断シールドを貫いて入った衝撃波らしい

ハイパーセンサーから警告音が響き赤い光が土煙を突き抜け襲いかかる

なんとか寸前でかわすが僅かにかする…

「な、なんなのよあれ」

鈴の驚く声を耳にしながら土煙が晴れソレが姿を表す

頭が馬、両腕には半透明な球体が備え付けられ背後には大きな翼。

ISを一回り大きくしたナニかがたたずんでいる

「鈴！」

「え？きやああ!？」

馬型？ISが右腕を掲げ球体に光が走り鈴にめがけ放たれる…寸前で一夏が抱き抱えその場から急加速、光が当たると背後にあった壁が急激に氷づけになる

「な、なんなのよアレ！」

「わからない。だが今は逃げないと不味いみたいだ」

鈴の甲龍を抱え加速する白式、しかし狙いを定め今度は左手をかざし赤い激しい熱を伴った光を放つも当たらずアリーナの壁を溶かす

「あり得ない、あんなサイズでビームを撃てるなんて信じられない！つてかおろしなさいよ」

「バカ暴れんかって…うわっ!!」

僅かにスピードが落ちたのを見逃さず今度は赤と青のビームを放つ…逃げられないと覚悟した瞬間ナニかが横切った

「バイオネットめ、まさかこの日に来るなんて…」

：リアルタイムモニターをみて唇を噛み締める。すぐさまハッチを解放してアリーナへ入ろうとするんだけど全システムがシャットダウンされて開かない…この分厚い壁の向こうでは一夏くと凰さん、二人を狙い撃つバイオネットIS。

オレは深く呼吸し、右腕を正面に構える。右腕の甲部分からナニカかが伸びやがて鋭利な金属製の刃が形成され光り始め体が熱くなる
「はあああー！」

掛け声と同時に一閃、無論型もナニもあつたもんじやないけど、振り抜いた瞬間刃は消え代わりに分厚い隔壁がガラガラと切り裂かれ落ちる

「熱い、でも急がなきゃ…フロントム・ガオー!!」

ガオファアを纏いウルテクスラスター全開でアリーナの空を舞う。

(一夏くと凰さんは……いた!)

加速しながらバイオネットISの砲撃から逃げてる姿が目に入る、でも僅かに加速が落ちた

「不味い!プロテクト・リング!」

ウルテクスラスター最大出力で加速し二人の前に立ちはだかり展開したプロテクト・リングにフロントムクローを纏わせた

「プロテクトオ・クロオオオオオオオ!!」

圧倒的な破壊力を秘めた赤と青のビームが切り裂かれ霧散、現れたのはネービーブルーとグレーの装甲が目立つ額に緑色の宝石を輝かせたISがゆっくりと振り返った

「大丈夫か一夏くん、凰さん!」

「り、燐!?なんでここに!？」

「それよりも今は逃げるんだ!アイツの相手はオレがやる」

「な、なにいつてんのアンタ!あんなのに勝てるわけないじゃない」

「…大丈夫だ、一夏くん、凰さんを頼む!フロントム・リング、プレス!ファアアントオムウ・クロオオオオオオオオオ!!」

ウルテクスラスター全開で馬型?ISに突っ込み一気に懐へ入り逆袈裟に切り払うと同時に回転回し蹴りを叩き込みたまらずグラリと倒れる

「まだまだああ!ドリルガオオオ!!」

量子変換されたパツケージマシン《ドリルガオー》が現れ両腕に火花を散らし装着、金色のドリルを高速回転させながら馬型ISの装甲を撒き散らしながら貫き穿つ

「な、なんなのよアイツ…むちゃくちゃすぎる(やっぱり、やっぱりアイツの関係者に間違いないわ!!)」

燐の戦う姿になにかぶつぶつ眩く鈴、だが馬型ISに変化が起こる…全身の装甲が展開すると同時に無数のコードが伸び襲いかかるもガオファアはフロントムクローで切り払うが別方向から伸びたコードが腕ごとガオファアを拘束と同時に地面へ力任せに叩きつけ始めた

「ぐ、ぐあああああ!」

「燐!はあああ!!」

白いなにかが通り抜けコードが切り裂かれ、攻撃から解放されたガオファアを鈴と一夏が抱き抱えた

「な?一夏くん、凰さん、なんで?」

「無茶するなよ燐!」

「つたくよ、一人でやろうなんて無茶すぎよ！」

「うう…でも二人ともS・Eが」

二人の状態をアナライズするとすでに二桁を切っている…ファイナル・フュージョンをするしか勝つ方法はない

あの馬型ISはS・Eと別のエネルギー障壁が二重構造で展開している上に通常では考えられない高エネルギー反応が検知してる…ファイナルフュージョンしてヘルアンドヘブンを放てば勝つことは出来るかもしれないけど爆発時のエネルギーの余波にアリーナが耐えきれない

ならば方法はひとつしかない

「長官、燐からファイナルフュージョン承認シグナルじゃ！」

「うむ、束くん！ファイナル・フュージョン承認!!」

「り、了解…ファイナルフュージョン……………プログラムウウウ・ドラアアアイブツ!!」

空間投影スクリーンに移された各コンディションパラメーターにプログラムが流れると同時に腕を大きくあげ束は力一杯クリアパネルを叩き壊した

— G A O F I G H G A R —

(リツ君、頑張つて…)

束は祈るような目で画面を見つめうつむいていた

「二夏くん、少し離れてくれ…「え、り、燐?」ファイナル!フウウウウジョオオオオオン!!」

二人から離れ胸部リングジェネレーターからEMTを発生させる

とプログラムリングを展開する

量子変換されたパツケージマシン《ガオーマシン》三機がガオファアの回りを旋回しながらプログラムリング上を走りやがて合体が始まる

まずはドリルガオーⅡが脚へ進入し固定、続けてライナーガオーⅡが胴体へ進入、しかし肩に触れる寸前で量子化と同時に肩を構成、最後にステルスガオーⅢが背中へと接続。二基のエンジンブロックが火花と共に上昇し量子変換され腕にロック、シャッターが開き勢いよく拳が飛び出す

最後に脇腹と胸に肩装甲が競り上がり移動固定し最後にヘッドギアが装着しマスクが閉じGストーンが競り上がりGGGとも読める刻印がみえ瞳に赤い光が走る

「ガアアオッ！」

左腕にGとも読める刻印が輝き

「ファアイッ！」

両腕を大きく広げその手から緑の稲妻が迸り

「ガアアアアッ!!」

再び大きく交差し両腕を腰辺りに構えると同時にステルスガオーⅢの左右の翼が一部スライド展開、緑に輝きウルテク・エンジンが展開した

それは黒き鋼の巨人

バイオネットの驚異からすべてを守るため

ISコアとGストーンが融合し生まれた新たなIS…

その名も

勇者王ガオ・ファイ・ガー!!

「いくぞ、バイオネット!!」

「が、合体した…燐？お前のISってソレが本当の姿なのか」

「なんなのよ…もう！」

二人の声を背中に感じながら馬型ISと対峙する。両腕装甲をガパンと展開し現れた球体に光がほとばしる

「ウォール・リング！」

正面に展開したウォールリングに向け手を突きだした瞬間、赤と青の閃光が襲いかかる…

「プロテクト・ウオオオオオール!!」

着弾するも不可視の障壁に阻まれ止まりながら五芒星状に反転しそれを勢いよく弾き返した

「ムン」

爆発に包まれやがて煙が晴れる、受けたダメージが瞬時に再生していく

「なら、フロントム・リング！プラス！ブロウクウウン・フアアアアアントオオオムツ!!」

右腕にGエネルギーをためながら回転しそれはやがて限界を超え勢いよく展開したフロントムリングごと殴り抜くと同時に打ち出し馬型ISの胴体をとらえる…だがS・Eを突き破るが未知の障壁を展開し防いだ

「な、ナニー！だがまだ諦めるわけにはいかない!!」

GSライドの出力が高まりそれに呼応するようにさらに力を増していき遂に障壁を破り撃ち抜いた

二段構えの障壁に高エネルギーを秘めた馬型IS…例え障壁を突破してヘル・アンド・ヘブンでコアを抉り出すとしても爆発、二段構えの障壁を打ち破るには今まで以上の力が必要だ

どうしたらいいんだ…

「燐、俺に任せてくれないか？」

「い、一夏くん？」

「さつきのロケットパンチをみてわかったんだけど、あの馬型には絶対防御の他にも障壁が展開されてるんだろ」

「あ、ああ…それに」

「アイツの中にはメチャクチャなエネルギーがあるから迂闊に手が出せないんでしょう…」

「凰さんまで……………まさか一夏くん！」

「そうだ、俺の百式の零落白夜で絶対防御のSEを完全に無効化する…」

「そしてアタシが龍砲でアイツをアリーナのシールド目掛けて打ち上げる…」

何て無茶な提案を…でも一夏くんの零落白夜ならSEを無効化して切り裂く、さらに凰さんの衝撃砲で馬型ISをアリーナの天井へ吹き飛ばす、最後にヘル・アンド・ヘブンでコアを抉り出し一夏君か凰さんに渡せば

「わかったよ、でも約束してくれるかな。絶対に無理しないって」

「わかってるよ」

「当たり前よ！まだ一夏に…ゴニヨゴニヨ」

「??:」

小さく呟く凰さんに首をかしげながら簡単な打ち合わせをしそれぞれの持ち場へ向かう

『燐！何をやってる』

『織斑先生、今からこいつからコアを抉り出してアリーナの外へ押し

返します！コアを一夏くんたちに渡してオレとアイツが外に出たら最高出力でシールドを展開してください！』

『待て隣！もうじきしたらプロテクトが解ける！そうすれば』

『オレを…いえオレたちを信じてください…では！』

通信を切り今まさに始めようとしたときだった

「一夏あつ！」

キーンツと耳に残る聞き覚えがある声…一夏くんが慌てて声がした方をみて唾然となってる

なぜならそこには篠ノ之さんが中継室でアナウンスをしていた人からマイクをつかみ叫ぶ姿

「男なら、男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとする」

キンツキンツと再び耳に響く。不味い、今の声で馬型ISがゆつくりと腕を中継席へ向け赤い光が溜まり放たれた

「箒、逃げ——」

ダメだらここからじゃ間に合わない…

「うおおおおおおお！」

ナニかがアリーナの外から中継席へ墜ちと同時に赤い光が迫り着弾したかに見えた…が爆発は起こらず中継席は無傷、かわりに赤い装甲を纏ったISが盾を構え立ちはだかっている

あれはまさか

「ふう今度はうまくいくと思ったんだがな、間一髪だけ嬢ちゃん、発破をかけるのはいいが無茶して怪我したら彼氏が泣くぜ！」

「な、何を？／＼／＼／＼」

「え、炎竜？なんでココに」

「細かい話はあとだぜ隣、っと氷竜に変わるぜ…」

赤い装甲がパージされビートル形態になると代わりに青い装甲が纏われる

「燐、お久しぶりです。到着が遅れましたがこれから防衛行動に移ります」

「と、凍也…わかった…あとで話を聞かせろよ」

「了解！」

「ね、ねえ…あいつらなんなの」

「心配しなくていいから、オレの仲間だ」

「わかった、鈴、手はず通りいくぞ!!」

「ち、ちよ…ああ、もう仕方ないわね！」

白式と甲龍が空を駆ける、それをみて馬型ISが再びビームを打ち放つも寸前で回避する

「はあああ！」

金色の輝きに包まれ雪片式型を展開し瞬時加速、素早く懐に潜り込み零落白夜でSEを削り切り裂いた

「一夏あつ！退きなさい龍砲最大出力！ぶつとびなさい!!」

一夏くんが退くと同時に滑り込むように衝撃砲を展開、最大出力でアリーナの外へと向け打ちだす

「よし、ヘル・アンド・ヘブン!!」

両腕を交差し大きく横へ広げ、右に破壊の力が、左に防御の力が収束され徐々に正面、いやすさまじい勢いでアリーナのシールドに向かう姿を捉えながら近づけていく

「ゲム・ギル・ガン・ゴー・グフオ……ムン!!」

呪文を唱えながら攻撃のGエネルギー、防御のGエネルギー溢れさせる右手と左手を胸の前で突きだした形で組んだ瞬間、緑色の竜巻《EMT》が発生。馬型ISを包みこんだ

「うおおおおお!!」

ウルテクエンジンを展開し四基のGSライド最大出力で地を抉りながら突進、そのまま両拳で胴を貫こうとした瞬間、

「いけません」

「な、なにかいけないのよ」

「このままコアを抉り出したとしても残された体には膨大なエネルギーが残留、もしヘル・アンド・ヘブンの破壊力に反応したら」

「まさか!」

「はい、燐はあなたたちを守るために……」

「や、やめなさいアンタ!!」

「フンツ!」

金属片とオイルを撒き散らしながらコアを抉り

「ぬ、ぬううう……せやああああ!!」

抜き取ったISCコアがEMTから抜け二人の手元へ落ちる……その時赤と青の影が飛翔する

「いくぞ炎竜!」

『おう!』

「シンプレート値が上昇！80、85、90、100!!」

「よし、シンメトリカルドッキングいけるよ！レイジ博士!!」

『シンメトリカル・ドッキング!!』

氷竜、凍也の身体から氷竜を構成していたISアーマーが分離、同時に炎竜も分離し凍也の身体の回りを旋回しながら装着され左右の腰にクレーンアーム、最後に胸に銀色の盾がつき目が紫に輝く

『超う竜うう神ンツ!!』

「が、合体した…はははもう驚かないぞ俺」

「やっぱり、やっぱり、あいつと同じだわ!」

あまりの光景に驚きを隠せない二人、超竜神は量子変換された在るものを構築しクレーンアームをガイドレール代わりに懸架、照準を定める

『ワンオフアビリティ、イレイザーヘッドXXXL（トリプルエックスエル）！射出!!』

ゴウツ！と勢いよく銀色の長い塊がガオフアイガー目掛けて射出され着弾寸前で馬型ISが爆発。しかし遅れてイレイザーヘッドが当たった瞬間空へ膨大なエネルギーの本流が放出されその場にはガオフアイガーが無傷で残された

「はあ、はあ…なんとかうまくいったか…」

ほっと一息ついた燐、しかしウルテクエンジンが明滅しやがてフラリと力なく落ちていく…だがガシツと誰かに支えられた

「全く無茶をしますわね燐さんは」

「オルコットさん？なんで」

「織斑先生に言われて前もってココに待機してたのです…あとでお話があるから覚悟した方がいいですわ」

「はい、覚悟しておきます」

うなだれる燐を抱えながらピットへ向かうセシリア、クラス対抗戦に乱入した馬型ISは一夏の白式、鈴の甲龍、燐のガオフアイガーの連携で勝利を得た

そして新たに現れたG—IS—03炎竜／氷竜。そして二つの心がひとつとなり合体することで誕生する超竜神。ハイパーツール《イレイザーヘッド》はバイオネットとの戦いに勝利をもたらす《鍵》となりうるのか？

第四話 赤と青（後編）

了

第五話 事件後

「大丈夫か燐？」

「ああ、大丈夫…それよりもさ…」

「燐さん、あのヘル・アンド・ヘブンはなんなんですか、それにさつき
の姿は？」

「あ、アレはワンオフアビリティーなんだ…」

「やつときたか。織斑、獅童、凰」

ピットに入ったオレたちを待っていたのはすごく厳しい眼差しで
見る鬼…織斑先生が腕組みして仁王立ちしてたつ姿。後ろにいる凰
さんがガタガタ震え一夏くんも冷や汗をだらだら流してた
とりあえず説教は確定だな

第五話 事件後

「や、やつと書き終わったあゝ」

「お疲れ様、オレも今やつと終わった所だ」

「アンタたち、終わった？」

バシユつと扉が開き現れ凰さんが入ってくる。数時間前に対抗戦
に乱入したバイオネットの馬型ISを倒した直後、織斑先生から今回
の件に直接関わったオレたちはこの事を口外しないという誓約書と
教師陣が来るまでの間の行動の詳細をレポート提出すると言われ
ココ自習室でその作業をしようやく終わったのだった

「そういえばアイツがいらないわね？」

室内を見て凍也のことを聞いてくる凰さん。IS学園へ来る前、中
国で大規模な竜巻が無数に発生するという異常事態が起こった際救
助活動に参加していた鈴さん達の前に《緑と黄色のIS》が現れて救
助活動を援護してた時に少しだけ会話し名前を聞く前に姿を消した

らしい：凍也のIS《超竜神》展開時と余りにも容姿が似てたからと
思つて関係があるんじゃないかと聞きに来たらしい

緑と黄色……まさか疾風が中国にいるの!?

「…ああ、凍也なら織斑先生のとこだよ凰さ：「鈴でいいわよ」：いいの?。」

「同じ年なんだから別にいいわよ…あたしも隣つて呼ぶから」

「わかった…一夏くん、鈴さん、オレ今から織斑先生の所いくから書いたレポート渡してくれ」

「え、こういうのは自分でいかないといけないんじゃない?」

「いいから、いいから…じゃまた後で」

一夏くと鈴さんから書類を素早く奪いとり、二人だけ残しその場から足早に出ていった…こうすれば仲直りできるはずだしな

(一夏くん、がんばれ)

と心の中でエールを送りながらある場所へ足を向け歩き出した

「今後のために応援に来たというわけか…：すまないな凍也。私の暮桜が使えればよかつたのだが」

「いえ気にしないでください、今回の件については大河長官、火麻参謀、ロゼ議長がIS委員会を經由で私をメカニック候補生として編入手続きをしてあります。近いうちに《例の議案》も可決されると聞き

ました」

「ロゼさんがあの議案を!?……なら再び集まれると言うわけか……凍也、疾風と霧也は?」

「今、霧也は日本政府、ロシア政府。両政府から更識家令嬢の護衛と日本におけるバイオネットの動向を探っています。疾風（はやて）は中国、五老峰で姿を見たまではつかんできます」

（まさかと思いたいが疾風の方向音痴はまだなおってないみたいだな）

内心あきれながら話を続ける千冬と凍也が話している場所はIS学園の最下層にあるエリア。その一室で二人は今までの経緯と対策について話していた

「織斑先生、例のコアの調査解析結果が出ました」

いつものおどおどした空気がなく真剣な眼差しを向けデータを空間投影モニターへ映す…様々なデータの羅列と乱入してた馬型ISが一夏、鈴、燐、そして凍也が纏う赤と青のIS《超竜神》がメガトンツール《イレイザーヘッドXXXL（トリプルエックスエル）》を射出し爆発エネルギーを大気圏外へ放出する姿が流れた

「このISコアは登録はおろか今までとは違う技術で作り上げられています……コアを作れるのは…」

「山田先生、少し巻き戻してくれないか……そこでストップだ」

「は、はい、これって織斑くんの零落白夜がああISを斬った瞬間ですよね」

「…おかしいと思わないか? 零落白夜で切られたのに関わらずだ

メージが通ってない」

「ほ、本当ですね…それに獅童くんのロケットパンチを受けた瞬間に未知の粒子反応が検知されてますね」

零落白夜で防御を切り裂かれた筈なのに未知の障壁が展開される映像。明らかに通常のISでは起こらない現象に三人は黙り混む

そんな中、秘匿回線がなりモニターが切り替わった

—久しぶりじゃの千冬くん—

「レイジさん？なんでここの回線が!？」

—なに、先ほどIS委員会と国連から要請があつてのIS学園を襲撃した未確認機を調査するよう頼まれたんので—

「そ、そうですか…たば、アリスはどうしてますか？」

—う、そ、それがのく／レイジ博士！今すぐリツ君の所にいかせて！アジャスタをしなきゃ／お、落ち着くんじゃ！—

「げ、元気そうですね…」

「あ、あの織斑先生？この方は？」

—ああ、自己紹介が遅れてすまん。ワシは獅童レイジ、宇宙開発公団研究開発部門におけるものじゃ—

「獅童？ま、ま、ま、ま、ま、まさかあの《世界十大頭脳》獅童レイジ博士ですか!？あ、あ、あ、あの、わ、私は山田摩耶って言います！」

—ああ、まあそうかしこまらなくていいからの山田摩耶くん…：さして先ほどライブラリを閲覧させて貰ったが、その妙な粒子反応じゃが日本。いや宇宙開発公団研究開発部門でも調べられんワイ…：そこでスイスにあるセルン中央研究所で解析をしようと考えておる…：そこ

でなんじゃがのー

「……燐にセルン中央研究所迄護衛も兼ねた休養をとらせたいんですね？」

少し驚いた顔になるレイジ。どうやら凶星だったらしい

—まあ一週間ばかりフランス経由で件の《I S コア》移送を兼ねてスイスへいかせるつもりじゃ……それに一度、燐を公団で定期検診とガオファアのオーバーホールを……

少し頬を掻きながら言うレイジにやれやれと心の中で呟きながら燐に伝えると告げ久しぶりにあったレイジと千冬は会話に花を咲かせながらバイオネットの対策を学園上層部を交え話すと約束し通信を閉じた

「あ、あの織斑先生、少し聞いていいですか？」

「何かな？」

「し、獅童レイジ博士とは何時からお知り合いなんですか？」

少し考えながらやがて口を開いた

「……学生時代の恩師の一人だ……さて山田先生、このコアを宇宙開発公団研究開発部門へ送るから嚴重に封印作業を頼めるか？」

「は、はいー！」

「凍也、後で学園長と……「すみません遅れました！」……って燐？なんで(´▽｀)!!」

「え、レポートが書き終わったから提出を」

「職員室でよかったんだがな……まあいい、燐。後でレイジ博士から連絡が来るから自室に戻っていい」

「は、はい……じゃあ失礼しました……また後でな凍也」

「ああ、ていうか近いうちにまた会えると思うんだが」
「？」

少し疑問符を頭に浮かべながらペコリと頭を下げそのまま退室するとバシユッと音を立て扉がしまると再び先ほどの映像を再生しみる三人。そんな中、千冬だけは回収されたISコアに視線を注ぐ
「…まさか、あの時奪われたISコアか：いや今までのとは違う感覚だ……まるで……」

でかかった言葉を飲み込みコアから視線を離し再び映像をみいる
目

それは、かつてブリュンヒルデ。いやID5《ブラックヴォルフ》と呼ばれた黒狼の目だった

「ふう。一夏くん、今戻っ……」

「「……………」」

最下層から戻ったオレの肌にギスギスとダブルリムオングルが無数に突き刺さるような空気：…なんかスゴく居づらい
ってか、オレがいない間に何があったの!?

「り、燐。助けてくれ（小声）」

「い、いったい何があったんだ？」

「実は、燐が出たあとに謝ったんだ。そしたら許してくれたんだ：…でもセシリアと箒が来てからあんな感じなんだ」

……セシリアさんと葦さんは鈴さんが一夏くんのことが好きだった本能的に悟ったんだな……

「さて、一夏さん。今日の戦闘分析始めましょう。わ・た・く・し・とふたりで」

「なにいつてんのよ！一夏はあ・た・し・と組んで戦ったんだから、あたしと分析するに決まってるじゃない!!」

「いいや！一夏は・わ・た・しと今後の特訓に向けての対策をするんだ!!」

ゴゴゴゴゴ！ドドドドド!! って音と共にスタンドが現れたのを観た気がしゴシゴシ目を擦るけどまだ見える……不味いなこれ

「一夏くん」

「な、なんだ憐」

「とりあえずさ三人と一緒にやったらどうかかな？三人揃えば文殊の知恵って言うし」

「……そうだな……憐、俺逝ってくる」

覚悟を決め言い争う三人の和に入り数分、ようやく収まり三人仲良く分析を始めた

もちろんオレも一緒に……

こうして長い長い一日はようやく終わりを告げた

第五話 事件後

了

第六話 デート♪

IS学園より少し離れた湾岸部、巨大な浮遊島《ギガフロート》に建設されたアイランドシティ。その中央に高くそびえる高層建築、《宇宙開発公団本部ビル》

そこでは来るべき外宇宙へ進出へ向けての新たな技術開発及び新型シャトル、軌道衛星拠点建設に必要な新素材開発部門があるこの施設の地下2・5キロ下に建造された海中施設ヘキサゴン、その最重要区画エリアXでは燐の定期検診が行われていた

「……………ふむ、GSジェネレーター正常稼働68%…各値異常なし。OKじゃ燐」

「ふくやつと終わったあ」

体につけられたパッチを外し《マニージマシン》から立ち上がる燐。ガオファー、ガオファイガーで戦うようになってから祖父であるレイジの手で月に一、二回の定期検診を受けていたのだ

「あとガオファーもオーバーホールするから渡してくれるかの」

「わかった、んじゃオレ食堂…」

「リ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜ツく〜〜〜〜〜〜ん♪
♪

「うわあ!?!」

声と同時に前から思いっきりタックルされ倒れそうになるがこらえる。見るとIS開発者にして現在絶賛行方不明中の篠ノ之束がまるでウサギみたいに跳ねながらヒシツと抱きついてきた

「うんうん、久しぶりのリツ君の匂いだああああ♪お日様みたい♪

♪」

「ち、ちよ？東さん？離れて（あ、あたってると？背中に柔らかいメロ
ン？があたってるうう）」

柔らかな二つの膨らみを感じながら離れようとするもガツシリと
抱きつかれ中々はなすことができない

「ああくゴホン。東君、あんまりイチャイチャされると」

「アリス（東の偽名）さんって年下趣味だったんだ」

「年下のかれを、自分好みに調教…ハア、ハア、ハア」

「しかも逆玉じゃないかしら…」

「がんばれ、アリスさくん」

女子職員の好奇の視線に気づき慌てる燐だが東はさらにギュウウ
ウツ！と抱き締めてくる

「じ、じいちゃん、助けて〜!!」

「仕方ないのう…東くん、少しよいかのゴニョゴニョゴニョ……」

苦笑いしながら軽く東に耳打ちした瞬間、ピンっとメカウサ耳が勢
いよく立ちパツと離れた

「燐、ガオファアの調整に今日の夜までかかるから、久しぶりに街に
出たらどうかの？」

「え、でも…セルン中央研究所迄の輸送ルートの打ち合わせは」

「それに関しては大河君と火麻君とやるから安心せい…そうじゃ東
君も今日は午後から休みじゃったの」

「う、うん／＼／」

「じゃあ二人にコレをあげよう」

と白衣の胸ポケットから取り出したのは最近リニューアルオープンした《ボトム・ザ・ワールド》のパス

「ま、息抜きがてら遊んでくるといい…ああ、いい忘れつつたが今日までじゃからの…じゃ、ワシはこれで失礼するぞい」

「ち、ちよ…ああ、いっちゃった…しかもマジで今日までだし…」

「リツ君！」

「な、何？」

「い、今から一時間後にロビーで、ま、待ってて！」

「え？ちよ……………行っちゃった……………まあいいかな」

ボタンつて音と共に、すんごい早さで駆けてく束さんを見ながらオレは自分の部屋へと歩いていった…

「早く来すぎたかな…」

私服に着替えロビーに来たんだけど束さんの姿がない…でも、久しぶりかな。こうゆつくりするのは

「り〜〜〜ッ君♪おまたせ♪♪」

「た、束さ……………ん」

声が聞こえ振り返る。水色のフリルが目立つワンピースに少し大

きめな帽子に髪をツインテールした東さんが立ってる…な、なんかすごく

「……か、かわいい」

「ーそ、そう!?!じ、じゃ行こっか!レッツゴオオ♪♪」

「ち、ちょー!ひっぱらな…」

そのまま東さんに引きずられながら公団のリニアに乗りしばらくして……ボトム・ザ・ワールドの入り口に到着した

「着いたよりッ君!じゃあ早速、あれに乗ろう♪♪」

「え?あ、アレに乗るの!?!」

パスを提示して少し歩き指差したのはボトム・ザ・ワールド名物《ビッグチカチャンコースター》

「ほ、ホントに乗るの?」

「うん♪さっそくいってみよ」

あっという間に最全席に座りロックされる、ガタンガタンと緩やかに上昇していくビッグチカチャン、やがて最頂部で止まり一気に降下した

「ぎ、ぎやあああああああ!?!」

「ハハハハハハ、楽しい!」

すごい速さでビッグチカチャンがレールを滑る中、叫び声がありました

「博士、燐の定期検診の結果は」

「GSジェネレーターは問題ない…じゃが」

空間投影スクリーンが形成され映し出されたのは燐の検査結果、そしてガオファアのメンテナンス状況。それを見て顔を曇らせる

「これはF・Fのダメージか？」

ライナーガオーIIの内部断面図、細部に異常を示す数値が多数示されていた

「長官、これはヘル・アンド・ヘブンのダメージじゃ…いくら絶対防衛に守られてるとはいえ、いつか…」

「深刻な事態になるか…博士、セカンドシフト移行にはあとどれくらい要する？」

「…二ヶ月以内じゃ…」

言葉をつまらせるレイジ、ガオフアイガーで戦うようになり数回。その間に束と共に負担がかからないよう改良してはいた。だが予想を上回るダメージにレイジは頭を抱えていた

「…今回、学園にも現れたバイオネットISは高圧縮エネルギーを内包してたそうだ。博士、《アレ》の完成は」

「すでに完成しておる、しかし、テストをおこなっておらんからの。まだ実戦では使えんワイ」

「今後、学園にバイオネットISが現れる可能性が高い…一刻も早く実働テストを急いでくれ」

「そのつもりじゃ…」

二人はオレンジ色の巨大なマイナスイオンドライバーのシユミレート
データ、構造概念図へ無言で目を向けた

「すつごく楽しかったね」

「う、うん…」

「次はあれに乗ろっか」

ビッグチカチャンコースターを降りるも次のアトラクションへ向
かう…

「な、何でまた絶叫マシンなの!？」

「いいじゃん、いいじゃん」

につこり笑顔を浮かべ有無を言わずシートに座らされた直後、高
さ150メートルまで上昇し体に浮遊感を感じた瞬間

「うっわああああああ!？」

「きゃははははははは♪♪たっのしっしっ♪」

「ヘルプミイイイイ!？」

本日、二度目の隣の悲鳴と束の音がボトム・ザ・ワールドに響き渡つ
た

「だ、だいじょうぶリツ君…」

「う、うん…平気だから…あ、少し動かないで…」

「え？」

あれから絶叫マシン巡りを終えベンチでぐったりしながらアイスハウスで買ったアイスを食べる燐は手を止めハンカチをとりだし頬についたアイスをふく

「よし、取れた…あれどうしたの束さん？」

「…ごめんね、ごめんリツ君…わたし、リツくんのこと全然考えてなくて…ごめ…え？」

「オレなら大丈夫だから…じゃ今度はあれに乗らない？」

ベンチに座りながら束の頭を優しく撫でながら指差したのは《ピツグチカチャン観覧車》だった

「え、ええ〜いいの／＼／＼」

「うん。ほら、行こう束さん」

アイスを食べ終わるとベンチを立ち、手を握るとそのままパスをカウンターに提示し観覧席に座る、ちょうど互いに向き合う形で

「／＼／＼／＼／＼／＼」

心なしか束の顔が赤い。目が合うとバツと顔をそらすを繰り返した。それ以上に燐も顔が熱くなるのを感じていた

「そ、そういえば、二人つきりしているの久しぶりだね」

「う、うん…り、リツ君。少し聞いていいかな」

「な、ナニ？」

「リツ君、リツ君は将来はやっぱり宇宙飛行士になるのかな？」

「うん、オレの夢だから…どうしたの束さ…んんっ!？」

顔に柔らかな髪と胸元に温もり。見ると束が身を任せるように抱きついている

「…ねえリツ君、リツ君の夢に、わ、わ、わ、私はいるかな？」

「…え？…」

「…いい、いいの！いい、今は聞かなかったことで！……そ、そうだリツ君にこれあげる!!」

パツと身体から離れ小さな箱を取りだし手渡した

「開けていいかな」

「はいよ」

包装を剥がし蓋を開けると金色のニンジンロケット型のペンダント…取りだし手に乗せるとパチンと音と同時に蓋が開き満面の笑顔を浮かべる束の写真が入ってた

「コレって」

「…わ、わ、わ、わたしだと思って大事にし…大事にして」

言葉の最後あたりが小さくなる束、頭から湯気が立ち上ってるのが見える

「な、なんか恥ずかしいけど…ありがと束さん…」

「う、うん！あ、あれれ？」

急にふらつき始める束、咄嗟に燐はその身体を優しく受け止めるもピクリとも動かないかわりに穏やかな寝息が耳に聞こえてくる

「…まさかと思うけど、寝てなかったんだ束さん…まあいつかな」
束を抱き抱え隣に座らせる寝かせしばらくして観覧車が降り場へ
着いた…だが

「束さん？た・ば・ね・さくん……………駄目だ起きないや…」

肩を揺らすも一向に目を覚まさない。昔から束は一度眠ると中々
起きないことを思いだした燐は束を抱き抱え観覧車から降りる…い
わゆる《お姫様だっこ》でだ

(うう…このままリニアには乗れないし…仕方ない歩いて帰るか)

そう決めると燐は地上ゲート…開発公団海岸線ルートに出るとオ
レンジ色の夕暮れに染まる空の下、砂浜を歩いていく

穏やかな潮風が流れ束の髪を揺らすと顔が見え穏やかな寝顔を浮
かべる束。思わずドキドキしながらもまっすぐ開発公団へ向け歩き
だした

……………しかし

(り、リツ君にお姫様、お姫様だっこされてる!?も、もう少し寝たふり
し…とこ♪)

開発公団に向かう途中から起きていたことに燐は気づかず、数十分
後に開発公団へ辿り着いた燐と束の姿を見た職員達は終始暖かな
視線を送り、その様子を見たレイジはコッソリと隠し取りしてたのは
言うまでもなかった

第六話 デート♪

了

第七話 守りの左手

五月後半。雲ひとつない空、黒を基調としたステルス戦闘機を背負うようにグレー地に青緑色の装甲、緑色の宝石を輝かせるIS《ガオファー》が超音速で空を翔る

『燐、もうそろそろしたらフランス領空に入る。そろそろ降下準備に入るんじや』

「了解」

『ところで燐、ステルスガオーⅢのウルテクスラスターの具合はどうかの?』

「異常なしかな。じゃあセルン中央研究所についたら連絡するから…ところで束さんは?」

『束君ならさつき仮眠を取りに部屋に戻ったぞ…最近徹夜続きだったからの。燐、くれぐれもバイオネットには気を付けるんじやぞ』

「わかった」

通信をきると目の前にはパリの街並みが見える。燐はゆつくりと空を旋回しつつ《ファントム・イリュージョン》を展開、ハイパーセンサーで人気のない事を確認し、空き地へ音もなく降り立つとガオファーを解除した

「此所からは陸路か…んじやいくか」

軽く背伸びし燐は巨大なトランクを量子変換しガオーブレスに納め歩き出した

第七話 守りの左手

数時間前、???内ミラーカタパルト

「燐、ISコアをセルン中央研究所まで頼んだぞ」

「何かあったらすぐに連絡寄越せよ燐」

「燐君、必ず無事に戻ってくるんだ」

「火麻さん、大河さん、じいちゃん、じゃあ行ってきます…ファントムガオー！ガオツ・ファー!!」

光と共にIS《ガオファー》が纏われ同時にステルスガオーⅢが現れ背中にドツキング、燐はカタパルトデッキに立つとクラウチングスタートの構えをとる

—ミラーコーティング始めるよりツ君♪—

東の音がカタパルトデッキに響くと銀色の粒子がガオファーの回りを漂い蒸着、やがて銀色に染まる

—ミラーコーティング完了だよ♪…え、えとねリツ君…お土産はいからね…う、浮気したらダメだからね!!—

「浮気って!?そんなことしないし。それに俺女の子にモテない………」

—………ガオファー、ステルスガオーⅢ装備モード。イミツション!!—

「い、やあああああああ!?!」

少し怒気が混じった声を聞いたのを最後にミラーカタパルトから勢いよく射出され大空をまるで弾丸の様に駆け抜けた

浮気って…俺モチないんだけどな

んで今に至るんだけど、フランスの中央にあるセルン中央研究所直通リニアの発着ターミナルへ向かい足早に歩く。じいちゃん達からはゆっくりして良いと言われてるんだけどバイオネットが何時またIS学園を狙うかわからない
し……

「きやつ!？」

「うわ?」

胸に鈍い衝撃…踏みとどまるけどぶっかった相手が倒れそうになる。あわてて手を掴んだ…ふう、ギリギリセーフだ

「だ、大丈夫か?…あ」

「……………」

金髪を首の後ろで束ねた中性的な子がジツと自身の手と俺の手を見て…いやその視線はインタークーラーコートの袖がめくれ上がり淡い緑光を発する《Gストーン》に注がれてる…あわてて隠した

「あ、あのさ…今見たの黙って…あ、日本語わかんないよな…」

「…あ、あの。僕、日本語わかります」

少しおどおどしながら口を開き出た日本語にホッと胸を撫で下ろした…でも日本語うまいな

「…日本語うまいな君、あ、俺は獅童燐って言うんだ」

「シドー…リン?なんかすごく不思議な響きだね。じゃあ僕も…シャルル・デュノアです」

「シャルルか、さつきぶつかってごめんな。痛いところ無いかな?」

「え、僕なら大丈夫だよ…でもシドー君は?」

「大丈夫、こう見えて毎日鍛えてるから平気だ」

「へえ〜なんか羨ましいな…でもシドーはなんでフランスにいるの?」

「え。観光かな（本当はセルン中央研究所までいくんだけど）」

「なら僕が街を案内してあげるよシドー」

「え?シャルル!?俺あんまり時間が…」

「いいから、いいから」

ぐいっと左手をつかまれ俺はシャルルに強引に引きずられながら
パリ市街を歩きだした

街中を歩く度に左腕のGストーンが暖かくなるのを感じながら

メインオーダールーム

「はっ…リツ君に悪い虫がついた気がする!!」

ガシャンツとメカウサ耳がピンと立たせる束…その目から光が消
えてるのを見た大河、火麻、獅童は冷や汗を流していた

「いろんな場所に案内してくれてサンキューなシャルル」

「いいんだよシドー君。でもさ…そんなに食べれるの？」

「ああ、シャルルは食べないのか？たくさん食べないと大きくなれないぞ、男の子なんだしさ？」

「ぼ、僕は良いよ（…あんまり大きくなると肩こりがひどくなるから）」

なんか妙に落ち込んでるシャルル…街中をいろいろ案内して貰い少しだけ互いのこと話したりしたんだけどシャルルが男だって聞いた時マジ驚いた。でも男にしちや体が細いし、それに女の子っぽい仕事が見えるけど気のせいだな

んで今、俺とシャルルはオープンカフェのテーブルに座り軽めな食事をとってた…ん、このコーヒー上手いな

「あ、あのさ、シドー君…シドー君の左腕の石ってなんなの？」

「……………」

石…多分Gストーンの事だろう…でもなんで聞くんだ？って考えた時、シャルルが胸元から取り出したモノを見て思わずコーヒーカップを落としかけた

金の鎖に繋がれた台座に詰められた石…緑よりも深く淡い光を湛え《G》とも読める幾何学模様が輝く石…Gストーンを何故シャルルが持つてるんだ？

「…シドー君の石と同じだよ…」

シャルルが言いかけたその時、爆発音が響き空気が震えると同時に悲鳴が上がる。シャルルを庇うように目を向けた先には赤い蒸気機関車を模した全長6メートル前後のISが辺りに火炎弾を撒き散らし建物を破壊する姿

「シャルル、早くここから逃げるんだ！」

「え、シドー君はどうするの？」

「…いいから早く逃げるんだ！」

それだけ言うとシャルルをその場に残し走り出すと、左腕を大きく掲げ叫んだ

「フロントム・ガオー！ガオツファー！ウオオオオオ！！」

量子変換されたフロントムガオーがバラバラになり燐の体に装着、ISガオファーが姿を見せ赤い蒸気機関車を模したISにフロントムクローを展開と共に殴る：だが絶対防御とは違う不可視の障壁が展開し防いだ

「な、なに！」

《!?!%?・*?%!@!!
???!》

言葉にも著せないような雄叫びをあげ両腕、円形状の筒を向けると中央が乾いた音と共に開き、無数の火炎弾を撃ってくる。なんとか回避するも背後にある建物に当たり爆発、ガラガラと倒壊していく

「不味い、このまま戦ったら街にいる人達が…ステルスガオー！」

叫ぶと同時に音もなく飛翔するステルスガオーⅢはそのまま蒸気機関車ISに体当たり、たまらず体勢が崩れた地響きをあげ倒れた

「た、大河さん！リツ君からファイナルフュージョン要請シグナルが来てるよ!!」

「な、なに！博士!？」

「慌てるでない、今にスクリーンに……な、こ、これは!？」

空間投影スクリーンには赤い蒸気機関車を模したISと戦うガオファアの姿に言葉を失うも、大河は迷わず拳を突きだし叫ぶ

「東君、ファイナル・フュージョン承認!!」

「了解！ファイナルフュージョン：プログラムウウツドラアアアア
イブツ!!」

素早くコマンド入力と共に大きく振り上げた東の拳がクリアパネルごと赤いボタンを叩く。正面に各コマンドがコンプリート、明滅しながら赤い文字が大きく現れた

—G A O F I G H G A R —

「よし、ファイナルフュージョ……ぐああああ!!」

承認シグナルを受けファイナルフュージョンしようとした燐の背中が爆発……いや何かに撃たれプログラムリングが消失する

『国籍不明のISに次ぐ、直ちに戦闘行為を止め投降せよ!』

燐、ガオファアと蒸気機関車ISの回りにフランス軍に所属しているであろう《ラファール・リヴァイブ》数機が囲むようにガトリング砲、アサルトライフルを向け展開している

(しまった、ここは日本じゃないんだった…迂闊に戦えば国際問題に…でも)

燐、ガオファアの周囲にはラファールリヴァイブ、後方には蒸気機関車ISがうかがうように見ている

(く、どうすればいい…どうすれば!?)

「長官!このままだと燐の奴がアブねえぞ!!」

「じゃが下手に動けば国際問題になる…ワシらは日本政府の秘密防衛組織じゃからの…海外においての防衛行動は不可能じゃ」

「し、じゃありツ君は…レイジ博士!わたしが」

「ダメじゃ!今、君が出ればヤツラの思うツボじゃ…」

東は現在行方不明になってることにされてるが実際は日本政府直属秘密防衛組織のメンバー《アリス》として居る。もし彼女が表に出れば更なる混乱を招く事を思い出した一同が諦めかけたその時、スクリーンが切り替わり壮年の老女が姿を見せ大河が思わず立ち上がった

「ロ、ロゼ議長!」

『大変なことになってるみたいだねえ、幸太郎坊や、激坊主、レイジ、

東嬢ちゃん：地球防衛会議が宣言します。本日、現時刻をもち地球規模特殊犯罪軍需組織バイオネットによる国境を越えた驚異から防衛を目的とする地球勇者防衛隊《Gutsy・Galaxy・Guard》GGG（スリジー）設立をここに宣言します！《旧ID5》メンバー各員は速やかにGGGへ着任し、現在フランスでのバイオネットの破壊行動から防衛行動を許可します!!』

「よっしやあ！長官!!」

「うむ。東君、ファイナル・フュージョン！テイク2承認!!」

「ファイナル・フュージョンテイク2：プログラムウウツドラアアアアイブツ!!」

再び拳が降り下ろされ砕けたパネルを叩いた

「…よし、ファイナル！フュージョオオオン!!」

叫ぶと同時に胸部リングジェネレーターからEMTを発生させるとプログラムリングを展開する

量子変換されたパッケージマシン《ガオーマシン》三機がガオーの回りを旋回しながらプログラムリング上を走りやがて合体が始まる

まずはドリルガオーIIが脚へ進入し固定、続けてライナーガオーIIが胴体へ進入、しかし肩に触れる寸前で量子化と同時に肩を構成、最後にステルスガオーIIIが背中へと接続。二基のエンジンブロックが火花と共に上昇し量子変換され腕にロック、シャッターが開き勢いよく拳が飛び出す

最後に脇腹と胸に肩部装甲が競り上がり移動固定し最後にヘッドギアが装着しマスクが閉じGストーンが競り上がりGGGとも読める刻印がみえ瞳に赤い光が走る

「ガアアオッ！」

左腕にGとも読める刻印が輝き

「フアアイッ！」

両腕を大きく広げその手から緑の稲妻が迸り

「ガアアアアッ!!」

再び大きく交差し両腕を腰辺りに構えると同時にステルスガオーⅢの左右の翼が一部スライド展開、緑に輝きウルテク・エンジンが展開した

バイオネットの驚異から人類を守るため産み出されたファイティング・インフィニット・ストラトス

その名も勇者王

ガオ・ファイ・ガー

『す、姿が変わった？隊長!』

『…各隊員に次ぐ、これよりあの黒いISへの攻撃を停止、黒…いや地球勇者防衛隊GGG所属ISガオファイガーの援護をする！各機展開!!』

隊長機の指示にしたがい左右に散開、アサルトライフルで赤い蒸気機関車ISへ攻撃する…だが絶対防御と謎の障壁で弾かれ啞然となる一機のラファール・リヴァイブ目掛け火炎弾を放つも黒い影がよぎり左腕をかざし叫んだ

「プロテクト・ウォール!!」

着弾と同時に爆発し、すさまじい衝撃がガオファイガーの体に伝わる…だが爆発せず弾かれた火炎弾が街中へ落ち爆発する

「な、何！」

プロテクト・ウォールを解除しそのまま火炎弾を体に受けるガオファイガー…プロテクトウォールを使えばさつきと同じことになる、あのI Sの狙いは自分のはず、ならば体で防ぐしかないと考えた結果だった

「ぐ、ぐううう」

「あ、あなた何で？」

「…この街にはたくさんの人がすんでるだろ…ヤツの火炎弾をプロテクトウォールで防いだらさつきみたいになって家と大事な人たちを失うことになる…ヌウオオオ!!」

相手の攻撃に耐えながら話す燐の声に苦しみが混じるのを感じた隊員は何もできないと事に歯噛みするしかなかった



「ガオファイガー、表面装甲ダメージレベル及びシールドエネルギー残量50%…これ以上攻撃を受けたら！」

座席から長官席に座る大河に束が訴える

「このままでは燐が、長官！」

悲鳴にも似たレイジの叫びを聞き閉じていた目をかっと思開き叫んだ！

「ディバイディング・ドライバー射出!!」

「な、何／＼いい／ですって!!」

「ま、まだ動作テストもしてないんだ！」

「も、もし失敗したら…」

「このままではパリの街もガオファイガー、そこに住む人々の明日が失われてしまう！今使わないでどうするんだ!!」

長官の言葉に黙り混む一同…

「全責任は私がとる…皆の明日を守るために!」

「わかった。東君、デイバイディングドライバー射出用意!」

「は、はい、デイバイディングドライバー。ミラーカタパルトにスタンバイ…」

海中からミラーカタパルトデッキが浮上。内部でミラーコーティングがされオレンジ色のドライバーが白銀に輝く

「デイバイディングドライバー射出!」

瞬間的に電磁的反発力が産み出され勢いよく射出され大空を駆け抜けていくデイバイディングドライバー

—リツ君!デイバイディングドライバーを使って!!—

『デ、デイバイディングドライバー?』

—説明とサポートはわたしがするから早く!—

『あ、ああ! ウオオオオオ!!』

スラスター最大出力で空へと飛翔するガオファイガー、やがて厚い雲を抜け背後から白銀に輝き物体が迫りコーティングが剥がれオレンジ色のドライバーが姿を現す

—相対速度を合わせて…今だよリツ君!!—

「うおおおお!!」

左腕を突きだしそのままゆっくりと装着ロックされ、最大加速と上昇と共にデイバイディング・ドライバーの先端《―》状のユニットに光が溢れた

「デイバアイディンググッドライバアアアアアアア!!」

急加速降下し叫びながら赤い蒸気機関車ISの足元へ《―》状のユニットを叩きつけた瞬間弾丸を打つような音とシリンダーが軋ませた瞬間、地面に光が走る

光が走った部分が地響きをあげ裂けるが何かが違う、まるで風船が膨らみように円径に押し広げていき、赤い蒸気機関車ISはその中へ落ちていく

『こ、これは一体? 周囲の状況は』

『周辺地域に異常なし…でも空間干渉値が変動しています!!』

ラファールリヴァイブ部隊は眼前で起こる不可解な現象に驚く中、ガオファイガーはゆっくりとその空間に降りたつた

「な、なんだこれ?」

―デイバイディング・フィールドだよ。リツ君、この中だったら思う存分戦えるよ!!―

「ありがとう…いくぞバイオネット!!」

ガタンツとデイバイディングドライバーを外しウルテクスラストー全開で接近するが蒸気機関車ISは再び火炎弾を撃ちガオファイガー爆発に包まれた

「ブロウクウウンツ！フアンツトオオム!!」

爆炎を掻き消すよう現れた光輪を纏った拳が蒸気機関車ISの顔面をとらえ放電現象を起こしながら装甲を砕き辺りに破片を撒き散らしながら貫いた

《%?*@\$@??.&&%%\$\$##&&!>?》

「まだまだああ！はあツ!!」

ぐらりと体勢を崩すもすぐさま頭部が再生する…だがいつの間にかに間合いを摘めたガオファイガーのドリルニーに胴体を貫かれ、大きくよろめく

「ふんー!」

さらに右腕部分の間接を決め力任せに引きちぎり投げ捨てるが腕が再生し始めた

「く、学園に現れたISと同じタイプか。なら…ヘル・アンド・ヘブン!!」

両腕を交差し大きく左右に広げた腕、その拳に光が溢れだす

「ゲーム・ギル・ガン・ゴー・グフォ…：…ムン!」

呪文を唱えながら攻撃のGエネルギー、防御のGエネルギー溢れさせる右手と左手を徐々に近づけ胸の前で突きだした形で組んだ瞬間、緑色の竜巻《EMT》が発生。蒸気機関車ISを包み動きを止めた

「うおおおおおお!!」

ウルテクエンジンを展開し四基のGSライド最大出力で地を抉りながら突進、そのまま両拳を蒸気機関車ISの胴を貫く、上半身がま

るで風船みたいに弾け周囲に金属片とオイルを撒き散らしながらメ
キメキとコアを抉り抜く

「…ムウウン、セヤアアア!!」

抜き取った瞬間、蒸気機関車ISが光に包まれ爆発、凄まじいまで
の爆風が辺りに溢れやがて収まり、ガオファイガーが通常より大きな
ISコア? 持ち無傷でたつ姿

「な、なんだこのコアは今までと違う…だが爆発する前に！」

紫色のエネルギー光を発するコアを握る両手に力を込めたとき
だった

『ダメー!それを壊したらダメ!!』

「え?」

突然響いた声に目を向けると緑色の球体、いや背中から八枚の翼を
広げ降りたソイツは俺が握るISコアに手をかざした

『…クーラ・ティオー・テネリタース・セクティオー・サルース・コク
トウーラ』

緑色の長い髪を揺らしながら優しく手をかざし、その指先から暖か
な光が溢れ包み込むとISコア? がグニャグニャと崩れはじめた頭
した姿…ボロボロのISスーツを着た黒い髪でまるで憑き物が落ち
たかのような表情を浮かべ大粒の涙を流す一人の少女だった

「ぐす、ありがとう…ありがとう…ひくッ」

「に、人間が取り込まれてたのか」

『……………』

「!ま、待ってくれ君は一体!?!」

燐が呼び止めようとするもフワリと浮かびまるで流星の様に空を
かけ消え去った

「あの子は一体……」

——リツ君、あと数分でデイバイディングアウトするよ！デイバイ
ディングドライバーを回収してそのままその子と一緒にセルン中央
研究所に向かって！——

「わ、わかった……すっかり捕まってるよ」

涙を流しながらうなづくのを見て、両翼部ウルテクスラスターを展
開飛翔するガオファイガー。その直後デイバイディングフィールド
が波立ち徐々にアレスティングフィールドが縮小しやがてなにもな
かったかの様に消滅する様をみて驚く燐に通信が入った

『地球勇者防衛隊所属 I S ガオファイガー、先程は攻撃をしてしま
いすまなかつた。深く謝罪したい』

「別にいいさ、いきなり国籍不明の I S が現れたらそうなるって……
だからあまり気にしないでください」

『本当にすまない……今度出会うときは共に戦うと約束する……あと隊
員とこの街を守ってくれてありがとう』

ラファールリヴァイブ部隊の隊長機、隊員が敬礼するのを目にしな
がらゆつくりとセルン中央研究所に向かって大空を駆けていくガオ
ファイガー

だが燐は I S コア？から泣き止み眠ってしまった女の子を元に戻
した八枚の翼を広げた《光》について考えていた

（あの光にいたのは俺と年が変わらない女の子だった……それに G ス

トーンがすごく暖かくなつたし…あの子は一体)

考えるも答えがでない…燐は頭の片隅に追いやるとセルン中央研究所へ最速で空を駆けた

この日、《緑光を纏う天使》と命の宝石《Gストーン》を携えし少年が出会いを果たした

この出会いが新たな勇者王伝説の始まりになるとは、まだ誰も知るよしもなかった

「いけませんねえくせつかく産み出した商品が破壊されるとは」

「しかたないようギムレットくん。何せ今まで無人で動かしていたアレに初めて《パーツ(人)》を組み込んだから不具合は起きるものだあ〜」

「ですがあGGG、忌々しいですねえ…我々に対する組織をあのババアが準備していたとはね」

「まあいいさあ、次なる実験の場は決まってるしねえ…フフフ楽しみだなあ…」

いびつな笑みを浮かべ見るモニターには、九歳前後の五人の子供達。その一つを拡大し舐めるように見る

赤い髪に顔を覆い隠すようなバイザー、黒のボディースーツを着た子供の画像を狂気が入り交じった目で見つめている

「あの時の声は最高だったよお…また聞きたいなあ。絶望、苦痛に満ちた最高の音楽を奏でてくれるかなあ…シドオオオリイイイン…アヒヤハハハハハハハハハハハハハハハ♪」

「そうですねフリールくん。さて行きましようか日本へ……フヒヒヒヒヒ」

口を耳元まで吊り上げ歓喜に満ちた声をあげる小太りな中年男性《フリール・ルコック》とギムレットはやがて闇に溶けるように消え去った

第七話 守りの左手 了

第七話（裏） 紫の守護者

燐がスイスにあるセルン中央研究所へ向け嫉妬混じりのミラーカ
タパルトで射出され数時間後

「……………定時報告。更識簪嬢、学園へ無事登校確認、引き続き学
園外の警護に当たります」

『わかった、少しでも以上があればすぐに報告しろよ霧也（きりや）』

「はい、では次の定時連絡で」

通信を切り護衛対象の更識家令嬢「更識簪」へ目を向けるのは白髪
にややアルビノ気味の肌、濃紺の制服に身を包んだ目付きの鋭い少年
《犬神霧也（いぬかみきりや）》が学園の屋上から白いマフラーを風に
なびかせながら立つ姿があった

第七話（裏） 紫の守護者

（……………周囲に異常なし、サテライトサーチ圏内に不審者は該当せず…）

眩く彼の視線の先には空間投影スクリーンを多数展開する簪の姿。
数か月前、技術提供を受けた日本政府、ロシア政府からの要請を受け
霧也は《更識簪》の護衛を極秘裏に開始していた

なぜ護衛をするのか？それはIS学園の生徒会長にして暗部の家
系を継ぐロシア代表候補生《更識楯無》の血を分けた妹だと言うこと、
すなわち人質にとれば様々な情報が聞き出せると考える輩と《日本を
捨てた女の妹》だと言う逆恨みに近い理由もあるが楯無の専用ISの
技術をバイオネットが狙っているとの情報を両政府から得たから
だった。護衛を始めて数日、未だに不審者の姿がない…だが霧也は
簪の作業をじっと眺めている

(……やはり一人で打鉄式を完成させようとしていますか、マルチロックミサイルシステムもまだまだ改良の余地があるようです。GIS-05L《閻竜》のシステムが参考に……いけません、護衛に集中しなければ)

考えを振り払い周囲の索敵を始める霧也……やがて時間が過ぎ辺りを闇が支配する。ようやく作業を終えた簪は端末を閉じ第二整備室から出て寮へ歩き出した

当然、霧也も気づかれないよう距離を離しながらも辺りを警戒しながらだ

(……寮及び通路に異常な熱源無し、どうやら今日は……)

考えたその時、ナニかが切り裂く音が耳に入る、咄嗟に飛翔する霧也の目には薄く鋭いナニかが見え簪に迫る

「(いけません!) 伏せてください!!」

「え?」

突然の事に驚く簪、あと数センチと迫る刃を霧也は金色に輝く半月状の刃で切り払い左右にカランと乾いた音と共に落ちた

「あ、あの。あなたは?」

「……私の名前は今は名乗れません……ですが早くここから逃げてくださ……っ!!」

再び風を切る音が響く、今度は無数に刃が飛来し霧也と簪に襲いかかる。それを霧也は凄まじい速さで切り払い、碎きながら辺りをサーチする

(熱源感知できず。ですが微細な振動音を確認……位置座標感知完了しました)

「……少しご容赦を。ガンドーベル!!」

「え、きや!?!」

音もなく一台のバイクが現れると霧也は簪を抱き抱えシートに座らせるとナニかを素早く入力する

「ガンドーベル、彼女を寮まで!!」

「え、き、きやああああ」

ピカピカとライトを明滅と同時に簪を乗せ寮へ勢い良く走り去るガンドーベル、ゆっくりと辺りを見回しながら霧也は意識を集中させながら右腕を掲げ叫んだ

「ボルフォッグ!!」

紫色の光がF50の形を作り、バラバラに分解。ミラーコーティングされた霧也の体に纏われは粒子が弾けるとG—I S—02 《ボルフォッグ》がその姿を顕す

「シルバァームウウン！ハアツ!!」

金色に輝く半月状の刃が瞬く間に白銀色に染まり、大きく振りかざし投げつけたのは何もない空間…しかし火花が散ると同時に弾かれた

「な、なぜ気づいた…」

グニヤリと風景が崩れると胸元を押さえる強化服を纏った男が苦しそうにこちらを見ていた

「あなたの光学迷彩は完璧でした。ですが駆動音までは消すことは出来なかったようです」

「さ、さすがは紫の守護者…だが、このままでは終わらん!!」

「投降する気はないのですか?」

「くどい!!」

「…やむおえませんか…では相手になりましょう」

シルバームーンを構える霧也、対する相手は両股装甲内から二振り
の片刃剣を構え一步も動かない

やがて一陣の風が流れ葉が舞った瞬間、地を蹴り斬り逢う二人…火
花と金属がぶつかりあう音が響く

「やるな紫の守護者！」

「あなたこそ…ですが何故このような事を!？」

「ISが生まれてからすべてが変わった!篠ノ之束がISを作らな
ければ女尊男婢社会なぞにならなかつた!我々男の立場は地に落ち
日陰者になつた!!」

劍檄が勢いをまし押されながらも霧也は黙って切り払い続ける

「だから女尊男婢社会の象徴であるIS学園を、更識楯無を倒さね
ばならんのだ!」

「貴方は勘違いをしている!今現在の女尊男婢社会になつたのは、I
Sを活用するために女性に有利になるように法の整備がされ、それが
思想に影響を及ぼし今の流れになつたと気づかないのですか!すべ
てが篠ノ之博士の責任として考える貴方の考えは間違えてます!!」

「なっ!」

熱く叫ぶと共にギインと片刃の剣を弾き返す霧也の目には怒り
と悲しみが入り雑じっていた

「…貴方のように都合の悪いことが起こればすぐに他人に責任転嫁し
逃げるような大人は…」

シルバームーンを両手に構え斬りかかり残る刃も弾き飛ばし、その勢いのあまりへたりこんだ男性の前に立ち

「……私は嫌いです…ジェットワッパー!!」

そう呟き量子変換されたジェットワッパーで拘束すると背部のメルティングサイレンを鳴らしガングルーを呼び出し操縦席へ乗せキャノピーを閉じへキサゴンへ向かわせるとISを解除し空を見上げた。大小様々の光が夜空を彩っている

「……ISはまだ見ぬ宇宙へ向かうために産み出した翼。今はこんな形で広がりましたが何時かは本当の姿を取り戻すはずだと私は信じたいものです」

誰に言うでもなく呟くと地を蹴り闇夜へとその姿を隠し消え去った

余談だが、ガンドーベルで寮まで送り届けられた簪は教師を伴い戻ったが霧也の姿がなかった事に少し残念そうな顔をしていたと記しておく

第二章 兄弟竜／龍顕る！ 第八話 兄妹

「おし、着いたぜ燐」

六月上旬、正確に言えばスイス《セルン中央研究所》から日本へ戻って二日が過ぎた、でも俺は「あること」がずっと気になっていた

フランスであるの《ISコア》を握り潰そうとした俺の前に現れた緑の光に包まれ八枚の翼を広げた女の子

そしてISコア？から人、女の子に戻した時に感じたGストーンの共鳴は一体なんだったんだ

「……………い、おくい燐」

それにあの子から感じた懐かしさは…

「どうしたんだ燐」

「え？な、なんだ一夏君？」

「燐、最近なんかあったのか？授業中も上の空だったしなんか悩みでもあるのか？」

「い、いや、何でもない…って此所は？」

「ああ、俺の友達のじいさんがやってる食堂、まあ立ってるのもなんだし入った入った」

背中を押されながら引き戸を開くと大きなテーブルが六つ、カウンターを囲むように並び厨房が覗ける懐かしい作りの店内だなど感じながら適当に近くの椅子に座る

「おう一夏、久しぶりじゃねえか……ん、そつちの坊主は誰だ？」

「は、はじめまして。獅童燐です（…な、なんだろ火麻参謀といい勝負できるかも）」

「今時の奴にしちゃ礼儀正しいな。俺んとこのに見習わせたいぐらいだな。で何食うんだ？」

訪ねられてメニュー表を見る…いろんなお品書きがかかれてる中からひとときわ目立つ大きな文字でかかれたメニューを頼んでみることにした

「ご、業火野菜炒めをお願いします」

「わあったー！」

丸太から削り出したようなまな板に野菜をおき中華包丁を握り軽快なりズムを鳴らしながら切り、それを油通しし用意していた中華鍋へ入れ鍋を振るいはじめると同時に勝手口が開いた

「おじいちゃん、おにい見なかった！」

「ああ、弾か？バンドの奴らと練習行くなって朝からいないぞ」

「…おにいったら、何で肝心なときにいない…」

た
といいかけた女の子が俺たち、いや一夏君を凝視して動きが止まった

「ん？よう久しぶり。邪魔してる」

「い、一夏さんっ!?き、来てたんですか？全寮制の学園に通ってるって聞いてましたけど」

「ああ、うん。外出…っっていうか友達つれてきたんだ」

「友達？」

「あ、はじめまして獅童燐だ…」

「獅童燐…：…ああ、世界で二番目に動かした宇宙開発公団の若き宇宙飛行士候補生獅童さんですか!!」

五反田さんのあまりの声の大きさにキンキンと耳鳴りがする…俺ってそんなに有名だったんだ

「蘭！あんましでかい声出すな！客に迷惑だろ!!」

「ご、ごめんなさい」

巖さんに怒られてシユンとなる五反田さんを一夏君は手招きしテーブルへと座らせてしばらくして自然に会話が弾んでいく

内容はIS関係だったんだけど鈴さんの名前が出た途端、東さんが怒った時によく見るような黒い何かが見えた

「おう、できたぞ坊主！」

ドンツとおかれたのは野菜と肉の香ばしい匂い漂う野菜炒め、ライスに琥珀色に輝くスープ。箸を手に取り手を合わせた

「いただきます…：…：…う、うまい！」

「り、燐！落ち着けたら野菜炒めは逃げないから!!」

「油通しして野菜の旨味をギュツと封じ込め、さらに肉とよく絡むように調合された甘味噌、豆鼓、醤油…砂糖に僅かに柚子の香りがする…だからスルスル入るしご飯によくあう！」

「おお、よくわかったな坊主。油通しがこの業火野菜炒めの命だ」

「おかわり！」

「食いつぶりもなかなかいいな坊主。よし大盛をサービスだ!!」

「な、なんかすごい人なんですネ」

「まあな、なあ弾はどうしてんだ？」

「聞いてくださいよー夏さん、おにいったら最近バンドばかりやってるんですよーこの前なんか……」

——カモオンツ！ロックンロオオル!!俺の熱いシャウトでハートをギンギンにしてやるっぜ!!——

「私の学校でいきなりライブはじめて大変だったんです……でもみんなには好評で」

「相変わらずげんきにやってんだ……」

「違います！おにいがあんなになつたのは六年前に誘拐されてからなんです!!」

ダンツとテーブルを叩く蘭にビクツと体を震わす一夏くん、思わず箸を止めると五反田さんはさらに続けた

「それに、最近のおにいったら……」

「俺がなんだったって？」

突然響く声、三人がそろって目を向けた先には赤い髪をまとめ背中にはギターケースを持った少年が不思議そうな顔をしてをあげたっていた

「お、おにい!？」

「な、なんだよ蘭、俺の顔になにか付いてるか?って一夏じゃないか!」

「よ、久しぶり元気だったか弾」

「ああ、毎日バンドの練習で忙しいけどな。で今日はなんでうちの食堂に来たんだ？」

「ああ、今日は友達を連れてきたんだ。コイツは…」

「…お前……………燐か…」

ガタンとギターケースを落とす弾、その瞳と顔からはまるで《何故ココにいるんだ》的な表情を浮かべ燐も同じ表情を浮かべている。一夏とギターケースを持ち上げる蘭もただ見ているしかできなかつた

「……………ひ、久しぶりだな弾!」

「お、おう燐! 元気してたか!？」

「なんだ弾、燐と知り合いなのか?」

「あ、ああ…一夏は知らないんだったな、まあ何て言うか…別な小学校の友達だったからな」

「そうだったのか…でも以外だったな燐と弾が友達だったなんてな」

「まあなくハハハ…つとあんまし店んなかでいるとじいちゃんに怒られっから部屋に戻ってからまた来るわ」

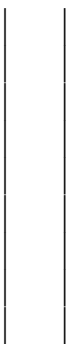
手をヒラヒラさせながら五反田さんからギターケースを受けとると勝手口へと歩いていく弾…去り際に聞こえるか聞こえないかぐらいの小さな声で短く呟いて俺の隣から離れていった

とりあえず業火野菜炒めを完食しようと思を進めた急ぎながらもよく噛みながら…

「うまい！すいませんライスおかわり!!」

「おうよー！たくさん食べよ坊主!!」

もちろん《五反田食堂》に新たなる大食い勇者王伝説を樹立したのはいうまでもなかった



「来たか燐」

「久しぶり弾…元気してたか」

「……………まあな…んで燐はどうなんだよ」

「俺もまあまあかな…バンドやってるんだって？五反田さんから聞いたよ」

「ああ、オレにはこれしかできないからな…でだ燐、今日は何しに家に来た…」

これからが本題だと言わんばかりに言葉を強める弾

先ほど小声で《飯を食い終わったら店の裏に來い》と言われて来た俺は質問に答えることにした

「二夏君が連れてきたんだ…なんか俺の元気がなかった見たいらしいからな…」

「二夏らしいな…ソレを少しでも蘭に向けてくれりゃオレも苦労しないのによ…はあゝ」

「ん？どういう意味だ？」

「そんなまんの意味だよ…燐、束さんは元気してるか？まあ、あの人の事だから寝不足になってるだろうけど」

「最近をよく寝るようになったよ…六年前よりかは……」

「……そっか…最後にひとつだけ聞いていいか。黒いISの噂は知ってるよな？」

黒いIS…たぶんガオファイガーの事だ、でもソレを聞いてどうするんだろう？

「何だ黒いISって？単なる噂話じ……」

「…とぼけるなよ燐、あの黒いISはお前なんだろう？《何故わかった？》って顔してるな、あの《黒いIS》はお前の夢の為に束さんが作ったモノだって霧也と疾風、凍也から聞いたからな…どうなんだよ」

あ、あいつらしく弾にいうなよな…まあ間違いじゃないし言うしかないか

「ああ、黒いIS…ガオファイガーは俺だ…でもな弾、ひとつだけ言わせてくれ…」

「なんだよ、まさかお前、俺を連れ戻しに…」

「違うんだ弾、お前は俺達と違って———された———が少ない。それ以上に血の繋がった本当の家族がいる…それに目標を見つけたお前を連れ戻すなんてできるかよ」

「…り、燐…すまない、疑ってすまねえ」

「別にいいさ弾。でき《マイク》は元気にしてるか？」

「ああ、アイツなら今新しい友達のとこにいつてるぜ…でもアイツのサポートのお陰で今こうして普通に《話す》事ができるからな…」

『!!』

『サイコヴオイス見たいにはできませんねえ〜フリーイルくうん』

『やはりベターマンを捕獲しなければ無理みたいだねギムレットくうん…ダアアンの声帯と音感をいじろうとするかあああ』

『…ハミル…ハミク……ヤ…ム…ル…フガアアアアアアアアアアア!!』

手術台に固定された少年の声帯を背中から延びたメスで切り開く度に血が散りかすれるような声が辺りを木霊する。だがメスが震えだし粉々に砕け破片が頬を切った

『フフフ…素晴らしいなあダアアンツ……もっともっと改造してあげよう……フヒヤハハハハ』

目をゆっくり細めながら頬から流れる血をマスクの下から長い舌を伸ばし舐めとり再びメスが煌めく…

『フギイ！フギヤガアアアアアアアアアアアアアアアア!!』

『ああ〜いい声だあ〜ハアツハアツハアツ』

「どうした弾?」

「い、いや、なんでもないさ…さつて、速くみんなのところに戻るか」

一瞬見せた暗い表情を振り払い弾はわざとらしく声を上げ裏にある五反田家へ歩き出しそれに隣も続き中へ上がり向かったのは弾の部屋、そこでは

「ああくまた負けたあ!」

「まだまだだな蘭は…お、弾、隣遅かったじゃないか」

「あ、ああ、じいちゃんに捕まってな…おし、蘭、オレが敵をとつてやるから貸せよ」

「お、おにい!まだ私が一夏さんと」

「細かいこと言うなって、なあ一夏」

「そうだぜ蘭…つとやるな!!」

「そーいや弾、知ってるか?」

カタカタとコマンド入力しながらキャラを操る弾に無造作に話しかけてきた

「蘭、来年IS学園、うけるんだと」

「な、なんだつて!!」

操作する手が止まりガバツと蘭を凝視する弾、しかしその視線を流すよう顔を反らしたと同時に《YOU・WIN》とテレビに大きく写された

「ど、どういうことなんだよ！つていうか今通ってる学校はどうすんだよ？それに推薦はないんだぞ?!」

「私の成績なら大丈夫だし筆記なんか、バンドばかりしてるおにいとちがって余裕です」

「い、いや…そうだ一夏、燐、あそこつて実技あるんだよな!!」

「ん、ああ、あるな。IS起動試験つてのがあつて適正がないやつはそれで落とされるし」

「適正があつて動かせたとしても試験官と模擬戦闘やるのがあるな」

「それなら問題は解決済みです」

三人の前にエツヘンとたち見せた一枚の紙にはIS簡易適正試験《判定A》とかかれた文字に啞然となる弾、だがすぐさま回復し立ち上がった

「ダメだ、蘭！今通ってる学校を変える事なに勝手に決めてるんだよー！」

「あら、いいじゃない別に」

「か、母さん！つていうかいつかそこに!?!」

「さつきよ、弾。あまり大きな声を上げるとお友だちに迷惑よ…あら挨拶がまだでしたね私は五反田蓮、弾と蘭のお母さんです…キラ☆」

「か、母さん！いつの間に!」

「ひ、ひさしぶりです蓮さん（相変わらず変わってないなあ）」

「あら久しぶり一夏くん、元気にした？ 麦茶持ってきたから飲んでね」

「母さん、そのポーズやめてくれって恥ずかしいから!」

「ええ、別にいいじゃない。弾だつてコスプレするじゃない」

「あ・れ・は・ライブの衣装だつて!と、とにかく話は戻すけど蘭が学校変えるのいいのかよ!」

キラつてポーズをとき、にこやかに笑いながら盆に乗った麦茶を配りながらもまっすぐ弾の話聞きながら

「弾、蘭が自分で決めたことよ。《たくさんの人にオレの歌を聞かせたい》つてお友だちと毎日練習してる。それとまったく同じことよ」

「う、うう…わかつたよ…でもさ親父にも一度話せよ…じゃないとオレン時みたいに変だからな」

それだけ言うとピイツと前を向きだまりこむ弾を見て思いつきり笑ってしまいそうになるのを堪え、再びIS/V Sを三人で交代しながら対戦していった

『ハローウツホ〜♪』

「マイク、今日も来てくれたんだ」

『うん、だってマイクはウツホと友達なんだもんね〜♪♪』

生徒会での仕事を終えた寮に戻ったウツホと呼ばれ眼鏡をかけた少女の回りを嬉しそうに飛ぶ丸っこいナニか

「今日はどうしたのマイク？」

『今日も新しい歌を持ってきたもんね〜』

「え、ほ、本当／＼／＼／＼／」

『できたてほやほやの新曲なんだもんね〜さ、ウツホ早く、早く』
うなずきながらマイクから渡されたのを耳につけ目を閉じる

——いっくぜ！今日もみんなのハートに元気を送るぜ！！——

激しくかき鳴らされるギター、ベース、ドラム…そしてボーカルの声が響く度に体を熱くなるのを感じる少女、今まで聞かなかったロックを聞くようになってから毎日が充実し始めた

(すごく熱くて優しい声…誰なんだろう…心にすごく響く…)

曲に身を任せながら気になるのはボーカルの声…まるで心に染み渡り元気になっていく

(……どんな人なんだろう……マイクに聞いてみようか…な……)

やがてうつらうつらとなりそのままベッドへと仰向けになるように深い眠りについた少女

『ウツホ、寝ちゃったもんね……マイクはこっそり帰るもんね…弾も待ってるだろうし』

ワイワレスイヤホンを回収し部屋の窓に立つマイク…G—I S—

06 《マイクサウンダース13世》は友達である親友《五反田弾》のもとへ呼び出したバリバリーンに乗り込み空へと消えた

「……………マイク、弾を頼みます…」

その姿を紫色のIS《ボルフォッグ》を纏い腕組みし屋上にたつ少年は素晴らしい残すと回りに溶け込むように姿を消した

「わりい、そろそろ寮に戻らないと」

「あ、悪かったな一夏、燐長く引き留めちまって」

「いって、いって。さてと蘭、入試頑張れよ」

「は、はい！で、では一夏さん、燐さんもお元気で」

「燐坊！また食べにいよ」

「は、はい！厳さん」

夕暮れに染まる五反田家から四人に見送られながらIS学園直通リニアがある場所へと歩いていく

「さって明日から学校かく朝の特訓もあるしキツいな」

「そうだな、でも学校ってキツイのもあるから楽しいんじゃないかな」

「んく確かにそうかもな。さって急ぐか燐、んでもって明日の特訓頼んだぜ」

「ああ！」

「素晴らしい軽く拳をぶつけリニアに無事乗り込み寮へと戻った頃、一機の飛行機が日本へ向かっていた機内には金髪の少年…燐がフランスで出会ったシャルル・デュノアが座席に座っている

(…日本…か…)

心の中で呟くシャルルがなぜ日本へ向かうのか。『世界で三番目にISを動かした男子としてIS学園に転校、そして織斑一夏、獅童燐の専用ISのデータを収集しろ』と父親に命じられたからだ

(…あの人は僕を道具としてしかみていない…会社を建て直すことしか…でも獅童の名前があったなんて以外だったな)

少しだけ笑みを浮かべるシャルルの脳裏には燐と出会い僅かな時間を過ごした思い出はシャルルにとって暖かいものだった

(…聞きそびれちゃったけど燐の左腕の石…このペンダントの石と同じだよ)

ポケットから金の鎖に繋がれ台座にGとも読める緑の石が嵌められたペンダントを手取る。シャルルの母方の先祖が受け継いできたモノとシャルルは聞かされ色々なおまじないや昔話を母親から聞かされていた

—…勇氣ある獅子ってナニ、お母さん—

—……………お母さんのご先祖様と常に一緒にいた獅子のことよ…命を護り未来を切り開く為に自らを傷つくのをいとわなかった心優しく勇氣に溢れた獅子なの…—

—痛くなかったのかな獅子様…ぼくは…—

—……………。獅子様は自分の痛みよりも他人が受けた痛みの方が一番辛い…—

—だったら、だったらボクが勇気ある獅子様の側にいて助けてあげる！—

—そう、私がとっておきの…ひいひいおばあ様から教えてもらったおまじないを教えてあげる…じゃこれをかけて—

—え？でもこれはお母さんの—

—いいの…このペンダントは……………にしか使えないから。お母さんのあとに続けていってね……………—

(…この石ってなんだろう…お母さんは誰にも見せたらダメっていつたのに何で獅童に見せちゃったんだろう…それにあの力はなんなんだろう…黒いISを獅子様だつて思ったんだろう……………お母さん、僕わからないよ)

「雷龍、ひとつ聞きたいんだけど」

『なんだ疾風』

「日本についたはずだ…なのになぜ囲まれてる？」

『……………疾風が迷うからだろ？』

「ずいぶんと余裕のようだな侵入者」

周囲を黒塗りの二機のISに銃を向けられ冷や汗を流す疾風：日本へ向け歩いたはずなのに中国、そこでバイオネットの気象兵器が巻き起こした大竜巻から街にすむ人々を守るために戦いやたら気が強いIS乗りと共に協力、気象兵器を破壊、同時に救助活動を終え逃げようとする場を去り日本へ歩いたが五老峰という秘境に迷い混み大滝の前に座した《編み傘を被った老人》に気に入られ《ある技》を伝授され再び日本へ歩いた：だが今度はドイツに出てしまい厄介な事にIS配備特殊部隊シユヴァルツェ・ハーゼの演習施設に迷い混み今に至る

「あ、あの私は怪しいものではないですよ（：雷龍、逃げる可能性はゼロみたいだ）」

（『もとはといえばナビシステムを壊したからだろうか！気象兵器壊すのに最大出力のマキシマムトウロンなんか使うからよお!!』）

「な、あれは雷龍が出力を」

「…何をしている」

氷のように鋭い声が辺りに響く：見ると一機のISがゆっくりと降りてくる…回りの二機が慌てて離れるのを気に止めず近寄りグイツと疾風の胸ぐらをつかむ

「ぐ、ぐう」

流れるような銀髪に左目を眼帯で覆い鋭い眼差しをむける顔を疾風は悲しい目をしてるなと感じた

「貴様の所属、目的を言え…いっておくが黙秘権は通用しない…」

「まずい…まずい……………」

「…答えないか…まあいい。これより基地へ帰投…コイツを連行する」

そのまま手を離し咳き込む疾風にチラツと目を向けるも、そのまま飛翔し基地へ向かう残された二機は疾風の腕を掴みあとを追った

第八話 兄妹 了

第八・五話 マドカ

「束くん、スクリーンを開いてくれ」

「ハイハイ。エイ♪」

燐が五反田家で大食い勇者王伝説を樹立した頃、宇宙開発公団最深处《地球勇者防衛隊》通称GGG本部では先日、フランスでの戦闘時に現れた八枚の翼を広げた少女と謎のISSコアから人へ戻った少女についての話し合いが持たれていた

「獅童博士、この少女はいったい誰なんだ」

「わからん。ただひとつだけわかったのは、あの少女が放つ光には《Gストーン》、いや《Gクリスタル》と同じエネルギー波動をガオファイガールのハイパーセンサーが感知しとった」

「でもそれ以上に気になるのは《あのISSコア》から人を分離したことだよ。どういう理論でああなるのか私でもさっぱりだよ」

スクリーンにはグニャグニャとISSコアが形質変化、さらに二つに別れ通常のコアとボロボロのISSスーツ姿の少女が大粒の涙を流す姿を見ている中、大河は静かに口を開く

「……束くん、あのISSコアはまさか」

「……八年前、《モジュール01》で奪われた《41個》の第二世代型ISSコアに間違いないよ……だってアレは白騎士のデータを基にして多目的宇宙開発用に私が作った……か……ら……わかる……よ………なんで……こんなことか」

言葉をつまらせる束。その手にポタポタと涙が落ち濡らしていく……その肩にポンと手がおかれ顔をあげる束に獅童レイジの穏やかな顔でたってる

「東くん、君のせいではない…悪いのはバイオネットじゃ…」

「…ああ、バイオネットの野郎共が何たくらんでいようが、俺たちGGが叩き潰してやるぜ！」

バシツと拳を打つのはやたら筋肉質な火麻参謀…かつてID5《シルバーピューマ》として数年前のバイオネット極秘研究所を破壊に参加する以前から《ある軍需財団》絡みの事件で非人道的な実験を目の当たりにしていたから仕方なかった

「確かにな…火麻くん、千冬君は？」

「ん？ああ。この前、燐が保護した子供のところについてるぜ…まさかアイツら《あの計画》を実行してたとはな」

「…ブリュンヒルデ量産計画…私たちがもつと早く知っていた。だがバイオネットの動きは予想以上だ…博士、あのISコアの解析結果は？」

「ふむ、セルン中央研究所で件のISコアの解析結果をみて驚いたワイ。数十年前に発表された論文内でソレと同じ粒子構造式を見たことがある」

「その論文とは？」

「東くん、出してくれるかの」

「は、はい」

スクリーンに出されたのは一人の老人が提唱した理論と。内容は負の思念をエネルギーへ変換する自立制御型動力コアの概念図だった

「ストレスをエネルギーに変えるのかよ…なんつう理論だ」

「人が誰しもが持つマイナス思念、言わばストレスをエネルギーへ変換する自立制御型動力コア…ひとつ間違えば暴走する危険性と人

体が特殊粒子に侵され遺伝子が形質変化する可能性が示唆された。だが学会から反発を受けるも人体実験を強行しおった」

「その結果、被験者のストレスは解消したんだけど副作用で急激な形質変化に耐えきれず死亡。彼は学会から永久追放されたんだよ」

「……彼、リユウノスケ・F・ゾンダー博士は最後こういつたそうじゃ：『私の理論は間違えていない！間違えてるのはこの世界だ！いつか私の考えが正しかった事を知るだろう』：それから数年後に行方をくらませた。あの時奪われた第二世代型《ISコア》にはゾンダー博士の理論が使われてるのは間違いない」

「束くん、博士。その粒子の名は？」

「素粒子Z0（ゼットゼロ）じゃ／だよ」

「……………」

「……………あ、怖がらなくていい……………」

なるべく優しく言ったんだが、何故か怯えられる……やっぱり私が怖いのだろうか？

隣が保護した子：名前は判らないが私と余りにも似ている、いや似てるのは当たり前だ

バイオネットの連中が私のジーンマップを手にいれ兵器として利用して産み出したらしい

「……………」

この子は恐らく《人》として扱ってもらえてなかったのだな…

—教官—

思わずドイツ軍で一年間、教官を勤めていた折りに私へ尊敬の眼差しを向けていた教え子と重なる…元気にしているだろうか？

この子と同じ境遇で似た子だ…なら私がやることは一つだ

「ひうー」

そつと近寄りただ優しく抱き締める…これが今の私にできること。少しでも落ち着いてくれたらいい

この子に一番必要なのは他者の温もりなのだから

「…あ、あの…私が怖くないんですか？」

「ふ、怖くはない……やつとしゃべってくれたな…私は」

「お、織斑…千冬…さん…ですよね…」

強ばった身体が徐々にとけ少しずつポツポツと話し出した…物心ついた頃から I S 操縦を叩き込まれた。その目的は私と同じ最高の I S 操縦者を量産すること

だがそれは《ある男》が来たことで終わりを迎え、たくさんの子達のがが実験に興され死んでいった

この子はある二人の手により庇われていたが見つかりあのコアに組み込まれたらしい

「…わたし、わたしは…」

「もういい、言わなくていい…」

涙を溢れ出させるこの子をギュッと抱き締めながら思うのはバイオネットの連中に対する怒り。もうアイツラのせいで無関係の人が

傷つくのは我慢できない

ヤツラの目的は恐らくIS学園の生徒…私は守らなければいけない

もう一夏を《あの時》みたいにな…！

「すまない、もつとはやくに気づいていれば…すまない、お前の…」

「……マドカ…」

「？」

「わたしの名前は…マドカ…織斑マドカ………お願い、スコールとオータムを助けて…」

「アツハハハハくやってくれましたね…まさかMのゾーンマップを完全に破壊するなんてね」

「へへ、悔しいか？あんたたちにあの生意気なガキを渡してたまっかよくばるか」

「オータム、口が汚いわよ…で、私たちをどうするつもりですか？」

「いやいや、君たちはIS操縦者としては優秀ですからねえ…まあ今となつてはISも最強の兵器ではなくなりましたからねえ…最後ぐらいは華々しく散ってもらいましょうか」

ケタケタ笑いながらマントにも似た衣装から取り出した二つの物体、赤紫色に怪しく輝くソレをゆっくりと近づけていく

「我がバイオネットの最新商品：ゾンダーISの宣伝塔になっても
らいますよ♪フヒヒハアアアアア!!」

「や、やめろ、んなのスコールに近づけんな!!」

「う、ううああああああああ!!」

抵抗するもがんにがらめに縛られたスコールの額へ押し付けられ
た瞬間、暗い室内に赤紫色の光が満ち溢れた

「ゾ、ゾンダアアアアアアアアア!!」

「フヒハアハハハハ！いいですよお、これで軍からの注文が殺到す
る事でしょう…ねえフリーイルくうん♪♪」

「そうだねギムレットくうん♪♪ゾンダー博士に感謝だねええ…
アヒャ♪♪♪♪」

グニャグニャとした何かが叫ぶ姿に歪な笑みを浮かべるフリール・
ルコツク、ギムレットを唇を噛み締めながら睨むオータム。

「さあ行きなさいい、我ら新生バイオネットの邪魔になる黒いIS《ガ
オファイガー》を破壊し、リイイインを殺しなさい…アヒャ♪
♪」

ギムレットの声に応えるように瞳を輝かせ、グニャグニャとした何
かはまるで周囲に溶けるようにその姿を消した

第九話 転校生

「……………」

早朝、板張りの剣道場に二つの影。いや防具を着た燐と一夏が竹刀を正眼に構えたつ姿、二人は岩と化した力のように一步も動かない

「……………」

その二人をじっと見つめるのは同じく胴着姿の箒。その時開け放たれた窓から風が入る

「!」

それが合図だと言わんばかりに踏み込み竹刀を振るう一夏。ソレを最小の動きでかわし踏み込みと同時に抜き胴、しかし竹刀を楯にし後ろへ飛び再び構え竹刀をもつ手へ振るう

「!」

乾いた音が響き竹刀が宙を舞う、その場には竹刀を弾かれた燐と竹刀を構える一夏の姿があった

第九話 転校生

「や、やった。一本とったぞ!」

「一本とられちゃったな…でも俺も頑張らないといけないな」

「ふ、ふん、紫藤に勝ったぐらいで満足するな一夏(うう、なんか一夏が強くなってきてる…それも昔みたいに…い、いやまだまだ!!)」

「わかったよ箒、其より早く着替えないと遅れちまうぞ」

「そうだな」

朝練を終えた私たちは更衣室前で別れ軽くシャワーを浴びる…ほどよい温度の水が当たる度に想うのは一夏のことだ
最初の頃に比べて剣速も鋭くなった、それ以上に昔の一夏に戻りつつある

「…前よりかっこよくなったな一夏は…」

思わず口に出してしまい顔が暑くなる。いかん！まだまだ一夏は未熟だ！

特訓出来るのは嬉しい、で・も・だ。なぜか獅童も参加してるし…ホントは一夏と二人つきりで／／／／

「…はああ…素直になれないな……………」

小さく呟いてシャワーを止めるとロッカールームへ歩きだした

「到着つと……………ん？なんか騒がしいな」

「なんだろうな隣？」

教室へ入るとなにやら女子たちが騒いでるらしい…

「やっぱりハツキ社製のがいいなあ」

「え、ハツキのってデザインだけって感じしない」

話の内容から察するにISスーツのメーカーについて各社のカタログを手にしやべっていた

「そういえば織斑君と獅童君のISスーツってどこのなの？見たことないんだけど」

「なんか特注品だって。男のスーツがないから、どつかのラボが作ったらしい…名前は確かイングリッド社のストレートアームモデ

ルだ」

「俺のは宇宙開発公団謹製の次世代ISスーツのプロトタイプだな」

「織斑君のはわかるけど獅童君のはなんかゴツゴツしてない？まるで鎧みたいだし」

「そ、そうかな…でも船外活動でデブリがぶつかっても壊れないように……」

「作ってあるんですよ。さすがは宇宙開発公団謹製。でも他の機能は通常のISスーツと同一のモノです」

「や、山田先生？よく知ってましたね」

「二応先生ですから……獅童君、いま私を先生ってよんでくれましたよね！すごく嬉しいです!!」

目をキラキラ輝かせる山田先生…何故なら今まで《山ちゃん》《山ピー》などのあだ名で呼ばれていたから仕方なかった

「なんか獅童君、かたいよお」

「ねえねえ、獅童君も山ピーってよんだら」

「い、いや山田先生は山田先生だし…」

ズイツとにじりよるクラスの女子のプレッシャーに冷や汗を流す
燐

「じゃあ織斑君と獅童君もあだ名でよんじゃおうか」

「賛成」

「獅童君はリツ君、織斑君はしたの名前でイツ君なんてどうかな？」

「わあくなんか可愛らしくていいね」

「ええ、わたしはおりむくがいいなあ」

宇宙開発公団《束ラボ》

「……なんだろ、いま私以外にリツ君って呼んだ悪い虫が増えた気がする!!」

「束様、落ち着いてください!」

メカウサ耳をガシヤンと勢いよく立て黒い笑みを浮かべる束を必死に押さえる銀髪の少女の姿があつたとか

「リ、リツ君はやめて!?!」

「ええ、かわいいいいじゃない織斑君もイツ君でいいよね」

回りの女子たちに気圧されたじたじになる二人：だがそこに救いの手がさしのべられた

「諸君、おはよう」

「お、おはようございます!」

ざわざわしていた教室、いや女子たちが一斉に席に座るのを見てため息をつくのは一組担当教諭織斑千冬：自他にも厳しい彼女が現れただけでクラスはまとまりを見せた

だが千冬の様子が普段と違うことに隣は気づいてしまう

「今日からは本格的な実践訓練を始める：訓練機であるがISを使用しての授業になるので全員気を引き締めるように。スーツが届くまでは学校指定のものを使うように。忘れた者は水着、あるいは下着

で構わないが」

「お、織斑先生、下着はダメですよ。男の子もいるんですし」

「ふ、冗談だ…その前にみんなに特別教諭を紹介しよう」

声のトーンが一段と重くなる…がソレを払うかのように教室の扉が勢いよく開いた

筋肉が灰色のスーツ越しに見え、緑色のモヒカン頭にオレンジ色のサングラスをかけた一人の男性が教壇にたった

「今日からI S学園特別講師を務める火麻激だ！よろしく頼むぜ！！」

(ひ、火麻参謀うう!?なんでここにいるの!?)

歯をキラんと輝かせ暑苦しい笑顔に皆の時間が止まる…特に山田先生は石みたいに固まっている

「ああ、火麻講師は元アメリカ陸軍の出身だ…君たちの肉体トレーニングを担当する…山田くん、ホームルームを」

「…ひ、ひゃい！え、えええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！しかも二名です」

なんとか戻ってこれた山田先生のいきなりの転校生二人がクラスにくると聞き一気に色めき立つ視線が教室の扉へ注がれたと同時に開く

「し、失礼します」

「……………」

二人が入ってきた瞬間、教室が静かになる…一夏、燐、特に燐は一人を見て唾然となった

(し、シャルル?)

フランスでであったシャルル・デュノアがIS学園の制服に身を包み立つ姿に驚きを隠せない燐を他所に壇上にたった

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました…」

ほんの一瞬、目と目が合う。その時左腕、いやGストーンが熱くなってくる

(なんでまた熱くなるんだ…冷却システムは正常に動いてるのに)

悩んでるうちにシャルルは自己紹介を終えた瞬間、クラスの女子全員の最大出力のサイコヴォイスが響き渡る…まあ世界で三番目にISを動かせる男子でしかも深窓の貴公子のオーラを醸し出す容姿の前じゃ仕方ないよな

「ああ、静かにしろ」

「皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから」

今度は隣に立つ銀髪に左目を眼帯で隠した子が一步前に出る、制服の一部が軍服っぽい感じがするしなんか威圧感を感じる

「挨拶をしろラウラ」

「はい、教官」

「……もう私は教官ではない。それにここではお前も一般生徒だ……私の事は織斑先生と呼べ」

「……了解。ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

冷たさを感じる言葉に沈黙するクラスの女子

「あ、あの以上……ですか?」

「以上だ」

完璧な即答にあの火麻参謀もたじたじな顔になってる…でもその目が一夏君と合い表情が険しいものへ変わりカツカツと歩き出し止まると大きくてを振り上げた

「！貴様が——」

その手が降り下ろされ頬に当た…いや当たらずその手がガシツと掴まれた事に驚いてる

「い、いきなり何すんだよ！危ないじゃないか!!」

「…私は認めない。貴様があの人の弟である事を認めない」

掴まれた手を振り払い立ち去るとそのまま空いた席へと座り目を閉じ黙りこんでる

ボーデヴィツヒさん、何故一夏君を目の敵にするんだ？

「あく、ゴホンゴホン！ではホームルームを終わ…」

織斑先生が手を叩きながらHR終了を告げようとした時、ガオファアに秘匿通信が入り網膜に情報が流れる

(IS学園より50キロ圏内海上にバイオネットIS出現。GGGは直ちに出勤されたし)

「す、すいません！少し用事ができたので!!」

「え、し、獅童君？」

「山田先生、すまないが皆の授業を頼む」

「え、ええ〜織斑先生！どうしたらいいんですか!?!」

「まあ気にするなって、じゃあとは頼むぜ。摩耶ちゃん」

ガタツと勢いよく席から立ち上がり駆け出す燐、その後を追うように千冬、火麻も教室から出ていくのを呆然と見る山田先生と一夏、クラスメイトの女子全員

「……いやな予感がする…獅童…」

ただシャルルはいやな胸騒ぎを感じていた事に誰もまだ気づかな

かった

その頃、学園の外へ出た燐はガオーブレスを左腕に展開し叫んだ

「イク・イップ!!」

ガオーブレスから金の粒子が展開、その体に金色のアーマーとインタークーラーコートを組み合わせさせた複合装甲《アルティメットアーマー》が構築、装備され獅童燐、またの名をサイボーグ燐がその勇姿を見せる

「ステルスガオー!!」

歩道橋の下から音もなくステルスガオーⅢが現れ燐は地を蹴り飛び乗る、同時にウルテクスラスター全開で海上へ向かう

「大河長官、じいちゃん、デイベイデイング・ドライバーは?」
『すまん、あと十五分、いや十分時間をくれ。凍也もそちらに向かわせる』

「わかった…見えた!!」

海上へ出た燐の目には巨大なタンカーと融合したISらしきモノが船速をまし進んでいく姿

「(陸地まであとわずかか)…フロントム・ガオー!!…」

ステルスガオーから飛び降り叫ぶと背後にフロントムガオーが現れ両腕、両脚、胸、肩へ分解装着、ヘッドギアが最後に装着されてGストーンが輝いた

「ガオツファー!」

急降下と同時に両肩浮遊装甲内のウルテクスラスターを全開、フロントムクローを展開すると勢いよく殴りつけた

『ゾ、ゾ、ゾ、ゾンダアアアアアア!!』

その身体を揺らすも絶対防衛と不可視のバリアに阻まれるガオファア。しかし諦めずドリルガオーを召喚装着と同時にフィンが付いた金色のドリルが高速回転しバリアを押し返し始める

「ウオオオオオ!!」

『ゾンダアアアアア!!』

「な、うああああああ!!」

海面が持ち上がり無数の触手が伸びガオファアを拘束、そのまま上へ振り上げ海面へ何度も何度も叩きつけはじめた

「ぐ、ぐああああああ!!」

「先生！リツ君の細胞抑制システム一部破損！侵食値が異常上昇しています!!」

「博士、凍也と炎竜は！」

「現在、沿岸線都市部住人の避難誘導作業中じゃ、完了まであと数分かかるワイ！しかしこのままでは燐が」

『長官！じいさん！ファイナル・フュージョンするしかねえだろ！こんなままだと燐がマジいぜ！』

『ぐああああああ!!』

現地の上空で待機してる、《三段飛行甲板空母》で指揮を執る火麻の声が響く、大河はゆっくりと目を開け腕をつきだし叫んだ

「ファイナル・フュージョン承認!!」

「た、大河さん!」

「東くん、今ファイナルフュージョンしなければ隣の命が危ない……ガオーマシン内の細胞抑制システムの予備が起動するはずじゃ……今はそれに賭けるしかない」

「……り、了解……ファイナル・フュージョン……」

レイジの言葉に顔を俯かせるも顔を上げカタカタとキーを叩き勢いよく腕を振り上げ叫んだ

「プログラムウウツ! ドラアアアアイブツツ!!」

振り下ろされた拳がクリアパネルに覆われた赤いボタンごと叩き壊す、画面にプログラムが流れ赤い文字が大きく表示された

—G A O F I G H G A R—

「ぐ、グウウ!」

『メルティング・ガン!!』

炎の弾丸がガオファアの身体を拘束していた触手を撃ち抜く。見ると赤い装甲に銀色に輝く楯とメルティングガンを構えたG—I S

—03L 炎竜の姿

『おくれてすまない燐!』

「サ、サンキュ炎竜…ファイナル・フュージョオオオン!!」

燐が叫ぶと同時にリングジェネレーターからプログラムリングが開、ガオーマシンがその上を走りEMTが発生、合体シークエンスに入る

『ゾンダアアアアア!!』

「邪魔はさせまん!いくぞ炎竜!」

『おう!オラオラオラオラオラ!!』

アーマーを分離しG—IS—03R《氷竜》を纏った凍也、疑似ボディを構築した炎竜はISタンカーに接近、同時にラダートンファア、クレートンファアで殴りかかりその動きを止め《EMT》が弾け飛んだ

「ガアオツ・ファアイツ・ガアアアツ!!」

黒いIS《勇者王ガオファイガー》が叫ぶと共に左右のウルテクエンジンを展開し緑色の光を輝かせた

「長官!デイバイディング・ドライバー改装及び整備完了じゃ!!」

「うむ!東くん、デイバイディングドライバー!射出!!」

「海を割る気か!」

「了解！ダイバイディングドライバー、キットナンバー02……イミツション!!」

シートが後ろへ下がると背後に現れたの無数のパッド。その内右側にある一つに力一杯拳を叩きつけた

「っしやあーミラーカタパルト開け!!」

射出コマンドを受け取った上空で待機していた《三段飛行甲板空母》のミラーカタパルトが開くと同時に二つの銀の閃光が弾丸の様に空を貫く

「ウオオオオオオ！」

雲を突き抜け飛翔するガオファイガー。その横を二つの銀の塊が一つに合体、同時にミラーコーティングが解けたダイバイディングドライバー《キットナンバー02》が飛び相対速度を合わせ火花を散らしながらドツキング、《↑》状の先端プレートに光が集まる

「ダイバイディングツ！ドライバーアアアアアアアアアア!!」

そのまま海めがけて叩きつける…弾丸を打つような音が響き、シリンドーが軋むと光が一直線に走り空間が歪み始め押し広げやがて止まり直径10キロの円形空間《ダイバイディングフィールド》が形成される

『ゾ・ゾ・ゾンダアアア!?』

海が割れタンカーISはダイバイディングフィールドへ落ち、ガオファイガーも中へ降り立ちダイバイディング・ドライバーを解除し拳を構えた

「いくぞーブrouクウウンツ！ファアアントオオオムツ!!」

リングジェネレータからフロントムリングを形成と同時に撃つ、そのまま真っ直ぐ顔面をとらえるが障壁に防がれた……がものともせ

ずに破片を撒き散らしながら貫く

『ゾ、ゾンダアアアア!!』

瞬く間に修復するや否やケーブルと外装を巨大なドリルへ変え襲いかかるに

「ドリルか…なら俺もだ!!」

ウルテクエンジンを展開、加速しながら右膝のドリルを高速回転させぶつけ合う

『ゾンダアアアアアア』

「う、うう……」

激しい衝撃がガオフアイガー…絶対防御に守られているはずの燐の体に襲いかかり押し始められる

「う、ウオオオオオ!!」

叫ぶと同時にGSライドの出力が上がり、徐々に押し返すと相手のドリルを砕く、さらにウルテクエンジンを展開。加速し巨大な体躯を駆け抜けていくガオフアイガーめがけ熱線が襲いかかる

「フリージング・ライフル!」

『うおおお!ミラーシールド!!』

赤と青の影、炎竜と氷竜がタンカーISの熱線を凍らせ、楯で防ぐ

『『今です/だ!燐!!』』

二人の言葉にうなずくとウルテクエンジン全開で上昇、太陽を背にし両腕を大きく構えた

「ヘル!アンド!ヘブン!!…ゲム・ギル・ガン・ゴー・グフオ……ムン!」

呪文を唱えながら攻撃のGエネルギー、防御のGエネルギー溢れさせる右手と左手を徐々に近づけ胸の前で突きだした形で組んだ瞬間、

緑色の竜巻《EMT》が発生。その凄まじいエネルギーの奔流は巨大な体軀を誇るタンカーISを拘束する

「うおおおおお!!」

ウルテクエンジン全開で両腕を組んだまま突っ込み、そのまま頭部めがけ拳を叩き込む。ブロウクンエネルギーが内部で炸裂し内側から装甲や内部メカを弾けさせプロテクトエネルギーでコアを保護し掴んだ

「むんっ………せやあああああ!!」

メキメキとコアに繋がったエネルギーケーブルを引き抜き両手に人間大のコアを大きく掲げた瞬間に大爆発。しかし爆炎の中から燐、いやガオファイガーが無傷で姿を顕す

「燐、そのコアは持ち帰るんじゃ!」

「う、うおおおおお!!」

だが燐の様子がおかしい

「先生、リツ君の細胞の脳神経侵食率が増大!リツ君は、リツ君は自分をコントロールできないよ……リツ君が死んじやう!!」

「な、なんだと」

「うわあああああ!!」

雄叫びをあげながら力を込める燐の手にあるコアがメキメキなり始め乾いた音と共にヒビが入った

「ダメええええええ!それを壊しちゃダメ!!」

「ぎ、君はあの時の!？」

少女の声と目映いばかりの緑光が辺りに広がる、力を込めるガオファイガーの前に緑光：八枚の翼を広げた少女が舞い降り燐の左手に手を添え不思議な光が包み込んだ

「せ、先生、リツ君の細胞侵食率が低下：それに怒りが収まってる……」

モニターに示された燐の細胞侵食率低下に驚く束、レイジ：スクリーンにはゆっくりとコアに込めた力を抜きながら少女にコアを預けるようにゆっくりと差し出すガオファイガー

「な、なんなんじゃあの女の子は……」

「…：フランスで燐があった少女：なのか？」

メインオーダールーム、三段飛行甲板空母にいるメンバーはその光景に啞然とするしかなかった

第九話 転校生 了

第九・五話 三身一体

燐が海上にてゾンダーISとの防衛行動に移った頃…IS学園より少し離れた山奥。鬱蒼と繁る木々の間を紫色の影が幹を蹴り跳ぶ

(……どこですか簪嬢!)

忍者が纏う衣装にパトカーの意匠をもつ紫色のIS《ボルフォツグ》を纏う霧也が探すのは日・露両政府より護衛を依頼された《更識簪》と言う少女

(……私があその時に目を離さなければ……無事でいてください!)

ギリツと拳を握り木々を蹴る霧也の瞳からは焦りの色が見えた

第九・五話 三身一体

「ん…」

最初に感じたのは湿った木の匂い、目を開けると薄暗い。目を凝らして見ると木材を組んだ壁が目に入る 体を動かかそうとするけど両手と両足首が何かで縛られてて身動きができない

「ん?目さしましたみたいだな」

「だ、だれ?」

ナイフを研ぎながら男の人がこっちへ近づいてくる

「おれか?まあ更識に恨みがあるっついでいやあわかるか…裏切り者の更識の嬢ちゃんよお」

ナイフを制服に触れるか触れないか位置で滑らせピタツて止め頬に当てる

「や、やめて」

「しっかし、まあみれば見るほど似てるなあ…髪も目も裏切り者に…な♪」

「わたしはあの人は…」

「まあいいさ、俺にとつちゃんなこと関係ないさ…さて問題です」

ツツツとナイフを滑らせながら喋る男に体をこわばる…いつもそうだ

物心ついた頃からいつも、お姉ちゃんと比べられて…

「俺が今からやるのはなんでしようか♪1、裏切り者似のきれいな顔に傷をつける。2、指を切り落として送りつける。3、このまま喉を切り刻む…さあどつちかな♪制限時間は三分♪レツツスタート♪♪」

無邪気に笑いながらナイフを構え踊る男。簪は大きく声をあげようとするがわずかに見えた外をみて、今いる場所に気付く

鬱蒼と広がる森、声をあげても助けは来ない…こんな時、アニメのヒーローだったら風のように現れて助けてくれるはず

「さて、残り時間は二分だよ」

でもそんなヒーローは現実にはいない…と考えたとき《白く長いマフラ―》を風になびかせ私を守ってくれた少年の姿が思い浮かぶ

「あと一分♪…あれ？諦めちまったか？面白くねえなあ…しやあない面白くしてやるよ!!」

ナイフをパシツと逆手に握りスツと横へ風ぐ…制服の胸元が切れてる

「ぎ、きやあああああ！」

「ははは、声出せるじゃねえか！よし決めたバラバラに刻んでやる

よ裏切り者の妹さんよお!!」

目を爛々と輝かせながら歩いてくる…いや、来ないで…誰か…
「…助けて」

「あはっバクカ、こんなところに助けに来るやつなんかいるわぐえ!!」

「え!?!」

勢いよくなにかが吹き飛ぶ…違うさつきまでナイフを持ってた男の人が暖炉の中へ突っ込んで灰が舞う

「大丈夫ですか! 簪嬢!!」

白いマフラーに紺色の学生服姿、白髪にやや赤い目が目立つ私と同じぐらいの男の子が半月状クナイみたいなのでロープを切り立たせながら聞いていきた

「だ、だいじょうぶ…あ、あの…この前も私を」

「……今はここから出ますあなたの安全を確保しなければ…くっ?!」

「えー!」

…振り返り様に金色の半月状の剣でなにかを切り払う名前も知らない彼、その視線の先にはさつきの人がナイフを無数に構えたつている

「お前かああ 《紫の守護者》 いやボルフオッグ!!」

「…私を知ってるとは…ですが今はあなたの相手をする暇はありません…フオッグガス!!」

彼の手が光った瞬間、紫色のガスが噴出、狭い室内に満ち視界を

遮った

「…簪嬢、少しご無礼を」

「え？」

フワリと身体が浮く…正確にいうと彼に抱き抱えられてる

「…少しだけ揺れますが、ご辛抱を」

静かな声…でもなぜかはわからないけどスゴく安心する。それに私を抱えながら木を蹴りながら移動してるのにか変わらず汗ひとつかいてないし、まるで私が最近見たアニメ《忍者戦士飛影》の飛影と似てる気がする、それにこの白いマフラーずっと昔に見た気がした

「…あと少しで森を抜けます。簪嬢は外に待機させてあるガンドールでIS学園へおも…」

『逃がすかごらああ!!』

声と一緒になにかが降り土くれや木々が吹き飛んできた

「ミラーコーティング！」

銀色の粒子が彼の周囲に浮かんだ瞬間、その身体が銀色に輝いて飛んできた土や木々を弾いている…なんなんのこの光は？

「…アレは数年前に製造中止になったはずのニューロノイド？」

『アハッ、こいつニューロノイドって言うのか』

「ソレをどこで手に入れたのです!!」

『フリール…何たらっておっさんに貰ったんだよ…面倒だから一緒に潰れちまいな!!』

脚部クローラーを機動と同時に殴りかかるニューロノイドから簪を守るように逃げる霧也は背部にメルティングサイレンを部分展開

するとを鳴らし始めた

「ガンドーベル！」

茂みから音もなく静かに一台の白いバイクが現れニューロノイドへ体当たりする

「ガングルー！」

空からローターを回しながら一機の白いヘリが姿を現す

「各機、システムチェンジ!!」

霧也の声と共に二機のガンマシンがビーグル形態からビークルロボへ変形、ニューロノイドを囲みように立つ

「各機一斉攻撃！」

領くとガンドーベル、ガングルーはニューロノイドを翻弄しながらガングルーは胸部マシンキャノンから射撃、ガンドーベルは首輪状のメリケンサックを両手に殴りかかる光景に簪は目を奪われる

「……す、すごい……」

「簪嬢、暫しここでお待ちください……」

右手を上に掲げる霧也の背後にパトカーのホログラフが展開、バラバラに分解更に銀色の粒子がコーティングしながら纏われていきやがて弾けた

「ボルフォツグ!!」

腕を組叫ぶと共にニューロノイドとガンマシンが戦う場へ駆け、両

手に半月状の剣《シルバームーン》を持ち大きく構え投げつけた

『んなもん効くか!』

弧を描きターンするシルバームーンに対し胸のスリットがナニかを生成し始め拳がガキャンと展開光が集まる

『シナプス弾撃!!』

飛来したシルバームーン目掛けナニかを放出、ソレを浴びドロリと溶解し地面へ落ちた

「やりますね、さすがはニューロノイドといったところですね」

『どうする降参する…』

「ですがあなたは私には勝てません!! ガンドーベル、ガングレー! 三身一体!!」

大きくジャンプするとボルフオッグ、ガングレー、ガンドーベルの身体にミラー粒子がコーティングされガンドーベルが右腕、ガングレーが左腕に変形しボルフオッグのアーマーもより大きく強固なものへ変わり変形したガンマシンが左腕、右腕へ合体しミラーコーティングが弾けた腕を組んだ紫色のISがその勇姿を現す

「ビッグ! ボルフオオオッグ!!」

『な、ナニ!』

「4000マグナム!!」

ニューロノイドへ向け大きく構えたガンドーベルが変形した右腕

に装備された4000マグナムを撃つ、ニューロノイドの外装が火花と共に弾け、体勢が崩れる。間髪いれずイグニッションブーストで間合いを積み左腕に装備されたローターを回すと銀色に輝き始める

「ムラサメ・ソード！」

『て、てめえ！なめんじゃねえ！シナプス弾撃!!』

既にチャージを終えたニューロノイドの右腕が展開、同時にビッグボルフオッグの身体へ突き刺さり光が走る…がその姿は三つの光へ変わりボルフオッグ、ガンダーベル、ガングルーが無傷で降り立つ

「超・分身刹法!!」

再び光に包まれニューロノイドへ確実にダメージを与えていきその強固な装甲が砕けリンカージェルが漏れだした

『く、くそリンカージェルが……』

「これで終わりです！ワンオフアビリティー発動！大回転魔弾!!」

『く、くそおお!!』

再びビッグボルフオッグへ合体し独楽のように回転、やがて銀色に輝き始めると同時に無数の銀色の弾丸《ミラー粒子》が降り注ぎニューロノイドの手足を砕き行動不能へと陥らせその機能を完全に停止し動きが止まるとビッグボルフオッグがフワリと降り立った

『く、くそ動かない、ハッチも開かねえ!!』

「あなたの敗因は私の能力を見誤ったこととニューロノイドを使いこなせなかったことです…これよりGGG本部へ連行させていただきます」

き…」

「ま、待って！」

「簪嬢!? どうしたのですか?」

「あ、あの……この前助けてくれてありがとう……えと」

「私の名はボルフォッグ。今の姿はビッグボルフォッグです…お礼などいりません。あなたを守るのが私の役目ですから。あと数分したら布仏虚様がお迎えに来ます」

「あとひとつ聞いていい?」

「なんででしょうか?」

「…私とドコかであったことある?」

「………いえ。あなたと会うのはこれで二回目です……」

「簪お嬢様~!!」

質問に答えるボルフォッグと同時に声が響く、振り返った簪の目に息を切らし走ってくる布仏虚の姿を目にする

「……お迎えが着たようですね…では失礼します」

「待ってー……い、いない」

ニューロノイドの胴体以外の残骸を残し、ボルフォッグの姿はその場から完全に姿と気配すら消え去っていた

「…でも、まあ会えるかな…」

「簪お嬢様! 無事でよかったです!! さあ早くIS学園に戻りましょ

う」

「……うん……ありがとう虚」

少し黙るも頷き答えた簪は虚と共に近くに待たせてあるリズムジンに乗りIS学園へ戻っていった

(……あの人。ボルフォッグのマフラーって、私があの子にあげたのと同じ……まさか……ね)

ボルフォッグの白いマフラーが気になるも、濃密な一日を過ぎし助けられたせい緊張がほぐれ、うつらうつらと睡魔に襲われそのまま深い眠りについた

「……簪嬢……」

「霧也」

ガングルーにニューロノイドの胴体を固定しながら遠く離れたリズムジンを見送る霧也に声がかけられる、振り替えると黒い狼をもしたIDアーマーをまとった女性、コードネーム《ブラックウォルフ》織斑千冬が黒く長い髪を風に揺らしたっている

「……千冬さんですか……そちらの方はどうでしたか?」

「……火麻さんの予想通り学園正面ゲート付近に光学迷彩装備のAT兵器が数機現れた……燐がない時を狙ってきたのに間違いない」

「……バイオネットの狙いはおそらくIS学園の生徒、そして貴方の弟、一夏でしょう」

「……ああ、だが守って見せる、私の命にかけてな。霧也」
「なんででしょうか？」

「……久しぶりにあつてどうだったか？」

少し意地悪そうに笑みを浮かべる千冬の言葉に黙るもやがて口を開いた

「……昔みたいに笑顔を見せなくなりました……やはり刀奈……刀奈嬢との関係が悪くなってるみたいですよ」

「なら、お前が間に立てばどうだ？……お前たちは幼なじ……」

「……私はもうすでに死んだ身です……今さら二人の前に出られるわけありません。では失礼します」

軽く印を結ぶと風が巻き起こりボルフォッグ、いや霧也の姿を消したのを見た千冬は

「……霧也、多分楯無はお前が生きてる事を知っているぞ」

誰に言うでもなく小さく呟くと待機させていた専用ガンマシン《ガソール》に乗りそのままIS学園へ走らせた

第九・五話 三身一体

了

第十話 緑の髪の少女

IS学園に転入してきた世界で三番目にISを動かせる少年シャルル・デュノアと再会した燐

しかしタンカーと融合したバイオネットISが学園へ迫り燐、凍也、炎竜が出動。

苦戦し細胞抑制プログラムに損傷を受けるもファイナルフュージョンを敢行。

ダイバイディング・ドライバーで海を割るガオフアイガー、激戦の末ゾンダーISコアをえぐり抜いたガオフアイガーの前に緑光の少女が再び姿を顕した！

「クーラ・ティオー・テネリタース・セクティオー・サルース・コクトウーラ」

緑光の少女の手から光が溢れゾンダーISコアを包みグニヤグニヤと崩れやがて長い金髪の淑女が一筋涙を流しながら膝をつき隣には無傷のISコア。その光景に凍也、炎竜、三段飛行甲板空母にいる火麻、メインオーダールームにいる大河、レイジ、束もその光景に啞然としている

「……うう…あ、ありがとう…ありがとう……」

「……………」

ISコアと人を分離した緑の髪の少女は無言でフワリとガオフアイガーから離れはじめる

「ま、待ってくれ！君はいつたいたい!!」

呼び止めるもそのまま空へ向かい光の奇跡を残し飛び去る少女を追おうとウルテクエンジンを開く…が光が明滅し再び閉じた

『燐、無理するな！』

「はあっ、はあっ…うっ！うぐあああああ!?!あ、う」

グラリと身体が揺れ全身のエネルギーが強制排出、そのまま倒れそうになる燐の身体に何かが支える。見るとパワーラダーとパワークレーンで炎竜、凍也が支えている

『燐、しっかりしろ！』

「いけない、熱暴走が始まってる」

「リッ君の冷却システムが機能してない…このまま体温が下がらないと…リッ君が、リッ君が!?!」

「慌てるでない束くん、燐はちよつとやそつとのことでは死にはせん…長官、水陸整備装甲車を向かわせてくれ」

「すでに現場に火麻くんが待機させてある…博士、あの少女を」

「問題ないワイ、あの子が放つ特殊なエネルギー波はガオフアイガーのライブラリで登録済みじゃ…保安部に連絡を頼んだぞい」
二人のやり取りする間、東はモニターに示された燐のコンディションパラメーターを必死に冷却システムを遠隔操作を続けている

(リッ君、リッ君…リッ君!!)

空を緑の光が駆ける…やがてふわりと止まりそのままゆつくりと
人気がない風力発電用のタワーが無数に立ち並ぶ平原へ降り立つ。
光が収まり現れたのはプラチナブロンドの髪にアメジストの瞳、IS
学園の制服姿のシャルル…ぼうつとしながら考えるのは黒いISガ
オファイガー、そしてあのコアを人に戻した力

「なんで、なんで僕にはこんな力が……」

手を見るも光はでない、変わりに胸にかけられたGストーンが淡く
輝く

「この石ってなんなのかな……」

シャルルの母、顔も見ないうちに亡くなった祖母、曾祖母、先祖か
ら大事に受け継いできた《緑の石》を母がなくなる前に『誰にも見せ
てはいけない』《勇気ある獅子》《おまじない》の事は誰に教えたらい
けないといわれていたのを思い出す

「わからないよ僕は…IS学園に帰らな……きや!？」

いいかけた時、黒塗りのワゴンがまるでシャルルを囲むように止ま
り、扉が開くとGGG保安部職員が近づいてきた

「な、なにー!」

無言で歩み寄る保安部職員に背を向け走り出すシャルル。が頭上
からヘリがホバリングしながらその行く手を遮る

「うわあ」

ゆつくり迫る保安部職員、シャルルは後ずさる。が背後、左右から

も迫るその姿に恐怖を感じる

「う、うわあああ!？」

シャルルの額に瞬きほどの瞬間、Gの幾何学模様が浮かんだ

水陸両用整備装甲車。先ほどの戦闘で意識を失い倒れたGIS《ガ
オフアイガー》のファイナル・フュージョン・アウト、燐からガオ
ファーを分離し終え、現在GIS整備ルームではメンテナンス作業を
開始していた

「ガオーマシンの各チェック急げ！」

「∴ガオファー、フロントムガオーへ変形。洗浄及び消毒を始めま
す」

バラバラに分離しアームへ固定されたガオーマシンはそれぞれ最
終洗浄、消毒作業を進めるため洗浄及び消毒機材へ向かおうとした

「し、主任、フロントムガオーが!？」

「な、なんとと燐が居ないのになぜ起動している!!」

起動したGISビークル形態のフロントムガオーは消毒プール
から飛翔すると、ウルテクスラスターを噴かしながら解放されたハッ
チから飛び出しそのままフロントムイリユージョンを展開し消え去
るのを整備スタッフはただ黙って見上げていた

「は、はなして」

「だいじょうぶ、我々は怪しいものじゃない」

「うそだ！」

「怖がる必要はないから、さあ」

「いや、いや…だれか、だれか助けて!!」

保安部職員に捕まれながら叫んだ瞬間、すさまじい突風が巻き起こりシャルルの回りにいた職員が芝生に転ぶ

「え、な、なに…?!」

シャルルの眼前にはG-I S 《フロントムガオー》がフロントムイリュージョンを解除しまるで守るように浮遊してる

「ぼ、僕を守ってくれたの？」

まるでそうだと言わんばかりにシャッターを光らせ全体を揺らした瞬間、フロントムガオーが分解、シャルルを包みガオファーへ変わるとウルテクスラスター全開で空を飛翔し消え去った

「な、なんなんだあれ」

「とりあえず本部に連絡を取ろう」

啞然となりながら頷き職員達、やがて撤収していった

水陸両用整備装甲車

同G I S精密検査エリア

「…いかなの。ライナーガオーIIの耐久限界値がコンディション4じゃ」

「やはり、ヘル・アンド・ヘブンのダメージですか」

モニターを見るレイジの後ろにはオレンジ色の繋ぎを着た竜崎凍也が立ち、ライナーガオーⅡのダメージ値をチェックしている

「ふむ、リフレクションダンパーの総交換になるの……凍也くん、身体の調子はどうかの？」

「身体は異常はないです…博士、燐の所へはいかないのですか？」

「今、細胞抑制プログラムを束君が再構築しながら様子を見ておる。これが終わり次…」

—博士。格納庫へ来てください。フロントムガオーいえ、ガオファアが帰還しました—

「すまん凍也、ここを任せていいかの」

「わかりました。ライナーガオーⅡの部品交換を進めておきます」

そう言うレイジは立ち上がると慌ただしくオペレータームから出ていった

「……………」

G—I S—01ガオファアを纏ったまま動かないシャルル、その回りにはGGG整備班、一般職員が不安な面持ちで見守る…がその中から一人の黒いコートを着た男性が出てきた

「君、怖がらなくていいよ。ここは国連直属の秘密防衛組織の施設

なんだ。ここの皆は誰も君を傷つけはしないよ」

「あ、あの」

「ワシラは君の力を必要としている。頼む、君の力を貸してくれ：頼む」

「…え？」

幸太郎とレイジの言葉に心が動いたのを感じたのかガオファーが分離、ファントムガオーへ姿を変えゆつくりと浮かぶ

「行けっていつてるの？」

シャルルの問いに答えるようにシャッターを開閉するのを見て皆の方を向くと笑顔で出迎えてくれている。少しだけ笑みを浮かべ皆の方へ歩き出した

「ああ〜雲はいいなあ…」

一人の女性のがビルの屋上で大の字になり眩く。最近訓練に目標を見いだせなくなっていた。やる訓練はいつも同じことの繰り返し…パターン化してしまった訓練に飽きこうしてサボりながら雲を眺めていた

「ああ〜一度でいいから雲になりたいなあ…」

「雲になりたいのですかあああ？」

「だ、誰!?!ウワア!?!」

声が響き渡り起き上がった彼女は思わず後ずさる。なぜなら気色悪い仮面に赤紫色のピエロにも似た衣装をまとった存在がメカメカしいホウキに乗り飛んでいる。ISをまとってるならまだしもあり得ない光景だった

「雲になりたいあなたの願いを叶えてあげましょう」

ススツと音もなく近寄り女性の額に赤紫色に輝くゾンダーメタルを押し当てた

「う、うわあああああ…ゾ、ゾンダアアアアアアアアアアアアアアア!?!」

「フヒヤハハハハ、さあ…雲になりなさいあああああい」

ケタケタ笑いながら姿を変えるのを見届けたギムレットは軽く一礼し飛び去っていった

「……長官、検査が終わりました…我々と全く変わりがありません」

「うむ…すまなかったね。検査はもう終わりだよシャル…シャルル・デュノア君」

メデイカルルームでの検査データに目を遠し柔らかな笑みを浮かべる大河にシャルルは恐る恐る口を開いた

「あ、あの…僕のこととは」

「大丈夫、秘密にしておくさ…あと少しだけいてくれる事になるがいいかね」

「は、はい」

通信を閉じフウツと息を漏らし、別なウィンドウを開き目を通す大河。その目からは強い意思が見えた

その頃、メデイカルルームでは運び込まれた燐の細胞抑制プログラム及びマツチング作業を束は進めていた

「束君、どうかの燐の具合は？」

「破損した細胞抑制プログラムはマツチング中で、でも意識グラフが回復しなくて」

「なに、そのうち勝手に目を覚ますじやろうて。昔からタフだったからの」

「！先生がリツ君にファイナルフュージョンをさせるからいけないですよ！リツ君のことが心配じゃないんですか!!」

「孫の心配をしない祖父がどこにおる！」

あまりの剣幕に思わず体を震わせる束にゆっくりと口を開いた

「燐は六年前、バイオネットの奴等の改造で命が数時間しか持たなかった。だがGストーンのお陰で辛うじて命を繋いでおる…こうして生きているだけでワシは嬉しいんじや。バイオネットとの戦うと決めた燐の好きなようにやらせてあげたい…ワシはその手助けを可能な限りしたいんじやよ」

「ご、ごめんなさい、ごめんなさい先生、先生が一番辛いのに…私」

「いいんじやよ。束君がいるお陰で燐は安心して戦うことができるんじや」

「は、はこ」

うつ向き泣き始める束にポンツと肩に手をおくレイジ…しかし警報が鳴り響く

—博士、たつた今湾岸部上空に謎の巨大物体が出現、いえ？この反応は素粒子Z0です!!—

「な、なんじゃと！こんな短期間に!？」

『博士！燐は？』

「今は動かせん、細胞抑制プログラムのマッチングにあと十二時間はかかる…無理に動かせば燐の命が」

言いかけた時、メデイカルルームの扉が開く、

「……………り、燐？」

振り替える束とレイジの前には不思議な衣装を着た髪を緑色に輝かせる少女…ゆつくりと燐が眠るベッドへ近づきGSTーンに右手を添える、その瞬間まばゆい光があふれ出すと燐の瞼が微かに動きゆつくりと開いた

「う、うそ…マッチングが完了している」

「な、なんとということじゃ…人類の演算能力を超えた力じゃわい」

「シ、シャルル？何でここに？それにその格好なんだ!？」

「え、あ、あの……そ、それより身体は大丈夫なの燐？」

「そ、そうだよ！リツ君。身体は何ともないの？」

「心配しないでいいよ束さん、シャルル、俺は…人類最強のサイボー

グだ」

起き上がり立つと穏やかな笑みを向けインタークーラーコートを纏いメインオーダールームへと歩き出す燐。あつけにとられる三人だったが慌ててそのあとを着いていった

第十話 緑の髪の少女

了

閑話 覚醒―メザメ―

五年前、宇宙開発公団最深部

エリアX

同《Xルーム》

「…おはようリツ君…今日は具合はどうかかな」

淡い緑色の光に照らされ様々な機材から延びるケーブルに繋がれ眠る少年の頬にそつと優しく撫でながら喋るIS開発者《篠ノ之束》の姿がそこにあつた

閑話 覚醒―メザメ―

「…今日も元気だね…そうだリツ君、久しぶりに昔話を聞かせてあげる。むかしむかし、あるところに白い翼の剣士と赤い巫女がいました。二人は遠い遠い空の向こうから《真つ白で大きな船》に乗ってこの世界に来ました…」

眠りつづける少年にかたりのは、束の実家《篠ノ之神社》に大事に語り継がれてきた昔話。研究で手が離せないライとマヤに代わり燐の子守りをしていたとき聞かせていた話だった

「…白い翼の剣士と赤い巫女が乗った《真つ白で大きな船》は着くと同時に海に沈んでしまって、赤い巫女と共に、この世界で生きる事を決めた白い翼の剣士は不思議な力で住む家を建て一緒に暮らしてただけど、それからしばらくして赤い巫女の前から姿を消したんだ…代わりに真つ赤な石を一つを残して。でも赤い巫女は白い翼の剣士が戻ってくることを信じて待ちました……………」

先を言おうとするも口をつぐんだ束…なぜならここから先は燐が

まだ知らない話。燐が目をさましたら話そうと決めていたからだ
た

「リッ君。私の声聞こえてるかな？もし聞こえてたら答えて…」

左手を握り尋ねる…しかし燐は何も答えない

「……リッ君、昔から一度寝るとなかなか起きなかったね…でも私
が来ると目を開けて笑って手を握ってくれたよね…」

あれから一年、いまだに燐の意識は回復しない…バイオネットが施
した改造は常軌を逸していた

内臓の大半（消化器系を除く）を人工臓器、筋肉を人工筋肉に変え
られ異物であるそれらの拒絶反応を押さえるために遺伝子レベルで
の細胞改造…そしてあるモノ

宇宙開発公団へ向かう途中の輸送機で簡易検査した二人はソレを
みて目を疑った

「……リッ君、ごめんね……つらかったよね…助けに来るのが遅く
なって…」

ポタポタと涙が左手へ落ちていく…それでも燐は目をさまささない。

「ん、そうだリッ君、ダン君、トウヤ君、ハヤテ君、キリ君達が近い
ちにお見舞いに来てくれ…」

その時Xルーム全体に警報が響いた

—エマージェンシー、本施設内で火災発生。消火剤散布します。繰
り返す消火剤を散布します—

ハツとなり束は端末を操作する…システム内にアクセスするも火
災は無し、つまり誤作動だと気づくもXルーム内に消火剤が散布され

る…が束は素早く端末を操作、緊急プログラムを作成。燐が眠るベッドにシールドが展開され微かな機械音と共に閉じた

「う、ゴホツ…これでリツ君は大丈夫…あれ？」

シールドが閉じたのを見ながらゆっくり床に倒れる束…周囲には消火剤として撒かれたCO₂が充満している

「……あ…はは…もうダメ…かな…ちーちゃん、箒ちゃん、いっくん、リツくん…ごめん…ね…」

もうろうとする意識の中、親しい人達の名を口にした束の脳裏に言葉が浮かぶ

—束おねえちゃんがもし危ない目にあつたらぼくが必ずたすけてあげる—

「……たすけて…リツくん」

小さい燐と交わした約束を思い出し呟いた束の耳に何かが落ちる音が聞こえた

—燐—

—だれ？名前を呼ぶのは—

—燐、目をさましなさい……—

重い瞼を開ける燐、辺りには淡い緑光が満ち溢れている…穏やかで安らぎに満ちた光に身を任せようとするが再び声が響いた

—燐、目をさましなさい……あなたを守る人に危険が迫ってるわ—

—……ぼくを守る人？……—

—燐、助けてあげて……—

緑光がさらに明るさを増し頭に流れ込んできたイメージ

白い何かが立ち込め、ベッド？の近い位置で床に倒れた女性……顔は見えない。ただ特徴的なウサ耳、そして声

—たすけて—

か弱く助けを求める声に少年は閉じていた目をカッと見開き、迷わず右腕に力を込めシールドに手を添えると同時に《高周波ブレード》が手の甲から勢いよく展開、撫でるように切る

「(う、身体が熱い)……く、動いてよ……うつ」

ふらふらしながらベッドから降りる燐……しかし辺りは消火剤が充填し視界が遮られてる

「どこお姉ちゃ……ん………何これ……見える……」

燐の瞳……その奥に機械的なレンズが動く……何かをとらえ、ゆっくりと一歩ずつ歩き出す燐の身体から陽炎が立ち上る

(……熱い………熱い………アツい………でも………いかなきや………たすけなきや………)

身体からケーブルが抜けふらふらしながら歩きたどり着いた先にいたのは白衣姿に特徴的なメカメカしいウサ耳カチューシャに長い髪の女性が意識を失い倒れてるのは燐がよく知る《篠ノ之束》、燐はゆっくりと膝をつくと腕に力を込め抱き抱えようとするが力がです倒れそうになる

「力がでない……扉はどこ……あつた……あれ」

目覚めたばかりの燐は力が尽き倒れそうになるがグツと堪えると扉へ向け歩き出す

(アツい……アツい……)

陽炎が立ち上ぼらせ病院服から煙がたち燃え始めるも歩みを止めない燐……やがて扉の前にたった

「う、うう……アツい……アツい……」

陽炎を立ち上らせながら右腕に左手を添えるもふらつき膝をつく
(力が……入ら……ない……)

熱のせいで朦朧とし視界がぼやける、でも燐はもう一度立ち上がった

(ほんの一度だけでいいんだ……)

ゆつくりと腕を掲げる燐……手の甲から白銀色の刃が生えると表面が振動し全身のスリットから炎が噴き出す

——高周波ブレード——

バイオネットが燐の骨格に移植した特殊形状記憶液体金属と特殊細胞が結び付き体外に放出形成される剣、金属でありながら金属反応がなくターゲットに近づき産み出された刃で確実に殺傷、証拠を残さない《暗殺用サイボーグ》として燐は改造されていた

しかしある欠点も生じた。高周波ブレード使用時に体内で生まれる超高温を外へ排出が不完全、更に高周波ブレードのフレーム形成する細胞が異常増殖、健全な神経、臓器まで侵食していく。例え高周波

ブレードを使わなくても細胞が一定の期間に栄養をとらないと燐の肉体を侵食していき確実な《死》が待っていた

バイオネットは多少の欠点には目をつむり使い捨ての特殊暗殺用サイボーグとして今までの記憶を弄り《ある軍需財団》へ納品を決めた…が直後に秘密研究所の場所を突き止めたID5の手で救出されたのだった

その呪われた暗殺用サイボーグとしての武器を展開し構える…しかし誰かをの命を奪う刃ではない

(…もう、もう目のまえで…あのときみたいに…)

—なかなか面白かったですよ獅童博士♪…飽きちゃったんで死んでくださいな…アヒヤア♪♪—

「(だれも死なせはしない!!) はあああ!」

振動音が消え変わりに刃が光始め力を込め分厚い扉へきりかかる…早くしないと束の命が危ない。焦る燐の身体から炎が舞わせながら、Gストーンに光が溢れ出しそのまま切り裂く、音を立て扉が落ちると消火剤が強制的に排出されていく

「ま、まにあった…あ、う…」

ガランガランと重い音をたて落ちるのを見て、高周波ブレードが身体へ収めると燐はそのまま壁へもたれ目を閉じようとするが…

(…あつい…)

ふらふら歩きだし向かうのは気絶して倒れ伏す束がいる場所…やがてたどり着くと力を振り絞り近くに落ちていた耐熱シートに包むと背負うと歩き出す

(…あと少し…)

やがて高周波ブレードで切り払った扉を抜けると近くの壁に寝かせフラリと崩れるように倒れる…しかし寸前で誰かに抱き抱えられた

「大丈夫か燐君！」

「た、大河おじちゃん…おねえちゃんを…う」

「燐君！しっかりするんだ!!」

虎を模した金色に輝くIDアーマー姿の青年《大河幸太郎》の姿を見て燐は頼むとそのまま意識を失い、遅れて駆けつけたレイジはすぐ様メデイカルルームへと運び込んだ

一年間の昏睡から目覚めた燐…この日から自分の身体と向き合う苦難の日々の始まりになろうとは、まだ誰も知らなかった

第十・五話 竜崎疾風

中国奥地。その天まで届く程にそびえたつ山々に仙人がすむと言われ、霧に隠れた最奥にまるで天から流れ落ちできたような巨大な大滝の前に二つの影が見える

「ろ、老師。無理です！」

「ホッホッホッ疾風よ、すべて理づくめで考えてはいかん」

「お言葉ですが老師。廬山の大瀑布を逆流させることなど人の力では無理です！」

ゴウゴウと勢いよく落ちる滝を前に上半身裸の竜崎疾風が叫ぶも轟音にかき消された

第十・五話 竜崎疾風

「疾風、お主の中にある力《小宇宙（コスモ）》を感じ信じるのじゃ…このような瀑布など容易く逆流させることなどできるじやろう…」

「は、はい…」

水しぶきをあげる大瀑布を前に目を閉じ内にあるナニかを感じ高める疾風。バイオネットの気象兵器を破壊し日本へ向かう途中、この秘境《五老峰》へ迷い込んで数ヶ月

疾風は廬山の大瀑布の前に座した老師《童虎》（ドウコ）に人柄を気に入られ、ある闘法を伝授されていた

—小宇宙—《コスモ》

老師：童虎が言うには人の体は全て原子《小宇宙》で出来ている。この闘法はその原子を小宇宙で碎くと言うものだった

(小宇宙…)

内にある宇宙…小宇宙(コスモ)を感じようと目を閉じる疾風

(ほう、視覚を閉じたか…)

風が凧いだ次の瞬間、疾風は拳を大瀑布へ突き入れるが弾かれ拳から血が流れ落ちる

(どうすれば小宇宙を感じることができるんだ…)

悩みながらも拳を、蹴りを叩き込む疾風…徐々に脚と拳が赤く染まっていき岩場に落ちていく

「はあっ、はあっ…」

「疾風よ。あの時の事を思い出すのじゃ…」

「…っ?」

一ヶ月前、五老峰に迷い混んだ疾風…なぜかIS雷龍が起動せず途方にくれ歩いてた彼の前に現れたのは巨大な熊。牙を向き巨腕を振りかぶり殴られ岩肌に叩きつけられ意識を失い五感が薄れる疾風に牙を向ける熊を前にして《二度目の死》を感じたときだった

身体の内から沸き立つ力…銀河いや小宇宙が溢れだし無意識に立ち打ちはなつた拳《双頭の龍》が熊を貫き吹き飛ばし、そのまま意識を失い気がついたときは編み傘を被った老人に介抱されていた

この場所が五老峰と呼ばれ龍神伝説発祥の地であることを知り因縁めいたモノを感じながらも助けしてくれた事を深く感謝した疾風の礼儀正しさを気に入れ今に至る

(私が二度目の死を覚悟した時に感じた小宇宙…あの時の感覚を思い出すんだ…)

深く瞑想しながら構える疾風…その背中に双頭の龍が浮かぶと同時に宇宙が見えた時、カツと目を見開いた

—廬山双龍波!!—

双頭の龍のオーラが廬山の大瀑布を逆流させながら天を翔る疾風、その姿に老師も目を向ける

「フオッフオッフオッフ、双龍、天を翔るか…ワシの役目も終わりじやの」

満足そうな笑みを浮かべ童虎は誰に聞かせるでもなく呟いた

翌朝、朝靄立ち込める五老峰。廬山の大瀑布の前にたつ疾風と老師…疾風はピシッと姿勢をただし左手のひらに拳を当て頭を下げた

「老師、この数ヶ月ご指導ありがとうございました」

「そう固くなるでない疾風よ。お前が身に付けた小宇宙を正しい事に使うのじゃぞ…」

「はい老師。あなたから受けた教えは一生忘れません」

「うむ」

再び軽く一礼し背を向け歩き出す疾風。その姿が見えなくなるまで見送り童虎は杖をつき歩き出しやがて大滝の前に座した

「…疾風よ、これから先《命を守るための戦い》があるだろう…ワシは力を貸せぬが《命の獅子》と仲間たちと共に立ち向かうのじゃ…さらば…じ…や…我が…最後の…弟子よ」

まるで砂が崩れるように姿がほどけ消え去る童虎…そのあとには

何も残らなかった

「う、うまい…この料理はなんなのだ!？」

「中華粥です。ボーデヴィツヒさんは胃が少し弱ってるみたいですから豆乳を入れ優しい風味になるように作ってみました」

「……こんなに美味しいものがあるとは知らなかった…」

「いえ、この世界は美味しいもので溢れていますよ」

「そ、そうなのか……」

「それに食事はナニかをなすための力になりますから…ん、包子も蒸し上がりました。さあ暖かい内にどうぞ…ボーデヴィツヒさん？」

「……ナニかをなすためか……ではいたどころ」

ナニかがない混ぜになった感情がこもった瞳を見せるラウラ、しかしそれは消え去り出来たばかりカニ身入り包子（パオズ）をハムハム食べる姿に少し笑みを浮かべる疾風の頭に声が響く

（疾風！なんで黒ウサギに飯ご馳走してんだよ）

（雷龍、ボーデヴィツヒさんは食の大切さを知らない……それは悲しいことだ）

（……まったく、お前の食のこだわりはわかったよ。だがな、なんで黒ウサギにここまでするんだよ…俺らを独房に入れてコンテナに積み込んで日本まで連れて来たんだぞ）

(……そういう雷龍だつて前みたいにとゲがなくなつたな)

(うーそれは……と、とにかくオレは寝るからな!!)

それつきり声が消え、疾風はため息をつきながら空を見上げる……
真つ黒な雲が広がり昼間でも街灯を着けないと歩けないほどの闇。
疾風の瞳……右目が緑に輝く

(バイオネットの気象兵器ではないか……何とかして大河さん、レイ
ジ博士、燐、凍也、霧也と連絡を取らなければ……ん?)

振り返ると包子《パオズ》を食べ終えスウスウ眠るラウラ、疾風は
静かに蒸籠と皿を片付けると簡易ソファアへ抱いて運びそつとおろ
し寝かせ再び空へ向けた疾風の目に暗い空を翔るナニかが写る

(あれはガオファア?まさか燐が近くにいるのか……)

思わず立ち上がろうとする疾風……しかしナニかに引つ張られる。
見ると服の裾をソファアで眠るラウラがなぜか握っている、なんとか
はなそうと手を伸ばすも中々離そうとしない

やがてため息をついた疾風はスツと座り込んだ

(……すみません燐、私は今動くことができません。それにあの雲
は高濃度の酸素で構築され私と雷龍の装備では大爆発を起こしかね
ません……凍也の装備ならば街へ被害を出さずにできるはず)

やがてガオファアが雲へと吸い込まれるように消えていく

(……少しだけ待っててください……必ず皆と合流します)

心のなかで小さく呟き座禅を組み目を閉じ疾風は瞑想を始めた

兄弟竜が揃う日は刻一刻と近づきつつあった

第十・五話 竜崎疾風 了

第十一話 空を征するもの

「はああ〜」

空を見上げたため息をつくのは一夏達のクラス副担任の山田摩耶先生。彼女の目には真つ暗な空、本来だったらISを用いた飛行実地訓練をする予定だった…しかし三日前、突如現れた雲のせいで太陽は遮られ昼間でも明かりをつけなければ歩けない状況に、事態を重く見たIS学園の教諭達は事態が終息するまで屋外でのISを使った飛行訓練を取り止めることが決まり、クラスの皆にIS飛行訓練を教えることを張り切っていた摩耶は落ち込んでいた

「よう！山田先生!!」

声がかげられ空から目を離し振り返る。IS学園に臨時講師として来ている《火麻激》の姿に驚き慌てる

「火、火麻先生!?!どうしたんですか?」

「ああ、これから野暮用で外に出るんだよ……んでだなに見てたんだ?」

「そ、外は危ないですよ…いつになったら空が晴れるのかわかって考えてたんです…せつかくみんなとIS飛行訓練ができると思ったのに」

「大丈夫だ山田先生。雲は必ず晴れるから信じて待つてな…じゃあな山田先生!!」

「え?火麻先生………いつちやいました………でも信じてもいいかな」

腕を軽くあげその場から走り去る火麻にあっけにとられる摩耶、しかし火麻の言葉から強い自信を感じとっていた

第十一話 空を征するモノ

「……今日も真つ暗だな燐」

「そうだな、まあ晴れないって訳はないから気長に待とうか」

「……だがこうも暗いと気が滅入ってしまうな一夏」

「そうですわね……全くあの雲はいつたいなんなんでしょうか？」

「……天気予報もずっと曇りだし雨も降らないなんて……全くなんなのよあの雲は!？」

「お、落ち着いて風さん。でもいつかは晴れるよ」

雲が晴れないことに苛立つ鈴をシャルルがなだめる中、燐は別なことを考えていた

(今、この上空に展開している雲からゾンダーIS反応があるって聞いたけど攻撃もせずただ浮いてるだけだ……じいちゃんと大河長官、火麻参謀は今も対策を考えてるけど……それにあの中には……)

雲が出現して二日目、ロシアのIS部隊が突入を試みて内部へ入った……だがすぐに通信が途絶した

(束さんは全員生きてるっていつてたけど、SEの残量からしておそらく今日までしか持たない……何とかしなきゃ)

「お〜い燐、そろそろお昼にしようぜ」

「え？ああそうだな……ん？」

左腕のブレスレット、待機状態のファントム・ガオーが震え迷わず開くと暗号化されたメッセージが網膜に流れた

……GGG機動部隊は直ちにメインオーダールームへ集合せよ
……

「わ、悪い一夏くん。俺は今から公団へいかないといけなくなったからお昼はまた今度でいいかな？」

「それなら仕方ないか、じゃあ、また今度お昼にしような」

みんなに謝ると燐はその場から駆け出していく

「あ。僕、織斑先生に職員室へ来るように言われてたからお昼はまた今度でいいかな？」

「シャルルもか、そうだなまた今度な」

軽く頭を下げ駆け足で走るシャルルを見送り一夏は残ったみんなと共に食堂へと向かっていった

IS学園より数キロ離れた人工島《ギガフロート》に建設された宇宙開発公団、その最深部にある計六つのエリアがヘキサゴンに接続された、ここGGG本部メインオーダールームでは三日前に突如現れた雲型ゾンダーISへの作戦会議が行われようとしていた

「よく集まってくれたな諸君、皆も知っているとおり三日前に突如現れた雲型ゾンダーISへの突入作戦を試みたい……だがその前に君たちに新隊員を紹介したいと思う……入ってきたまえ」

「は、は、は」

扉が開きメインオーダールームへ入ってきた人物に思わず声をあげそうになる燐、何故ならプラチナブロンドの髪にアメジストの瞳に女の子と間違えるぐらいの容姿のシャルル・デュノアがGGGのジャケットをはおっていたからだ

「ち、長官！何でシャルルがここに」

「燐、我々GGGの力ではコアに取り込まれた人を安全に分離する術はない…」

「でもシャルルは民間人だ。万が一のことが起こったら…」

「燐、僕なら大丈夫だよ」

「シャルル!?!」

「僕に何でこんな力があるかはわからない…でも取り込まれたコアに触れたときに声が聞こえるんだ《たすけて》って…だからお願い!」

「…う…」

「燐、お前の負けだ。ここまで強い意思を持ったヤツを見るのははじめてだぜ」

「…長官、バイオネットはゾンダーISを人に戻す力を持つシャルルを狙うはず。俺にシャルルの護衛を任せてもらえないか」

「ああ、構わない…だができるだけ我々の方でもサポートをしよう」

「ありがとう長官…」

「新隊員の紹介も終わったところで本題へ入るかの。束くん、あやつの詳細なデータをスクリーンに…束くん？」

「は、はいはく、あの雲の構造解析映像出すよ♪」

黒いオーラを漂わせるもすぐに消し去るとキーを軽快に叩きスクリーンに雲内部構造図が大きく表示された

「あの雲を構成しとるのは高密度の酸素じゃな」

「ふむ、毎時20キロ四方に拡大しているか……東くん、これは？」

「空気取り入れ口だよ。あの雲型ゾンダーISは端から空気を取り入れてるんだ。まるで呼吸をするみたいにね、ロシアのIS部隊はそこから突入してみたんだけど」

「ロシア……まさかと思うが更識楯無君も参加していたのかね」

「ああ間違いないぜ。ロシア政府から実戦データをとるよう頼まれたらしいぜ……」

「……ロシア政府……確かG—IS—07《アリエス》の稼働テストをしてたな」

「ま、んなことより。内部にとらわれたIS操縦者数名の救出を優先、救出後にゾンダーISからコアをえぐり抜く……」

「しかし正確な位置をつかまなければならない……そこで、隣には空気取り入れ口から内部へ潜入、とらわれたIS操縦者全員の救出を頼む。現在、空へ行けるのはガオファーステルスガオーII装備モードだけだ」

「わかったよ大河長官」

「凍也と炎竜は俺と一緒に水陸両用整備装甲車で待機だ」

「わかりました」

『おうよー』

「ではこれより雲型ゾンダーIS内部へ潜入、内部にいるIS操縦者全員の救出、ゾンダーIS撃破作戦開始する!!」

「了解!!」

大河の号令と共に火麻、凍也はエリアIV水陸両用整備装甲車、レイジ、東はエリアVII三式空中研究所へ、オート制御で焔をのせたエリアI三段飛行甲板空母がヘキサゴンから切り離されウルテクジェットで急速浮上、海を割り空を舞う

やがて目的地、空気取り入れ口付近に到達。滞空する三段飛行甲板空母艦内でガオファー・ステルスガオーIII装備モードでカタパルト内に立つ

『聞こえるリツ君。ガオファーとステルスガオーIIIは特殊コーティングが完了してるよ…ライナーガオーII、ドリルガオーII、デイバイディングドライバーはあと二時間、頑張つて一時間で終わらせるからそれまでファイナルフュージョンはダメだからね』

「うん、よしミラーカタパルトオープン…ガオファー・ステルスガオーIII装備モードいきます!!」

瞬く間に光が集まり焔の身体を白銀の粒子が蒸着、同時にふわりと浮きあがり次の瞬間、勢いよく空をかける

「く、何て風だ!!」

体勢をギリギリで立て直し風に身を任せるように空気取り入れ口へ向け飛翔するガオファー・ステルスガオーIII装備モード

「ガオファー、空気取り入れ口まで距離500、400、300…」

「ふむ順調に風に乗ったの…」

確実に空気取り入れ口へ近づくガオファー、しかし警告音が流れた

「いかん、冷たい空気と暖かい空気がぶつかりあつて竜巻に近い状態になっておる」

「そんな！ステルスガオーⅢの設計耐及度が限界に近いよ…どうしよう。このままじゃ…リツ君すぐに引き返して!!」

『束さん、俺はこのまま内部に突入する！ウオオオオオ!!』

「やめるんじや燐！」

『ぬ、うう…う…う…う…』

凄まじい気流に錐揉み状態になりながら内部へ吸い込まれるようにその姿が消えると同時に燐、ガオファーとの通信が消え束は顔をうつむかせ、レイジは燐が消えた空気取り入れ口を凝視したまま立ち尽くした

「リツ君、起きないと風を曳くよ」

「う、うん…あれ俺なんで…」

「俺？いつからリツ君は俺って言うようになったのかな…まだ早い♪

リッ君は僕が似合ってるんだから」

「あ、うん…でも今日はどうしたの束さ…束お姉ちゃん」

「リッ君たら忘れてるゝ今日はリッ君のお父さん達がモジュール0
1から戻ってくる日だよ」

「ああ！そうだった…早くいかなきゃ…」

「そうだね、今までリッ君がやってきたことを教えないとね」

—フウウジョーン！ガオツフアア—！！—

—いくぞバイオネット！！—

「…僕がやってきたこと…」

—ファイナル！フウウジョオオン！！—

—ガアオツ！フアアイツ！ガアアアア！！—

「そうだよ、リッ君が今までやってきたことだよ」

「…うん、束お姉ちゃん。僕…俺いかなきゃ」

「まくた俺？…になってるよ♪リッ君。じゃあいつてらっしやい」

「うん」

うなずくと同時に強く風がなぎ思わず燐は目を閉じた

「ほ……ハハハ」

身体をゆっくり起こす燐、見回すも辺りは暗いガオファアのハイパーセンサーでスキャンすると位置座標が示された

「中心部に近いか……人の氣はそこに集中している……」

歩き出した燐はハイパーセンサーで現在位置を確認しながら人の氣を感じとる、やがて燐の前に壁が見える……

「……この上か……よしフロントムクロー!!」

両腕の金色のクロー《フロントムクロー》を展開し突き刺し上っていくガオファアは遂に中心核へ辿り着いた。ハイパーセンサーと人の氣を感じ見ると六人のIS操縦者の姿。そのうち一人に目が止まる

（あの人は保健室であつた上級生？ロシア代表候補生だつたのか……時間は一時間が経つてる）

見覚えがある顔に驚くも燐はファイナルフュージョン要請シグナルを発信と共にあるメツセージを送る

「

三式空中研究所、同オペレータールーム

燐との通信が途絶え一時間、通信回復作業と特殊コーティング作業を進めるレイジと束が作業を終えたと同時にパネルが赤く明滅しモニターに暗号通信が入る

「せ、先生、リツ君からファイナルフュージョン要請シグナルが来たよ。リツ君が生きてるよ!!」

「よし長官に要請シグナルを発信してくれ！東君、ガオーマシンをあの中へ射出、60秒後にダイバイディングドライバーを射出じゃ」
「う、うんわかったよ！火麻さん達にも連絡しておくね!!」

「よっしゃあ！凍也、炎竜、打ち合わせ通りにいくぞ!!」

「はい、いくぞ炎竜！」

『つしやあ、いくぞ凍也!!』

水陸両用整備装甲車の上部ハッチが開くとG-IIS-03氷竜、ビークル炎竜が飛び出し着地、しかし炎竜が降りた方に土煙が立ち上る

「炎竜、着地のコツを覚えろ」

『ビ、ビークル形態ならうまくいくと思ったんだけどな』

「ち、長官さん。ファイナルフュージョン要請シグナルが来てるよ」

「ああ、あまり緊張しなくていいよシャルル君。よしファイナルフュージョン承認!!」

「承認シグナルを三式空中研究所へ転送します」

「ガオーマシン各機、雲内部へ突入。ガオファーとランデブーまであと十秒じゃ」

「承認シグナル受諾！ファイナルフュージョン！プログラアムウッドラアアアアアイブ！！」

赤く光輝くパネルを叩き壊すとモニターに各ガオーマシン、ガオファーの各システムプロテクトが解除され大きく文字が流れた

— G A O F I G H G A R —

「来たかガオーマシン！いくぞファイナル・フユウウウジョオオン！！」

リングジェネレータのシャッターが開きプログラムリング形成展開、それに乗る走るようにガオーマシンが走ると共にリングが吸収され合体シークエンスに入る

ドリルガオーⅡのドリル部が全面へスライド脚へ装着、ジャッキがガオファーの足を固定、続けてライナーガオーⅡのブースターが分離、上下が開き右肩に進入と共に量子化し左肩へ装着、背後からステルスガオーⅢが飛翔と共に肩部装甲が胸へ移動脇腹へインテークがロック、肩から強化アームが形成と同時にエンジンブロックが競り上がりドッキングと共に拳が回転し飛び出す

最後に黒い兜を模したヘッドギアが装着、マスクが展開、額にGストーンが競りだし輝く

「ガアオツ！」

左腕を前に突きだし拳表面にGの刻印が輝き

「フアイツ！」

両腕からGエネルギーを放出させ交差

「ガアアアア!!」

両腕を大きく構え叫ぶと同時にEMTが弾ける

バイオネットのゾンダーISの驚異から人類を守護するために《破壊の神》を姿を元にし産み出された《希望》

その名も…

—勇者王ガオファイガー—

「来たか！…うおおお!!」

ウルテクスラスターで上昇と同時にデイバイディングドライバ―がガオファイガーに迫り、焔はそのまま左腕へドッキング。—上の金属版に光が走る

「デイバイディングツ―ドライバアアア!!」

その頃、雲型ゾンダーISの上部に光が走り円形状に拡がり止まる。すると中に捕らわれていたロシアのIS部隊がGGG開発特殊

バルーンに一人一人が包まれている

「やりおったな隣、デイバイディングドライバーで空間歪曲、穴を明けるとは。雲の内部は常温に近い状態でなおかつ雲は穴を開けられ空気は抜け上昇気流を産み出す…さすがはワシの孫じゃ」

「でも…あの人たち回収するのは誰がやるの？」

「大丈夫じゃ、彼が動いておる…」

モニターには白と紫色の影がロシアのIS部隊を回収していく姿をみて彼と言う人物に気づいた

(…キリ君…)

—篠ノ之博士…お願いがあります—

—キ、キリ君？リミピットチャンネルを使っちゃダメ！早くマニージマシんに座らないと—

—…刀奈と簪には私が死んだと伝えていただけないでしょうか—

—なんで、何でそんなこと言うのキリ君！君は生きてるのに何でそんな事を!!—

—…今の私は彼女達が知る《犬神霧也》ではありません…今こうして博士と話してる《私》が《本当の私》なのかわからないのです—

(……キリ君、君は本当にそれでよかったの)

「いくぞ炎竜！」

『おうよ凍也』

操縦者達が紫色の影に救出されたのを見て地を蹴りウルテクスラストアーを飛翔し叫んだ

『シンメトリカル・ドッキング!!』

「ゾンダーISSコアはあそこか！ヘル・アンド・ヘブン!!」

右腕にブロウクンエネルギー、左腕にプロテクトエネルギーを溢れ出させ徐々に拳を近づけていく

「ゲム・ギル・ガン・ゴー・グフォ……むん!!」

組み合わせ瞬間、中心核めがけスラストアー全開で突き進むガオファイガー。それに気づいたのか雲型ゾンダーISSから無数の針が弾丸のように襲いかかる

「うおおおおお!!」

弾丸のような早さで襲いかかる針を拳から発するエネルギー《氣》

の障壁で防ぎ遂に紫色に輝く丸い球体がみえ迷わず掴みとった

『「超オオ竜ウウ神ッ!!」』

シンメトリカルドッキングを終え超竜神は一際高いビルの上上に降り立ちクレーンアームを正面へ伸ばすと同時にイレイザーヘッドX1をコールし雲へ構えた瞬間なにかが突き抜けてくる

「うおおおー!」

突き抜けてきたのはゾンダーISコアを両手に構えたガオファイガー、超竜神と互いにすれ違う

『「ワンオフアビリティー!イレイザーヘッドX1射出!!」』

ドンツと鈍い音と共に銀色の塊がまっすぐ向かう…着弾寸前に雲が爆発するが瞬く間にイレイザーヘッドの超振動により爆発のエネルギーは宇宙空間へと逃がされ放出。数日ぶりに街を太陽がさんさんと照らし出した

『「お疲れ様です燐」』

「ありがとな凍也…」

『「あと数分したらシャルルが来ます。それまで辛抱を」』

凍也の言葉にうなづく燐…だがコアをえぐり抜いた時の事を思い出していた

「はっ!」

コアを中心に数えきれないほどの円錐状の物体が全方位を囲み、ありとあらゆる場所へ狙いをつけている光景

(アレはいつたいたいなんなんだ…まるでミサイルじゃないか)

「燐〜」

突然響いた声に我に変えると緑の光に包まれたシャルルがフワリと降り立つ

「どうしたの燐、具合が悪いの？」

「い、いや何でもない…じゃあシャルル、頼むよ」

「うん。クーラ・テイオー・テネリタース・セクテイオー・サルース・コクトウーラ」

「ああ、うう…わたし、わたしもう一度頑張ってみる……」

ボロボロのISスーツに自身のISコアを握りしめ泣きじやくる女性を保護し燐、凍也、シャルルは水陸整備装甲車へ乗り込みその場をあとにする。そこから少し離れた場所では先ほどロシアのIS部隊を保護救出した霧也がボルフォッグを纏い容態を見ていた

「…脈拍、呼吸共に正常ですね…」

容態に異常がないことに安心した霧也はメインオーダールーム経由でロシア政府に連絡を取ろうとした、が背後に気配を感じ振り返る。水色の髪を風に揺らし驚いた表情で霧也をIS学園最強の生徒会長《更識楯無》がジツと見ていた

(か、刀奈!?!意識が目覚めたのですか!?!)

「……やっぱりキーちゃんだ……やっぱり生きてたんだね」

「……人違いです……私の名はボルフォッグ。あと数分したらロシア政府から回収チームがあなた方の元へ参ります……では失礼」

「待って！キーちゃん」

背を向け飛び去る霧也を追いかけようとするもISのエネルギーが切れていることに気づき、楯無はその姿をだまって見送ることしかできなかった

第十一話 空を征するもの
了

閑話 師と弟子

四年前

「く、くううう…」

人の手すら入らない富士の樹海、自然に溢れたこの地にある小さな道場

— 御鷹流古武術道場 —

ひんやりとした道場内に白髪に道着姿の青年と正座する少年の姿、しかし体から陽炎が立ち上ぼり高周波ブレードが胴着の袖と肩から伸び前のめりに倒れうめく

「……………燐、心を落ち着けなさい……………」

「う、うう……………くう!？」

「……………そんなに《今の自分の身体》が嫌いですか」

「!」

「いえ、違いますね。嫌いではなく《恐れ》といったところでしようか」

「…先生に、先生に何がわかんだよ!こんな《身体》に僕はなりたくなかった。少しでも興奮したらこんなのが出る《身体》なんか嫌いだ!!」

ふらふら立ち上がりながら高周波ブレードを突きつけるように出す燐、しかし彼は手を添える。次の瞬間、勢いよく投げ飛ばされ道場の壁を突き破り外へ投げ出された

「…甘えるのもいい加減にしなさい。今のあなたに自身の体は制御

すらできない……その刃が証拠です」

「く、くうう……うるさい！うるさい！！こんな身体なんか僕の身体じゃない……先生もこの体になればわか……」

「……誰もが好き好んで自分の身体を持たされ《生》を受けた訳ではありません」

静かな声で話しかける青年の背後からスウツと影が現れる、全身に鎧をつけたナニかがゆつくり燐に近づき構えた刀を鞘から抜き放つ。冷たい金属の光を称えた日本刀を前にし驚く燐を他所に刀を素早く正確に振るうその姿は全くぶれがなく、やがて刀を床へ刺し柄足場に大きく宙返り。同時に柄を手に握り膝をつくと再び燐の眼前に刃を構えた

「意識を全身に巡らせ、魂脈……いえ《氣》の流れを感じ隅々まで行き渡らせれば40キロの甲冑を着てここまで動けるようになるのです」

「う、うそだ……こんなのできるわけない……その鎧や刀は紙で出来てるんじゃない……!?!」

言いかけた燐に鎧をつけたナニかがが歩みより持っていた刀を手渡す、ズシリとした重さにたまらず落としそうになるも耐え本物だと気づき驚く燐から離れた離れた鎧武者は兜に手をかけ顔宛と共にはずす。肩までの長さに切り揃えられた白髪に無表情な目の女の子がたっていた

「紹介します、妹のオリエです」

(ぼ、僕と同じぐらいの子……で、でもこれは現実だ……)

「燐、私達の家系は目か声に必ず障害を持って生まれます……私の場合は極度の弱視……オリエは視力が全くありません」

「め、目が見えないのに、氣の鍛練をただけであんなことが出来るわけ…」

「燐、私があなたにさつき言ったことを覚えてますか？」

「……」

「……誰も好き好んでこんな身体を持って生を受けたわけではないと。その刃が出るのは《心》が貴方自身の身体だと認識していないからです。望んでいようが望まなかろうが、その身体は《貴方のモノ》です」

「う、うう…」

「今日の稽古はここまでにします…」

背を向け歩き出す青年とその妹オリエ、だが燐はふらふら立ち上がった

「う、うう……あう……」

だがぐらりと揺れながら燐はそのまま板張りの道場の床へと倒れた瞬間

—あぶないよ—

微かだけでも優しく暖かな声を最後に意識を失った

—秘境ジャミール—

険しい山々に囲まれたこの地になにかが弾ける音が響く。見ると

二つの影、いややや緑色の長い髪に特徴的な眉、整った顔立ちの民族衣装をまとった青年と少年が対峙している

「う、うう…」

「どうした、その程度の小宇宙では私には勝てぬぞ？」

「う、うわああ!!」

少年が声をあげるとその身体から黄金のオーラが沸き立つ
(ほう?第七感《セブセンシズ》に目覚めつつあるか…)

心のなかでほくそ笑み青年も黄金のオーラ…いや黄金の牡羊を浮かび上がらせた

「今から出す技を小宇宙で防いでみよ…スターダスト・レボリューション!!」

牡羊座の軌跡を描くように拳を構えると黄金のオーラを激しく燃え上がった瞬間、無数の星の閃光が少年へめがけ降り注ぐ。無数に降り注ぐ流星を前に少年も青年と同じ動き、牡羊座の軌跡を描いたことに驚き叫んだ

「ほう、私の技で防ごうというか…所詮は借り物の技だ!!」

「…燃え上がれ僕の小宇宙!スターダスト・レボリューション!!」

無数の星の軌跡が交差し互いを包み込みやがて光が溢れ広がり二人の周囲にあった岩や山がくだけ散った

「まさか、私の位にまで小宇宙を高めるとは……ふ、それに私やムウと同じ才能を秘めているとはな」

焚き火を囲みながら気絶する少年を見ながら呟く青年、彼は《ある戦い》で親友である友よりも先に命を落とした……筈だった

だが気付いた時には聖衣箱と共にこの地ジャミールにいた。しばらく過ぎすうちに空間の捻れを見つけテレキネシスで捻れを修復した瞬間に現れた一人の少年《ユーノ・スクライア》を見つけた

だが空間の捻れを直しただけでは生身の人間は無事には出てこれない……もしかしたらと思いテレキネシスで身体を調べてみた彼は驚いた

何故なら少年には小宇宙、そしてテレキネシスに目覚めつつあった事に驚いた

もしかしたらこの少年を育てるために生き返ったのではないかと考えた青年は少年を《聖闘士》として鍛えることを決め今に至る

(……我が弟子ムウと同じ才能……ふ、覚えるのは遅いがまだ時間はある……この世界に私以外の黄金聖闘士の小宇宙を感じる……まさか？ いや考えすぎか)

弟子であるユーノ・スクライアへ目を向けながら傷薬の調合をし終えると布に包んだ黄金の箱を取りだし開くと不思議な輝きを称えた工具を手にし星砂(スターダストサンド)を降り工具をおろすと乾いた音が辺りに響く

(……この聖衣だけは修復しなければ……私の最後の弟子のためにな)

チラツと目を向けるも再びボロボロの聖衣《牡羊座の黄金聖衣》を

修復を始める牡羊座《アリエス》のシオン

身体がうつすらと透ける事に気づきながらも修復工具を振るい続けた

先に起こる大いなる災厄を防ぐために、傷ついた《勇氣ある獅子》を助け弟子に力を与えるために

閑話 師と弟子

了

第十二話 クラスメイトの正体（前編）

「…自分に何でこんな力があるかがわからないって？」
「うん」

夕暮れに染まる街を走るバイク《ガンダーベル》に乗操る燐は後ろに座り腰に手を回すシャルルの言葉に耳を傾ける

「僕のおばあ様、そのおばあ様のご先祖様に似た力があつたんだ…
それに声も聴くことも」

「…多分《その力》は神様がくれたんじゃないかな」

「え？」

「…ずっとずっと昔にこんな事が起こるってのを知った神様がシャルルの…先祖様に力を授けたんじゃないかって思う」

「…そうかな」

「…俺の場合はバイオネットのゾンダーISと戦う力、シャルルはゾンダーISコアを人に戻す力がある…与えられた力には必ず意味があるって思うんだ」

「うん」

「よし着いた」

話しているうちに燐とシャルルを乗せたガンダーベルはIS学園正面ゲートへつく、ヘルメットを外し座席の下へ入れると二人の前から音もなく走り去つたのを見た燐は大きく背を伸ばした

「さつて、寮に戻るかシャルル。明日はISの実技訓練だし」

「うん、明日の訓練の準備もしないとね…ねえ燐、あんな戦いをした後なのに身体は何ともないの?」

「大丈夫だ、シャルルのお陰で元気一杯さ。さあ早く戻らないと怖い寮長に怒られるぞ」

「うわ、不味いね…あれ燐?…わあああ♪」

空を見上げた燐につられるように見上げたシャルル、その瞳には無数に輝く星が映りこんでいた

GGGベータワー本部

水陸両用整備装甲車内

ガオーマシン整備ルーム

「ふむ、いかんのう」

「レイジ博士、コレは合体によるダメージか」

「いや、ヘルアンドヘブンによるダメージじゃ。GSライド四基から生まれた攻撃と防御の凄まじいまでのエネルギーにリフレクションダンパーが耐えきれんかったんじゃ」

正面スクリーンには分解整備中のライナーガオーII、その腕部リフレクションダンパーが無惨に亀裂が入り内部構造が剥き出しになった部分が映し出される

「…では、そのエネルギーが溢れる中でヘル・アンド・ヘブンを使う燐の体は…」

「…平気なわけ…ない…よ…今だってリツ君の身体はコンディションレッドなのに…」

隣に座る束のモニターには隣のコンディションが示され正常を示す《緑》の部分は消えほぼ異常を示す《赤》に染まりつつあった

「もし、もし、このままリツ君がヘル・アンド・ヘブンを使い続けた…ら…リツ君は…」

顔を俯かせる束の声が震え涙がポタポタとGGG制服に落ち濡らし嗚咽の聲が大河長官、レイジ博士のいるコントロールルームに響く

「…せめてセカンドシフトへ移行ができれば…」

左すみにあるモニターにはセカンドシフト移行後の姿とオレンジ色の巨大なハンマー？の凶面が浮かびこう銘打たれていた

《G・Too》

第十二話 クラスメイトの正体（前編）

翌日、IS学園にある第二グラウンドに勢揃いする一年一組のISスーツ姿のクラスメイトの姿が見えその表情は笑顔で溢れていた。先日、関東一円をおおった《雲型ゾンダーIS》が消え透き通るような青空を見たのと待ちに待ったISを用いた実技が受けられるからだ

その時、ISスーツに身を包んだ三人が駆け込んできた

「す、すいません遅れま…」

「おそいぞ、織斑、獅童、デユノア。とにかく早く並べ」

普段と変わらぬ口調で並ぶように促す千冬という言葉にうなずき三人

が並ぶとクラスのの女子たちの声が湧き上がる。まあ世界でISを動かせる三人の男子は未だに注目の的だ。沸き上がる声を遮るように黒い出席簿を手で軽く叩いた

「静かに。では、これより二組との格闘及び射撃を含む合同実戦訓練をはじめます。その前に君たちに紹介をしておこうと思う」

後ろへ目配せするとオレンジ色の繋ぎを着た黒髪にメンテゴーグルを付けた隣より少し背の高い少年が様々な機材が入った赤いビークルと共に姿をみせ一組、二組の女子がざわめきだす中、千冬の隣にたつ少年が口を開いた

「宇宙開発公団《技術開発部門》から来ました竜崎凍也です」

(と、凍也くなぜここにいる!?)

「竜崎はIS学園にこの度新設された特殊整備課のスーパーバイザー兼整備主任を勤める」

「特殊整備課が立ち上がるまでの間、IS学園の皆様と共に互いの持つ技術向上をしていこうと思います。若輩者ですゆえ行き届かない部分があるかも知れませんがよろしくご指導をお願いします」

ペコリと挨拶するとそのまま赤いビークルに近寄り軽く撫でるとカシャカシャと各部が開き調整をはじめ

「ねえねえ、あの宇宙開発公団から来たっていったよね」

「私たちとあまり変わらない年なのに…じゃあエリートなんだ」

「それに礼儀正しいよね」

(…まあ礼儀正しいけど《もう一人の凍也》を見たら驚くかもな)

(ねえ、燐)

腕を軽く肘でつかれ見ると鈴が小声で訪ねてくる

(ひとつ聞いていい？今織斑先生に紹介されてるのってあの時のIS超竜神よね？あと竜崎凍也って弟とかいる？)

(そうだけど皆には内緒で頼めるかな。で凍也には弟がいるけど…鈴さん？)

(そっか…いつか会えるチャンスはあるんだ…ありがと燐)

燐と鈴が会話してる頃、もう一人も凍也に視線を向けていた

(竜崎凍也…宇宙開発公団《特殊災害対策部門》所属してるはずですが…それにドコかであった気がしますわ)

赤い炎がオルコット邸を焦がし黒い煙が辺りに立ち上がる中、一人の少女がもう一人の少女を抱き抱え口元にハンカチをあて進む

—お嬢様しつかり！—

—ケホツ…チエルシー…—

咳き込みながらもうなずいたのを見て安堵するが突然、天井が崩れ落ちてきた

チエルシーは咄嗟に少女の体へ守るように覆い被さったその時、青い影が現れた

—ペンシルランチャー・ブルー！—

—ペンシルランチャー・レッド！—
声と共に赤と青の弾頭が瓦礫に着弾、瞬く間に硬化し崩落が止まる

—遅れてすいません、さあ早くこちらへ—

(青い…IS………)

巨大なペンシルを構えながら先導する青い装甲にクレーン？を背中へ接続したISを纏った操縦者を見たのを最後に少女の意識は途絶え、次に目をさました時は病院のベッドの上だった

(……まさかですわよね……)

そう結論付けるセシリア、だが青いISの正確無比な射撃技術はセシリアの目標にもなっていた…できればもう一度あつて見てみたいとの願いを込めて自身のISブルーティアーズのカラーも同じにしていた

「……今日は戦闘の実演してもらおう。嵐、オルコット。今から来る相手との模擬戦をやってもらおうか」

「は、はい!？」

「わたくしも?」

なぜかと言う顔をする二人

「嵐、オルコットは専用機持ちはすぐに始められるからだ。用意ができ次第前に出ろ」

「は、はい…でわたくしたちの相手はどこにいますのでしょうか?」

「何処にもいないわね……な、なにこの音？」

確かに専用機持ちは常に身に付けているから呼び出すことは容易だ。二人は納得し自分達の相手の事を尋ねた。だが代わりに何か音が響く

(……バ、バイオネットか!?)

身構える燐、だがその耳には聞きなれた声が入る

「ど、ど、どいてくださあああああい!？」

見上げると黒い点、それがどんどん大きくなり一夏がたつ場所へ落ちてくる

(く、危ない!)

駆け寄ろうとした燐、だが別な影が一夏と落ちてきた影の間に割つて入る、鈍い地響きとなにかがぶつかる音が響くと共に声が聞こえた

「ひゅ〜間一髪だったな。大丈夫か一夏、山田先生」

山田先生を片手で軽々と抱えた臨時講師《火麻激》が一夏の前に涼しい顔で立っている…しかも足元が地面にめり込ませながらも何事もなかったかのように歩きだし山田先生を降ろした

「火、火麻先生?身体はなんともないんですか!？」

「へ、こんなの毎日身体を鍛えてれば何ともないぜ…つと山田先生は怪我してないか？」

「は、はひ!?大丈夫でしゅ!?!」

「そいつはよかったぜ、どうした一夏?なんかオレの顔についてる

か？」

「い、いえ？何でもないです（身体鍛えただけでISをまとった山田先生を受け止められるのか？すごいな火麻先生は）」

答えるも冷や汗を流し無理やり納得する一夏、やがて山田先生が空へ上がると同時にセシリア、鈴がそれぞれISを展開し上昇。三機は互いに距離を取り構えた

「準備はできたようだな、皆もよく見ておくように：では、はじめ！」

掛け声と共に空をかける山田先生の動きは普段とは違い、機敏な動きで代表候補生出る二人の攻撃を回避行動をしつつアサルトライフルで牽制と同時に追い込んでいく

（さすがは元代表候補生か、現役でも十分通用するかもな：それにラファール・リヴァイブの性能を極限までに引き出してる）

「さて、デュノア。山田先生が使っているISの解説をしてもらおうか。」

「あつ、はい」

クラスメイトの前で山田先生が使うIS《ラファール・リヴァイブ》の解説を始め、それを耳にしながら自由に空をかける山田先生の姿にクラスの皆はじっと見守る。何せ代表候補生二人を相手に互角の戦いをみせてるのもあるだろう

「特筆すべきはその操縦の簡易性で、それによって操縦者を選ばないこととマルチロールチェンジを両立しています。装備によって格闘、射撃、防御への全タイプに切り替えが可能で、参加サードパーテーターが多いことでも知られています」

「ああ、説明はそこまでいい。そろそろ終わりだな」

ふと目を向けるとセシリアが山田先生の巧みな射撃に誘導され、その先にいた鈴にぶつかりそうになるが寸前でブレーキをかけ体勢を立て直す

「さすがですわね。元代表候補生の実力は侮れませんわね」

「そうね。でもね、あたしたちは負けられない」

「あら奇遇ですわね、わたくしもですわ」

互いに顔を向け少し笑みを浮かべ鈴は龍砲展開と同時に山田先生を狙うが避けられる…だが回避先にセシリアのビットから青い閃光が降り注ぐもかわされる

（さすがは現役代表候補生です。でも私も先生ですから負けられませんかよ！）

アサルトライフルを再び構え急加速、二人の間を抜け様に弾をばらまき防御体勢を取る鈴、セシリア。山田先生はグレネードを両手に構え急旋回と同時に発射、二機は爆発に包まれそのまま地面へと地響きと共に落ちた

「いったた…（さすがは元代表候補生だったわけはあるわね）」

「ま、負けてしまいましたわ（…まだ現役でも充分通用しますわね）」

「大丈夫か鈴、セシリア？」

「は、はい」

「ぜ、全然平気よ」

差し出された手を握り立ち上がる二人、だが一夏の背中に鋭い視線が突き刺さりビクツと震える

（く、一夏の手を握ってる…べ、別に羨ましいわけではないからな！！）

と羨望の眼差しを向ける筈に気づかず怯える一夏、パンパンと出席簿を叩く音が響いた

「これで皆も教師の実力を理解できただろう。以降は敬意をもって接するように、ではこれより織斑、オルコツト、獅童、デュノア、ボーデヴィツヒ、風の専用機持ちと八人グループで実習を行う。グループリーダーは専用機持ちがする事。では別れる」

千冬の言葉に蜘蛛の子を散らしたかのように動き出すクラスメイト。もちろん集まる先は決まっている

「織斑くん／デュノアくん／獅童くん、お願いします!!」

目を輝かせ三人の前に並ぶクラスの女子にあわてふためくのを見て「はあく」っと深いため息をつく千冬の声が聞こえた

「…このバカどもが。さっきも言った通り各代表候補のグループへはいれ!」

「「は、はい!」」

「ったく、世話の焼ける」

「まあ、そういうなって。昔のお前もあんな感じだっただろ?」

「火、火麻参…先生！昔とは違うからな!？」

等と千冬と火麻参謀との軽い口論に気づかず皆はそれぞれの候補生と共にIS《打鉄》《ラファール・リヴァイブ》へと乗り込む

「背中に預けるみたいな感じで。接続は上手くいったね。じゃゆっくり歩いてみて」

「う、うん…ゆっくり…」

燐、一夏、シャルル、セシリア、鈴の指導の元、最初はぎこちなかったものの少しずつなれ始める中、一つの班だけ異彩を放っている

「あ、あのくボーデヴィツヒさ……」

「…なんだ？早くISを装着しろ…」

斬って捨てるようにいい放つラウラに身をすくませながらも装着するクラスの女子に目をくれず視線を向けた先には女子に指導する一夏を見た瞬間、目に暗いナニかが見える

(認めない…私は絶対に…)

暗い炎を瞳に宿し一瞥すると背を向けぎこちない動きをするISを纏いふらふら動かす女子へと目を向けた

(また見られてるな…なにかやったのか?)

突き刺さる視線に気づきながら俺はクラスの女子を抱き抱え先ほどしやがませるのを忘れた白式を纏い、打鉄へと乗せながら心の中で

ため息をつく…

あの人の弟とは認めない…多分、第二回モンドグロツソ決勝戦に俺が誘拐され…た…時に…あの時…

—…J—011、この星は？私達はいまどこに？—

—…アルマ？まだ起き上がってはいけない！—

ふらふらと歩き倒れそうになるアルマを抱き抱えた私はそのまま玉座へ座らせるとすぐに眠りについた

《J—011、この星の大气組成は赤の星と同じモノと確認…周囲に生命体反応多数確認》

火花が散るブリτζ、正面にホロスクリーンが開きみえたのは黒く長い帽子に白を基調とした服を纏った人間がなにかを喋り膝まずいている

—な、何をやっているのだ…トモロ、言語解析はどうなっている—

《…解析完了、どうやら我々の船を《神》と認識しているようだ》

な、なんだ今の…でもアルマ、トモロ、J。すごく引つ掛か…
「織斑くん、次の人が待ってるよ…どうしたの？」

「い、いやなんでもない…って、またしやがませてないのか…まあいいか。じゃあ次は」

「わ、私だ」

軽く咳払いしながらずっと前に出てきた。なんか堂々としてる
な

「どうした？早く運んでくれ…そ、そうじゃないとあとがつかえるからな」

「お、おう？じゃあしつかり掴まってるよ」

ゆっくりしやがむと箒の身体を抱える…きやつと声が耳にはいるけどそれ以上になんだろう、すごくなつかしい感じがする

ずっと昔に、こうやって誰かを…誰か…

「二夏？どうした具合でも悪いのか？」

「い、いや、大丈夫だ箒。少しじつとしてるよ」

ごまかしながら箒を打鉄へ座らせるとアジスタ完了の表示と起動音が響く、大丈夫だと判断し離れようとしたら箒が呼び止められた

「二夏」

「な、なんだ」

「そ、そのだ！今日の昼は予定はあるのか？」

「い、いやないぞ」

「そ、そうか！ならたまにはお昼を一緒にとるとしよう！いいな？」

「ん、いいぜ」

パーツと花が咲いたように笑顔を見せる箒に思わずドキツとしながら訓練する動きから嬉しさが溢れだしてゐる気がする

やがて一通り訓練を終えた俺たちは千冬姉の言葉に従い訓練に使ったISを格納庫へと移し午後からの予定を伝えられ解散となった

「ふう疲れた〜ISって起動してないとあんなに重いんだな」

「まあ、起動してるときは間接にかかる負担を軽減する目的で反重力作用が効いてるからね」

「でも午後からも大変よ。ああ〜ISの整備って大変なんだから」

「量産型は整備を怠るとダメだよ、いざって時に動かないと守れるものも守れないよ」

「まあ、自分の機体整備ぐらいできなければ代表候補生とはいえませんわ」

等会話しているうちにロッカールームへたどり着き俺はシャルルと燐と共に着替え始めた…でも

「なあシャルル、早く着替えるコツか何かあるのか？」

「え？普通に着替えたただだから!?!こっち向かないで」

「?シャルル。同じ男なんだし恥ずかしがるなって。な?」

「う、うわあああ!」

上半身裸の隣が近づいた瞬間にバツと後ずさるシャルル:

「と、とにかく僕、先にいくから!!」

「…一夏くん。俺なにかやったかな?」

「やってないんじゃないか?んなことより早く着替えようぜ」

「…そうだな」

少し落ち込みながら着替えを終え俺たちはロッカールームをあとにした

「な、なあ箒さん。なぜそんなに怒ってるんでしようか?」

「別に何でもない…」

不機嫌オーラを溢れださせる箒に怯える一夏を他所に他のメン
バーも深くため息をつく姿、だがそこにもう一人別な人物もいた

「あの、私も此所に居てよかったですでしょうか?」

「こんなに天気もいいんだし青空の下で皆と食べるのもいいかなっ
て、それにシャルルと凍也もまだ慣れてないんだしさ」

宇宙開発公団からIS学園《特殊整備課》スーパーバイザーとして招かれた竜崎凍也も相席していた。

「そ、そうか、なら仕方ないか…」

なんとか箸の機嫌も治り少し遅めのお弁当タイムが始まり一夏の前に包みにくるまれた弁当が差し出された

「え、これって?」

「私の弁当を作ってたら余分に余ってしまった…ま、まあ食べてくれ！」

真剣勝負さながらの気迫に押し負け包みを開くと二段に重なった弁当を開くと真っ白なご飯、そして鮭の塩焼きに鶏肉のからあげ、ゴボウの唐辛子炒め、ほうれん草のゴマ和えが目にはいる

手をあわせいただきますといひ箸をとり唐揚げをとり口へ入れる

「……うん、醤油に生姜を合わせたのを一晩浸けたんだな…スゴく美味い」

「そ、そうか!」

パアツと明るい笑顔を見せる箸、それに対し鈴、セシリアはというと

「凍也っていったわね、あたしもたまたま作ってきたから食べてみる?」

「?酢豚ですか……では」

ドントツとおかれた酢豚に恐る恐る箸を伸ばし口へ入れるのを見る鈴。突然凍也の目がカツト見開かれた

「美味しい…甘酢の絶妙な組み合わせ…最高ですっ!!」

喋りながらも素早く箸が舞いあつという間に酢豚がなくなると我に変えり恥ずかしそうにほほをかく

「あ、すみません、全部食べてしまいました」

「べ、別にいいわよ…って、それなに？」

「私が作った弁当ですが、凰さん食べてみませんか？」

出されたのはなんのへんてつもない《肉じゃが》…何気なく箸にとり口に入れた瞬間、背後に雷が落ち動きが止まる

「り、鈴さん？な、何を食べさせたんですか!？」

「肉じゃがですが？」

その答えにセシリアは驚きながら肉じゃがをみる…なんのへんてつもない只の肉じゃがを前に意を決しフォークで肉じゃがを食べる…雷が落ちた…がすぐに意識を取り戻した

「お、美味しいですわ!!なんなのです。この《肉じゃが》は!!」

叫ぶと同時に意識を取り戻した鈴は詰め寄ってくる

「この味付けは失われたはずの《中華の霸王》秋山ジャンの味じゃないー!どこでこの味を!!」

「…あ、あの落ち着いてください!私が知ってるのは上湯スープの

取り方と…」

「なんかスゴく賑やかだな…さて食うかな」

「り、燐、いつも思うんだけどそんなに食べれるの？」

「ああ、これだけ食べないと…」【喰われちゃうから】……………」

「え？」

「な、何でもない、じゃあ食うか。シャルルのぶんもあるからたくさん食べろよ」

燐も少し大きめポットとバスケットを取り出し中のモノをテーブルに広げる、キレイに三角に切られた白いパン生地に多種多様な野菜と具が挟まれたサンドイッチ、紙コップに手製のクルトンを入れポットからスープを注ぐ

ただサンドイッチの量は燐側におかれてるのが半端なく多く、軽い山を作っているのを気にせず軽く手を合わせ手に取る

「お、美味しい…燐これどこで作ったの？」

「学園に寮から通う生徒が弁当を作るために実習室を貸してるんだ、今日のは厚切りベーコンとポテトサラダ、スクランブルエッグにレタスのサンドイッチ、あとコンソメスープだ。さあ熱いうちに」

勧められコンソメスープが入ったカップに唇をつけ少し飲む、鳥の旨味が広がり思わず声が出るのをみた燐も少し笑みを浮かべながらサンドイッチを手に取り口へ入れていく

「じゃあ、中華の覇王の弟子じゃないんだ…でも居場所はわからないの？」

「は、はい」

「あ、あの竜崎凍也さん。以前わたくしと会ったことがありますか？」

「…いい、いえオルコットさんと会うのは今日がはじめてです……ん？それはサンドイッチですね一ついただけ……」

セシリアの前にあつたバスケットからサンドイッチをつかみ食べた凍也。長い間の沈黙の後にバタリと倒れた

「り、竜崎さん！しつかりしてください!!」

「あ、あんななに食べさせたのよ！あたしは凍也に聞きたいことがあつたのに!!」

「なんか賑やかだな箒。ん、このゴボウうまいな」

「そ、そうか！じ、じゃあこれはどうだ」

凍也を必死に介抱する鈴、セシリアの姿に箒のお弁当をモグモグ食べながら言う一夏、燐とシャルルもそうだなあと心のなかで呟きながらサンドイッチを食べ、穏やかな時間が過ぎていった

第十二話 クラスメイトの正体（前編）

後編に続く

第十二話 クラスメイトの正体（後編）

「ふう、やっと帰ってこれた…」

「まさか食堂にあんなにクラスの子達がいるなんて…あれ燐ナニやつてるの?」

「いや、喉乾いたんじゃないかなって…シャルルも飲むか?」

「じ、じゃいただこうかな」

沸かしたお湯を少し冷まし茶葉を適量急須へ入れお湯を注ぐ…時間をおき用意した湯飲みへ注いでシャルルへ手渡す

「日本茶…グリーンティーって飲むのはじめてだよ…すごくいい香りだね…アツツ」

「慌てて飲むなって…少しかして」

舌を軽くやけどしたシャルルから湯飲みをとりフウフウと少しいきをかけ冷まし手渡したんだけど何か顔が赤いし、じっと湯飲みを見てる

「どうした?まだ熱かったか?」

「う、ううん!ぜ、全然熱くないからね!」

言い終わると一気に飲み干すシャルル…こうしていると普通の人間と変わらないなと思いつながらお茶を飲んだ

第十二話 クラスメイトの正体（後編）

雲型ゾンダーを倒してから数日後、俺とシャルルは同室になった。理由はシャルルのゾンダーISから人とISコアを分離する力《浄

解》能力を疎ましく思ったバイオネットのエージェントが狙う可能性があった。本来なら霧也が適任だけど今はIS学園最強の生徒会長《更識楯無》と妹《更識簪》の護衛、バイオネットの動向を探るために動けない

護衛兼ルームメイトになるよう千冬さんに頼み込んで急遽同室になったお陰で色々としゃルルの事を知ることができた

…あまり人に肌を見せたがらないのとかかなりの恥ずかしがり屋だと言うこと…まあオレもあんまし身体を見られたくないって気持ちにはわかるけど…たまに風呂上がりのしゃルルと会うたびにドキつてすることがある

まあこんな感じであつたという間に日は過ぎて土曜日、一般生徒に全解放されたアリーナで一夏くん、箒さん、セシリアさん、嵐さん、しゃルル、解析担当の凍矢と共に簡単な模擬戦をしていた…一夏くんの動きは以前に比べてするどくなつてる

「…はあつ、はあつ…疲れた」

「ま、負けたあくつていうか龍咆をかわすなんて反則よ…自信なくしちゃうわよ」

「お疲れ様、鈴さん、一夏くん…何か前より動きがよくなつてたな」

「まあ燐や箒の特訓のお陰かな…でもさ遠距離からの攻撃されるとダメだな…」

「白式って後付装備（イコライザ）ってないの？」

「ああ、全部《零落白夜》に回されてるんだって凍矢が説明してくれただよ」

「はい、パススロット全てが埋まってます…」

カタカタと素早くキーを叩きモニターを見るのは特殊整備課スー

パーバイザーとして招かれた凍矢、いつもと同じオレンジの繋ぎ姿で先程のモーションデータをまとめている

「ですが他のIS操縦者から使用許諾を承認されれば使うことは可能です」

「ほんとか凍矢!」

「…ただしハイパーセンサーの補助を抜いて目視射撃になります
が」

凍矢の言葉にガツクリする一夏くん。ここ最近の特訓は接近戦主体に進めつつ気の鍛練ばかりをしていたし…でも千冬さんの戦い方を目指していたのになぜ銃器を使いたいんだろうか？

「…なあ、セシリア。遠距離からの攻撃対策の特訓したいから付き合ってくれないか？」

「かまいませんわ…では参り…」

「オルコットさん、このモーションデータをインストールしていただけますか」

「これは？」

「ブルーティアーズの精密射撃補正、およびオルコットさんの現段階での反応速度に合わせたサポートプログラムです…あ、もちろんイギリス政府から許可はいただいています」

「いいんですの？竜崎さんは日本政府に籍を」

「いえ宇宙開発公団に所属している技術者としての協力をしているだけですよ」

まっすぐセシリアさんの目を見ながらブルーティアーズにデータをインストールしながら話す凍矢…何か久しぶりにキラキラ輝いてる、セシリアさんも何か顔赤いし

「……インストール完了。ではご武運を」

「は、はい……ではいつて参りますわ!」

意気揚々と一夏くんが待つアリーナへ飛ぶセシリアさん……まさか凍矢のこと好きなのかな?

「そういえば燐のガオファアも射撃装備はないね?」

「ああ、オレのガオファアは宇宙開発用として作られてるから武装は無いんだ……でもデブリ破碎用ファントムクローしかないし」

部分展開しファントムクローを見せる……と同時にシャルルからプライベートチャンネルが繋がる

(ガオファイガーには武器がついてるけど)

(……ガオファイガーは《あるIS》を基にして作ってあるから武器がついてるんだ)

あるISを基にしてガオファイガーは産み出された……アレは怒り、悲しみ、憎しみ、自分に夢を与え共に歩もうと手を差しのべた人たちを無慈悲に奪ったバイオネットに対する束さんの復讐心が込められた破壊神……《G—IS—00G》

あれを使う事がないようにしたい……絶対に

(燐?どうしたの)

(い、いや何でもない……とりあえずさ一夏くとセシリアさんの模擬戦見ようか)

(……そうだね……)

あれ?何か機嫌が悪くなった気が……一緒の部屋になってから珠にこうなる、特に束さんとガオファアの出力調整に関してや休みに買い物にいかない?……話してる時にだけど

「ねえ、アレってドイツの第三世代型だ」

「まだトリアル段階だって聞いたけど」

セシリアさんと一夏くんととの模擬戦が終わりに近づいたとき辺りが騒がしくなる、つられて見ると黒いIS：確かシュヴァルツェア・レーゲンだったかな

「……………」

ただ無言で一夏くんとセシリアさんが戦うのをじっと見る目：その奥には黒い炎、いや身体全体からも見えた次の瞬間。ゆっくりと右肩リボルバーカノンを展開し砲口は一夏くんとセシリアさんがいる方向に向けられている……………不味い！

咄嗟にガオファアを展開し二人が模擬戦を行う場、ウルテクスラストー全開で向かい射線状にはいりリングジェネレーター部シャッターを開きリングを形成し構えた次の瞬間

「ぐううう!？」

プロテクトリングが軋み間接が悲鳴をあげる：ドイツの第三世代型の装備は実験的なのが多いって聞いてたけど

「ぬ、ぬうあああ!!」

弾速エネルギーをプロテクトリングで相殺し弾き返す：でも体勢が崩れバランスを崩したオレを一夏くんとセシリアさんが支えてくれた。ボーデヴィツヒさんは黒い炎が宿った瞳でただ見下ろしている

「いきなりなにするんだ！危ないじゃないか!!」

「…生ぬるいやり方では訓練ではならないから手助けしてやったのだが余計な邪魔が入ったようだ…」

「だからといって警告も無しに撃つのはいけませんわよ！」

「……………」

「おい、俺に何か恨みでもあるのかよ！なんとかいえよ!!」

荒く声をあげる一夏くんにボーデヴィツヒさんは目を向け口を開

いた

「……貴様さえいなければ教官が大会二連覇の偉業をなしえたはずだ……貴様の存在を私は認めない……絶対にな」

興が冷めたといわんばかりにリボルバーカノンを納め立ち去って行くのをただ見送るだけしかできなかった

「なんなのですか？あの方は…警告も無しに」

「まったくくだわ！あたしたちと同じ代表候補生だなんて思うと気が滅入っちゃうわよ」

寮へ向け歩きながら口にするのは先程のボーデヴィツヒさんの行動、確かにアレはやりすぎだと思う

それにあの時に見えた《黒い嫌なもの》…師匠と《レグルス》さんが言っていたのに近い感じの氣を一夏くんも感じとったみたいだ

ボーデヴィツヒさんの一夏くんに対するあの態度は二年前の第二回モンドグロツソ時に起きたバイオネットによる一夏くんの誘拐事件が端を発してる

(……このままだと学年別トーナメントで一夏くんがボーデヴィツヒさんとあたらたら何かが起こる気がす……)

そこまで考えたときガオファーが震え、皆に気づかれないよう網膜へ暗号通信を流す、狼の紋章が浮かびやがて文字の羅列へ変わる

—バイオネットに新たな動きあり。新式粒子加速実験施設《イゾルデ》および《学年別トーナメント》開催時に注意されたし—

「ごめん一夏くん。オレ少し用事ができたから先に戻っててくれな
いかな？」

「ん？ああ別に構わないぜ…でも夕食までには戻ってくるんだろ？」

「まあね、じゃシャルルも先に部屋戻つといてくれ…あ、シャワー先に使つてていいからな」

「う、うん…」

そう言い残しオレは皆と別れた

「最近、燐って用事が多いな…って箒、どうした？」

「別に…」

別について言うわりにムスってしてるんだけど…多分さっきのドイツ代表候補生ボーデヴィツヒとの件かも。と考えながら箒を見ると首元になにか赤い光…楕円状の宝石が輝いてる。

「な、何を見てる一夏？」

「い、いや…その赤い宝石どうしたんだ？箒ってそういうの嫌いじゃなかったっけ？」

「……………この前実家に戻ったときに雪子叔母さんにもらったのだ…《白翼の舞》の担い手である巫女は代々受け継ぐものだ」と

少しうつむきながら話してくれた箒…確か《白翼の舞》ってなにも言わずに赤い宝石を残し消えた《白き翼の剣士》への想いを《赤き巫女》が舞いに込めたモノだって聞いている

白き翼の剣士…赤い宝石…白き…翼…J…Jジュエル…

—行くのですか義父上—

—ああ、私には果たさなければならぬ役目がある…シノノ、アルマを、娘を頼む—

神聖な空気が流れる社を前に立ち一礼する長身の男性、それを見送る宮司姿の青年に近づきナニかを握らせ、青年は手を開くと赤く輝く宝石が見える

—もし帰ってこずとも、この…を渡してくれ…去らばだ、我が義息子よ—

(い、今のは一体なんだ?)

「い、一夏?どうした顔色が悪いぞ?」

「な、なんでもない…多分疲れたのかな…」

「少しやすんだ方がいい…最近の朝練で頑張ってたから疲れたんだ…ほら肩を貸してやる」

「サンキュー箒」

「ああ〜熱いわね」

「ほんとうですわね」

つてセシリアと鈴の声を耳にしながら箒に肩を借り寮へと歩いていく

でもさっきのアレはなんなんだろう

アリーナの裏にある木々が立ち並ぶ茂み、オレはその中で大きな樹にもたれ掛かる、しばらくして気配が現れた

「……………久しぶりですね燐」

「ああ、こうやって直に話すのはな霧也。んで秘匿通信じゃ話せない用ってなんなんだ？」

「……………二、三日前に次世代環境機関NEOより試作段階で封印された《ガイゴー》が何者かに盗み出されました」

「な、ガイゴーが！まさかバイオネットか!？」

「おそらく間違いないでしょう。ただ目的については皆目見当がつきません」

「だとしてもGSライドは取り外してあるガイゴーを何に使う気だ？」

「……………わかりません。燐、奪われたガイゴーに関してはロシアおよび日本政府諜報機関との連携で調べを進めてみます……………わかり次第連絡をします。では」

風がなると同時に気配が消えたのを感じ幹から離れる……………バイオネット、ガイゴーを何に使う気だ？

(とりあえずは霧也からの連絡待ちか……ん、着いたか)

考えながら歩くうちに自室の前に来ていたことに気付きロツクを開き部屋にはいるとシャワーの音が耳にはいる。ハンガーへ制服の上着をかけた時あることを思い出した

(そーいよボディソープ切れてたんだ…無いとシャルル困るよな)

バスルームの入り口の洗面所の下にあるボディソープを取ったオレの耳にガチャつと音が響いた、多分ボディソープが無いことに気づいたシャルルか

「ちようどよかった、ボディソープ切れ…て……………」

「り、燐?…なんで……………」

「う、ウエイ?」

な、なんで裸の女の子がいるの…驚くオレ以上に女の子も驚きの表情を浮かべ見てる。いや待て、この顔と声、金髪にアメジストの瞳、胸にある豊かな膨らみ。まさか…………シャルルは女の子なのか!?

「あれ?シャルルは男の子で女の子?いやだつてシャルルつて名前は男の子で胸なんかついてないし!でも胸はついてるし!?アメジストの瞳ですごくきれいな金髪できれいな肌で、すごく、すごくかわいくて…………か、かわいい……………あれ?!?」

グラリと視界が歪み固い何かを感じる…床に倒れてるんだオレ…………アツイ、アツイ…………アツイ…………アツイ

「り、燐?…すっかりして熱っ!!そーだ!あのコートを…しっ…かりし…て…燐…燐!」

途切れ途切れの言葉を最後にオレは意識を失った

第十二話 クラスメイトの正体(後編)
了

閑話 双龍と甲龍!!

深夜のIS学園、その女子寮から少しはなれた場所で一人の少女が
星空を見上げているが、フウツと大きくため息をついた

「あたしなにやってんだろ…」

風に髪をなびかせながら呟くのは中国代表候補生《凰鈴音》：幼馴染みである一夏に会えたのは嬉しいが気になるのは中国で出会った少年のこと

(…色や形が違うけど特殊整備課の竜崎凍也と同じISと似てる…まさか)

日本に来る半年前、凰鈴音は荒れ狂う無数の竜巻を前にし逃げ遅れた街の人々を救助する緑と黄色のISと出会った日の事を思い出した

閑話 双龍と甲龍!!

半年前、あたし《凰鈴音》は第三世代専用機《甲龍》の最終調整をする為に中国科学院航空星際部に来てただけど、肝心の第三世代型空間圧搾兵装《龍咆》が完成してなくてしばらくの間暇をもて余した

「ああ〜暇ねえ……………」

施設から少し離れた場所にある芝生に倒れながら空を見上げる、
真っ青な空に穏やかな陽光…なんか眠くなってくる

(……………一夏もみてるのかな…)

うとうとしながら眠気に誘われかけた時、頬に冷たいなにかが落ち

る。拭うと同時に空が曇りだし風が音をあげ吹き荒れやがて大粒音雨が振り出し地面を叩いてく

「な、なんなのよいきなり!？」

あわてて航空星際所の中にはいるとしばらくして施設内に警報が鳴り響いた。これはただ事じゃない

—航空星際所所属 I S 部隊員は直ちに第一ブリーフィングルームへ集合されたし! 繰り返し返す…—

アラートとアナウンスが響くなか、ブリーフィングルームへ足を運ぶと正面スクリーンには信じられない光景が広がっていた

「諸君も知つての通り、我が航空星際所周辺都市に無数の竜巻が同時発生している。なぜこのような事態になったかは原因は不明だ：現在、軍に救援を求める要請が周辺都市から来ている」

丸ぶち眼鏡から鋭い眼光を覗かせスクリーンを見るのはここを預かるヤン・ロンリー司令はあたしと所属隊員へ目を向けながら

「これより所属 I S 部隊員及び機甲隊は逃げ遅れた民間人の救助作業へ向かってくれ：凰鈴音国家代表候補生、君にも協力をしてもらいたい」

深く頭を下げた司令からは切迫した空気をかんじたあたしは敬礼して他の科学院航空星際所所属 I S 隊員と共にハンガーへ向かうと甲龍を身に纏い他のメンバーと共に空へと飛び立つ

『聞こえるか凰鈴音国家代表候補生』

「は、はい?！」

『現在、避難が完了してるのは東地区、南地区、北地区だ。君たちは機甲隊と連携をとりつつ西地区の救援へ向かってくれ』

「了解、直ちに西地区の救援へ向かいます」

通信を閉じあたしは随伴する隊員と共に西地区へ向かった…でも西地区についたあたし達はあまりの光景に言葉を失った

…
六つの巨大な竜巻が西地区の建造物を破壊しながら蹂躪している

普通だったら、こんなあり得ないじゃない!?

「風代表候補生、アレを!」

隊員の声に我に帰ったあたしが見たのはビルの屋上…逃げ遅れた人たち。そして巨大な竜巻

「っ!」

声を出すより体が動く…でもここからじゃ間に合わない…そんな考えを振り払うようにスラスタを全開にするけど竜巻から生まれた突風が遮る

ダメ…間に合わない!!

「はあああ! ティガオ4!!」

叫び声が風が鳴るなか響いた瞬間、新たな竜巻が緑色のISAーマーがミキサータンクから生まれぶつかり競り合ってる、なんなのいったい!?

『おい、嬢ちゃん! なにぼさってしてんだよ? 風龍が防いでる間に要

救助者を速くつれてけっ…つとティガオ3！オラオラオラ！！』

黄色い稲妻があたしの前に降り注いだ瞬間、竜巻に飛ばされた自動車は弾けとんだ。稲妻が飛んできた方向には黄色いロボットが太極拳見たいな構えで立ち見てる

「雷龍、初対面の人に失礼だ…すいません、弟が大変失礼なことを」

竜巻を防ぎながら謝るコイツを見て沸き起こった怒りが収まってく。まあ確かにこの黄色のいう通りね

「わかったわよ。でも後であんたたちの事を聞かせてもらおうわよ！！」

「いいですよ、ですが今は要救助者をお願いします！」

言い切るや否や竜巻を押し返していく…なんか頼もしく見えるわね

「よし、ティガオ4！！」

胸にあるダイヤルを回すとさらに威力を増した竜巻をぶつけやがてひとつが消えた

『やったな風龍！要救助者の移動完了まであと少しだけ！！』

「わかった、残りあと五つか…」

うなづく緑色…確か風龍？…つての声から判断すると歳はあたしと同じぐらいかしら

「しっかりつかまりなさい」

そんなことを考えながら要救助者を運んだ時、風が強くなる…ハイパーセンサーが接近する五つの竜巻を知らせた

「くっ！速く避難を！！」

『不味いぜ、竜巻が一気に来やがった…おい、嬢ちゃんまだ終わんな

いのか!？」

「あと二人運んだら終わるわよ!それよりなんなのこの竜巻は?普通じゃあり得ないわよ!!」

「(確かに普通じゃない……周囲半径50キロ圏内の天候異常は認められない……まさかバイオネットか!)…雷龍、この竜巻の上空へ向かってくれ」

『わかった!・ティガオー、デンジャンホー!!』

あたしの前で荷台に乗り瞬く間に空へ消える黄色……雷龍
でもすぐに戻ってきた

『風龍、お前の読み通りだぜ!』

「やはりか……」

「ち、ちよつとなに話してるのよ!あたしにもよくわかりように説明しなさいよ」

「…この竜巻は人工的に産み出されています。雷龍、彼女にライブ映像を」

『あいよ!見て驚くなよ』

いきなりデータ転送されたのを見たあたしは思わず目を疑った、だって空の上に巨大な十字架を模した全長50メートルの巨体が浮かんでその下にあるユニットから竜巻を発生させている

「つまり、この機械が竜巻を生み出してるわけね。だったら壊……」

「待ってください、今の地点で破壊すると破片がこのまま街へ落下。二次、三次被害が拡大します………雷龍、アレをやるしかないようだな」

『お、おい!アレってまさか!?!』

「…そのまさかだ……貴女は今すぐここからIS部隊員、避難した

方々を連れ撤退してください」

「なにいつてるの？まさかアンタたちだけでアレをどうこうしようという訳？絶対に無理！無理に決まってるわよ」

「『……憲章第5条、125項。我々ID5、ID5隊員は何時如何なる状況に陥ろうとも《絶対》に諦めてはならない』」

「例え力が及ばなくとも」

『俺たちは絶対に諦めない!!』

強い眼差しと気迫が込められた声……なぜかわからないけど胸が熱い、それに信じてみたいって気持ちが溢れてくる

「わかったわよ、あたしはアンタたちを信じる……でも約束しなさい、必ず帰ってきなさい!!」

『了解!』

力強い声を聞いたあたしはそのまま背を向けると救助した人たちを連れてその場から離れた……すっかりやりなさいよ風龍、雷龍

「よし、要救助者の避難確認。雷龍、ぶつつけ本番だがいけるか？」

『ああ、やってやら!』

「ならいくぞ雷龍」

『おうよ!』

『シンメトリカル・ドッキング!!』

無数の竜巻が迫るなか迷わず空へ飛翔する風龍、雷龍の身体からISアーマーがパージされ黒く長い髪が特徴の少年の左に黄色、右に緑のアーマーが左右対称に並びゆっくり近づいてくる

『うおおおおお』

だが後僅かというところでアーマーから放電現象、あまりの突然のことに風龍、雷龍は余波に巻き込まれながら地面へと落ちた

「く、やはりシンメトリカル・ドッキングは私たちには無理なのか」

『く、凍矢と炎竜はシンメトリカル・ドッキングが出来るのに何故俺達はできないんだ!』

同じ双子で先に起動したIS氷竜、炎竜。そしてシンメトリカル・ドッキングする事で生まれるG-IIS-03S 《超竜神》。自分たちも同型、装備が違うだけだから出来る筈なのに何故できないとふらふら立ち上がりながら二人は考えたがなにも浮かばない

「ん? 反応!?!」

その時、ハイパーセンサーがなにか影を捉え風龍は感知した方へ目を向ける

「な、何故彼女がまだここにいるんだ!?!」

『風龍! アイツの手を見る』

先程別れた筈の鈴が手に抱えてるのは一人の子供、その背後からは竜巻が迫り徐々に距離を積めていく

「いけない！雷龍!!」

『わかった!』

痛む身体を押しながら再び飛翔する風龍、雷龍…このままだと二人がいる場所へは間に合わない

それでもスラスタ―を全開で向かう二人の脳裏にはある光景が浮かぶ

—竜崎教授、あなたにはもう我輩にとつての利用価値はすでにありません…

ですがチャンスをあげましょう…二人があなただの手を五時間つかみ続ければ助けてあげましょう—

—おかあさん！僕と疾風の手を離さないで!!—

—……凍矢、疾風……あなたたち……—

崩れ落ちる研究所の床にへばりつき必死に階下にぶら下がる母親の手をつかむ双子…だがゆっくりと手が滑り抜けていく…七歳の双子の力では大人一人を支えきれない

—凍矢、疾風……あなたたちは……—

—え？おかあさん？—

次の瞬間、なにかを呟き二人の手から自分の手を離した彼女。特殊エネルギー工学の権威にして世界十大頭脳の一人《竜崎乙女》は笑みを浮かべながら闇へ吸い込まれるように落ち微かに鈍い音が響き二人の耳に入った

—あ、あう……おかあさああああん!—

（「もう、もう目の前で…」）

『…命を手放したりは…』

眩いた頃、宇宙開発公団にある無人の三段飛行甲板空母内にあるシンパレート値（超AIとIS操縦者の心の同調律をいう）測定システムが起動、モニターに風龍、雷龍のアイコンの横にある数値が80、90、95と上がっていき100%を突破。シンメトリカルドッキング・プログラムが遂に起動する！

『絶対に喪つてたまるかあああああ！』

叫んだ次の瞬間、緑と黄色の光が辺りに溢れだした

『シンメトリカル！ドッキンググッ!!』

急上昇する二人：再び各部アーマーが分離、黄色と緑の左右対称（シンメトリー）なパーツが構成され疾風の身体へ吸い寄せられるようドッキング。右腕にミキサータンク、左腕に電磁架台デンジャンホーが接続、金色の頭部アーマーが装着と同時に胸部装甲《レイドゥーン》が付くと降り立つと大きく叫んだ

『撃ッ龍ウウ神ツツ!!』

そのまま鈴の背後に回り右腕…ミキサータンクを向けると凄まじいまでの超竜巻を発生させ防ぐと同時に相殺し打ち消す

『大丈夫か嬢ちゃん!』

「え、ま、まさか風龍、いや雷龍なの!？」

うなずくと撃龍神は空へ視線を向け背部ウルテクスラスターに光が点る

『嬢ちゃんはその子を連れて早く避難するんだ！今からド派手な技であのデカ物を跡形もなくぶっ潰す!!』

「えっ・ちよ…ああ〜もういつちやったし…でも」

口にてかかった言葉《大丈夫よね》を飲み込む…だってあたしの腕の中にいる子が不安そうな面持ちでみてる

「お姉ちゃん、あの人大丈夫かな」

「大丈夫よ、アイツを信じなさい…」

「うん」

小さな声でうなずいたのを見ながらあたしは光の点になったアイツを見送ると皆がいる場所へ向かった
…あたしもアンタを信じてるから

『うおおおおお！あれかああ!!』

分厚い雲を抜け現れた撃龍神の目にはバイオネットが開発した巨大な十字架を模した気象兵器《テンペスト》、接近するのに気がついたのか無数のミサイルが放たれ迫るのを超圧縮空気弾《フォンダオダン》で撃ち落としかわしきれないのを電磁架台デンジャンホーで防ぐも爆炎に包まれる。が立ち込める煙を突き抜け撃龍神が太陽を背に構える

『気象兵器：俺達の母さんのテラフォーミング技術を応用してるのか、バイオネットめ!…：…唸れ疾風！轟け雷光!!』

大きく構えた右腕に凄まじいまでの風のエネルギーが渦巻き、右腕電磁架台デンジャンホーに稲妻が迸り極限までに出力が高まる

『—双頭龍—シャン・トウ・ロン!!』

大きく構えた腕から風と雷のエネルギー…いや風のと雷の龍が現れ再び放たれたミサイルを飲み込み氣象兵器の体躯を貫き穿ちながら氣象兵器の構成素材を《雷の龍》が電磁エネルギーで物質を脆くし《風の龍》が細かく砕く

『うおおおおお！最大出力……………マキシマアムムツ！トウロオオオントツ!!』

撃龍神の声に答えるようにGSライドが最大稼働、威力をましたシャントウロン、いやマキシマム・トウロンが縦横無尽に氣象兵器表面と内部をバラバラに分解、やがて光に包まれ爆発するも原子レベルまで粉碎された氣象兵器は風と共に消え去り同時に竜巻は消え空をおおっていた雲が晴れ暖かな陽光が街へふりそそいだ

『……………氣象兵器の完全破砕完了……………』

ウルテクスラスターで滞空しながら眼下に広がる崩れたビル郡を見てギリツと拳を握りしめる

(…バイオネットが動き出せば、こんなことになるのはわかってた…わかってた筈…日本へ戻らなければ…)

ミキサータンクから風をデンジャンホーから電磁エネルギーを放出、水と土砂に熱エネルギーを与え乾かすと風で洗い流すように瓦礫を浮かし撤去していきやがて作業を終えた撃龍神はウルテクスラスターでその場から飛び去っていく

「アンタ待ちなさい！待ちなさい…：……………いきなり現れていきなり消えるなんて…まるで《廬山の龍神様》じゃない……………」

呼び止めるも遙か彼方へ去ったアイツを見てるしか出来なかったあたしはこの事を帰還してすぐにヤン司令に報告したんだけど

「鳳鈴音代表候補生、今の件は他言無用で頼む……」

って言ったきり黙り混んでしまったヤン司令、それから三日後に《龍咆》の実装と運用試験を終え本隊へ戻ったら一夏が世界ではじめてISを動かした男子になったってニュースになるし……まあ色々あつて日本へ戻つて一夏と再会してしばらくしてクラス対抗戦の時に現れた変なISと戦つてた一夏とあたしを助けた黒いIS、赤と青のIS………声がアイツと似ててさらにISも造りも似てた

「竜崎凍矢の弟、竜崎疾風……竜崎つて名前どこかで聞いたような気がするけど……」

そう口にしたあたしは手摺から離れ自室へ歩き出す……明日聞いてみようと考えながら

閑話 双龍と甲龍

了

第十二・五話 嘲笑する《狂科学の信奉者》、旅立つ若き《黄金の牡羊》

闇一色に染まった空間に紫光が断続的に明滅する中、何かがうごめいている

断続的な光の中、奇抜な衣装を来たピエロ、小太りな男、ヒョロリとした赤い手術着の男、白衣姿にギターを肩に架けた四人の姿が見えた。

彼らの視線の先には数日前《次世代環境機関NEO》より盗み出されたGNR-01《ガイゴ》の姿

「アゝヒヤハハハハ、よく盗み出すことができましたねえフリーイル君」

「なに、新型Z-I Sの実践投入も兼ねたテストだったからなあ……素体との適合率も80%を維持してるよ……ふひひひ」

いびつな笑みを浮かべながら背後に目を向けた先には、顔をうつむかせ虚ろな瞳を向けながらたたずむ女性の姿。額には《Z》とも読める幾何学紋様が浮かぶのをみてマスク越しでもわかる笑みを浮かべた

第十二・五話 嘲笑する《狂科学の信奉者》。旅立つ若き《黄金の牡羊》

「うむううう……すばらしいいなあゝ♪さすがは亡国機業のエンジニア《O》だけありますねえ。て言うか既に亡国機業は無いですからねえ。オオウ！我輩のビートがあつく、熱くうう！震えだすうう……イエエイ!!」

「そうだねえ、ドクターウエストくうん……だが少し静かにしてくれるかな……」

興奮したせいか肩に架けたギターを狂ったようにかき鳴らしはじめるのを手で制する小太りな男性……フリール・ルコックは軽くなにもない空間を撫でるとガイゴの姿が消え変わりにある映像が写る

—クーラ・ティオー・テネリタース・セクティオー・サルース・コクトウラー—

緑色の長い髪を揺らしながら優しく手をかざし、その指先から暖かな光が溢れ包み込むとISSコア？がグニャグニャと崩れはじめた顕した姿……ボロボロのISSスーツを着た黒い髪でまるで憑き物が落ちたかのような表情を浮かべ大粒の涙を流す一人の少女だった

—ぐす、ありがとう……ありがとう……ひくツ—

「まさああああ《Z—ISSコア》に取り込んだ《M》を分離するとはねえ……なんなのだアレは？……」

「わからないなあ、是非とも捕まえて解剖して神経、いや、遺伝子レベルで解体したい。だがあの黒いISSは《絶対防御》と《バリア》の複合防御システム《Zバリア》をもものともせず貫きえぐり出すとは……」

「しかもお、あの黒いISSは我らが産み出したZ—ISSに取り込まれないとはねエエエ……」

—うおおお！—

—はあああ!!—

Z—ISSと対峙し怯まず殴り、膝げり、逆間接を決めそのまま引きちぎり投げ捨て回転し蹴り……終始圧倒する黒いISSに目を向ける中、今まで黙っていた人物が静かに口を開いた

「……あの黒いISSにはZ-ISSのコアと相反する物質がコアとして使われているようだ……」

再び空を撫でると黒いISSとZ-ISSのエネルギー値がパラメータとして示され黒いISSの攻撃を受ける度にエネルギーが減退していく様が見える

「……その《物質》のせいで我らの製品が負けたというわけですかあ。ゾンダー博士」

奇抜な衣装を身に纏った彼《ギムレット》の言葉にうなずき、ボロボロになった緑色の輝きを秘めた結晶を写し出し驚く三人？に説明を始めた

「これは八年前に41の第二世代型ISSコア、《アレ》と一緒に回収したものだ……この結晶を解析した結果、我らの《Zコア》とは相反するエネルギーを有していると判明した……」

冷淡に言葉を続ける青年……ゾンダー博士はその手を止め目を向けたのはある一画、無数のシリンドラーが立ち並ぶその一つに培養液に浮かぶ脳髓……ときおりボコリと泡がたつ

「フリール、脳髓復元にはあとどれぐらいかかる？」

「あと数日だああ……細切れになった脳組織を拾いあわせたからなあ……酵素による化学変化による細胞復元たんぱく質及びニューロンシナプシス再構築も行われてるが。DNAいや器となる肉体の復元は無理だったがなあ……それにしても美しい色だああ／リイインのと神経組織が酸素と化学反応したときと同じ色だあ。たまらなくいきそ……ハアツハアツハアツハアツハアツ……ウツ!?ふひひ?いつてしまったよ／／／……ぐちよぎちよだあああ」

にんまりと笑い股間の辺りをみるフリール……その瞳には恍惚と歓喜の色が見えた

「私ももう一度あの声を聞きたいですねえ♪まあ近いうちにまた

聞けるでしょう……いや今まで以上の最高の音楽がねえ♪♪♪」

「オオウー！いいですねえ！でも我輩はあの双子とダンの美しく素晴らしい声を聴くだけで御飯が何倍でも進みま〜す」

——これより我輩の手で被験体02R、被験体02Lの左脳を交換、リンカージェルへ骨髄移植をはじめめるであ〜る……頭蓋を切除開始
いい——

——いやだ！やめてよ！！——

——やめろよ！この変態！！——

——ああ、いい声だああ♪さあ我輩にもっと、もっと聞かせてくれ……必死にもがきあがく無駄な二重奏をを——

甲高い声をあげ頭蓋を切り開くドクターウエストの手は休むことを知らず光が走り血が舞い手術台からあふれ出し床を濡らし叫び声が響き反響する

——ああ、いい声であ〜る♪……それにリンカージェルと血液の混合率もも綺麗で是つ妙な色具合っ！……酸素と細胞の化学反応した際の色彩の変化もベリイグツド♪

——痛い！痛いよううっ！！やめて、やめてよう！！——

——こ、この変態科学ギタヤロー……おれたちがなにしたん……だよ……う……だれかたすけ……てよ……う……う……——

——おや雑音が聞こえるうなっ！つと両左脳摘出完了♪……ドミノ方式で神経接合完了♪——

麻酔なしの手術に耐えきれず意識を失った二人から摘出された左脳を舐めるようにみながら移し変え瞬く間に神経接合、硬膜、頭蓋、皮膚の順に縫合し意識を失った二人を見下ろす

——次に目が覚めたとき君達は《双子》ではなくなってるであゝる……バイオネット初の人造《デュアルカインド》としてね♪♪——

「……なんだかお腹が空いてきたでありますねえ〜」

「無駄話はそこまでにしろ。ドクターウエスト、フリール博士、ギムレット。我々の目的を忘れたわけではあるまいな?」

「オオウ。そうでしたああ」

「ついあの声を思い出したせいで話がそれてしまったなあああ」

「フヒヤハハハ、いけませんねえ……我々の目的は忘れてはいませんよ……」

「ならいいがな……でだ、あの施設での実験はどこまでいった?」

頭を押さえながらため息混じりに訪ねる

「順調ですよ、さすがはゾンダー博士です。あなたの理論が産み出したアレは我々《バイオネット》に莫大な富をもたらすでしょう」

「当然だ、私の理論は間違えていない……」

「ところでゾンダー博士。P・Z—I Sの完成具合はどうかかなああ?」

「あと少しかかる、今までのを遥かに超えたエネルギーを食うからな……現在は《4つ》しかできていない」

4つ、ソレを聞き笑みを浮かべる三人。亡国機業を取り込んだ《バ

イオネットの本来の目的』の為に彼らはある施設を極秘に制圧。ソレを産み出そうとしていた

「では参りましょうかゾンダー博士、プロフェッサー・フリール、ドクター・ウエスト……イゾルデへ我らが求めるものを産み出すためにね」

ギムレットの言葉にうなずいた瞬間辺りは深い闇に包まれた

ゾンダーI Sコア。それは人が触れてはいけない《パンドラの箱》とも言うべきモノへ躊躇なく手を伸ばそうとする狂った科学者たちが集った組織《バイオネット》、その狂った科学の信奉者である彼らは向かうは極秘裏に制圧した《新式粒子加速実験施設イゾルデ》だが彼らは知らない。

その地に命の結晶《Gストーン》の用いて産み出されたI Sを纏い、命の尊さを知り他者の苦しみ、痛みを感じとる心を持つ《勇氣ある者》達が向かっていることを

パンドラの箱から溢れ出した《災厄》が飛び出した箱に残ったモノだけを人は持つことを許された《たったひとつのモノ》

それは………《希望》

「ユーノ。私の修行に耐えたお前に最後の試練を与える………聖衣をまとった私を倒せ」

「む、無理です！聖衣、しかも黄金聖衣をまとったシオン先生を生身の僕が……」

「甘えたことを言うな。聞けユーノよ、我が戦友の弟子は聖衣を脱

ぎ捨て強大な敵と戦い勝利した…なぜだかわかるか」

師である《シオン》の言葉を前に黙るユーノ、以前から聞かされていた戦友であり親友の弟子の話は何度も聞かされてはいた

「ですが！僕は」

「…」

無言で手を前へシオンが向けた瞬間、ユーノの身体がまるで岩のように動かなくなる。見るとその体には透明な糸、蜘蛛の巣状に広がったそれが拘束している

（う、うごかない…これはまさかクリスタルウォール？違うその派生技？）

「どうしたユーノ？クリスタルウォールの変形技《クリスタルネット》を己の力で砕いてみる…」

「う、ううう…」

全身に張り巡らされたクリスタル・ネットを砕こうとするがびくともしない。

（…このクリスタルウォールを形作っているのは小宇宙《コスモ》だ……なら！）

静かに呼吸し己の内に秘めた翡翠色の小宇宙《コスモ》が溢れだし、自身の体を拘束するクリスタルネットに触れた瞬間ヒビが入り瞬間に勢いよく弾けとんだ

「はあっ、はあっ」

「ふ、クリスタルネットを破るとはな。だがこの程度の小宇宙では私にすら及ばぬぞ」

「シオン先生、なぜ僕があなたと戦わなければいけないんですか。」

叫び訪ねるユーノ。だが対するシオンは口を閉ざし再び構える姿からなにかを感じとり覚悟を決め構え数秒、わずかな風が舞った：

「……………！」

「……………！」

姿が消え激しい衝撃波が生まれ辺りを震わす。肉眼ではとらえられないがユーノ、シオンは拳打と蹴打を互いに打ち込み弾いている：小宇宙を込めた拳は光速を超えており互いに肉薄しているかに見える

「どうしたユーノ？お前の拳は私にはまだ届かないぞ」

「う、くうう」

必死に無数の拳、蹴りを放つユーノに対し涼しい顔で反らし弾いていくシオン：その瞳には十二かを託し教えようとする意思が宿っている

「このままでは埒があかないな…ンツ！」

「カハッ！」

拳を弾かれ無防備になった胴へ蹴りが見事に入りそのままユーノは岩肌へ叩きつけられめり込みそのまま落ちた

「立てユーノ」

「う、うう…」

倒れたユーノに立ち上がるよう声をかけるシオン：身体が透け始めるが直ぐにもとに戻る

（まだまだ、まだあと少し…持ちこたえろ…）

「う、くうう…」

ふらふら立ち上がるユーノ、その体にまとわれた訓練服はボロボロに破け血が滲んでいる。ただそんな状態なのに、その目からは闘志は失われていない

(……咄嗟に部分的クリスタルウォールを展開し、私の攻撃を相殺しきれずとも防いだか……)

「ユーノ、お前は先ほど聖衣を纏った私に勝てないと言ったな……」

「は、はい……聖衣を纏った聖闘士には勝てないといったのはシオン先生じゃないですか」

「そうだ、しかし先にも話したように聖衣を脱ぎ捨て私と同じ黄金聖闘士に勝利した青銅聖闘士がいる……なぜ勝てたかわかるか?」

「……そ、それは」

「……それがわからなければ私に勝つことすらできない……さあ続けるぞ」

再び構え地を蹴り互いに拳と蹴りの応酬が繰り返されるがユーノは部分的にクリスタルウォールを展開ししのぐが、展開発動する僅かな間を縫いシオンの拳がヒットしていく

「………忘れたかユーノ! 聖闘士に同じ技は通用しないと言うことを!!」

蹴り飛ばすと同時に叫ぶシオンの拳がある軌跡を描く……牡羊座の軌跡を描くと同時に黄金の小宇宙が燃え上がり空に光の奇跡が走り出す

「うけよユーノ、アリエスのシオン最大の奥義! スターダスト・エボ

リユーシヨン!!」

「う、クリスタルウォール!!」

「無駄だ、クリスタルウォールを使おうとも私のスターダスト・エボリユーシヨンはふせげまい!!」

「う、うう…うわああああ!?!」

展開したクリスタルウォールがひび割れガラス細工のように砕け無数の流星がユーノを飲み込んだ

「う、う…あう…」

光が暗れ見えたのは訓練服の上半身が破け立ち尽くすユーノ…だがグラリと身体が揺れ倒れた

(ダメだ勝てない…聖衣を纏った、黄金聖衣を纏ったシオン先生に勝てない)

シオンの攻撃を受け続けた肉体はすでに限界を迎え五感が鈍くなるのを感じながらユーノは師であるシオンとの出会いを思い出した
ある人物との戦いで破れ死んだはずのユーノ…しかし目が覚めると見知らぬ場所において金色のオーラを身に纏った腰まで長い金髪の青年《シオン》に助けられた

―目を覚ましたか―

―は、はい…あの貴方が僕を?―

―…ああ、たまたま空間の【ねじれ】を見つけ直したらお前が出て

きた…少年、名はなんと言うー

— …… 僕はユーノ、ユーノ・スクライアですー

— …… ユーノ・スクライアか、ユーノよ、聖闘士になる気はないか？ー

シオンの口からでた《聖闘士》と言う単語とその《使命》…ある存在《テツカマン》によりに運命を歪まされ罪なき人々を苦しめた結果すべてを失ったユーノの心に響く

だがテツカマンに操られていたとは言え罪を重ねた自分が「この世に邪悪がはびこる時に必ず顕れる希望の闘士」…《聖闘士》になる資格があるのか？

そう思いユーノは断る意味を込め、今までの自分、呪われたテツカマンに支配された自分が犯してしまった《罪》を全てをシオンに話した…だが

— ……それがどうした？お前は犯してしまった罪に背を向け逃げようというのかー

—でも僕はー

—黙れ小僧！ー

—ッ！ー

驚くユーノにシオンの口から語られたのは善と悪の心を持つ聖闘士の生き様…大罪をおかし一度は死ぬも神話の時代からの邪悪の尖兵となり、かつての味方の聖闘士と戦い邪悪の監視を欺きながら、その心は《地上の平和と愛》の為に戦う《女神の聖闘士》の生き様はユーノの心を激しく揺さぶり胸を打った

—ユーノよ、罪をおかさず一生を終える者は誰一人ともいない……
おかしてしまった過去は変えられないが未来は変えることができる
……

—こんな、こんな僕でもですか—

—ああ……—

顔を俯かせ泣いたその日からユーノはシオンと共に聖闘士になるべく修行が始まった……死を何度も肌で感じながら必死に鍛練を重ね遂に小宇宙を会得、シオンのスターダストエボリューション、クリスタルウオール、スターライトエクステンクションを威力は劣るも身に付けた

(………シオン先生のスターダスト・エボリューションは僕のクリスタルウオールでも防げない……でも……)

五感が鈍くなる中、ゆっくりと立ち上がるユーノ……その視線の先には無傷で立つシオンの姿

「よく立ち上がったなユーノ……だがこれで最後だ……」

再び構え軌跡を描く……だがユーノも翡翠色の小宇宙を溢れださせ描く

「ユーノよ、私の技を何度使おうとも勝てないことはこの四年間でわかっているはず……まあいい、これで終わりにする」

「スターダストエボリューション!!」

軌跡を描き終わると同時二人の頭上に無数の星が煌めき天を駆け出しぶつかりあう……だがシオンの目の前に信じられない光景が広が

る

「わ、私のスターダストエボリューションをユーノのスターダストエボリューションがそうさいしあっているだ」と

無数の流星が空を駆けぶつかりあい消滅する光景に声をあげるシオンはユーノに目を向けた瞬間驚愕する

「……………」

（気、気を失っているだと…いかん！このままではユーノが）

気を失いながらもスターダストエボリューションを発動させるユーノ…徐々に押されはじめているのをみてシオンはたまらず声をあげた

「目を開けろユーノ！このままでは互いの技の余波に巻き込まれる！目を開けろユーノ!!」

「…………う、うう…………うわあああああ!!」

シオンの叫びにも似た声が響くと同時に翡翠色の小宇宙が弾け燃ったスターダストエボリューションの余波が二人を襲いたまらず吹き飛ばされ岩肌に叩きつけられ叩きつけられ

「ま、まさかビッグバンを起こ…カハッ！」

先に立ち上がるも腹部に鈍い痛みを感じ見るシオンの目には無数のヒビが入ったアリエスの黄金聖衣

（黄金聖衣にヒビ…まさか目覚めたのか）

ユーノが吹き飛ばされた方へ視線を向けるシオンの目には翡翠色

から黄金の小宇宙を浮かばせながら佇むユーノ、その背後には黄金の優雅に威風堂々とした牡羊が浮かぶ

（守護星座と黄金聖闘士が持つ究極の小宇宙…第七感《セブンスンズ》に）

「まさか、黄金聖衣に傷をつけるとはな…だが私を倒さなければ勝利したとはいえんぞユーノ！」

「…シオン先生」

そう呟き再び拳を構えるユーノ…だが今まで以上の小宇宙を燃やし黄金の小宇宙が激しく溢れだすのを見ながらシオンも構える

（そうだ、そのまま小宇宙を限界まで燃やせ…一度死を体験したお前ならセブンスンズの先にある域に到達するだろう…シヤカのようにな）

静かにそして激しく燃え上がるユーノとシオンの小宇宙は辺りを照らし空気を震わし始め地面が隆起し浮き上がる

（……………聖闘士の強さは聖衣の色で決まるものではない……………より激しく小宇宙を限界まで燃烧させた高めた聖闘士こそが）

軌跡を描きながら心の中で語りかけるシオン。ムウと同じ才能を秘めたユーノ、おかした罪の重さに心おれそうになるのを叱咤し共に鍛錬し切磋琢磨した日々が思い浮かばせながら遂に互いの技を発動させた

「コスターダストエボリユーシヨオオオン!!」

再び無数の流星が空を駆けぶつかりあいやがて光が二人を、いや山

の中腹にまるで太陽の光に似た柱が天へ立ち上った

「……………」

光が収まり現れたのはユーノを抱き抱えたシオン。だが纏う黄金聖衣はひび割れ全身から血が滴り落ちているのにか変わらず歩き寝泊まりしていた寂れた石窟へ入りユーノを寝台へ寝かせ自身は奥にある工房へ入る

「…………まさか私の小宇宙を超えろとはな…………これだから弟子を育てるのは楽しいな…童虎の気持ちもわかる気がする」

眩くと同時にシオンの身体から牡羊座の黄金聖衣が分解しオブジェ形態に変わり向き合う形で鎮座する、血が滴りひび割れた自身の聖衣の上に柵から取り出した不思議な輝きを秘めた砂を振りかけると輝きを増していく

「さて、最後の仕事をするとしよう…………私の血、黄金聖闘士の小宇宙が宿った血をもってして真に甦れ」

不思議な輝きを秘めた工具をアリエスの黄金聖衣へ降り下ろすと光が溢れだす、それと同時にシオンの身体が透け始めていく

ユーノと出会ってからしばらくたってから破損したアリエスの黄金聖衣を修復を試みたシオン。だが不完全な形でしか直せなかった

何故なら聖衣の修復に必要な素材がひとつ足りなかった…それは大量の生き血。しかも黄金聖闘士の小宇宙が宿った血

自らの血を用いて直そうとするより先に《五老峰》で《天秤座の黄金聖衣》修復を優先し延び延びになっていた自身の聖衣修復を始めよ

うとしたが手首を切るも血が出ない

気を抜けば身体が透け始め《この世》から離れようとする力が働くのを感じた時間があまりないことを察したシオンは苦渋の決断をするしかなかった

それはユーノの守護星座と第七感《セブンセンス》の覚醒、極限までに高めた戦いの中で覚醒させると言う一歩間違えば死が待つ方法

そしてセブンセンスに目覚めたユーノの攻撃を受け傷つき自らの極限までに高めた小宇宙が溢れた血をアリエスの黄金聖衣へ与える

この危険な賭けをするのに迷いもあつた…だがシオンはユーノが必ずセブンセンスに目覚めると信じていた

結果、ユーノは見事にセブンセンスに目覚めた最大の攻撃で傷つき極限までに高めた小宇宙が宿った血をアリエスの黄金聖衣へ与えることに成功したのだった

だがシオンの身体はさらに透ける、元に戻るを繰り返し工具を振るう手は力を失い始め危うく手元が滑る…が何者かに手を支えられた

「ユ、ユーノ！目が覚めたのか」

「シオン先生……僕が変わりに修復しますから休んでください」

「…いや、あと少しで修復が終わる…お前は休んでいる」

「ですが！」

「これは私の仕事だ、聞けユーノよ。この聖衣の修復が終わり次第、ロシアにいる《オウマ・獅童》の所へいけ」

「オウマ教授の所にですか？」

「以前ココに天体観測をしにきたオウマはお前の量子力学について考察に興味を示していたからな……よしできたぞ」

「こ、これがアリエスの黄金聖衣……命の鼓動を感じる」

「ユーノよ、師として命じる……黄金聖衣、修復工具共にロシアへ向かえ……」

「聖衣を僕に!?これはシオン先生の」

「……拒否は許さん……今すぐロシアへ向かう用意をしろ……出発は一時間後だ急げ」

有無を言わさないシオンの意思を感じユーノは自室?へ戻りきつかり一時間後、石窟の前に黄金の箱を背負い防寒服に民族衣装をまとったユーノとシオンが立っていた

「……………シオン先生、では行つてきます」

「ああ、オウマ・獅童によろしく頼むと伝えてくれ」

「はい……………シオン先生、四年間ご指導ありがとうございました!!」

別れを惜しむ気持ちに溢れながら深くお辞儀し歩き出すユーノ。たまに後ろを振り返り見る姿に苦笑し、その姿が見えなくなるとシオンはゆつくりと石窟の中にある工房へ入り椅子に深々と座る顔にはすべてをやり遂げた表情に満ちていた

「……………ユーノよ、我が最後の弟子よ……私はお前にすべてを伝授した」

ゆつくりと呟くシオンの身体が透け始め足元が粒子にかわり消えていく

「……………この世界に見えざる《闇》……………ハーデス以上の邪悪な意思。こ

の世界を混沌へ満たそうとする魂だ。若き《アリエスの黄金聖闘士》
ユーノ・スクライアよ。その邪悪なる魂を、闇を砕く力を秘めた《傷
付いた獅子》《要たる龍の少年》《水瓶の少年》《神に近き少年》《人類
の守護者》と共に……未来……を……」

遂に身体全体が光の粒子へかわり天へ昇っていく

——…未来を切り開け……若き希望の聖闘士——

ただその言葉を辺り響かせながらシオンの魂は天へと昇り星の輝
きとなった

了了

第十三話 バイオネットの影

「ん…」

「め、目が覚めた…燐」

「シャル…ル？」

声を耳に目を向けた燐、の隣にはジャージ姿で髪をほどいたシャルルが少しほっとした顔で見てる

「なんでオレ…ベッドで？」

「そ、それは…その…あの…」

しどろもどろになるシャルルの姿を見た瞬間倒れたときの光景
水に濡れた白い肌、流れるような金髪に深いアメジストの瞳、そして豊かな膨らみにキュツとしまった腰…触れれば壊れてしまうようなシャルル（女の子）の姿

「あ、ああああ!!ごめんシャルル!!オレ、オレなんてこと…うっ…あ」

「り、燐落ち着いて!」

身体から陽炎が立ち上る燐の身体へふあさつと白地に金の装飾が施されたコートがシャルルにかけられ少しずつ陽炎が消えていく

燐にかけられたのは《インタークーラーコート》。戦闘時及び感情が高まると発熱しやすい燐の身体を冷やし細胞を安定、《イークイツプ時》にはIDアーマーとしての機能を併せ持つ《篠ノ之束》特製のコートだ（もちろんIS学園に通う燐の制服（夏冬用）、ISスーツにも簡易的な冷却システムを搭載している）

「ふう…ありがとシャルル…!？」

「うわ?り、燐!ちよつと!？」

いきなり手を取られ慌てるシャルル、燐は少し顔をうつむかせながら口を開いた

「…火傷してるじゃないか…：シャルル」

「うわあ！り、燐？な、な、な、な／／／」

グイツと火傷して赤くなった手をインタークーラーコートの内側、正確に言えば胸元へ入れると同時に体勢が崩れ胸元にシャルルは勢いよく倒れこんだ

「少し冷たいけど我慢して…：」

「う、うん（…：う、うわ？僕なんかすごい体勢に？それに燐の顔近い／／／／）」

ドギマギしながら頷くシャルルを見て冷却ガスを少量放出、やがて火傷の痛みが消える。おそるおそるコートから手を出すと火傷が綺麗になおっている

「え？すごい冷やしただけで」

「ああ、このコートは治療用ナノマシンも装備されてるんだ…でも綺麗に治ってよかった」

ほっとした表情を浮かべた燐、超至近距離で見たシャルルの胸がドクンと高鳴り顔が熱くなるのを感じながらゆっくり離れた

「…：…：…：…：…：…：」

気まずい空気が流れる…：燐の隣にはプラチナブロンドの髪を下ろしジャージ姿のシャルルが少し顔を俯かせながらチラチラと見ている

(……う、なんか気まずい……どう話したらいいだろう……悩んでてもしかたないよな)

(……やっぱり怒ってるかな……正直に話した方がいいよね)

「あ、あの！燐／シヤルル!」

同時に声を出してしまい再び沈黙する……だがこうしていても埒があかない。燐は聞くことにした

「あ、あのさシヤルル……何で男のフリしてたんだ……」

「……」

「あ、嫌ならいいんだ……何か事情があったん……」

「……実家の方、あの人がそうしろって……命令したんだ」

実家と聞き燐の頭に真っ先に浮かんだのはフランスのデュノア社。量産機ISシエアが世界第三位の企業がなぜ男装するよう命令したのか？

それよりも気になったのは先程とは違いシヤルルの顔が暗い表情を見せてる

「なあ、シヤルル……男装するよう言ったのはまさか……」

「うん、僕の父……デュノア社の社長……」

「……親が命令……何でそうなるんだシヤルル……親ならふつう言わないだろう」

「……僕は愛人の子なんだ……二年前に母さんが亡くなってから父の部下が迎えに来たんだ。色々検査をうけたらIS適応が高いってのがわかって、非公式だけどデュノア社のテストパイロットをやることになったんだ」

淡々とシャルルの口から語られる過去、父親であるはずのデユノア社社長がシャルルを経営不振に陥った会社を建て直す為の広告塔にするため男性だと偽らせ、更には自社を維持するために一夏と自分のISのデータを盗むませる為だけに日本、IS学園へ向かわせた事に怒りを覚え始める

しかし何か引掛かる…一夏と自分のISのデータを盗むように言われたのに何故行動に移さなかったのか？

「シャルル、少し嫌なことを聞くけどいいかな？オレや一夏くんのISデータは送ったことは？」

「ないよ。それに《あの人》が『私が連絡するまでIS学園で待機している』って言ってたけど……いつまでたってもデータを送れって連絡も来ないし、僕の事なんか忘れてしまってるんだらうね」

データを盗むように命令されたのにか変わらず督促もない、特異例である自分達の機体データはふつうならば喉から手が出るほど『わが社の為に直ぐ様送れ!!』と言うハズ

それがないと言うことは……

(……まさか……)

ある推測と同時に嫌な予感を感じた燐は迷わず《ある場所》へ秘匿通信を開くと直ぐ様フランス対特殊犯罪組織《シャツセル》のデータベースを閲覧、同時にデユノア社の調査を依頼し閉じた

「……燐にばれちゃったし、きつと僕は本国へ召還されるだらうね……デユノア社は潰れるか、他企業の傘下に」

「シャルル！」

「え、ええ？な、なに!？」

「少しだけ結論を出すのを待ってくれるかな。それにシャルルはGGの特別隊員だ。GG憲章、第一条四項!」

「じ、重要な職務、及び特別任務に付くGG職員、隊員はいかなる国家、帰属する国家からの招聘、召還を本人の同意がなければ拒否する権限を国連《地球防衛会議議長》ロゼ・アプロヴァール、GG長官大河幸太郎の名において与えられる…あ?」

「…シャルルはココにいて良いんだ…さつきも言ったように少しだけ時間くれないかな」

「う、うん…で、でも燐」

「?」

「か、肩から手を離して…す、少し痛い」

気がつくとシャルルの肩をガシツと握ってた事に気づく…慌てて離そうとする燐の目には胸元のジツパーが大きく開き谷間が見え思わずボウツとなる

「……………燐?……………うわあっ!？」

「あ、み、オレ見てないから!」

「……………燐のエツチ」

「う!?!本当に見てないから!？」

胸元を隠しながら少し頬を膨らませ見るシャルルにひたすら謝る燐。まあサイボーグといっても生体部分(?)が残ってるから仕方ない

「クスツ……嘘だよ(でも燐も男の子なんだ。それに)」

—ココにいて良いんだ—

嬉しかったな小さく心のなかで呟くシャルル…

GGG憲章。GGG結成時にロゼ・アプロヴァール議長がGGGの活動方針及び行動理念が示されたもの（GGG隊員及び職員はこの憲章を一言一句忘れず心に刻み地球防衛、バイオネットの機動兵器で起こりうる二次災害災害を勇気を持つて立ち向かい職務へつく事）。ひたすらに謝る燐を止めようとしたとき待機状態のガオファー、シャルルのラファールも震えだし通信が入る

—GGG機動部隊、至急メインオーダールームへ集合されたし—

「燐！」

「いこうかシャルル、少し捕まってる」

「え？ちよ燐／＼／＼」

顔を見合せ頷くと寮の自室の窓からシャルルを抱え飛び降り、いつの間にか待機していたガンドーベルへ乗りGGG本部、メインオーダールームへ向けアクセルを全開にし走り出した

「少し飛ばすからしつかり捕まってる」

「う、うん」

もちろんシャルルと一緒に…余談だがしつかり燐の腰に捕まりガンドーベルと共に現れた二人を見て束が黒いオーラを溢れ出させていた

一時間後、北海道上空

弾丸上のフォルムに二基のジェットエンジンユニットが目立つGGG所属《三段飛行甲板空母》。《GGG》G—IS機動部隊を迅速に作戦行動地点まで輸送するこの艦にはミラーカタパルトが装備され

ており各種ツール射出に使用されるが移動拠点としても用いられる、現在ブリッジには作戦参謀《火麻激》、GGGメインオペレーター篠ノ之東、そしてGGG特別隊員《シャルル・デュノア》の姿があった
同ブリッジ

「各員配置についたか？」

―東ゲートOKだ―

―南ゲート、到着完了―

―北ゲート、いつでも行けるぜ

「おし、これより制圧された《新式粒子加速実験施設イゾルデ》内部へ潜入、そして囚われた職員の救出作戦を開始する。内部へ潜入後は各自打ち合わせた通り行動だ」

―了解！―

燐、凍也、炎竜（スタンドアローン・モード）の声が響くと一切の通信が途絶え代わりに正面スクリーンへ光点のみが映し出される

「あ、あの火麻参謀？あの紫色のは」

「ん？…デュノアはあったことないんだっただな…まあ近いうち顔を会わせる事になるがな…さてと連絡あるまでオレらはここで待機だ」

「はい…？あ、あの篠ノ之さ…」

「ナニかな、リツ君の背中に抱きついてメインオーダールームに乗り入れてきたデ・ユ・ノ・ア・君？（黒笑み）」

「な、何でもないです（な、なんなのこのプレッシャーは!?!）」

「……………（汗）」

真つ黒なオーラがボタバタほとばしらせながらシャルルを見る束を見て冷や汗を掻く火麻は正面スクリーンへと目を向けると四つつの光点が点滅しながら内部へ入るのを見た

「……中央研究エリアまであと一キロか…誰だ！」

「アツハハハハくお久しぶりですねリイイン♪」

インタークーラーコートを揺らしながら走る燐…だが突然その動きを止め叫ぶと声が通路を反響する…が異質な気配が辺りを支配する

「……だよリイイン♪」

背後からの声にハツとし振り返る、とんがり帽子に全身を覆い隠すようなマント、奇抜な仮面を着けた紫色の人物がケタケタ笑いたつてる

「お前かギムレット！まさかイズルデを制圧したのは…」

「はいく私たちですよ♪そしてアナタたちを足止めさせていただき
ますよ」

「…私たち？…まさか！アイツラもここにいるのか!!」

「はいい、今頃再会を喜んでるでしょうねえ」

「久しぶりぶりであくく披検体02ウウ♪…ん、片割れはどこにいるでありますかああああーヤアアアッ！」

「……ドクターウエスト……貴方がここにいるということ……ま……まさか!!」

「イエスウ、アイドウ♪片割れがないのは非つ常に残念であるが……まあいいか！我輩の熱いビートをくらいたまえ♪！」

エレキギターを向けるとガシャンと真ん中から割れ無数のミサイルが襲いかかる

「く、フリージングライフ！フリージングガン！一斉射撃!!」

背部クレーンユニットが展開と同時に全面に向け先端の砲口から冷却ビーム、右腕に構えたフリージングガンが火を吹きミサイルを凍結撃破していく

「おおおう!?流石はデュアルカインドであるなあ！左脳交換手術及びリンカージェル移植手術は成功でありますなあ♪♪」

歪な笑顔を浮かべながら壁を蹴り奥へ走り出すドクターウエスト
「く、逃がしません！ドクターウエスト!!」

「ふむうく独立機動ができるISとはああく珍しいなあ……是非とも解体したいなあ……久しぶりにいい」

『お前は変態科学やろー！いやフリール・ルコック!!』

「変態科学？フヒヒ最高の誉め言葉だなあ」

血で染め上げたような赤い手術着姿のフリール・ルコックは嬉しそうに体を振るわせ笑いながらに無数のメスを炎竜目掛け投げつける

『メルティングガン！オラオラオラ!!』

とつさに構えたメルティングガンが襲いかかる無数のメスが砕き溶かしていく

「ふむう〜やるなあ……フヒヤハハは♪」

『逃げんな変態科学ヤロー!』

暗がりへ溶けるように消えたフリールをハイパーセンサーで感知するや否や追いかける炎竜…その言葉からは激しい怒りがにじみ出ていた

「ふむ、誰も来ないようだな………」

黒のスーツに身を包んだ青年「ゾンダー博士」が小さく眩き時間の無駄だと言わんばかりに背中を向け歩き出す…がわずかな空気の乱れを感じ振り返る

「……………」

頭を白いマフラーで包み揺らしながらまっすぐ歩く紺色の制服をまとった少年の姿。青年は無機質な笑みを浮かべ手をかざすと無数の重火器が顕現し火を吹き着弾と同時に爆発、辺りに爆風が起きる

「…………ふ、あっけな…………」

言いかけたその時、銀に輝く物体が青年の重火器が顕現した腕を音もなく切り裂きゴトリと落ちる

「な、な、ぐ、くああああっ!!」

叫びが辺りに木霊す中、煙が晴れ顕れたのはマフラーがほどけ白髪に赤い瞳が目立つ少年の姿に青年は驚きの顔を見せた

「お、お前は！くっ!!」

切り落とされた腕が光輝き辺りが真っ白に染まる…が少年はどこからともなく金色に輝くブーメラン状の刃を投げつけた

ガキンと鈍い音が響くと共に光は消え黒紫色の血と腕だったナニかが残され、ジツとみながら少年は印を結び旋風を起こし消え去った

「く、そこをどけギムレット!」

「いやですよおく久しぶりにアナタのテストをしてあげますよお………バ・イ・オ・ダ・イ・ン・R I N」

「オレを、オレをその名前で呼ぶなあ!!」

ギムレットの言葉を聞いた燐の怒気をはらんだ声が辺りに響いた瞬間、地を蹴りギムレットの顔面に目掛けめいっばい殴り付ける…が手応えがない

「ここだよR I N」

「ぐあっー!」

背後からの鈍い衝撃と共に爆発がおきそのまま硬い床へと落ちるもすぐさま立ち上がる燐の前には無数のミサイルをマントの下から展開しながら浮かぶギムレットがケタケタ笑いながら撃ってくる

「ウィル！ナイフツ!!」

獅子の顔を象った左腕装甲に納められた緑色のナイフ《ウィルナイフ》で迫り来るミサイルを切り払いながら間合いを詰めていく

「こんな攻撃なんか通用しないぞ。ギムレット!」

「おやおやなんですかその情けないモノは？貴方にはアレがあるはずですよ……我がバイオネット最高傑作武器《高周波ブレード》がね」

「うるさい！誰があんなのを使うか!!」

「なら使わせてあげましょう……イヒヤハハハは!!」

ミサイルを収納するや否や今度は巨大な回転鋸が現れギムレットはひらりと乗りサーフボードみたいに操りながら縦横無尽に壁や機材を削り、ウイルナイフを構える燐目掛け襲いかかってくる

「くっ!!」

胴体目掛け襲いかかってきた回転鋸を火花を散らしながら受け止める燐

「なかなか強情ですね。そんなあなたにもうひとつプレゼントです」

ケタケタ笑いだすと背後からもうひとつの回転鋸を展開、燐の死角から襲いかかる

「く、うあああ!!」

「な、なにー！このパワーは!?!」

火花を散らしながらギムレットが乗る回転鋸を切り払うと迫ってきたもうひとつを跳躍しかわし燐は両耳ホーンクラウンから胸元まで延びた数珠繋ぎになった円筒状の物体を掴み叫んだ

「ハイパー！モード!!」

左腕装甲のGストーンが輝き《インタークーラーコート》に配置さ

れたIDアーマーがガシャンと展開しフィンから放熱が始まり全身が金色に輝きだす

ハイパーモード、サイボーグ燐は髪が形状変化した《エネルギーター(エネルギーチューブ)》を掴むことで99,9秒間だけ通常の三倍の力を出すことができるのだ!

「な、なんですかその姿は!?グアツ!」

「ハアツ!セイ!ハアツ!!」

金色のオーラに包まれた燐がすり抜け様にギムレットの身体と回転鋸をウイルナイフで切り裂くと同時に正拳、裏拳、肘撃ちを叩き込みバランスが崩れたギムレットを天井へ蹴りあげ呼吸を整え構えた

「ぎゃー!ぐひゃああ!!」

「……………御風流《獅子乱舞》!せい、せい、やあつ!はあつ!!」

まるで《黄金の獅子》と化した燐の拳から《氣》が溢れ、そのまま無防備状態のギムレットの体へ数百発の拳が的確に急所を捉え撃ち抜く

「アビツ!アババツ?グブアツ…ぐびゃああ!!…なんですその金色の力は!」

「…これは。オレの師匠御風蓮!御風オリエと共に鍛練を重ね!!」

「アパオ!!」

「そして!《レグルス》兄貴の闘法が合わさり生まれた力だああああ!!」

黄金の氣が纏われた拳が鳩尾、顔面、全身の急所へと鈍い破壊音を響かせ辺りに紫色の血が飛び散り苦悶に満ちたギムレットの悲鳴が響く

「グブオ…アビュアア!? ウヴァアアア!? い、いけませんね…グエロ!? えこ、こは退却です!」

「待てギムレット!!」

燐のあまりの攻撃に耐えきれずそのままイズルデの奥へ逃走するギムレットを追いかけようとする、が黄金の輝きが消え膝をつくといんタークーラーコート、IDアーマーから大量の冷却ガスが放出され一気に体温が低下していく

「はあつ、はあつ……時間切れか……だがバイオネットがイズルデを占拠してる。職員の救出を急がないと……ファントムガオー!!」

疲労した身体を奮い立たせファントムガオーを召喚し燐はガオファーを装着、研究エリアへと飛翔し進んでいき光が見えると迷わず飛び込む

「ここがイズルデの中心? まるで蜘蛛の巣のようだ」

眼下に広がるのは蜘蛛の巣状に張り巡らされたエネルギーケーブル、その先には巨大な卵らしいナニかが脈打つのが見える

「燐! アレは一体?」

『凍也、それに燐もここに来たのか?』

「凍也? それに炎竜? ……まさかこれは俺たちをここへ誘い込むための罠か!!」

すべてを悟った瞬間、卵が大きく弾け巨大な王蜘蛛をモチーフにしたゾンダーISがコチラを睨みながら蜘蛛の巣状に張り巡らされたエネルギーケーブルをまるで滑るように移動し巣にかかった獲物を捕職するように迫ってくる

《ゾ、ゾンダアアアアア!》

「くっ！フロントムクロー!!はあっ!!」

ウルテクスラスター全開で王蜘蛛ゾンダーISに殴りかかるも寸前でかわされる、がIS氷竜、炎竜がクレールントンフアー、ラダートンフアーを大きく構え交差し頭を捉えそのまま地面へ叩き落とした『へへ、どうだ蜘蛛ヤロウ』

「油断するな炎竜、今の攻撃ではダメージが足りな…」

《ゾ、ゾンダアアアアア》

「な、なんだこれは！ウワアアアア!!」

叩き落とされた王蜘蛛ゾンダーの口から吐き出された糸がガオフアー、IS氷竜（凍也）、炎竜の身体に巻き付き高出力の電磁波を流し込んでくる

「ぐ、ぐああああ!!」

たまらず叫び声をあげる三人：いくら操縦者は絶対防御に守られているとはいえ電磁波は電子機器の集合体であるISにダメージを与えていく

それは身体の四割近くが機械化した燐にはまさに命取りになるであろう出力。徐々に人工筋肉及びIDアーマの機能が低下し始めていく

（不味いな、このままでは燐の身体が……）

（……………このままだと記憶が消えちまう……………くそ）

（く、力が出ない……………特殊防護シールドを突破されるなんて……………呼吸

が……できない)

皆を助けようと氣を練ろうとするも電磁波で身体機能に異常が起こり呼吸ができない……その姿を遠くからみる三つの影。ドクターウエスト、フリール・ルコック、先ほど隣にボコボコにされたギムレット(全身に包帯を巻いてる状態)がいびつな笑みを浮かべみていた「ふひ、フヒ……イダツ……ウダダツ……ハは……これでみおさめみ?ただたいですねぇ……」

「うむう……あの素晴らしい音楽が聞けなくなるのは残念だなあ」

「まあ……邪魔な披検体たちがいなくなれば我輩たちの計画は完璧イイ……最高の音楽が聞けなくなるのは残念ですがねぇ」

「ゆ、油断するな……」

苦悶に満ちた声に振り返る三人の前に切り落とされた右腕から赤紫色の血を垂れ流しながらたつゾンダー博士に驚く

「ゾンダー博士、何があつたのかなあ?」

「氣をつけろ、あと一人厄介な奴がここに来ている……この私が手掛けるも失敗した不良品がな」

苦しそうに声を漏らすゾンダー博士の言葉を聞き驚いた時、三人に電磁波攻撃を仕掛ける王蜘蛛ゾンダーに迫る紫の影

「シルバームーン!ハアツ!!」

白銀色の三日月状のブーメランが糸を切り裂き自由の身になる三人の前に紫色のIS《G—IS—02》ボルフォッグがシルバームーンをキャッチすると降り立つ

「遅れてすいません燐、凍也、炎竜。職員全員の救出を完了しました」

「た、助かったぜ霧也」

「久しぶりだな霧也」

『本当に久しぶりだぜ』

「今は懐かしんでいる時ではありません。燐はファイナル・フュー
ジョンを……うわっ!!」

『ゾンダアアッ!』

王蜘蛛ゾンダーの足に殴り飛ばされ地面を水切り石のようにはね
消える霧也の姿に燐は決意した

「霧也!……凍也!炎竜! サポートを頼む」

「わかりました!炎竜!!」

『おうよ!いくぜ蜘蛛ヤロー』

二人は王蜘蛛ゾンダーの足止めをするべく動き出すとメルティン
グガン、フリージングガンで牽制、たまらず王蜘蛛ゾンダーは動きを
止めた

「いまだ!ガオーマシン!!」

叫んだ瞬間、イゾルデの研究棟の影からステルスガオーⅢが音もな
くあらわれ飛翔、空からはライナーガオーⅡ、地中を貫きドリルガ
オーⅡが姿をみせる

「火麻さん、リツ君からファイナルフュージョン要請シグナルが来たよ！」

「よし、長官!!」

「うむ、ファイナルフュージョン承認!!」

「了解、ファイナルフュージョン！プログラムウウドラアアイブツ!!」

素早くプロテクトを解除と同時に拳がクリアパネルを叩き割ると緑色に輝きガオファア、ステルスガオⅢ、ライナーガオⅡ、ドリルガオⅡのアイコンが流れ赤い文字が大きく浮かび上がった

— G A O F I G H G A R —

「ファイナル！フユウウウジョオオン!!」

叫ぶと同時にリングジェネレータからプログラムリングが展開、その上を各ガオマシンが滑るように飛翔。まずはドリルガオⅡの上部部分がスライドそのままガオファアの足へ接続、続けてライナーガオⅡが後部サブロケットをパージ上下に展開し跳ね上がった肩アーマー部分へ侵入と同時に量子化装着、ステルスガオⅢが背部へ逆噴をかけ静止と共にロッキングしインテークが競り上がり胴体へエンジンユニットが火花と共に腕部強化フレームへ接続と同時に拳が勢いよく回転しながら飛び出しガツガツと止まり最後にヘッドギアが装着されマスクが付きGストーンが競りだし《GGG》のマークが光輝く

「ガアオッ！ファアイッ！ガアアアッ！」

緑色のエネルギーを両拳から溢れ出させ大きく交差し拳にGの刻印を光らせEMTが弾け飛び、黒いIS《勇者王ガオファイガー》が左右のウルテクエンジンを展開し緑色の光を輝かせ飛翔しゆつくと降り立つ

「いくぞゾンダーIS!!」

『ゾンダアアッ!』

ウルテクエンジンを閉じ構えるガオファイガーに対し腹部に当たる部分から無数のミサイルを生成し射出しまるで蜘蛛の子みたいに広がり着弾、爆発し煙に包まれる。

「……………ブロウクウウン！ファアアントムツ!!」

叫び声が響くと共に煙の中から光輪を纏った拳が飛び出し、そのまま王蜘蛛ゾンダーの顔面を砕き貫く

「そんな飛び道具に頼った戦い方で！はあっ!!」

『ゾ、ゾンダアアアアア!?!』

「このガオファイガーを倒せると思うな!!」

たまらず後ろ向きへと倒れるのを見逃さずウルテクエンジン全開で間合いを積みそのまま高速回転したドリルニーを胴体へ打ち込み蹴り飛ばす

『ゾ、ゾンダアアアアア!?!』

事故修復しながら立ち上がる王蜘蛛ゾンダーは再びケーブルへ飛

び乗りそのまま自身がいた場所へ移動、その真下にある《粒子加速器》を取り込みさらに巨大化、背後から巨大な竜を模した粒子加速砲が伸び先端に光が走り粒子加速ビームがガオファイガーめがけ放たれる

「プロテクトリング！プロテクト！ウオオオル！！」

リングジェネレータからウォールリングを形成展開しかざした左手に粒子加速ビームが着弾、五芒星状に偏向と同時に王蜘蛛ゾンダーめがけ打ち出す

『ゾ、ゾンダアアアアアア!?』

自身が放った粒子加速ビームを受け外装が溶け落ち苦し紛れに再び電磁ネットを腹部から吐き出すが

「そうはさせません！フリージングライフル！！」

『二度とそんな手が通用するかよメルティングガン！オラオラオラ！！』

氷竜、炎竜の射撃により凍結、もしくは溶かされていくのを見て身じろぎするのを見逃さず焔はウルテクエンジンを展開し空へ飛翔し両腕を大きく構えた

「ヘル・アンド・ヘヴン！……………ゲーム・ギル・ガン・ゴー・グフォ……………ムン！！」

呪文を唱えながら攻撃のGエネルギー、防御のGエネルギー溢れさせる右手と左手を胸の前で突きだした形で組んだ瞬間、緑色の竜巻《EMT》が発生。王蜘蛛ゾンダーを包み込みその動きを止める

「うおおおおおお！！」

ウルテクエンジンを展開し四基のGSライド最大出力で空を突き

進みながら突進、そのまま両拳で王蜘蛛ゾンダーの額を砕くとZ—I
Sコアをガシツと掴むと同時にEMTが弾ける

「ぐ、ぬぬぬ……せやああああ!!」

背を向け紫色に輝くZ—I Sコアを大きく掲げた瞬間、王蜘蛛ゾン
ダーの身体は爆散しガオファイガーは炎に包まれる

「リツ君／＼燐!!」

上空に待機していた三段飛行甲板空母オペレーターシートに座つ
ていた束とシャルルの声が響き爆発の影響で砂嵐だらけの正面スク
リーンが回復し見えたのは、無傷で立つガオファイガーと氷竜、炎竜
の姿

「よかった、よかったリツ君……」

「火麻さん。僕、燐の所にいってきます」

「ああ、頼んだぜデユノア」

三段飛行甲板空母の第一カタパルトが開きオレンジ色のカラーに
染められたシャルル専用機《ラファール・リヴァイブ》が飛翔するの
を見守りほつと肩から力を抜く火麻

「燐」

「待ってたぜシャルル。このコアの浄解を頼むぜ」

「うん、まかせて。クーラ・ティオー・テネリタース・セクティオー・
サルース・コクトウーラ」

ラファールリヴァイブを解除し八枚の翼を広げたシャルル（浄解

モード)の手から光が溢れゾンダーISコアを包みグニヤグニヤと崩れやがて髪をあげたややきつい目が特徴の女性がボロボロ涙を流しながらコアから分離されていく

「ありが……と……う、アイツラから助けてくれてありが……グ
スツ」

「ふう……終わったよ燐」

「お疲れさまシャルル。あと数分したら《三式空中研究所》とじいちやん達が来るから少しだけここで待ってようか」

「わかったよ燐」

「……やってくれるなGGG、そしてガオフアイガー」

「我々の計画にとって最大の障害になるのは間違いないなあああ
〜」

「イエス！その通りであゝるっ！お陰で生成できたのは予定の31
個の半分であゝる！それにあのグリーンエンジェルは始末しなければ
いけな〜〜い!!」

「ふひ？あだたつ!?それに関して……だだだ？は抜かりありません
……」

痛みに耐えながら言うギムレットの言葉にうなずくとまるで闇に
溶けるように四人の姿が消え去った……最初からそこには誰もいな

かったかのように風だけが流れた

数分後、三式空中研究所

同解析ルーム

「ふむ、やつらは何故イズルデを制圧し職員を無傷で捕まえたんじゃないだろうか？」

「…今までのバイオネットのやり方とは全く違うな……獅童じいさん、長官は今どこにいるんだ？」

「長官は先ほど設立が決まったロシアGGGに向かつとる……恐らくはG-IIS-07《アリエス》の運用テストスケジュールを決めにいったんじゃないろ」

レイジの言葉に火麻が頷いたとき、自動扉が開き紫色のIISを纏った少年が姿を表した

「レイジ博士、ただいま戻りました」

「おお霧也くん、無事だったか。燐たちのサポートと職員たちの救出……苦労じゃったの」

「いえ…実はイズルデの地下で興味深いモノを発見、採取してきました」

「なんじゃ？」

訪ねるレイジに霧也が手を差し出し開き見せたのは紫色に輝き中心にZとも読み取れる幾何学模様が目立つ結晶体に思わず息を飲む火麻参謀と遅れてきた束も啞然となった

「レ、レイジ先生、これってまさか!？」

「こ、これは、まさかゾンダーIIS—コアか!？」

二人の声が三式空中研究所の解析ルームに木霊した

第十三話 バイオネットの影

了

第十三・五話 戦士―キオク―

—J—011、ジュエルジェネレーターイング・アーマー出力臨界突破！このままでは押し切られるぞ？—

『…わかっている！トモロ、あの敵の正体は？』

—…………おそらく各銀河星系に《伝承》としての存在が示唆されている《…》だと断定する—

冷静で的確な情報…トモロ119の言葉が正しければ私…赤の星【アーク艦隊】所属、認識番号《J—011》が対峙しているのは《…》。《…》は——させるために眼下に広がる蒼く輝き数多の《生命》に満ちた星から……をしようとしている

その証拠に数カ月前、惑星から——が——ている。私
は原因調査へ赴くため《シノノセイジュウロウ》にアルマと《あれ》を
預け五年かけて修復を終えたアーク級11番艦《Jアーク》で深い海
より浮上する

—ジュエルジェネレーター正常稼働確認。これより大気圏を離脱
する—

閑話 戦士―ソルダート―

やはり空はいい…《赤の星》の技術の粋を集め産み出された対原種
用決戦兵器《Jアーク》は瞬く間に大気圏を離脱すると同時に船体が
激しく揺れた

「むー」

—J—011、左舷九時方向よりエネルギー反応。ジュエルジェネ

レーティングアーマー展開!!—

「くっ！急速反転、同時に反中間子砲一斉掃射！」

—敵影確認……攻撃開始!!—

……戦いはじめてまだ時間も経ってはいないのにか変わらず私の艦……いやメガフュージョンした身体は中破寸前……《Jクオース》も碎け各種武装も半数以上機能停止、ジェネレーティングアーマーも既がない等しかった

嘲笑うように立ちはだかる《……》は再び攻撃を仕掛けてくる。装甲が碎けながらも必死に耐えながら考える

《赤の星の戦士》である私がこの星のために戦う理由を

—お父様、いい加減セイジユローを認めてください!!—

—義父上！今日こそは勝たせていただきます!!—

人ですらない《私》を《父》とした娘がほほを膨らませながら、その娘が見初めた義息子と真剣にて切り結ぶ日々……

——……、必ず帰ってこい。私に印可状を与えるのだろうか？もし帰ってこないときには妾が地の果てまで追いかけてやるからな—

Jアーク修復作業に向かう途中に立ち寄った京の都で出会った唐より来た《修羅姫》の顔が浮かぶ度に力がJジュエルから溢れ出してくる

私は戦士……蒼き空を駆け原種と戦う為の道具

しかし今は違う

未来を生き、無限の可能性に満ちた《命》達を守るために戦う

たどえ…

『トモロ！Jジュエルジェネレーター、リミッター解除!!』

—ジ、J?この状態での使用は駆体が持たないぞ!!—

『構わん！今使わなくしてあいつを………《………主》を止めることはできません!!』

—了解、ジュエルジェネレーターリミッター解除！最出力!!—

『ぐ、グウウウ………ジュエイツ！フェエニックスウウ!!』

赤い光に包まれ私……いやキングジェイダーは炎とみまごうばかりのエネルギーに包まれ身体が悲鳴をあげるのをこらえ火の鳥と化すと大きく羽ばたく

『……………』

火の粉を羽のよう舞い散らせ奴へ体当たりする度に身体が軋む…

—ジュエルジェネレーター出力最大維持!—

『うおお!!』

何度も、何度もぶつかり奴はわずかに体勢を崩す…

『トモロ！転移座標入力後ESミサイル全弾発射!!』

—了解、ESミサイル全弾発射!!—

オーバーロードし自らをJクオースと化した炎鳥《J・フェニックス》から無数のミサイルが発射、しかし巨大な何かの背後へ着弾と共にESウィンドウが開かれキングジェイダー、いやJ・フェニックスは力の限り体当たりをした

『うおおおお!!』

『?!?』

背後に開かれたESウィンドウへ吸い込まれるよう姿が消えると共に赤い炎が瞬く間に消え真っ白になり各部装甲が砕け内部機構がむき出しになったキングジェイダーが力なく浮かぶ

『く、うう……もう一歩も動けん』

やがて地球の重力へ引かれ始め私の身体が赤く燃える……すでに身を守るジェネレーターリングアーマーは機能せず、本体が受けたダメージは深刻なものだった

—J、このままでは燃え尽きるぞ—

『そのようだな……トモロ、やつが次にこの星へ来るのは何時だ』

—あく……まで予……想だが1300年……後……—

『トモロ?どうした!?』

—メイ……ンシス……テムに深刻なダメージ……確認……修復作……業に12……00年……を要す……る……—

突然、身体がフュージョンアウトし弾き出された。内部には亀裂が走り火花が散っているが

「トモロ……なぜフュージョンアウトを」

—……J—011、今ならばお前……だけ……で……も……脱出はか、か、

可能……だ――

「戯けたことを、私はこの艦Jアークとリンクしている……大破すれば私自身も命を失う……」

――……J―011、リンクは先程切らせて……もら……った……

「な、何ーコ、コレは!？」

私の身体が赤い光に包まれブリッジが揺らぎ始める……いや空間転移の兆し。止めようと手を伸ばすも身体の自由が効かない

――……赤の星、ア……ク艦……隊所属、ソルダート師団……《J―011》。お前は生……きろ……12……0……0……ねん……後……N

I……そ、そ、備……え……ろ――

「トモロー！」

叫んだ瞬間まばゆいばかりの光に包まれ消え去るJ、直後ブリッジが爆発。連鎖反応のようにキングジェイダーの身体が爆発……そのまま海へと落ち水柱がたち沈んでいく

――ジュエル……じゃねれた……きの、う、う、う……とう……け……つ……めいんしすてむしゅうふくか、か、か、い、いい…………し……ま、またアオウ……J……――

ひび割れ浸水する《トモロールム》から光が消え深い深い海底へと落ちた

「う、うは……?？」

「気がついたか！妾に心配かけさせおって……どうした?！」

「……だれだ君は……私は……私は……うっ!？」

全身を布に巻かれた青年は頭を押さえ苦しみだすのをみて慌てて十二単衣姿の女性が慌て寝かせつける

「すまない、君は私のことを知ってるようだが……思い出せないのだ」

「(本当に妾のことを覚えてないのか……) ……お前は……《織斑白夜》だ」

「織斑白夜……それが私の名前か……感謝する……その……」

「……修羅、妾は修羅姫と呼ばれておる……どちらか好きな方で呼ぶといい」

「修羅、私を助けてくれてありがとう」

軽く頭を下げる青年、織斑白夜に慌てる彼女……わざとらしく咳払いしながら食事の用意をするという部屋を出ると向かったのは別な離れ……簾をあげるとヒビが入り血だらけになった鳥を模した白い甲冑にそつと手を触れる

「……生きててよかった……本当に……《じえい》……妾の愛しき良人よ」
大粒の涙が白い甲冑へ落ちただ彼女……修羅姫の泣く声が静かに響いた

「ん、また《あの夢》か……平安時代に巨大ロボに変形する艦なんてあるわけないよな」

大きく欠伸びながら立つんだけどなんか身体が痛い……それに

「何で服破けてるんだ……まあいいか」

あちらこちらが破けたパジャマ、なんか内側からなにかが出たって感じがする、それ以上に左腕。手の甲が熱い

「やけどしたわけじゃな……」

「一夏！今日も朝の鍛練を…お、お前なんてかつこしてるんだ!!」

「え？ほ、箒？」

「は、破廉恥な!？」

「うわあああ!？」

顔を真っ赤にした箒が俺めがけて振り下ろしてくるのを必死にかわしてるうちにさつき見た夢のことは忘れてしまった

この日、《織斑一夏》が見た夢が何を意味していたかが判るのはずっとあとのこと

白き翼の復活は確実に近づいていた

閑話 黄金の翼―クルイシキカイノカミー

二十数年前

異形の甲冑を纏った邪悪なる神の欲望にまみれた機械甲冑姿の戦士が黄金の箱を背負い走る少年を追う

『逃がすか人間！食らえ!!』

「くっ！」

巨大な手裏剣が少年の体を切り裂こうとした瞬間、黄金の光の軌跡が忍者を模した鎧を着た戦士の回りを通り抜けた瞬間、背後にいた機械人形が四角よりも細かく切り裂かれ消えていく

忍者？の眼に写るは黄金の鎧を纏った一人の少年…ゆっくりと手刀を構えた姿に恐れを抱く

「ここより先は山羊座、カプリコーンのエルシドが相手をしよう…：：：邪悪なる異形よ、我が大いなる聖剣を受けよ！エクスカリバー!!」

振り抜かれた手刀から産み出された斬撃が残る機械兵？を切り裂く

「いけ！シジフォス!!その子を安全な場所へ」

「すまないエルシド…後で必ず会おう」

「ああ、わかった」

黄金の箱を背負う少年シジフォスが走り去るのを見て構えるカプリコーンのエルシドの表情からは焦りの色が見える

(あと少しだけもて…我が身と我が聖剣よ…頼むぞシジフォス！)

身体が透け始めながらもエクスカリバーを振るうエルシド…だが押し寄せるデクーの武器が突き刺さる

「ぬ、くうう!?!」

『人間ごときがてこずらせてくれたな……このバル・スパロスの手で死ぬることを光栄に……な、なに？ 貴様、腹筋を締めて』

深々と突き刺さった手裏剣が食い込んでいく様に焦りだす

「遙か……離れた……東洋の地《ニホン》には『肉を切らせて骨を断つ』とあるらしいな……内にある小宇宙よ……我が聖剣よ……邪悪なる神をも切り捨てよ……さあ受けてもらおうぞエクス・カリバー《聖剣拔刀》!!」

『な、なにー！うああああああああああ!!』

黄金の煌めき……いや太陽の光が辺りに溢れながら滑らかに細かく切り裂かれていくバル・スパロス……エルシドの体はゆっくりと光に飲まれ消え去っていく

——……シジフォス……この世界の希望を頼んだぞ！——

「っ！逝ってしまったのかエルシド……今は……」

天へ還る黄金の輝きを見る彼、シジフォスの腕には生まれたばかりの小さな赤ん坊がすやすや眠っているのを目にしながらゆらさぬぬよう……山と山を飛びきりたつた崖を越えた

閑話 黄金の翼―クルイシキカイノカミー―

エルシドが逝き数日がたった……私は今ニホンと呼ばれる国に来た

だがそれ以上に気になることがある。なぜ私は生きているのだろうか……心臓を抜き取り忠誠心を見せたテナ・エクスクラメーション

を放った直後からの記憶がない

気がつけばサジタリアスの黄金聖衣箱の近くに倒れていた…そして夢神を倒し死んだ筈の山羊座カプリコーンのエルシドもいたことに驚いたときだ

「この鳴き声は……これは?!」

「……信じられん……この赤子…まさか」

気がついたエルシドと近くを探ると岩肌に着に包まれ元気になく赤ん坊、抱き上げると泣き止み私たちに笑顔を向ける赤んぼうから包み込むような暖かで優しさに満ちた小宇宙が溢れだすのを見て私たちはこの子を——と確信しサンクチュアリへ向かった

だがサンクチュアリは存在していなかった、それ以上に私たちがいた頃よりも遙かに進んだ文明に圧倒された

すこしばかりの手持ちの金(金塊)を換金し必要な服を買い揃え旅をし一月が過ぎた頃だった、私たちの前にニンジャのような聖衣にも似たモノをまとった集団が襲いかかってきた

「……………貴様ら何者だ」

『答える必要はない! その赤子を渡せ!!』

「……………どうするシジフォス……………」

「今はこの子をお守りする……………」

聖衣を纏い撃退したが日に日に襲撃を受ける回数が増していき私たちは疲弊し始めてきた……………街から街へ移動しながら敵の正体を探るも手がかりはなかった

ただ彼らは変わった声と同時に協力的な一撃を繰り出してくる

―アタック・フランクション！―

―必殺フランクション！―

今まで出会った事のない未知の敵…聖衣にも似た鎧には全く見覚えがない

ただわかるのは冥王ハーデス以上の邪悪な意思…いや《ナニかに対し優位に立とうとする邪な欲望》に満ちた小宇宙を肌に感じ取った
共にこの子を守るために戦っていたエルシドはもう居ない…：：：だがニホンの地なら安全に…

『見つけたぞ下等な種よ！ソレを渡してもらおうか!!』

「…：：：断る、この御方は我等《聖闘士》が守る希望…：：：お前たちのような邪悪な輩に渡すわけにはいかない」

背中にある黄金の箱が開くと人馬…：：：黄金の翼を広げ弓と矢を構えたサジタリアスの黄金聖衣を纏い拳を構え小宇宙を高め撃ち放つ

「小宇宙よ、燃え上がれ!!ケイロonz・ライドインパルス!!」

『ぐ、ぐあああああああ』

黄金の光と共に消え去るのを見届け時、新たな小宇宙を感じ振り返る

私の目に映ったのは神が介入したトロイア戦争に出てくる英雄アキレス…いやアキレウスを思わせれ暗い蒼と白の彩りの聖衣にも似た鎧をまとい、緑色の光を湛えた盾と剣を構えながら見下すよう私へ目を向けている

『…：：：下懺な人間ごときに負けるとは恥を知れ…：：：…：：：ソレを渡してもらおうか』

今までとはけた違いの圧力…：：：私たちが襲ってきた敵の主力のようだと判断し小宇宙を燃やし構える

「断る！」

『ならば死ね！人間!!』

大きく構えた剣を振るうのを見て拳で弾き、そのまま殴りつけるも円盾で防がれた

(恐ろしく硬い盾だ……龍聖座の盾と並ぶかも知れない……だが負けるわけにはいかない!!)

私の背後には聖衣箱に守られるよう眠る子を、この世界の《希望》を守らなければいけない使命がある、何度も何度も拳と蹴りを繰り返すも盾で防がれる

『………下等な人間にしてはよくやるな……褒美に我が最大の一撃で葬ってやろう』

——必殺フランクシヨン!——

不思議な音声が響くと輝きながら剣から槍へ持ち変えたアキレウスに似た者が私へ迫るが微動だにせず動かない

(風を感じ大地と一体化する……イオニア兄さん………!)

『な、何！我が必殺フランクシヨンを!』

当たるまで数センチで槍を下から弾きあげ、光速の早さで背後へ回る

「お前の敗因は相手を格下だと決めつけ実力を見誤った事だ………燃え上がれ小宇宙よ………ケイロンス・ライドインパルス!!」

『ふん、そのような攻撃など我が盾の前では……な、何!』

ケイロンスライドインパルスの威力を凌ぐかに見えた盾に亀裂が

広がっていく

『ま、まさか、いままでの盾への攻撃は私の盾を砕くものだったのか！
グアアアアアア!』

叫び声をあげアキレウス？は岩肌へ叩きつけられたのを見て聖衣箱のある場所に向かい抱き抱えようとした瞬間痛みが走った

「カハッ……」

腹部から伸びた円錐状の金属の塊……いやアキレウスが持っていた槍だと気づく

『に、人間ごときが！我らが機鎧神《アラユムチ・シイエナ》《ヤムウヌノ》より授かった機神鎧《フレイムド》を傷つけてくれたな！』

強引に抜かれた部分から血が溢れだし意識がもうろうとしながら膝をつきそうになる私の脳裏に声が響く

——シジフォス、この世界の希望を頼んだぞ——

ぐっと足に力を込めそのままアキレウスと向き合う。エルシドから託された希望を守らなければこの世界は……

『まだ立つか……エターナルテロメアーズでの修復はあとわずかで終わる我と違い、貧弱で限られた命しか持たぬ下等な人間よ。次でお前は終わりだ!』

——必殺フアंकション!——

再び光を纏い槍をつきだすアキレウス……だが私は意識がすべて澄みわたってる。それにこの感覚……あの時黄金聖闘士が持つ第七感（セブンセンス）を超越した

「……………」

『な、何!』

無意識につきだした拳から光が走ると同時に槍が跡形もなく砕かれ動きが止まるアキレウスを前にし小宇宙を高める

「燃え上がれ小宇宙よ、第七感を超えろ!目覚める第八感《エイトセ
ンシズ》」

『な、なんだこの力は人間が持つ力ではない!まさか我らと同じ!』

「私はお前が言う限りある命しか持たない人間だ…だが限りがある命を持つからこそあらゆる不可能を乗り越えられる…:永遠の命を振りかざし人を見下すことしかできないお前達には到底理解はできない!ケイロンス・ライドインパルス!!」

『ぎ、ギャアアア!この程度、再生機能で修復?できないだど!なぜだ!?!』

第八感に目覚めたシジフォスのケイロンスライドインパルスに天高く打ち上げられるも再生機能が機能しないことに驚きの声をあげる

「私たち聖闘士の闘法は物質を構成する原子を砕く、あるいは運動を止めるモノだ…:お前の再生機能が如何なモノであろうとも物質で生まれている以上内部は原子がある…:それを完全に砕いただけだ」

『バ、バカナアア———』

断末魔を最後に跡形もなく消えたのを見た私は膝をついた、腹部からの出血が止まらない。真央点を突いたとしてもあと数時間の命しかもたない

「ぐ、さあ参りましょう…:今から安全な場所へ私がお連れします」

聖衣箱から赤子を抱き上げ聖衣をしまい歩き出すも意識がもうろうとし始める…この子だけは安全な場所へお連れしなければ

人目を避け山中を歩き数時間、開けた場所へ出た私の前には赤い柱で作られた門に長く続く石階段…何故かわからないがサンクチュアリと似ていると感じながら石段を一步ずつ登り木造の神殿？のまゝに來た時ぐらりと身体が揺れ柱にもたれ掛かるように倒れてしまい立ち上がろうとするも力が全く入らない

ふと見上げると空には星が輝いている…腕のなかで眠る子もいつの間にかに目を醒まし笑顔で見ている

だがもう私は立ち上がれない…この子を守ることができ…な

「君！しっかりして!!」

耳に響く声に力を振り絞り顔をあげると黒い髪にワフク？姿の女性に傷を見て手当てしようとするも手を止める。助からないことを知っているからだ

力が抜けていくのを感じるも私は必死に意識を繋ぎ止め腕の中にいる子を女性へと手渡し優しく抱き抱えるのを見ながら背中に背負った聖衣箱を前に差し出し最後の言葉を紡ぐ

「……邪悪なるモノからこの子を守り戦つ……て…きたが…わ、私の…命はここまでのようだ………お願いです、この…子を……この子をお願いできますか」

「は、はい……この子の名前は？」

「そ、その子は…ぐ、ぐほっ！」

「無理をしたらダメよ！」

「……………いつか…わかります……………そして仁・智・勇を兼ね備えた者……………この射手座サジタリアスの黄金聖衣……………を……………授け……………くださ……………い」

「……………」

女性へそう告げ私の意識は闇に落ちた……………広がるのは只の無、だが最後の希望を託すことができて良かった

もしこの子が成長し目覚めた時は黄金聖闘士が揃っているはず……………まだ見ぬ若き黄金の聖闘士よ、君たちに……………を……………託す

「ぎ、消えた……………でもこの箱と赤ちゃんは……………でも安心してね。私があなたの代わりに、この子が成長するまで守ります……………どうか安らかに」

「どうした？…それに黄金の箱とお前の腕の中にある赤ちゃんは？」

「託されたの……………きずだらけの男の子に……………ねえあなた、この子を私たちの子供にしましょう」

いきなりの子供にしようと言う妻の言葉に困惑する夫……………だがその目から強い意思を感じとった

「……………わかった、では名前をどうする？」

「……………まだ時間はあるからゆっくり考えましょう、それにまだ寒いから風邪引いちゃうわよ。あなたその箱を家に」

「ああ」

黄金の箱を背負う宮司とすやすや眠る赤ちゃんをだいたい巫女服

姿の女性は社内にある家へ歩いていった

この日、神社の境内で倒れたきずだらけの一人の少年から託された赤ん坊は子供がいない宮司と巫女の養子となった日から、二十数年後に物語は動き出す

第十四話 黒兎

…教官は憧れだった…欠陥品の烙印を押された私のまえに現れ再び《最強の座》へと戻してくれた
でも《ある男》の話になると教官は

教官は完璧でなければならぬ…だから私は不要なモノを排除しなければならぬ

「…ツヒさん。ボーデヴィツヒさん？」

「…なんだハヤテ…」

「いえ…今日のは口にあまり合いませんでしたか」

「いや……すまないハヤテ…私は寮へ戻る」

「そうですか。ならコレを」

蒸籠から取り出したのは湯気が立ち上る甜点心（あんまん）を小さな蒸籠にいれ手渡した

「…コレは？」

「新作の甜点心です…この前いていたアイデアも少し取り入れてます」

「そ、そうか…じゃあありがたくいただきます…」

大事そうに蒸籠型の容器を手にドイツ大使館から出るラウラを送り、外交官に注文されていた本物の杏を使った《杏仁豆腐》を用意するため厨房へ入った時、頭に声が響いた

—疾風、あの黒ウサギ様子が変じゃなかったか—

(ああ、なにかを思い詰めてる…っ!?)

指先に痛みが走り見ると指先に赤い筋、中華包丁の先で切ったと気づくが…それ以上にラウラの僅かな変化をみて胸騒ぎを感じる

(…嫌な感じがします、早く燐たちと連絡を取らなければ)

そう心の中で呟くと瞬く間に杏仁豆腐をガラスの器へ盛り付け黄色いビークルに乗せ外交官がいる執務室に歩いていったころGGG本部へキサゴン、三式空中研究所(収納形態)では

「コレがISをゾンダー化させるマテリアル《ゾンダーメタル》か」

「解析した結果わかったのは重金属粒子が複雑に絡み合いある意味ニューロンにも似た組成と結晶体になっとなる…ヤツらバイオネットはコレをイゾルデの地下で大量に生み出したっらしい」

「…数十年前にゾンダー博士が提出したマテリアルと100%同一のモノだって確認もとれているよ。でも何が目的で生み出したままでは私にもわからないよ」

「こんなちっさいのがゾンダーISになるとは思えねえな」

「迂闊に触るでない! ワシ等もゾンダーIS化してしまうぞ!!」

掴もうと手を伸ばした火麻があわてて引つ込めたのを見てフウつとため息をつきながらゾンダーISコアを嚴重に封印しながらウィンドウを展開する、ソコには巨大な緑色の光を湛えた原石《Gクリスタル》が映る

「新たに判明した事がある、長官、参謀、何故燐達のISがゾンダーISと戦って取り込まれないかわかるかの」

「確かに、今までのゾンダーISは機械を取り込み機能を拡張してきた。しかし燐達のISは取り込まれるような現象すらもない…」

「アイツ等にとって弱点があるからじゃねえのか?」

「そうじゃ、燐達のISの動力に使われているGクリスタルから生み出されたGストーンを用いたGSライドが使われておる……GストーンはゾンダーISコアと相反する性質を持つ、いわゆる反物質じゃ」

「だからこそ取り込まれずにすんだんだよくでも私たちにとっての弱点になりうるからね……もしGストーンをも上回るゾンダーISコアが現れたら」

「まさか!」

「……Gストーンは力を失ってしまう、そして燐は」

第十四話 黒兎

翌日、IS学園 第三アリーナ

「……ふう……まだずれてますわね」

ブルーティアーズがアーマーへ戻しながら、スターライトMk-IIの構えを解き見るのは無数のターゲット……射抜かれてるもののズレが大きすぎる……ビッドへの確な指示を跳ばしながらの射撃管制及び最大稼働時におけるフレキシブルバーストおこなっていたんですけどまだまだ道のりは遠い

(まだ私の努力が足りないということですか……凍也さんに聞いてみたいですけど、公団に戻られているみたいです)

「……なにやってんのよ、あんた?」

「り、鈴さん?何でここに!」

「なにつて訓練しにきたって決まってるじゃない。」

「そういうあんたもずいぶん難しい事やってみるみたいじゃない」

素晴らしい鈴は甲龍を展開すると空へ上がりながら手招きする。セシリアも空へ飛翔すると互いに向き合った

「……………アンタ、少し聞いていい?」

「何ででしょうか?」

「…宇宙開発公団から来た竜崎凍也とどういう関係?もしかしてつきあってる?…」

「な、なにをいきなり!凍也さんとはまだお付き合いというか、まだ、その……………ま、まさか鈴さ」

「安心なさい、竜崎凍也をとったりなんかしないわ……………さて無駄話はここまでにして模擬戦を始めましょうか?あまり時間な……………」

会話を遮るようにびびく音をハイパーセンサーで感知し急速回避する二人、先ほどまで自分達がいた場所に光が走り抜けていく

「……………今のはレールガン?いえコレは」

「……………そのまさかみたいね……………ちよつといきなり攻撃してくるなんてどういうことよ」

セシリアと鈴が見る先には黒いISシユヴァルツエア・レーゲンを纏ったラウラ・ボーデヴィツヒの姿、右にマウントされたりボルバークanonから薬莖が飛び出し鈍い音と共に落ちた

「中国の甲龍、英国のブルーティアーズ……………カタログスペックよりも性能は劣化しているようだな……………やはり量産機に負ける第三世代機しか作れないようだな」

「……………へえ、アンタ喧嘩売ってるの…」

「……………今の言葉聞き捨てなりませんわね」

「本当のことを言ったまでだ。古臭いしきたりや伝統に固執するしかない英国代表、人の数の多さだけが自慢の中国代表……………機体もだがそれを操る候補生も随分と質が落ちているな」

ラウラの言葉と同時にブチチツと何かが切れる音が響く。鈴は双天月牙、セシリアはスターライトmk-2を静かに展開し構える表情からは怒りが読みとれた

「…ほう？人並みには怒れるようだな。こい、量産機程度に二人がかりで負けた代表候補生」

「やってやろうじゃないの！あとで後悔しても知らないんだからね！！」

「…………同じ欧州連合だから大目に見てましたが…………私の祖国に対しての侮辱は我慢なりません！お相手をしてあげますわよ！」

「くだらん口上はいい、とつとと来い」

ラウラの見下すような視線と言葉が合図といわんばかり鈴とセシリアは得物を強く握りしめ空を駆けた

◇◇◇◇◇

「シャルル、燐はどうしたんだ？今日は一緒じゃないのか？」

「え、えと、なんか宇宙開発公団から呼び出しがあったみたいだよ。確かガオファアの追加パッケージのマッチングしに戻るって、でも夕方には戻るよ」

第三アリーナへ続く道を歩きながら一夏の質問に答えるシャルル、これから日課であるIS操縦訓練へ向かうのだが燐の姿が見えない理由に納得する

「そっか…燐も大変なんだな。将来はISで外宇宙探索を目指してるからな…さて学年別トーナメントに向けて頑張…」

途中で合流した筈と共に第三アリーナへ入った同時に爆発音が耳に入る、特殊シールドを隔て見えたのは鈴の甲龍、セシリアのブルーティアーズ。そしてラウラのシユヴァルツェア・レーゲンが2対1の

戦いを繰り広げている

「鈴！セシリア！」

だが鈴とセシリアのISはアーマーが所々損傷、または損失しているのに対して、ラウラの機体は傷どころかダメージを受けた形跡すらもない

「くらいなさい！」

鈴の声と共に甲龍の両肩アーマーが展開と同時に空間圧作用兵器・衝撃砲《龍砲》が最大出力で真つ直ぐラウラを捉える

「無駄だと何故わからない。この停止結界の前ではな

」

スツと手をかざすと不可視の砲撃が瞬く間に無効化されたのを見て苦い顔を見せる鈴へ両肩から射出したブレードが多角的無限軌道しながらセシリアの援護射撃を回めぐり鈴の足を掴む

「鈴さん！く、やらせませんわ！いきなさい!!」

セシリアの声に応えるようにビットが射出され、正確な射撃が雨のように降り注ぐのを容易に回避していく

「理論値最大稼働時のブルーティアーズなら驚異だが、この程度ならば驚異にすら感じない、期待はずれだな」

落胆する表情すら見せず、左右同時に腕を交差。すべてのビットが蛇に睨まれた蛙のように動きが止まる。それを見てセシリアは狙撃するもシュヴァルツエアレーゲンのリボルバーカノンの砲撃で打ち消され、連射射撃に移ろうとした瞬間、強い衝撃が襲いかかり姿勢が崩れながらナニがぶつかったか理解した。

先ほどラウラに拘束された鈴を振り子の要領で自分にへ叩きつけられたとわかったセシリアの視界から、ラウラの姿が消えた

（アレは瞬時加速！）

「くっ……のー！」

双天牙月を分離し切り結ぶ鈴の刃とプラズマソードとワイヤーブレードで迫るラウラに徐々に追い詰められた時、再び装甲を展開《龍

砲》をチャージする、それを予想していたかのように実弾砲撃で破壊すると体勢が崩れた鈴へプラズマソードを突き刺そうとした

「させませんわ!」

二人の間に割って入りスターライトを盾にし腰アーマー…弾頭型ビットを射出、大爆発が起こり煙に包まれながら二人は少し離れた床へ叩きつけられた

「い、いきなり零距离はまずいでしょ!それにしても無茶するわね」

「す、すいません。でもコレなら………そ、そんな!!」

煙が晴れた先には無傷で立つシユヴァルツエアレーゲンに啞然となる二人を黒く濁った目で見る…その瞳には暗い炎が見えた

「もう終わりか?今度は私がいかせてもらおう」

瞬時加速同時にセシリアにゼロ距離リボルバーカノン砲撃、呆気にとられる鈴を蹴り飛ばし空へ舞う二人にワイヤーブレードを飛ばし巻き付け引き寄せるラウラの一方的な暴力が始まる

腕、脚、体的に的確に拳が叩き込まれ二人のシールドエネルギーが削られ瞬く間にレッドゾーンへ到達する。このままだとISが強制解除され命に関わる。そんなのをお構いなしと言わんばかりに攻撃の手をゆるめず容赦ない

「…やめろ」

小さくつぶやいた一夏の声に気づいたのかラウラがゆっくりと愉悅に満ちた顔を見せた瞬間、一夏の中で何かがキレた

「やめろおお!」

白式展開と同時にアリーナのシールドを零落白夜で切り払い中へ突入、そのままラウラへ大きく斬りかかる

「二人をはなせ!」

「ふん、感情的で読みやすいな……」

「な?体がうごかない」

振り下ろしたハズの零落白夜のエネルギー刃が止まっている、いや

身動きが出来ない事に驚く一夏に暗く淀んだ瞳に歓喜の色を宿しリボルバーカノンが向けられる

「やはりお前はあの人の弟である資格はないようだな……消えろ」

引き金を弾こうとした瞬間、弾丸の雨が降り注ぐと体の自由が戻るとラウラは軽く舌を鳴らした

「ち、雑魚がもう一人いたか」

「シ、シャルル？」

「僕が引きつけるから早く二人を!!」

「ああ!」

ラファールリヴァイブを纏ったシャルルの言葉にうなずくと一夏は二人を抱きかかえ瞬時加速をしようとする…がウィンドウが開きアラートが鳴り響く

(しまった! エネルギーが無い!!)

「邪魔だアンティーク……」

「エ? うわああああ!?!」

ワイヤーブレードをいつの間にかに展開しアサルトライフルを持つ手を拘束し明後日の方向へラファールリヴァイブ事アリーナの外壁に叩きつけリボルバーカノンを一夏へ向ける

「これで終わりだ……」

リボルバーカノンからの連続砲撃が一夏、セシリア、鈴に迫る…一夏は必死に状況を打破する為の方法を模索するも何も浮かばない。いやただ浮かぶのは仲間を護ることが出来ない後悔、無力さが支配する

(力が欲しい……あの砲撃をかわして皆を守れるぐらいの速さを……翼を! 夢の中で見たあの白い翼の戦士みたいに!!)

「一夏ああああ!!」

アリーナの外にいる筈の音が響くと同時にリボルバーカノンの砲

撃が着弾、煙が晴れると大きくえぐれた床が見え満足したのかラウラは一瞥し去ろうとした時、白い影がラウラの横をよぎる：振り返った瞬間、リボルバーカノンの砲身が切り裂かれていた

「な、ナニが……?!」

あたりを警戒するラウラの視線に映ったのは白式、いや白式よりもスマートで白いアーマーが腕、脚、胸部を覆い、左腕には赤い宝石が輝き頭部を覆い隠すようなマスクにも似たパイザーを纏った人物に驚きを隠せないラウラ。その姿はどこか神々しさを感じ取りながら箒は言葉を漏らした

「あ、あれは……私の神社に伝わる白き翼の剣士……まさか一夏が？」

「……………」

無言で立つ白式?の背後にある白い翼が乾いた音と共に開いた瞬間、姿が消え今度は右肩浮遊装甲が切り裂かれ爆発。あたりに散乱する中、再び姿を見せ赤い宝石が嵌まった左腕装甲から赤いビームブレイドで切りかかるもとつきにプラズマソードで受け止めるラウラの表情は驚愕の色に染まっている

「な、なんなんだ、なんなんだお前はあ!!」

「……………」

目にも止まらぬ剣速で切り結ぶ姿は騒ぎを聞きつけアリーナの管制室で見っていた山田麻耶は言葉を失い、織斑千冬は表情はこわばり手が震えている

(な、なぜだ、何故あの姿に!)

第二回モンドグロツソ大会で誘拐され、ドイツ軍諜報部の情報提供で一夏が監禁された場所へたどり着いた千冬が見た戦士の姿……一夏の姿に不安を覚えながら外部への情報漏洩を防ぐように山田先生につげ第三アリーナと不安な心と共に歩き出した

了

第十四・五話 受け継がれる獅子の魂、偽りの面に秘めた心

富士山麓、樹海を抜けた先にある大きく開けた場所にでると焼けおちた道場の柱が墓標のように立つ中に人影が見える

白地に金の装飾が施された冷却用特殊コート《インタークーラコート》に身を包んだ赤い髪の少年がひざをつき手を合わせ拜む姿、やがてゆつくりとその目を開けた

第十四・五話 受け継がれた獅子の魂、偽りの面に秘めた心

二年前

「師匠！オリエ！！」

レグルス兄貴に言われ二人がいる場所へ木々を駆け抜ける。二人の氣はもう近い、でも何かイヤな予感がする……不安な気持ちを振り払いようやく到着したオレが眼にしたのは

『死ねモブキャラ！』

「グアッ！」

師匠が黒い鎧を着た奴に為すすべもなく切り裂かれ地面へ倒れるもオリエを守るために立ち上がる姿……その時ナニカがぶち切れ小宇宙を高め拳を構えると蒼白い雷がバチバチ鳴り迷わず撃ち放つ。

「師匠から離れる！オオオ、ライトニング・プラズマー雷光放電ー！！」

『な？何！グアアアアア！』

蒼白い雷が無数の軌跡を描くと瞬く間に黒い鎧を着た奴は木偶状態になり為すすべもなく光に包まれ消える……今は師匠を、オリエを助けないと！

「師匠！オリ……!?」

オレがみたのは左肘から先と右足の付け根あたりがもがれたようになくなったオリエ、全身を切り裂かれ両脚をグシャグシャにされた

師匠の姿にガタガタ震え出す

「オ、オリエ……嘘だよな……目を開けてくれよ。そうだと腕探さなきゃ……探さなきゃ……」

「り、燐……やめなさい。オリエはもう死んだ……」

「う、うそだ……眠っているだけだ。早く腕と腕を探してくっつけなきゃ、くっつけなきゃ」

「やめるんだ、君も解っているはずだ……オリエから命の氣が感じられないことを……オリエは死んだのです」

死んだ、その言葉が何度も木霊する。息も絶え絶えになりながらオレの腕を掴み言うど師匠は咳き込み口から血をあふれ出した……何でだよ。何でこんなことに

「無様なものだ。いかに鍛錬を重ね研鑽しても人ならざる者達《バイオネット》の前では無力に等しい……ゴホッ！何時の時代も人は過ぎた力を手にしたがる……バイオネットはその過ぎた力を手にし人を不幸にする……それは悪意ある力……だ……」

「お願いだからもうしゃべらないでよ、このままだと師匠が死んでしま……」

『やってくれたなバイオダイナー！纏めて死んじまいなあ！』

怒声に思わず振り返る、さっきライトニングプラズマで粉みじんに砕いた筈の黒い鎧？が加速しながら太く鋭い槍を突き出し突進してくる。このまま避ければ師匠が死んでしまう

オレは二人から離れ真っ直ぐ突っ込んでくるそいつの前に立ちはだかる……鈍い衝撃と熱い痛みと共に胸奥から熱いものがこみ上げ口からあふれる

胸元には真っ黒な黒い槍が深々と貫いている。

「……ゴボ……」

「燐……」

薄れていく意識の中、レグルス兄貴の音が響く。みるとオレをみながら立ち尽くしている。それを最後にオレは意識を手放した

★★★

『く、この出来損ないのバイオダイスがモブキャラをかばいやがつて！……ん……手前もこのモブキャラの仲間か！』

「……………」

『オイ、なんかしゃべろよ？もしかしてお漏らしでもしましたかあ？大層な金ピカ鎧を着たおチビちゃん？』

「……………」お前が蓮童、オリエ、燐をやったのか」

『やつとしゃべりまちたね〜おチビちゃん、イエス♪イエス♪イエス♪その通りだよ〜出来損ないのバイオダイスとモブキャラ二匹は俺様がやったんだよ〜さてオシャベリタクイムは此処まで！バイオダインを生きたまま回収するのが目的だったけど死んじゃまったからな……さてモブキャラのおチビちゃんも寂しくないようケツの穴から口先までこの槍で貫いていやるよ〜』

下卑た笑い声を響かせながら槍に貫かれたままの燐ををまるでゴミを払う様に投げ捨て構えたとき、周囲が明るくなり始めた…黒い鎧？の周りに無数の球体が銀河を描くように漂い浮遊している

「……………」お前が傷つけた三人は俺の親友と弟子だ…今から放つこの技は俺の弟子…燐が編み出した」

『な、何だこの光は！』

背後に黄金の小宇宙を高まらせやがて黄金の獅子へ変わり手を前へかざす、球体がまるで煌めく星々のように輝きを増していき狼狽える黒い鎧へまるで吸い込まれるように疾走、すべてが体内へ入った

「銀河、いや星雲すべてを無に帰す、俺の後継者《獅子座レオの燐》の最大奥義…フォトン・バースト！ー光子破裂！ー」

『な、何だ内側から身体が原子レベルまで破壊されて、イ、イヤダ、まだ死にたくない！モブキャラキャラを殺して…殺して…：ナ、ナハト様ああああああ!!』

断末魔の叫びが響く前に内側から内包された攻撃的小宇宙が連鎖し破壊力が増大。超新星爆発いやそれ以上の圧倒的破壊力を秘めたフォトンバーストの前に跡形もなく消え去りクレータだけが残される

「レ、レグルス」

「れ、蓮童！しっかりしろ!!」

「ワ、私より燐を…：まだ命の氣は消えていません…」

俺は近くの岩に倒れた燐を抱きかかえ目を背けてしまった…：胸元に大きな貫かれた跡から見えるのは人工臓器、金属化した骨…今は蓮童にみてもらわないと

「蓮童、燐は生きているんだよな？」

「…はい、おそらくは《Gストーン》と《細胞X》の力が辛うじて命を繋いでいます。ですが心臓が潰されて細胞Xでも復元できません…：獅童先生たちが来るまで持ちこたえられるか」

「…：蓮童、心臓があればいいんだな」

「な、なにをするのですかレグルス！聖衣を脱いで？」

驚くなよ蓮童、今の状況を変えるにはやるしかないんだ。獅子座の黄金聖衣がオブジェ形態になるのを見届けゆつくりと心臓がある位置へ手を添え迷わず貫き通し無傷のまま取り出した心臓が黄金の輝きに包まれる

「な、なんてことを！あなたは死ぬ気ですか!？」

「…：蓮童、俺はどのみちいつか消えてしまう。もしかしたら、この日の為に生きていたんじゃないかって思うんだ…」

身体が透けていくのを感じながら俺はオリエの亡骸へ近づくと頭

を軽くなでた。まだまだ生きてたかったよな、痛かったよな、苦しかったよな、守れなくてごめんオリエ…俺たちも直にそちに逝くからな
「……蓮童、俺の心……臓を燐……に……お前の氣操術なら……」

「わかりました。燐、最後までアナタに教えることができずに申し訳ありません…ですが、これから先に何があるうとも乗り越えていけると信じています……ゴホツ…レグルス、先に逝ってオリエと待っててください……」

「ああ、……またな…蓮童……」

黄金の輝きを秘めた心臓から光があふれ燐を包むとレグルスは笑みを浮かべながら粒子へ変わり天へ昇るのを見届け蓮童は呼吸を整える。身体が輝きださせながら痛々しく貫かれた胸へ心臓を入れる。瞬く間に細胞Xが滲み出し融合する中、蓮童はスツと目を開くと右手を塞がりつつある傷の上へ置く

「……富士の霊峰に集まる氣よ…若き獅子に新たな命を！御鷹流《氣魂開闢》！」

辺りにすさまじい光が風と共に溢れやがて収まると空に獅子座が光り輝いた…数時間後。異常に気づいた大河、火麻、レイジ、束がみたもの

「師匠、師匠！目を開けてくれ！師匠!!」

獅子座の黄金聖衣が威嚇するように立つ背後でオリエと寄り添うように亡くなった蓮童、二人を前にし膝をつき涙を流す燐の姿だった

★★★★★

「師匠、オリエ、レグルス兄貴。オレは三人の命をもらって今日も生きているよ…みんながオレのために託した命のおかげだよ……」

焼け落ちた道場から少し離れた場所に立つ燐の前には二つの墓標と黄金の獅子《獅子座の黄金聖衣》が鎮座

している

「…………オレは師匠やレグルス兄貴のように強くはないけどバイオネットの連中のせいでオレたち以上に不幸になる人たちを守りたい…みんなから託された命、オレの身体はそのためにあるんだって思えるんだ…じゃあ時間だからIS学園に戻るね。今度来るときは皆の好きなものをもってくるよ…またね」

スツと立ち上がり軽く一礼、そのまま背を向け歩き出す燐…今日は燐にとって大事な人たちが亡くなった日。そして三人から命を託された忘れられない日…

三人と共に過ごした日々は燐の心を鍛えハーフサイボーグの身体を受け入れ、人としての生を歩み《勇者》として戦う決意、バイオネットから人々を守る《勇者王》として戦う運命が決められた日



「社長、日本へ出発用意ができました」

「あぁご苦労、しばらくお前に本社を任せた……さて一向にデータを送らん役立たずに私自ら催促せねばな、まあ期待もしていないがな…」

「……そうですか」

「…では行ってくる。くれぐれも彼らの機嫌を損ねるなよ…」

「いってらっしゃいませアルベール社長」

深々と頭を下げる副社長に一瞥もせず専用ジェットに乗り込むのはデュノア社長アルベール・デュノア。彼が向かうのは日本のIS学園で行われるクラスマッチを観戦と言う名目で向かう彼の表情は野心に満ちた先程とは打って変わり苦悩に満ち溢れている

(……あと少しだ……あと少しですべてが終わる…ソレまでは…)

心の中で呟いた言葉は誰にも聞こえない…彼以外に座るものがないキャビンの天井を虚ろに眺め胸元から取り出したロケットへ目を移し乾いた音と共に開くと若い男女の姿が納められている

(……まさかノワールの子と出会うとはな…これも運命か…)

まだ若い頃のアルベールとシャルルとよく似た金髪の女性、そして黒髪に前髪を切りそろえた眼鏡をかけた女性マヤ・ノワール：いや隣の母《獅童マヤ》の名を知るアルベールはやがて深い眠りへと誘われた

彼が見る夢……それは何かは誰も知らない

第十四・五話 受け継がれる黄金の魂、偽りの面に秘めた心

第十五話 風と雷（前編）

「なんなんだお前は！」

……なんだこれ？なんで俺コイツとたたこつてるんだっけ……それによくわからないけど左手が熱くなる度に力が……力が体の奥から溢れてくる

ー空は良い……何処まで穢れなき蒼き空は我らソルダートの誇りを
顕す……ー

ーだ、誰だ！ー

真つ青に何処までも青い空が目の前に広がる。俺の前に白い鎧を着た騎士が俺をまつすぐにみている

ー……ほう？以前と違い私を認識できる様になったか……どうやら戦士の自覚が目覚めたようだな。Jジュエルの戦士として果たすべき責務をー

ー待ってくれ！俺はJジュエルの戦士なんかじゃない……責務つてなんなんだよ！ー

ー……聞け、誇り無き力、信念無き力、己のためだけに振るう力は只の獣以下だ、お前の前にいるのは力に溺れた意味を理解せぬ者………《誇り無き者》の一人だ………

ー誇り無き者？……ー

ー……科学という悪魔に信念と魂を売り渡し力を手にし神と名乗るもの……与えられた力を欲望のままに振るう二度目の生を受けた愚者をそう呼ぶ……《誇り無き者》は平気で周りの人々を傷つける。まるで神にでもなつたようになー

白い鎧をきたヤツの言葉はまるで染み込むように響く…：そうだ目の前にいるのは愚かな者、誇り無き者…：ならばやることは一つだ

「……誇り無き者は敵だ！」

俺／私は目の前の敵を斬る…：身体を捻りラディアアンアトリツパーで高振動ワイヤーを切り払い黒いISの眼前に迫り懐へ潜り込み蹴りを叩き込みガードを崩す、がら空きなった上半身めがけビーム刃を振り抜く

信じれないって顔をするなコイツ…：慢心が負けを呼ぶ事を身を持ってしれ！

「止めるんだ一夏ああ!!」

悲鳴にも似た声…：箒の音が耳に届いた時、目の前が真っ暗になる…：身体から力が…：抜け…：コレは…：Jジュエル凍…：結…：コマ…：ン…：ア…：ル…：マ…：か？

「一夏ー！」

「……………」

誰かに抱きかかえられ、恐れの色に染まった瞳を向けるアイツをみたのを最後に意識を泥沼のような闇へ落ちていった

第十五話 風と雷（前編）

IS学園 保健室

「……………ん……………んは？」

身を起こしあたりをみる。保健室のベッドに寝かされている、それに左手が暖かい、箒が俺の手を包むように握りしめイスに座って眠ってる…：それに、ずっと昔にこんな光景を見た気が……

「J、手を出してください。アジャスタを」

「私なら大丈夫だ。今は身体をいたわれ…この惑星の環境になれてはいないのだから…」

「な、何だ？今の…ん？なんか周りが騒がしいな…箒を起こさないようにカーテンの隙間から外をみると」

「イタタツ！優しくしなさいよアンタ！」

「少しじつとしてください。打ち身に軽い打撲これだけですんだのは絶対防御のお陰ですね。凰さんの治療はこれで終わりです…さあ、次はオルコットさんです」

「は、はい…あの、その凍也さん…痛くしないでくださいね」

「…わかりました。まずは…」

「軟膏を手に出して背中の中へ赤く腫れてる箇所へゆっくりと伸ばしていく」

「ひゃん!」

「あ、すいませんオルコットさん。冷たかったですか？」

「い、いえ。お気になさらず…続けてくださいまし（凍也さんの手、スゴく暖かい…なんかクセになって…アン!）」

「…セシリア、スゴく気持ちよさそうな顔をしてるな…み、見なかつたことにしよう、流星に人の恋路を邪魔したらなんたらって言うからな。しかしセシリアが凍也の事をな。ん？」

「ん……」

「よう、起きたか箒」

「…あ、ああ！か、身体は何ともないな？痛いところも無いのだな？」
パって手を離し慌てながら身体の具合を聞いてくる箒…何かしたのかな俺？

「まあ、すつきりした感じかな？箒が手を握ってくれたお陰かな…あ、看病してくれてサンキューな」

「そ、それならいい。それと千冬さんから言伝あるんだ…」

「千冬姉から？」

『一夏のIS《白式》に異常がみつかったからメンテに出しておく。一応、トーナメントまでには終わらせて返す。それまでは獅童、篠ノ之と無理しないように訓練するように』……だそうだ」

「…そっか。でも返ってくるならいいか。で千冬姉は？」

「…千冬さんは白式を倉持技研に届けにいつてる。と、とにかくだ、今は休め。明日からは私と獅童で特訓だ。でだ、覚えてないのか？」

「何のことだ？確か俺…あいつの攻撃を受けて…それから…ウウ！」

錐をねじり込むような痛みが頭の芯から響く…それに誰かと話していたような気がする……く、頭が痛い

「だ、大丈夫か？無理はするな、さ、早く横になれ」

「ワリイ。じゃあ少し眠ったら部屋に戻るわ…箒は先に戻っていいぞ」

「い、いや、私は残る。病み上がりの一夏を残していけるか……それに？」

「い、いや何でもない……………とにかく休め。いいな」

「お、おう…」

箒の言葉に甘えて眠るか…でも何か言い掛けてたのを気にしながら、眠りについた…でもなだれ込んできたクラスメート達から今月末のタッグマッチのパートナーを組んでくれやなどで対応してたら休む時間が無くなってしまった

★★★★★★

IS 学園最深部

「……………レイジ先生、どうなんですか」

『あわてるでない。東くんが解析を始めたばかりじゃよ…千冬くん、この映像は二年前に君が見た一夏君の姿と酷似しておる。ドイツ第三世代機を歯牙にかけぬほどの機動性、さらには高出力のプラズマソード…もはやコレは白式ではない。全くの別物じゃ』

「わ、私が聞きたいのはそんな事じゃない！一夏は、一夏は大丈夫なのかと聞きたいんです！……………あんな姿なんか、もうみたくなかった……………普通の生活を送って欲しかったのに……………」

『す、すまん。千冬くん、君の気持ちを考えずに言ってしまうて……………』

目を伏せ謝るレイジ先生の姿を見て、慌てる千冬。二人が会話するのは数時間前の出来事。一夏の白式が有り得ない変異をとげ、かつての教え子であるラウラ・ボーデヴィツヒが駆るシュヴァルツェア・レーゲンを

圧倒的な力を見せたのを見て、急ぎ千冬が駆けつけた時には赤い光剣の刃がラウラの胴を風ぐ寸前で消え、元の姿へ変わり白式を強制解除し倒れる一夏を抱きかかえた時の胸の内は不安で一杯だった

一夏を箒に任せ、あの姿を知るレイジへ連絡を取り《白式》の解析を束に頼んだ千冬はラウラが起こした事の顛末には自分が深く関わっていることを知り後悔していた

(……全て私のせいか……)

胸の内で小さくつぶやき、束からの解析結果をただ待つしか出来なかった

★★★★★

「……………」

真つ暗な室内で小さく毛布をくるまる少女ラウラ・ボーデヴィツヒ…その瞳は虚空を捉え、その手は微かに震えている

その原因は、数時間前の変異した白式をまとった一夏に対しての底知れない力。今まで自身を築き上げてきた経験、誇り、そして世界最強のIS操縦者、自らを鍛え上げた教官にしてブリュンヒルデ《織斑千冬》の教導がガラガラと音を立て崩れた

「……………」

手の震えが止まらないラウラの手に何かが触れる。竹で編まれた蒸籠を手取る

ーボーデヴィツヒさん？今日はどうしました？ー

ーボーデヴィツヒさん。今日は新作が出来たので食べてみますか？ー

ー……そんなに慌てたら、喉を詰まらせま……ああ？……いつてるそばから。はい、ゆっくり飲んでくださいー

ー迷惑じゃないかですって？そんなことないですよ。ボーデヴィツヒさんのおかげで新しいメニューも出来たんです。それに……いえ、何でもないですー

「…………ハヤテ…………ハヤテ…………」

気がつくとラウラは学園の外へと出ていた。向かうのは何時も疾風が料理を振る舞うドイツ大使館から離れた場所にあるコンテナハウス。疾風の顔がみたい。その一念だけでようやくたどり着いたラウラの目には堅く閉ざされた扉、その向こう側には人の気配すら感じられない

ラウラは待つ…コンテナハウスの主《竜崎疾風》を。だが無情にも時間はただ流れていく。ポツポツと雨が降り始め、やがて勢いを増しその身体を濡らしていく

「…………あはは…………」

乾いた声が響く…

「…………わたしには最初から何もなかったのだな……………あはは…………」

悲しみ、喪失、絶望…それらの感情が緋い交ぜになった声が虚しく響く。やがておぼつかない足取りで学園へ向かい歩き出した



学年末トーナメント開催の日、俺は隣、箒、シャルルと共に発表された組み合わせに目を疑った。

「最初っからアイツとやり合うのか…コンビをくむのはシャルルか」

「仕方ないさ。一夏くんは篠ノ之さんと組むんだろ。ならば有利だと思うな…」

「何でだよ？」

「一夏くんと篠ノ之さんは幼なじみだ。つまり互いの長所と短所を補いながら戦うことができるはずだ。それにボーデヴィツヒさんのI

S対策は万全だからね」

「そうだな。そろそろピットに向かうか。メンテから帰ってきたばかりの白式だけど勝ってみせるさ」

「その意気だ。その前に篠ノ之さんを迎えにいったらどうかな？あんまり待たせると怒るかも」

「わ、わかった。またな燐」

肩を軽く叩き、俺は箒を迎えに通路を慌ただしく駆け出した。途中、千冬姉とばったりあって「通路を走るな」って怒られたけど

「さて、オレもそろそろ行くかな…ん？」

一夏さんと別れたオレの目にシャルルの姿が見えた。そろそろ試合が始まるに何であんな所に？ゆつくりと歩み寄るとシャルルとは別な声が耳に入る

「久しぶりだな…シャルル」

「……はい…父さん…」

黒いサングラスに金髪をオールバックにし、顎ヒゲに黒いスーツに朱いネクタイ姿の長身の男性を父さんと呼んでる、まさかシャルルの父親なのか

「さて、本題に入ろう。織斑一夏の白式、獅童燐のガオファアのデータを渡してもらおうか？」

「え？でも連絡するまで指示を待って…」

「私からの指示を待っていただと？言われなくてもデータを入手するぐらいは出来なかったのか……何の為に前を日本へ送ったのか理解していなかったようだな。流石は《あの女》の娘だけはあるな。指示がなければ動けないようなグズなお前にも出来る仕事を与えた

「というのにな、身体を使って誑し込む事も出来んとは」

「だって、ボクは…ボクは…」

顔をうつむかせ言葉を漏らす足元に何か落ちる。シャルルが泣いている…それ以上言うなよ。

「…やはりお前なぞに期待した私がバカだったようだな。そんな役立たずにはもう用はない、娘ですらもない。デユノアの名前も捨て、二度と私の前に姿を見せる…な？」

言い切る前にオレは胸ぐらをつかみあげていた…我慢できなかった…

「あんたは、あんたはシャルルの父親だろ！なんでこんなひどい事言えるんだ！血を分けた娘なんだろ!!」

「り、燐？」

「それがどうした、子は親の言葉に従うものだ。リン？…そうか、お前が男性操縦者の片割れ《獅童燐》か…このグズにだいぶ入れ込んでるみたいだな。この役立たずが欲しいのか？ならくれてやる…変わりは幾らでもいるからな」

…もう、我慢できない。堅く握った拳が顔面へ穿たれようとするも寸前で止められる。華奢な手…シャルルが顔を俯かせながら掴んでいる

「…燐、ボクなら平気だから…殴るのは止めて。この人はIS学園に招かれた来賓だから。お願い…」

来賓…つまりは国を代表して来た…：殴れば国際 I S 委員会を通じて学園に迷惑がかかる。熱くなつた思考が冷えゆつくりと手を離すと、まるで意にも介さず風に襟を正し此方を振り返らず、その場から歩き去っていった

「……シャルル？」

「………少しだけ。少しだけ、このままで居させて。お願い」

顔を埋めるシャルルの言葉…痛々しくてオレは何も言わず、ただ優しく背中を撫でるしかなかった。そんなとき聞き慣れたメロディーと同時にシャルルの髪が淡い緑に輝く、慌てて懐から端末を取り出す。

《大阪に素粒子 Z 0 反応確認。 G G G 機動 I S 部隊は出動されたし》

……こんな時に素粒子 Z 0 反応？しかも大阪。それに今の状態のシャルルを連れていけない。東さん達、三式空中 I S 研究所メンバーによると、ゾンダー I S コアの復元時間は数分。 G バリアで封印すれば二時間は持つと言ってる。それに大阪なら I S 学園まで三段飛行甲板 I S 空母なら往復一時間以内で着ける距離。でも……

「…行つて燐…」

「え？」

「ボクなら平気だよ。それに大阪には燐の力を必要としてくれる人がたくさん待ってる。前にも言ったよね…：『この力はゾンダー I S から人を守る為に神様がくれた力じゃないかって』…：だから行って。ボクは燐からたくさんの元氣をもらったから。ね」

「シャルル…：…わかつたよ。行つてくる！なるべく早く戻ってくるから」

「うん、いってらっしゃい。燐」

精一杯の笑顔を見せるシャルルの声を背に受けて走り出す。オレ

の力を必要としてくれる人達が待つてる場所へ…

★★★★★

「来たか…」

「ああ、来てやったぜ」

淡々としながらも冷たい眼差しを向けてくる。隣にはシャルルの姿。抽選で決まったらしいがアイツの様子をみる限り心を許し、信頼してもいないって空気を帯びている

「一夏、そろそろ時間だ。気を抜くな」

「わかつてる。あとは打ち合わせた通りに…」

カウントが始まり、やがて0を示し開始を告げる音が鳴り響く。まづ仕掛けてきたのはラウラ、リボルバーカノンからの砲撃が火を噴く。それを小刻みにスラストスターを動かしかわしていく。

「ボーデヴィッツヒさん、援護するよ！」

オレンジ色の装甲が目立つラファール・リヴァイブを纏ったシャルルが銃を構え撃ってきた。身体を捻りながら旋回するも火線が追いかけてくる

そこに影が割り込む。影の正体は打鉄をまとった箒の姿、回避運動を取りながら間合いをつめブレードで横風ぎに切り払う。がマシンガンから近接ブレードへ持ち替え防ぎシャルル

「やるね篠ノ之さん！でも負けないよ!!」

「デュノアこそ、その切り返しの手は感嘆に値する。それより、相方を放っておいていいのか！」

「え？うわっ!？」

近接ブレードで押し返すと同時に、左手にアサルトライフルをコー

ル、銃身下部に配置された円形の弾頭を打放つ。迷わず切り払うシャルルの前でまばゆい光が照らし視界を奪う

普段の筈ならば使わない手……それ以上に組み上げられた戦略的行動の裏には燐からの指導があったからだ

――状況にあわせて柔軟に行動する。常に変化するのは戦いの場では当たり前だ。今月末のクラスマッチはツーマンセル、互いを補い支え共に勝利する事が目的だ。当然、一対一の戦いを持ち込まれた際の対応もやるよー

ーお、おう／わ、わかったー

二人の為に訓練メニューを考え、実践と改善点を探しあうを繰り返したかいあって、二人の間には強い信頼関係が生まれていた……

ーお、やってやがんな。織斑、篠ノ之、俺も参加するぜ!!ー

ーち、ちよ!火麻参謀!近接ブレードを振り回したら危ないですから!!ー

……火麻の乱入もあつたが、シャルルの足止めをした筈はそのまま一夏と合流、真っ直ぐにラウラのいる場所へ向かう

「……………少しは知恵を付けたか、だが私には通用しない……………」

「そうかよー!」

雪片を構え切りかかる。それをプラズマ手刀で受けワイヤーブレードを射出、絡め取ろうとする……が、背後に回り込んだ筈が距離を取りながらアサルトライフルをバラムくように弾丸の雨を降らせる。が寸前で不可視の壁に阻まれたように弾が止まる

「……………無駄だ。この停止結界《A I C》の前では……………」

「それはどうかな!今だ!一夏!!!」

「オウー！いくぜ！」

声に気づき振り返ったラウラが見たのは零落白夜を解放した雪片
式型の青白い刃が自らを切り払う光景、踏みとどまることが出来ずに
勢いよく、アリーナの壁へ叩きつけられ当たりに土煙が舞い上がる
「や、やったのか？」

★★★

負けた…もう私には何も無い……いや、最初からなかった…

朦朧とする意識の中、一人ごちるラウラの脳裏には自らの出生から
現在までの記憶が溢れ出す…しかしそれすらも色あせやがて碎けて
いく。

ー…私は何のために生まれ生きてきたのだ…ー

「我が輩がお答えしましょうか？遺伝子強化試験体C—0037…ラ
ウラ・ボーデヴィッツヒ少尉」

「私を知っているのか…出来損ないと笑いに来たか」

「いえいえ、あなた様のお力になろうかと、思い出しなさい。あなたが
ココへ来た理由を……大事な大事な織斑千冬をかつての姿に取り
戻すためでありまゝす。そのための力をあなたへえ〜プレゼント！
フォーユー!?!」

クルクル回りながらラウラに近づき取り出すのは紫色に輝く結晶
《ゾンダーメタル》。それを押し付けるように額へ当てると瞬く間に
融合、紫色の光が怪しく輝く

「さあ！行くのであゝる！我が輩のかわいいゾンダーIS！レッツゴ
オッー！」

★★★

「……！危ない一夏!!」

箒の音が響くと同時に身体が押され、光が走るとアリーナの壁が大きく震え貴賓席にいる名士達も慌てる中、土煙から現れた姿に唾然となる一夏

黒いウサギと人が融合した何かが両肩から巨大な砲を構え立つ姿に数ヶ月前に現れた馬型ISを彷彿させるフォルムに見覚えがあった

「一夏！箒！逃げて！あれはゾンダーだよ!!」

『ゾ、ゾンダーアアアアアア!!』

咆哮をあげるや否や、両肩の砲門が火を噴き一夏と箒に迫る。辛くも散開し回避するもあまりの破壊力に地面に大穴があくのを見て青ざめる。だが下手に逃げればアリーナのシールドが貫かれ、観客席にいる人達に被害が出る

「あれはまさかボーデヴィツヒなのか!」

「間違いないだろ！燐も居ないし、箒！千冬姉と連絡は!」

「ダメだ！通信がつかない！どうしたら」

(燐と凍也は大阪に現れたゾンダーISとの戦闘中…コアの状態にならないと浄解出来ない。どうしたら)

「よけろシャルル!」

声に気づいたシャルル、その眼前には黒いウサギと人が融合したシュヴァルツエア・レーゲン・ゾンダーが迫ろうとしたその時だった

ー廬山！双龍飛翔!!ー

凜とした声と共に、緑と黄の双龍が行く手を遮り押し返した。三人の前に黄色いダンプカー?、その上に立つ紫色の人民服に大きな編み笠をかぶった少年が構える姿…地響きを立てながら降り立つ黒ウサギ・ゾンダーISをみる

「……大丈夫ですか?」

「は、はい……あなたは？」

「詳しく説明する時間はあまりないので…織斑一夏くん、篠ノ之箒さん、シャルル・デュノア隊員はこの場から離れてください…いくぞ雷龍」

『ああ、一週間、京都、山形、四国を三回巡って迷いに迷って岩鉄に案内されてようやくIS学園にたどり着いたんだ。いくぜISチエンジ!!』

黄色いダンプカーが瞬く間に分離、少年の身体へ装着。電磁架台《デンジャンホー》へ登場する姿に既視感を感じた一夏、シャルル。そしてアリーナの観客を避難誘導するセシリア、鈴がよく知る人物と似ている

(ア、アイツ、あの時の緑と黄のIS！)

(まさか、凍也さんの弟《竜崎疾風》さん?)

『…さて、黒ウサギを助けるか、少し荒っぽいが我慢しろよ！ティガオ4！ラアアアアイ!!』

『ゾ、ゾンダアアアアアアアア!?!』

高出力の雷が黒ウサギゾンダーISの全身を包む。たまらず声をあげた時、疾風の耳に声が響く

ー…助けて……だれか…ー

《ボーデヴィツヒさん? やめろ雷龍!!》

疾風の声に放電を止める雷龍。黒ウサギゾンダーISは巨大な砲門を向け砲撃する。雷龍のアーマが弾けるように消え、変わりに緑のアーマが装着。同時にミキサータンクを正面に構える

「ティガオ2！フォンダオダン!!」

ミキサータンク正面の砲口が開き、超圧縮された空気弾が迫る砲弾とぶつかり相殺する。胸を撫で下ろす疾風に雷龍の声が響く

『おい、疾風！なぜ僕と変わった？』

「ボーデヴィツヒさんの声が聞こえた…苦しんでいる…雷龍、アレをやるぞ」

『わかったよ。黒ウサギのあんな声聞いたらやるしかないだろ…二度目のシンメトリカル・ドッキングを』

黄色いダンプカーのライトの明滅に頷くと大きく空へ飛翔する…三式空中研究所でゾンダーISコア解析作業を進める束の前にシンパレート・ウインドウが開いた

「こ、これって疾風くん、雷くんのシンパレート・ウインドウ。日本に帰ってきてるんだ！」

60、70、80、85、89、90、99…そして100を超えシンパレートウインドウにドッキング可能を示すコマンドが表示された

『シンメトリカル！ドッキング!!』

疾風の纏う風龍、隣を飛翔する雷龍がバラバラに分離、装甲形成と同時に左に緑、右に黄色のパーツが装着。左腕にシャオダンジイ、右腕にデンジャランホーが楯のように付き、最後にヘッドギア、胸部装甲がドッキングし地へと降り立つ

『撃ッ！龍ウウ神ッッ！』

「ははは、また合体した。もう驚かないぞ…」

「一夏、多分アイツも燐の仲間だ…」

やや、驚きながら疾風ごと、IS撃龍神をみる三人をよそにウルテクエンジン全開で黒ウサギゾンダーISへ接近、互いの拳を掴むよう

に握り踏ん張る…

『く、なんてパワーだ！第三世代ISをベースにするとココまで上がるものなのか!!』

『ゾンダアアアアアアア!』

『な、身体が動かない!まさかAICか!!』

両腕が塞がり、さらにAICにより身体の自由を奪われ、肩部砲口に光が集まるのを間近にし、拘束を解くべく必死に動こうとする疾風と雷龍にゾンダーISコアに取り込まれたラウラの声が響くと同時に様々な光景がよぎり、気づくと真つ暗な空間に立っていた

ーココは?ー

ー多分、黒ウサギの心の中だ………こんなに冷たくて暗い場所にしたのかよー

ー……雷龍、ボーデヴィツヒさんは私達と《同じ》だ……ただ違うのはー

ーわかってるよ。さっさと探そうぜ……ボーデヴィツヒをー

ーその必要は無いようだー

疾風の視線の先には顔を俯かせ座り込むラウラの姿。近寄ろうとするも見えない何かに阻まれ近づけない……やがて疾風はゆつくりと口を開いた

ーボーデヴィツヒさん。私の声が聞こえますか?ー

ー……聞こえているー

ーこんな所から早く出しましょう。ボーデヴィツヒさ……ー

「嫌だ。私は何もかも無くした。教官の弟にも勝てず、今まで私が積み上げてきたモノはすべて壊れた……私は弱い。最強である私は失敗作だったんだ。生きる資格なんて無……」

「ボーデヴィツヒさん。あなたは強いですよ」

「な、何をいう。私は負けたんだ……」

「あなたはずっと、真つ暗なココで必死に耐えてきた。私がボーデヴィツヒさんの立場だったら耐えきれないでしょう。あなたは負けた事で初めて《自分の弱さ》に気づいた。ならばコレから少しずつ、一歩ずつ確実に、あなただけの強さを探しましょう」

「こんな、こんな弱い私でも強くなれるのか？生きていいいのか？」

「はい。さあいきましよう……」

優しい眼差しと声に、のぼされた疾風の手を恐る恐る握るラウラ……暗く冷たい空間に亀裂が生まれ、砕け眩いばかりの光が溢れ出した

『ここ、ココは？現実世界に戻った。A I Cが解けている……今ならばいける！』

両腕に力を込め地を蹴りそのまま、頭に乗りそのまま腕を捻るとたまらず手をゆるめた。それを見逃さず大きく腕を振るう撃龍神のシヤオダンジイ、デンジャランホーに風、雷のエネルギーがほとぼしり、さらに強くなる

『ボーデヴィツヒさん！少しだけ痛いですけど我慢してください！！唸れ疾風！轟け雷光！』

両腕に蓄積された腕を頭上に構えた時、雷と風のエネルギーがある

スーツ姿の少女《ラウラ・ボーデヴィツヒ》が憑き物が落ちたかのような表情を浮かべながら、そのままぐらりと倒れるのを見た疾風は慌てて抱き止めた

「ふう〜終わったよ。えと……」

『ああ、自己紹介がまだだったな。俺の名前は撃龍神。またの名を竜崎疾風だ。よろしくな………んで聞きたいことがあるんだが凍也兄貴はいるか?』

と、先ほどまでと打って変わり砕けた感じで三人に話しかけ聞いてくる撃龍神こと竜崎疾風。あたふたしながら答えようとした時、シャルルのラファール・リヴァイブに通信が入り耳を傾けたシャルルの耳に信じられない言葉が響いた

『デュノア隊員、急ぎこちらに着てください! 燐が歪曲空間に取り込まれました!! あなたの力を貸してください!!』

「え!？」

第十五話 風と雷（前編） 了

第十五話 風と雷（後編）

「り、りつくくん……返事をして、お願い！」

「落ちつくくんじゃ束君、今はあの空間の解析を優先するんじゃ……凍也くん、炎竜周辺の避難状況は？」

『避難誘導は完了したぜー！』

『それより、あの空間はいつたい！獅童博士、たば……アリス博士解析を急いでください』

呆然となりながらインカムで呼びかける束の目に映るのは、空間の捻れを示す値、そして不可思議なドーム状の球体が輝き、少し離れた場所にはダイバイディング・ドライバーが深々と地面に突き刺さる映像が映し出されている

様々な角度からデータ計測、表示したモニターを複数展開、解析するレイジと束はある結論にたどり着いた

「……あの球体はおそらく、アレステイニングフィールド、レプリケーションフィールドで形成されたダイバイディングフィールドに何らかの干渉……例えば超高速で運動する物体が存在したせいで生まれたものじゃ」

「それに、クラインスペースを形成しているから、中からも、外からも干渉できない。メビウスの輪と同じ原理の構造だよ……でもこのままじゃ、このままだと後三十分で……リツ君、ううん大阪の街が消滅しちゃう」

第十五話 風と雷（後編）

遡ること一時間前……

「まどかお姉ちゃくん、はやくはやく」

「ま、待ってルネ、ユキ……そんなに走ったら危ないよ」

「へいきへいき！早くしないと道頓堀たこ焼き売り切れちゃうから」

元気いっぱい走る双子の姉妹《大河ルネ》《大河ユキ》を追いかけるのはGGG預かりとなった少女《織斑マドカ》。肩で息をしながらようやく二人に追いつき道頓堀名物たこ焼きを買うべく行列の最後尾に並ぶ

なぜマドカがGGG長官大河幸太郎の娘と大阪にいるのか

『ルネとユキを大阪にですか？』

『ああ、前々からいきたいと言われててね。なかなか約束を守れなくてね。君も気分転換をかねて大阪に遊びに行くのはどうかと思っ
ね』

『でも私は……』

『たまには年長者の言うことも聞くものだよ。マドカくんには、いつもユキとルネを見てくれて、家事を手伝ってくれているご褒美だ。楽しんでおいで』

などの経緯があり、こうして三人は大阪の珍しい食べ物、通天閣などを巡り歩いていた（むろん、マドカには気づかれないように護衛がついている）

「まどかお姉ちゃん、はい！」

「エ？コレは？」

「いつもわたしたちの事をみてくれてる、まどかお姉ちゃんにプレゼントだよ」

長い行列から解放され、出来立てホヤホヤのかつお節がふんわり、ソースが香るたこ焼きを口にするマドカの目には、少し不格好ながらも一生懸命に作ったと感じるペンダントが映る

「あ、ありがとう……大事にするね……ルネ、ユキ」

少し目を潤ませながら二人にありがとうを言いながら二人に「は

い、あ〜ん」とたこ焼きを食べさせるマドカ。なぜかはわからないが護衛についていた人物が

(し、信じらんねえ。あのマドカがあんなに穏やかな顔になんのはじめてみた……スコール、あたし等のやった事は間違いないよ) お前にも見せてやりたいよ)

いまだに消息が掴めないスコールを想いながら、三人を見守るスーツ姿の女性……数日前にイゾルデに現れた大蜘蛛ゾンダーの素体になつていたオータム。GGGに保護され目覚めた彼女は真つ先にMことマドカの安否を聞いてきた、長官であり身元引受人である大河から今に至るまでの経緯を聞きほつとしていた

だがバイオネットの幹部、それらを統べる盟主に関しての記憶はオータムの中から人為的に消されていた。亡国機業のエージェントとして活動していた経歴から、一時は拘束、収容所へ送るべきと声が上げられていたが

『彼女……オータム嬢ちゃんはバイオネットの手口を知り尽くしている。その経験を生かして対バイオネットのエージェントへ起用したらどうかい?』

国連事務総長にしてGGGの立役者、地球防衛会議《ロゼ・アプロヴァール》議長の一声でGGG日本本部直属《チーム・ハウンド(猟犬)》の一員へとなった

当然、バイオネットに狙われる可能性があるマドカの護衛も自らの意志で買って出ていた

(スコール、今どこいんだよ……)

小さく呟き、移動し始めた三人と距離を開けながら歩き出した頃

「もうやってらんないわよ!」

声を荒げながらベンチに座りたこ焼き、大阪風好み焼き、串カツ、

e t c . e t c . が入った袋を開きやけ食いする女性の姿…服装から見て空軍の軍服。襟元にはIS部隊の徽章が見える

「たかだか、三キロ太っただけでダイエットしろ、減量しろだの、あたしは食べ盛りなんだから別にいいじゃない」

あつという間に、特大好み焼き《ナイアガラの滝》スペシャルを平らげ、プリぷりのタコたつぷりの特製タコ焼きをかき込むように食べる姿に彼女の近くを通る人たちは若干引いている

「……I—S W A T 辞めようかな…空を飛ぶのは好きだけどデートの時間もとれないしダーリンとラブラブ出来ないし……ああ〜考えたらお腹空いた！好きなように食べて食べまくってやる！」

「オヤオヤ、いけませんねえ〜」

「だ、誰よ、あんた!？」

「そんなに食べたいですか？ならもう少し食べ応えのあるモノをあげましょう」

女性の座るベンチの周りをくるくる回り、奇抜なピエロのような衣装の下から紫色に輝く結晶…ゾンダーメタルを取り出しゆつくりと近づけていく

「……食べて食べて大きく育ちなさい〜この街にあるモノ全てが貴女のためのご馳走ですよ〜」

ヒタリと額に当てられたら女性と瞬く間に融合、手元にあった食べ物を瞬く間に平らげ、ベンチに手をかけ貪るように口にしまりバリ食べ始める

「ご馳走、食べた…食べた…ズ、ズゾ…ゾンダアアアアアアアアアアアア!!」

「いいですよ〜さあたくさん食べなさい。フヒヒヒハハハハ!!」



「うわあくすぐくきれいだよ。マドカお姉ちゃん」

「ル、ルネ、そんなにはしやいだらダメだよ…」

「マドカお姉ちゃん。ビリケン様と写真撮ろうよ」

「はいはい、じゃあ並んで…どうしたの？」

「アレって何かな？」

通天閣名物のビリオン様の写真を撮ろうとした二人の指差す方には夕日に染まった大阪の街。しかし何かが動く…目を凝らしみると十五メートル前後のピンクの丸い何かが転がり、そのまま通天閣へぶつかり大きく揺れ、マドカはとっさにルネとユキを抱きしめ庇うように手すりに捕まり必死に耐える

「…大丈夫。ルネ、ユキ」

声をかけるも返ってこない。代わりに震えが伝わる…マドカはある言葉を思い出し耳元で囁いた

「怖くない、怖くない…ルネ、ユキ、大丈夫。私がいるから怖くないよ」

優しく耳元で話しかけながら、外を見るマドカの目には《雪だるま》みたいな何かやゆつくりと迫る姿…展望台のいた人たちも諦めの色がみえる

そうしている内に、ゆつくりと歩み寄り通天閣に掴みかかると大きな口を空け食べようとしたときだった

『ハアアアア!!』

ネービーブルーを基調としたIS《ガオファー》がミラーコーティングが剥がれ落ちながら量子変換したドリルガオーで顔面を殴りつけ、たまらずゾンダーISが地面へと跳ねるように倒れ、遅れてIS

氷竜：凍也が火災を起こす街に着地、同時にフリージングライフ、フリージングガンで消火していく、炎竜は何時ものように着地に失敗しかし立て直すと、通天閣から逃げ遅れた人達の救援作業を開始する『燐！要求助者は俺たちに任せろ！』

「街の火災鎮火は任せてください。ゾンダーIISをお願いします!!」

「わかった！いくぞゾンダーIIS!!」

むくりと立ち上がるモフモフとしたクマをモチーフにしたゾンダーIISと対峙するガオファー：最初に仕掛けたのは燐、素早くイグニッションブースト、いやりボルバークイグニッションブーストで翻弄、懐へ潜り込みそのまま身体を捻り蹴りを叩き込む：がその柔らかな体へ沈むようにめり込んでいく

『ナニーぐあああ!?!』

動きを封じられ、そのまま殴り飛ばされるも背後に通天閣があることに気づき踏みとどまる

『こいつ、身体が柔らかすぎてダメージが通らない：ならばドリルガオー！ハアアアア!!』

ドリルガオー装着モードへ変わり殴りかかる：がズブズブとめり込み、動きを封じられる：ドリルガオー分離と同時にそれを足場代わりに駆け上がり顔面へ空中回し蹴りを決め、たまらず地面へ倒れた

『いまだ！ガオーマシン!!』

歩道橋の下から黒いステルス戦闘機：ステルスガオーⅢ、車両整備庫からH2AロケットをモチーフにしたライナーガオーⅡ、クマゾンダーIISからドリルガオーⅡが離れ再ドッキング。ガオファーの周囲を旋回する

上空に待機していた三段飛行甲板空母、オペレータールームで戦況を見守る火麻参謀、専属オペレーター東のモニターパネルが赤く明滅

する

「長官、リツ君からファイナル・フュージョン要請シグナル来たよ！」

『うむ、ファイナル・フュージョン承認!!』

「はい！いくよりリツ君！ファイナル・フュージョン！プログラムウウウ〜ドラアアアイブツ!!」

大きく振り上げた拳が、ガシヤンと透明なパネルを叩き割り、正面モニターにファイナルフュージョンプログラムが走り文字が赤く明滅した

— G A O F I G H G A R —

『ファイナル！フウウウジョオオオン!!』

叫ぶと同時にリングジェネレーターからプログラムリングが展開、その上を各ガオーマシンが滑るように飛翔。まずはドリルガオーIIの上部部分がスライドそのままガオファアの足へ接続、続けてライナーガオーIIが後部サブロケットをパージ上下に展開し跳ね上がった肩アーマー部分へ侵入と同時に量子化装着、ステルスガオーIIIが背部へ逆噴をかけ静止と共にロッキングインテークが競り上がり胴体へエンジンユニットが火花と共に腕部強化フレームへ接続と同時に拳が勢いよく回転しながら飛び出しガツガツと止まり最後にヘッドギアが装着されマスクが付きGストーンが競りだし《GGG》のマークが光輝く

「ガアオツ！ファアイツ！ガアアアツ!!」

緑色のエネルギーを両拳から溢れ出させ大きく交差し拳にGの刻印を光らせEMTが弾け飛び、黒いIS《勇者王ガオファイガー》が左右のウルテクエンジンを展開し緑色の光を輝かせ飛翔する

『ゲム・ギル・ガン・ゴー・グフオ…ムン!』

呪文を唱えながら攻撃のGエネルギー、防御のGエネルギー溢れさせる右手と左手を徐々に近づけ胸の前で突きだした形で組んだ瞬間、緑色の竜巻《EMT》が発生。拘束されたクマゾンダーISにウルテクエンジン全開で加速する…だが

『ぐ、ぐううおおおおお!!』

ウルテクエンジンを展開し四基のGSライド最大出力で地を抉りながら突進するガオフアイガー…いや焔の身体が凄まじいエネルギーの奔流に悲鳴をあげる

(グアッ!)

…GSジェネレータ、絶対防御をも超え襲いかかる激しい痛み、熱さに耐え抜き、そのまま両拳をクマゾンダーISの絶対防御、ゾンダーバリアごと胸を貫く、上半身がまるで風船みたいに弾け周囲に金属片とオイル、丸いナニを勢いよく撒き散らしながらメキメキとコアを抉り抜く

『…ムウウン、セヤアアア!!』

抜き取った瞬間、ゾンダーISが爆発、凄まじいまでの爆風に巻き込まれ、ガオフアイガーの手に握られたゾンダーISコアがフィールド外へと投げ出される

「いかん!ゾンダーISコアが!?!」

『パワークレーン!』

「パワーラダー!!」

『ゾンダーISコア、確保完了!!』

青と赤のクレーンとラダーがコアをキャッチする姿、それをみてほっと胸をなで下ろし深々とシートに座るレイジ…

『よし、作戦完了だ。燐そろそろディバイディングフィールドから出る』

『はあ、はあ…り、了か…な、なんだこれは!!』

驚く燐…ガオファイガーの目に映るのは高速で動くナニカ…よく見ると撃破したゾンダーISの身体から飛び出したタコ焼きミ사일。それらがさらに加速し空間に変化が起こりやがてドーム状に展開。燐とガオファイガーを飲み込んだ

『り、燐…く、いくぞ凍也』

『待て…うかつに飛び込んだら…』

凍也の制止を聞かずに飛び込む炎竜、だが次の瞬間弾かれたように空間から飛び出したアスファルトを削りながらようやく止まり。頭を抑えながら立ち上がる

「せ、せんせい。あの空間は…リツ君と通信が」

そして、通信が途切れてから十五分、IS学園からシャルルが到着しゾンダーISコアを浄解し今に至るのだが状況は変わらない。それどころか更に最悪な事態に発展していた

「大阪が消滅?」

「うむ、シャルル君はディバイディングフィールドは何か知つとるのかの?」

「ディバイディングフィールドはレプリケーションフィールドとアレスティングフィールドの相互次元反発作用を利用し形成されて、いつてみたらブラックホールにも似た性質を持っているんですよね

？」

「そうじゃ。ワシらは《ある世界》の友人T、そしてM君の協力で生み出す事に成功した。じゃがソレでも不安定な空間に変わらん。燐との通信がとぎれる前に辛うじて拾えた映像にヒントがある」

モニターに映されたのは、高速でダイバイディングフィールド内を疾走する丸い球体…タコ焼きミサイルの解析データを出力する

「あの球体、タコ焼きがアレスティングフィールドとレプリケーションフィールドのバランスをかき乱すほどの運動エネルギーで動いた結果、超空間次元ポッドができたんだ……中はもちろん、外からも通信が…通信が…そしてフィールドの復元が開始して完全に閉じたらリツ君が…大阪の街ごと」

ーウワアアアアア!!ー

手で顔を覆うシャルルと顔を俯かせる束の脳裏には閉じた空間で圧縮、粉々に砕けるガオファイガーと消滅する大阪の街…その手に大粒の涙が落ち白い手袋を濡らしていく…レイジは胸が痛くなりながらシャルルに訪ねた

「シャルル君、君の力で燐と連絡がとれんかの？」

「は、はい……ごめんなさい。ボクのカじゃ届かないです」

少し目を閉じ呼びかけるも届かない事を伝えるシャルルの言葉に少し目を伏せた時、アラートが三式空中研究所に響き渡り、すぐさまモニターを目にする二人の表情は凍りついた

「…いかんーフィールドの復元が始まってしまった！」

「復元まであと十分……もうダメなの……いや…リツ君…リツ君

!!

「燐！」

徐々に縮み始めるデイバイディングフィールドに二人の音が響く、内部にいるガオファイガーは脱出の方法を探し、無駄と解りながらもブロウクンファントムを繰り出す。しかし別方向から転移したブロウクンファントムを受け膝をつく

『はあ、はあ……このままだと……いや、まだ諦めてたまるかあああ!!』

再びブロウクンファントムを撃ち放ち、何度も倒れながら脱出を試みる…だがすでに限界が近づいていた

「もう、もう打つ手は無いのか…」

だんつとコンソールを叩き空を仰ぎ見た時、再びアラートになる…大気圏上層部から自由落下する隕石。いや金属反応、新車のゾンダーかと手に汗が滲ませる火麻、レイジ、東…三式空中研究所の正面モニターに映されたの救急車にも似た何か。突然通信が入る

ーコチラ、GGGロシア所属《G-IIS-07アリエス》…獅童レイジ博士。獅童オウマ教授から手渡された空間修復ツールを創世、譲渡します!!ー

「に、兄ちゃんから？アレが完成したのか…東君、燐は助かるぞい！バックアップを頼む!!」

「は、はい！超空間次元ポッドの次元収束ポイント検出…できたよ先生！」

涙を拭き、素早く超空間次元ポッドの次元収束ポイントを検索。すぐさまソレを降下中のアリエスへと転送、同時にアリエスに変化が起きた

「いくよ…アリエス。創世コンテナ展開！」

瞬く間に人型に変わると量子変換した背部に配置した長方形のコンテナを展開。中央が開き三基のGSライドを中心にツールが制作、最後にオレンジ色の装甲が着くとセンサーに光が輝く

「ぶっつけ本番で悪いんだけどいってくれるかな？」

「「ピピピパへピハピバ！」」

元気よく頷き簡易カタパルトから勢いよく飛び出す彼ら…やがて超空間次元ポッド上層に到達、ぶっつきながら三基連結すると高速回転、束が見つげ算出した空間次元収束ポイントへ突入、何度目かになるブロウクンファントムを放ち満身創痕になりひざを突く燐、ガオファイガーの前に突き刺さると分離、まるで自己紹介をするように手振り身振りで伝える姿を見て立ち上がる

『ま、まさかオウマさん達が設計していたプライヤーズ！お前たちの力を貸してくれるか！』

三体同時に頷くと燐は立ち上がり両腕を前へと突き出し構え叫んだ

『いくぞプライヤーズ！デイメンジョンツ！プライヤアアアア!!』

三体が合体、巨大なペンチへ変わると両腕へドッキング。プロテクトエネルギー、ブロウクンエネルギーを中央ユニットへ充填、力強く開くと空間が大きくねじれ始める

デイメンジョンプライヤー…GGGロシアが日本本部獅童レイジ博士の兄獅童オウマ教授、別世界の特別協力者《ミツキ・サエグサ》《タバネ・シノノ》との共同製作したツールシステム…

デイバイディングドライバーが生み出した歪曲フィールド内で想定外の空間異常を起こした部分をねじ切り、修復する空間修復ツール

でありパーツ状態で移送中に起きた空間異常に対し、最新G―I Sシリーズ《アリエス》の単一仕様《無限創世》で完成したハイパーツールである！

『ウオオオ！』

デイベイディングフィールドの復元があとわずかと迫った時、光の柱が立ち上がり、ねじ切りつかんだ次元空間ポッドごと飛翔するガオファイガー。大きく振り上げそのまま空へと投げ捨てる…数秒後、大気圏上層部で爆発、やがて光が収まりデイベイディングフィールドが復元完了した場所に降り立つ

『はあ、はあ……ガオファイガー帰投します』

「よっしゃああああ!!大成功じゃあああ」

大喜びするレイジ、その隣に座る束と近くに立つシャルルの姿を見る…

「良かった。リツ君……本当に良かった」

「……火麻参謀。ボク、燐の所に行つて良いですか？」

「ああ、いつてき…「ダメだよ」」

火麻の声を遮った束、ゆっくりとシャルルに目を向け口を開いた

「リツ君はコレからワ・タ・シが優しくファイナルフュージョンアウトして、たくさん具合を見なきゃいけないから、先にI S学園に帰つたら?ちくちゃんに怒られるよ…シャルル君?」

「そう。でもボクも燐の身体の事はよくわかるから…ガオーマシンの整備が忙しいなら、なおさらボクに任せてもらえるかな?アジャスタができるからね」

「ふふふふふふふふふふふふ」

ゴゴゴゴゴッ！と二人の背後に女神アテナ？黄金のライオン？のオーラをみたレイジ、火麻参謀が冷や汗をだらだら流していた…水陸両用IS整備装甲車に帰投した燐が二人から何をされたかは知るものは誰もいない

「……………なんか、とんでもない修羅場って感じだね…ありがとうプライヤーズ」

とつぶやくG―IS―07アリエス、その操縦者ユーノ・スクライア。そのとなりでボケと突っ込みを繰り返す空間修復ツール《プライヤーズ》、デイメンジョンプライヤーはバイオネットとの戦いに勝利の鍵をもたらす事は間違いない

なお、クマゾンダーIS化したI―S―WAT隊員《三村カナ》少尉は軍を退役、長年交際していたダーリンとお好み焼き屋を開き、まさかの人気店となり二人で切り盛りし幸せな結婚生活を送り、近々二号店を関東へ出すことが決まったそうだ

第十五話 風と雷（後編） 了

第十六話 転校生、その名は……

海底の砂利を巻き上げ進む黒い影。GGGが誇る《水陸両用IS整備装甲車》。GGG機動IS部隊のGISシリーズ整備と補修素材、操縦者のメデイカルルームを完備している特殊艦。大阪でのゾンダーISからの防衛的戦闘行動を終え帰還へ就いていた……

「あ、あの〜シャルル？東さん？」

フュージョンアウトを終えメデイカルルームに収容された燐の両隣にるのは篠ノ之束こと《東雲アリス》、シャルル・デユノアが燐が横になるベッドの両脇でにこにこ笑いながら見てる

「リツ君、今からメデイカルチェックするから上を脱ぎ脱ぎしようか」
♪

「何で服を脱がせるのかな〜それより燐、左手を出して。僕が優しくアジャスタしてあげる」

笑顔で燐に訪ねる二人…しかしその目は笑っていない…それどころか束は病院着に手をかけ手慣れた様子でボタンをはずしていく

「ち、ちよ束さん！脱がさないで!？」

「さあさあ、恥ずかしがらずに、いつもみたいに私にリツ君のすべてをみ・せ・て♪」

「……………いつもみたいに……へえ、いつもみせてるんだ燐は…」

「あ、あのシャルル？どこいくのさ?？」

「……………燐のバカ」

プウツと頬を膨らませ、小さく何かつぶやき燐の左手から自らの手を離し、メデイカルルームからでていくシャルル。その背中に《塵芥になくれ!》と叫ぶ巨大な鉋で敵を削りきる黄金の破壊神のオーラが浮かんでいたのを見たGGG隊員の面々はガタガタ震えていたそうだ。

第十六話 転校生、その名は……

「……………ん」

「気がついたか?」

「き、教か……………つく!?」

「無理するな。ボーデヴィツヒ:…まだ万全ではないのだからな:…ほら、少し横になれ」

目を覚ましたラウラの目に椅子に座り本を読む織斑千冬の姿。驚き身体を起こそうとするが全身に気だるさと痛みが襲いわずかに歪めたのを見て優しく寝かせる千冬:…口元まで毛布でかくしややうつむき小さくつぶやいた

「は、はい……………あの教官。私は一体……………あの時、とんでもない事をした気が……………」

「……………お前は悪くはない。私の監督不行き届きと警備に穴があつた……………お前の抱えていた心の闇に気づけなかった私は教師として失格だ……………本当にすまなかつた」

「き、教官!頭をあげてください!責任ならわたしにあります、勝手な行動で教官に大変な迷惑をかけたのですから!!だから頭をあげてください」

頭を下げる千冬に声をかけた時、医務室の扉が開かれ二人の男性がカツカツと軍靴をならし歩き二人の前に立つ…着ている服から見てドイツ連邦の軍服、飾られた階級章と顔を見たラウラ、頭をあげた千冬は身を堅くし敬礼する。軍帽を被ったら金髪に切れ長な水色の瞳を向けながら男性が敬礼した手を下げ静かに口を開いた

「久しぶりだな織斑千冬教官、そしてラウラ・ボーデヴィツヒ少尉…」

「す、スコルピオン総帥！ヘルガ参謀長！いつ日本に？」

「I S学園より対抗戦観戦へ招かれたのだ、我がドイツ連邦代表候補ラウラ・ボーデヴィツヒ少尉の戦いを観に来た…だが、あそこまで無様に負けるとはな」

「そして、中国代表候補生《鳳鈴音》、欧州連合の同盟国家である英国代表候補生《セシリア・オルコット》両名に対しての少尉の挑発的行動、専用I Sの損壊は本国において問題になっている…」

「待つてください！スコルピオン総帥！ヘルガ参謀長！ボーデヴィツヒが今回の騒動を起こしたすべての原因は私にあります！罰するなら私をお願いします!!」

「き、教官…」

淡々と言うスコルピオン総帥、ヘルガ参謀長に声を挙げる千冬の姿に驚くラウラ。身体を張り生徒を守ろうとする姿からは責任を負う大人としての信念が溢れている

「織斑千冬、君は我がドイツ連邦軍に一年間、教官として少尉や我がI S部隊を育て上げた実績は高く評価している。だが今回の処罰はすでに教官の任を解かれ日本に在籍している君には関係ないこと、ボーデヴィツヒ少尉の処遇は後日、追って沙汰する…いくぞヘルガ」

「ハッ！フューラー！……また会おう織斑千冬」

そう告げると、踵を返し歩き出すドイツ連邦総帥《スコルピオン》、参謀長《ヘルガ》は医務室を出ていくの千冬とラウラはただ黙って見送ることしか出来なかった



「フューラー、少尉の処罰ですが」

「……………ヘルガ参謀長。すでに決めてある」

IS学園の外におかれた専用ジェットへ歩きながら手渡した赤い封筒を受け取り、軽く敬礼し別れたヘルガ参謀長へ目を向けながらジェットへ乗り込み深々とシートへ身を任せるように座るスコルピオン総帥は一枚の写真を手取る

日の丸を前に並ぶ五人の少年の姿…その中の一人、編み笠に薄い紫の人民服に身を包んだ黒く長い髪の少年へ視線が注がれる

「……………我がドイツに多大な貢献をし救った世界十大頭脳《竜崎乙女》女史の子息の一人《竜崎疾風》…ボーデヴィツヒ少尉と出会ったのは偶然と思いたいな…」

少し笑みを浮かべる彼の脳裏には熱き青春をボクシングにかけた若き日のスコルピオン総帥、ヘルガ…旧ドイツJr.;そして旧日本Jr. いや、最高のライバルと拳を交え生まれた友情。そして世代を超え再び現れた新生日本Jr. メンバーに名を連ね、十年前にドイツ連邦で起きた異常気象を沈静化、ふたたび緑あふれる国土を蘇らせたの恩人の子息の名をつぶやく。やがて専用ジェットは滑走路を離陸、はるか彼方にあるドイツへと飛翔。分厚い雲へ消え去った頃。入れ違いでGGGベイエリア本部からシャルルと共に燐がIS学園へとガ

ンドーベルで帰り着き降りるとオートで走り去るのを見送り寮へ歩き出す二人、だがさつきから会話すらなく気まずい空気が流れていた

「あ、あのシャルル？」

「……………」

(……………うわ、まだ怒ってる……………やっぱり束さんとのアレが原因だな。多分)

何度か話しかけるもスルーされるばかり。勇者といえども機嫌を損ねた女の子には適わないようだ。そんな空気を振り払うように救世主が現れた

「よお！燐。今帰りか!？」

「あ、一夏くん。どうしたんだ妙にテンション高いけど？」

「実はな、大浴場の使用許可が降りたんだ！今から二時間限定だけどさ。燐もシャルルも一緒にどうだ？」

今まで寮の個室にあるシャワーだけですませていた一夏のテンションの高さに驚く二人…大浴場の大きな湯船につきり、日頃の疲れをすつきりとしたいというのもあるが、大阪でのゾンダーIISとの戦闘の疲労とその後の一悶着で疲れた燐、一日に二回も浄解をしたシャルルには魅惑の言葉。しかし

「悪い、実はコレから織斑先生の所にいかないといけないんだ。先に入っついていいよ…」

「……………そっか、千冬姉に呼ばれてるなら仕方ないか。じゃあ先に風呂いただくぜ」

「ああ、今回は一番風呂譲るけど次回はオレが一番だからな」
「覚えておくよ」

軽く拳をぶつけると、燐はシャルルを残し職員室へ歩いていき、二人から完全に離れたことを確認し中庭へとでると木の幹に身体を預ける

「…………霧也、いるんだろ？」

「はい、大阪でのゾンダーIISとの戦闘お疲れさまでした…」

木の影から、白いマフラーで目元から下を隠し、紺色の学生服姿の犬神霧也が音もなく現れた

「…………学園にもゾンダーIISが現れたって聞いたよ。まさか二人にシャルルの浄解モードを見られるなんてな…」

「…織斑一夏くん、篠ノ之箒さんは口が堅いので大丈夫と判断しました。学園外に現れたAT兵を千冬さんと撃退している最中に、バイオネットの幹部の侵入を許してしまいました。幸い疾風がIIS学園内に現れたゾンダーIISへ対処してくれたので最悪な事態は未然に防げました」

「！疾風が学園にいるのか！」

「はい、獅童博士が先ほどまで雷龍、疾風のシンメトリズム調整してました。今IIS学園食堂でゾンダーIISのコアとなったドイツ代表候補生ラウラ・ボーデヴィツヒ嬢へ食事を用意しています」

「そうか、疾風のG—IIS《撃龍神》ならコアを無事に抽出できるからな…でもボーデヴィツヒさんの看護をなんでやっているんだ？」

「(…………ドイツでの件は内緒にしといた方がいいですね。あとが面白いでしょうし…)それは疾風本人から聞いた方がいいかと。燐、これで機動IIS部隊メンバーはほぼ揃いました…」

「……そうだな…報告ありがとうな霧也…今度会うときは「GGGベイエリア本部で」……つてもういないし…とりあえず部屋に戻るか」

いつの間にかに消えた霧也に苦笑いしながら、寮にある自室へと歩いていった



「ふう〜やっぱり風呂はいいねえ〜リリンが生み出した最高の文化つてやつだよな〜」

ゆつたりと湯船に浸かりながら腑抜けた顔で、タオルを頭に乗せパシヤッと湯を肩に浴びせる燐…湯煙がただよう誰もいない大浴場を独り占めの状態に満足している…腑抜けた顔になるのはある理由があるからだつたりする

湯船に浮かぶ燐の全身、至るところに大小様々な傷跡…バイオネツトの悪辣な改造および実験で切り開かれ縫合されるを繰り返し受けたモノ。目をこらさなければわからないが全身には規則正しいライン？が見え、左腕にはGSTーンと一体化した装置がお湯越しに見える

(……シヤルルまだ怒ってるかな……)

なお、部屋に戻ってすぐ大浴場へいくとベッドに頭から毛布をかぶり眠っているシヤルルに言ったのだが、無言だった…束との距離感の近さに嫉妬していたのも理由があることを知らず、明日の朝一番に謝ろうと考え、ゆつたりと全身で湯の温度を堪能していた時、ガラリと引き戸が開く、

「……一夏くんか？……二度風呂に来た…の…シ、シヤルル!？」

「お、おじやまします」

髪を下ろし、Gストーンとラファール・リヴァイブ待機形態のペンダントを首にかけ豊かなバストをタオルで隠したシャルルの姿…一瞬、見とれるも慌てて身体の向きを変え湯船に顔を半分隠す燐…
(な、なんでシャルルが大浴場に!?!て言うか寝てたよね?なのになにに何で!?!)

混乱しながらブクブクと考える。しかし答えは見つからない…悩みに悩む思春期真っ盛りな勇者?の耳と背中に音、自分以外のぬくもりを感じようやく現実に帰還する燐の左手に何かが触れる。みると真っ白な華奢な手が重ねられ淡い緑の光がお湯に反射している…つまり自分の後ろには生まれたままの姿のシャルルがいる事実には思考がオーバーヒート寸前になっていた

「あ、あのシャルル?女の子がそう簡単に男の人に裸を見せたり、こう、くつつくのも、肌をわせるのもいけないから!?!な、ナニ言ってるだろ…あうう」

「…くすつ…燐って意外と固いんだね。でも僕のは見たからおあいこだよ」

「あ、あの時は本当にゴメン!と、とにかくオレあがるから。シャルルはゆっくり…」

湯船からでようとす。だが燐の手をしっかりと握るシャルルの手に阻まれ動く事ができない

「…燐、少しだけ話したいことがあるんだ。聞いてくれるかな」

「…な、ナニ?」

間近に感じる体温と女の子特有の甘い香り、柔らかさにくらくらしながらも、シャルルの声にしっかりと耳を傾ける

「学園に残るよ…GGG特別隊員としてもあるけど、これからは自分の意志で一歩ずつ前に向かって進みたいんだ…コレからは僕にしかできないことを、僕の力を必要としてくれる人の為に役立てたいんだ」

「そっか…一歩ずつ…すごいなシャルルは」

「ううん、僕にその《一步》を踏み出す《勇氣》を憐がたくさんくれたんだ……ありがとう」

「え？オレがシャル……シャルロット……え？」

「お母さんがつけてくれた本当の名前……シャルロット・リオンレーヌ……あの人から《デュノア》は名乗るなって言われたからお母さんの姓《リオンレーヌ》になっただけ」

「……リオンレーヌ……フランス語で《獅子の女王》って意味だったな」「意味わかるんだ……って、初めて会った時も訛もない綺麗なフランス語で話してたよね。誰かに教えて貰ったの？」

驚いたように声を上げながらさらに密着するシャルル……シャルロットの鼓動と息づかいを感じドキマギする憐の体温も鰻登りに上昇中……でも聞かれたからには答えなければと我慢する

「……母さんが日仏クォーターで、日本の大学に来るまではフランスに住んでたんだ、昔よくフランス語やおとぎ話を教えてくれたんだ」

「……そうなんだ。フフ、少しリード出来たかな」

「なんか言ったシャル……シャルロット？」

「え？ううん、何でもないから！それよりソロソロ上がろう！じゃ先にあが……キャ！」

勢いをつけ立ち上がったのが悪かったのか。湯船の中で足を滑らせるシャルロット……とつきに手を掴もうと腕をのばすも運悪く二人とも倒れ、水しぶきならぬ《湯しぶき》が盛大に立つ

「ケホ、大丈夫、憐……ふえ……」

「タタタ……ん？」

湯船から顔を出す憐、だが両手のひらに柔らかく張りのある圧倒的存在感。視線の先には収まりきれないほど女性特有の母性の象徴、憧れ、夢が詰まったバスト。指がしっかりと埋まり隙間から桜色の何かが見える二つの膨らみをしっかりと支えるような形で掴んでいる。シャルロットの顔が瞬く間に真っ赤になりアメジストの瞳が潤み始

める

「う、うわああああ!?!」

「シ、シャルロット!? やめて死ぬ! 死ぬから水責めは…ゴバツラ!?!」

照れ隠しと言わんばかりに、燐の頭をつかみ湯船に沈めるシャルロット…沈められながらもサイボーグの目が肌やら、金の何か? を目にしたのを最後にぷつりと意識が途絶えた



「おはよう燐……って? どうしたんだ? すごく顔色悪いぞ!?!」

「な、何でもない…色々あったからさ…」

ざわざわ騒がしい教室の机の上にタレライオンみたいに力なく顔に乗せ答える燐は大きいため息をついた。目が覚めるといつの間にかに自室のベッドにいた燐、ぼんやりしながら大浴場の出来事を思い出し、隣のベッドをみるがシャルロットの姿がない。寝た形跡も見あたらず枕元に一枚の紙切れがおかれていた。

ー少し用事をすませてくるから、先に教室にいつてー

短く書かれた文章を見て、真っ先に浮かんだのはあのハプニング…手のひらに柔らかかさや温もりが蘇り熱暴走が起きかけ慌てて掛けてあった冷却コートを着る燐、それでも体温が上がり心臓がバクバク鳴るのが収まるまで始業前までかかり、今に至る

(……どうしたんだろシャルロット。オレのせいかな、それともフランス本国に…ソレはないか。ボーデヴィツヒさんの姿も見えないか)

だがフランス本国からの呼び出しの可能性を捨てる燐。シャルロットの立場はGG憲章において守られているからだ。ラウラの場合はゾンダーIS化以前の行動がドイツ本国に問題視され処罰を

待つ身だと霧也からの追加報告から知ってる。疑問で頭いっぱいになった時予鈴が鳴り響く。教室の扉が開き、副担任の山田先生が入ってくる…何か様子がおかしい

「み、みなさん。おはようございます……はあああ」

「なあ燐、山田先生様子おかしくないか？」

「オレもそう思う。とにかく待とうか？」

一夏にそう答える燐、山田先生はふらふらしながら教壇に立つ
「今日はですね……皆さんに転校生を紹介します。転校生というか、みんなもう知ってるんです…はあああ……」

ざわめきはじめるクラス。三人目の転校生に色めき立つのに対して、山田先生はややうなだれながら口を開き、入ってくるように声をかけた

「失礼します……」

タレライオンみたいになっていた燐の耳に聞き慣れた声、目を向けた先には女子の制服に包んだ女の子がぺこりと頭を下げた

「シャルロット・リオンレーヌです。皆さん、改めてよろしく願います」

一瞬、クラス全員が固まる…一夏も勿論、燐も固まるも直ぐに復活。朝に姿を見せなかった理由にようやく気づいた燐に頬を赤くしながら目を向け笑みを送るシャルロット……吹っ切れた笑みに燐は思わず釘付けになってしまった

「デュノア君はデュノアさ……いえ、込み入った事情で母方の姓リオンレーヌに……うう寮の編成をやり直さなきゃいけない……」

山田先生の疲れた声は、やがて沸き起こったクラスの声にかき消され、数分後に遅れてやってきた火麻激の必殺技《ヒートスマイル》で騒ぎはおさまった……

同時刻、ドイツ本国からの書簡を受け取り目を通したラウラは内容

に驚きの表情を浮かべ自室のベッドにへたり込んでしまった

《辞令》

ーラウラ・ボーデヴィツヒ少尉。貴君に近々ドイツ本国において設立するGGGドイツ支部に先駆け、《GGG日本》本部へ三年間の研修配属、所属部隊《シユヴァルツエ・ハーゼ》隊と共にIS学園へ通学しつつ警備をGGG機動IS部隊とあたられよー

ドイツ連邦総帥《フューラ・スコルピオン》
ドイツ連邦参謀長《ヘルガ・ジーニアス》

厳罰を覚悟していたラウラにとって、信じられない内容。総帥と参謀長直筆のサインは紛れもなく本物。突然のGGG日本本部へ部隊と共に配属啞然となるラウラの手からも一枚の紙切れが落ち、手に取り見た瞬間、ボンッと湯気が立つ

「な、ナニを考えてらっしやるのだ！総帥!!」

「どうしました、ボーデヴィツヒさん。まだ病み上がりなのですから
大声は…何ですかコレは」

「み、見るなああああ！」

「グハッ！」

蒸籠を片手にラウラの足元に落ちた紙を拾い上げるも、ラウラの強力な膝蹴りが顎へ決まりベッドに沈む疾風…しかし蒸籠はしっかりと握ったまま。慌てて手に取った紙にはこう書かれていた

ー我がドイツ連邦最大の恩人《竜崎乙女》女史の息、竜崎疾風と子を成せ。少尉もまんざらではないとクラリツサ副隊長から色々聞いている。この三年間を有意義に使い攻略せよー

と、スコルピオン総帥直々のお言葉にベッドで気を失う疾風を見る。黒く絹のような髪、整った顔へ手を伸ばすラウラ…

「オオ！牙藍様、いつお戻りになりましたでありますか〜イエー！」

「さっきだ。オレ様のカツコいいファイバードが治ったんでな。糞くだらぬい夢を叶えようとする奴らを根絶やしにするためにGGGをつぶす。ついでにグレート合体も出来るからな……フリール、お前にこいつを、《サーベラス・イグナイト》を与える……他の者にもバルゴラ、ジエミオン、ガルムレイドを完成次第与えよう……まずはガイゴーを使ってヤツを始末せよ。バイオネット・ナイツの諸君！糞くだらぬい夢は？」

「「どぶに捨てちまえである！」」

狂気に満ちた声が重なる中、白亜のニューロメカノイド《ガイゴー》の生体ユニットが微かに震え、やがておさまった

第十六話 転校生、その名は……

了

第三章 滅ぶべき右腕、破滅の声

第??話 兆候

―……状況確認……―

真つ暗な闇が広がる部屋に赤い光が明滅、中央に黄色い球体が鎮座。彼は永い永い時をこの光ささぬ場所で何度メカになる言葉をつむぐ

―……ジユエルジェネレータ修復率《85%》、バトラー、アーク本体、各武装修復率……《5%》―

光指さぬ場所では本来の修復は行えない。彼はこの千年余り、自らの修復に力を注いでいた……しかし修復が進んだのは《生体コンピューター》である自分、心臓である《ジユエルジェネレータ》のみ

―……急がなければ……奴らが……―

焦る気持ちばかりが募る。遅々と進まない身体の修復ができない、身動きできない自身を何度も呪った……

第??話 兆候

―……011、アルマ、今どうしている―

遙か昔に、リンクを切った戦友《011》、アルマの姿が浮かぶ……故郷の惑星《赤の星》で《原種》と戦う為だけに生まれたソルダート師団サイボーグ011、原種核を浄化と対消滅する為に生まれたアルマと共に戦いに投入されるハズだった

搭載が間に合わず《ゾンダー》化され、ソルダート師団、アルマ、アーク級艦隊に牙を向き瞬く間に機界昇華されバラバラに分断され、辛うじて生き残ったアルマ、ソルダート師団の生き残り《011》と共に戦いを続け振り切る為にESワープするもバイパス変動を起こし影響を受け中波したJアーク、ワープアウトした彼等の前には蒼く輝く

生命に満ち溢れた惑星

傷ついた彼は、ソルダート011に衝撃で目覚めたアルマを地上へ残し修復に専念しつつ惑星の調査。緑の星によく似た環境：調べる内に在ることに気づいた

《五つの解放点》、《天高くそびえる山（キリマンジャロ）》の厚い氷の中で深い眠りにつく《氷の獅子》の存在

《三重連太陽系》にも存在したとされる《星の意志》がいる事もだが、それ以上の事を知り得た

何者かが《四つの解放点》から《星命》を吸い上げ、徐々に気象が狂いはじめている。観測結果からあと数年以内にこの惑星が炎に包まれ消滅する、彼は011へ詳細を通信で送り、吸い上げられている場所を特定した

月と惑星の中間点：合流した彼等は調査の為、白き方舟《J・フォートレス》で中間点、衛星軌道へ向かいみたのは星命を吸い上げ禍々しいオーラを纏う赤と黒の装甲に胸に緑色の球体に羽を大きく広げた装飾が目立つメカノイド：周囲に強力な《重力子》反応を彼は確認し未調整の《ジエネレーティングアーマ》を展開する

ー………なんだ手前は？モブキャラか？………でつけえ図体してやがるな？ガンバスターもどきか？まあ、んなことどうでもいいか、この世界をぶっ壊す前に死ねよ！モブキャラ風情が！！ー

肩部キャノンが火を噴き、Jフォートレスのジエネレーティングアーマを貫き、単一結晶装甲を砕いていく…

ーく、いくぞトモロ！メガフュージョン！！ー

ーお？デカ物になりやがったか、でもなこの超重神ゴッドグラヴィオンのオレ様に勝てると思うなよ！グラヴィトン・プレッシャー・パUNCH！！ー

ークア！五連レーザー砲、反中間子砲一斉掃射！！ー

ーきかねえんだよモブキャラ！カツコイイオレ様のゴツドグラ
ヴィオンが負けるわけねえだろうが！オラ！受けてみな！白銀の牙
を……………超・重・斬！！

ーぐ、またまだ！J！クオオオオオス！！ー

ジャイアントメガノイド《キングジェイダー》は瞬く間に各武装が
沈黙していく、《星命》が解放点から吸われていく力をます敵に対し
て、彼等は最後の力を振り絞り彼等は禁じ手《Jフェニックス》を使
い、大ダメージを与えると同時にE S ミサイルで宇宙を観測できる
《ポイド》へ転移させることに成功した

しかし《赤の星》が誇る技術の産物である《対原種決戦兵器Jア
ーク級Jフォートレス》は大破寸前となりながら、011とのリンクを
解除し退去させると大海原へ落ち巨大な体躯を散らせながら深い深
い海へ沈んだ

…あれから千年余りの時が過ぎた。彼は休眠と覚醒を繰り返しな
がら自らの修復を進むが体躯の修復は不可能に近かった。変わり
となる体躯を…再び来るであろう災厄に立ち向かう為、友の力となり
共に大空を舞う新たな体躯を…

そう願った時、彼は遙か彼方から懐かしき友の力を感じ取る、その
近くにアルマの力も在ることに驚く

ー……………011？それにアルマ？……………待て、この反応は
……………原種？いや機界生命体反応……………この惑星に発生したと
いうのか！？急がなければ。すべてが機界昇華されてしまう……………イ
ソ…ガナ…ケレバ…ー

エネルギー節約の為、起動限界を迎えた彼の意識は徐々に遠のくと
共に部屋から光が消えていく…やがて闇が支配し再び眠りについた
穢れなき大空を友とアルマと共に駆ける夢を抱きながら

★★★★★★★★

ー……………G…オンへ……………オー…充填…85%……………ー

…宇宙開発公団最深部《GGG》本部に嚴重に保管された直径10
キロ四方の原石《Gクリスタル》内部に声が響く

ー……………ジエネ…ク……………シン……………へ充填……………20%

……………ー

緑色の光が溢れる内部に獅子の影と共に雄叫びが響く……………《彼女》
はその額に手を当てる。願うは少年に来るであろう逃れられない災
厄、それを打ち払う力を

込めていく

ー……………あの……………の力にな……………つて……………ー

…少年達の過酷な運命を見続けた《彼女》の声は慈愛に満ちなが
らも悲しみをも醸し出している

この場所で、意識が目覚めて六年、見ていることしかできなかつた
沢山の《大事な人達》を失う姿に何度も涙した。何度も語りかけ慰
めようとした…すでに精神生命となりGクリスタルの中でしか存在
を許されず、言葉すらもかけられない

ー……………ごめん……………な……………い……………でもアナタに……………私……………の
…命…にかけて…力を……………ギャ…オ…を……………ー

優しい眼差しを向け獅子を抱く《彼女》の声はやがて消え、Gクリ
スタルから淡い光が治まっていった

第??話 兆候

了

第十七話 奪われたガオーマシン!!

バイオネットにより国家間を超えた地球規模の破壊活動およびこれにより起きた人為的災害、自然災害に対して国連《地球防衛会議》議長ロゼアプロヴァール国連事務総長が提言により地球勇者防衛隊、ガッツイ・ギヤラクシー・ガード (Gutsy Galaxy Guard)、通称GGGを発足して1ヶ月。各国に支部設立に伴い《G—ISCOA》供与、ゾンダーISに関しての情報開示がなされた

いち早く支部が設立されたのはロシア、獅童オウマがスペシャルアドバイザーとして在籍している《ロシア宇宙科学院》を母体とするGGGロシア。中国科学院航空星際所楊司令が指揮するGGG中国。そしてフランス政府直属バイオネット対策チーム《シャツセール》を母体に生まれたGGGフランス

現在、《GGG日本》本部から供与された技術を基に勇者王ガオファイガー専用ツール、各勇者の様々な新装備開発が進められる中、バイオネットは水面下で恐るべき計画を発動しようとしていた事にまだ誰も知る由もなかった

「さて、いくとするか……出来損ないのバイオダイナーINに感動の再会をプレゼントをしにな……クヒッ！」

『……………り、リョウカ、カ、カ、イ……………ガラン……………サ……マ……』

「ケッ！フリールの奴やりすぎだつうの……弄る度に絶頂しまくってたからな……まあ、出来損ないのバイオダイナーの悲鳴はしっかりボイスレコーダーに取ってやるか奴のコレクションを増やす手伝いしてやるか……クヒャー！来い！ファイバード!!」

光に包まれ青を基調とした全身装甲のIS《ファイバード》を纏う少年……《沙華堂(シヤカドウ) 牙檻(ガラン)》。背後に控えたニューロメカノイド《ガイゴ》共に飛翔する……

「もう、やめてくれ……誰か、誰か……」

「黙れよ。俺様のカッコイイ専用ISなんだから言うこと聞けよ火鳥勇太郎……いやファイバードさんよ？……」

……それつきり口を閉ざす声の主に満足そうに目を細めた牙隘（ガラ）ン）と無言で追従するガイゴの姿は空の彼方へと消えていった

第十七話 奪われたガオーマシン!!

数時間前、IS学園《演武場》

「そーういや臨海学校近いんだよな……つとー!」

「……山田先生が下見に行くって言うってたな……はあつ!」

「アレ?山田先生と火麻先生が行くって聞いたんだけどな……最近、噂になってるみたいだぜ、二人がつきあってるってさ!」

「まさか!?あの火麻参ぼ、先生が山田先生と!」

早朝、清廉な空気が満ちる道場内で木刀を構える燐、一夏……踏み込むと同時に打ち込み、乾いた音が木霊する。今日の鍛錬は太刀筋を見切り、かわすと同時に撃ち込む特訓……二人とも目をはちまきで隠し、気の流れを肌で感じ逆袈裟に撃ち、反動で互いに離れ距離を取り正眼の構え（鹿島流）と蜻蛉の型（示現流の型）を取る一夏と燐

「す、すごい……燐ってサムライなんだね……」

「ああ、だが一夏があそこまで獅童とやるとはおもわなかった……」

最初の頃は、一夏が負けていたのだが燐と互角に撃ち合える技量に到達していた……そんな二人を見るシヤルと箒は二人の動きに驚きながらも無駄のない演舞のような足裁きから切り払い、突きから袈裟、柄打ち、胴風ぎ、息をもつかせぬ苛烈な打ち込みに思わず声を漏らしてしまう

（……一夏……私より強くなってる……獅童のおかげかもな……それ

に比べ私は…)

…過去の苦い思い出が箒の脳裏をよぎる…それに比べまっすぐに競い合い、高めあう二人の姿に胸が締め付けられる

「……あくまで噂だろ一夏くん!」

「うわっ!」

振り下ろされた木刀を滑らせるように流し、そのまま抜き胴を放つ
燐…それが合図のように二人は互いに一礼、木刀を納め上座へと一礼し外へでると正座する。

「たた、今の効いたぞ燐」

「わ、悪い…でも踏み込みがたいぶ速くなったな…今度、篠ノ之さんとやってみたらどうだい?」

「……そうだな。最近は燐とばかり鍛錬してたからな……よし、誘ってみるか」

「い、一夏、汗を拭いたらどうだ。あとコレも飲め」

「サンキュー……ングング、プハア生き返るなあくなあ箒、今度一緒に鍛錬やらないか?」

「な?……う、わ、私で良ければ何時でもいいぞ!お、お手柔らかに頼む」

タオルで汗を拭きながら、手渡されたスポーツドリンクで喉を潤す
一夏の問いに上擦りながら頷くのを微笑ましく見守る燐の道着が引っ張られる

「ねえ燐、箒って束さんの…」

「うん、妹だよ……でも二人が本当に仲直りするにはまだ時間がかか
るんだ……せめてシヨウ兄がいたら」

「シヨウ兄?」

「……束さんと篠ノ之さんのお兄さんで、ISが発表される前に飛び
級でギリシャの大学に留学して、世界中の神話大系の研究をしている
んだ……今はエジプトに居るみたいなんだけど」

十一年前、燐がまだ四、5歳ぐらいの頃に獅童家に遊びに入り浸り
な束を心配し迎えにきてくれた少年《篠ノ之松陽(シヨウヨウ)》。い
つも和服に身を包み燐を実の弟のように可愛がりながら色んな事を

わかりやすく教えてくれた彼を《ショウ兄》と呼んでいた

今はエジプトでアスワンダム近くに沈んでいた未盗掘の王墓を見つけた同じ日本人で女性の助教授と調査をしているらしい……それ以上に松陽は、自身と束、束と箒は血の繋がりが無いことを燐に教えてくれた人だった

……束が妹である箒と髪や容姿が似てないことに気づき、戸籍標本を閲覧。二十数年前に神社の前に射手座のレリーフが刻まれた《黄金の箱》の近くに捨てられていた事実を知り、ギクシヤクした姉妹関係になり今に至る事をサイボーグとしての身体を自らのモノとして認識、恩師《御凰蓮》《御凰オリエ》聖闘士《レグルス》の命を受け継ぎバイオネットと戦うと決めた日に手紙で伝えられた

なぜ自分に？そう思った時、手紙の裏に書かれた文字
が目に入る

「燐、君を一人の男と見込んで頼みたい。束と箒を昔みたいに仲の良い姉妹に戻してくれませんか？束と一緒に過ごした君ならば、きっかけを与えられるはずです。箒も今、親しくしていた一夏さんと離ればなれになり不安で一杯です……もし一夏さんと出会うのであれば一緒に力になってくれませんか？……どうか、お願いします」

文字から滲み出る心配の感情を感じ燐はさりげなく束に箒と仲直りする機会を作ろうとしていたが、要人保護プログラム（正確には国連から内諜へID5関係者を護衛の意味もあった）により音信不通となった事が溝を広げていたのもあり、束本人からも消極的な言葉ではぐらかされていた

（……ショウ兄、二人を仲直りさせるのは骨が折れるよ……）

と、心の中で呟いた頃……

「ん……朝ですか」

ベッドから身体を起こすのは《GGG日本》本部、機動IS部隊所属兼IS学園食堂《中華》主任《竜崎疾風》……しかし何か重い。手に

は焼売の生地のようにしつとりすべすべな手触りに「またですか」と大きくため息をつき架け布団の中を見る

サラサラとした銀髪に穏やかな寝顔を浮かべ抱きつくよう眠るドイツ代表候補生にして《GGG日本》本部へ研修に来ているラウラ・ボーデヴィツヒの愛くるしい姿にドキドキする

一月前以来、GGG経由でIS学園食堂の《中華料理主任》として招かれてからというモノ、料理人寮に割り当てられた疾風の部屋：正確に言うとはベッドへ潜り込む日々が続いていた

しかし、疾風はそつと髪をすくと心地良さそうに笑みを浮かべるラウラに在ることが脳裏に蘇る

―どうしたの疾風?―

―母様の髪、すごく綺麗です―

―ありがとう疾風。でもね、コレだけは覚えておくのよ…髪と顔は女の子にとって命に等しいの。特に髪をゆだねるのは好意の顕れと―…―…―を意味するの、忘れたらダメよ―

―うん、母様―

―む、疾風ばかりずるいよ…母さん、僕もいい?―

―はいはい。甘えん坊さんね…凍也も覚えておくのよ…―

(わ、私はとんでもないことをやっているのではないでしようか?!)

我に帰る疾風、慌てて手をひこうとする…いや意志に反してさらに髪をすく

「は、んんっ／＼」

熱を感じさせる声に疾風の手は滑るようにすいていく…が、突然扉が粉微塵に吹き飛ぶ…ソコには中国代表候補生《凰鈴音》の姿。背後には猛り狂う虎がギランとみている?!

「疾風…コレはどういう事なのかしら?」

「り、鈴音さん!?!こ、これはその!?!」

「ん、なんだ騒々しい…鈴か。せつかくの夫婦の営みを邪魔をするとは無粋だな」

寝ぼけ眼をこすりながら小さくあくびするラウラ、サラサラとした銀髪が白磁のように白い肌を流れ落ちるように滑る一糸纏わぬ姿を見た鈴からびきつ？何か切れた音が聞こえ、温度が一気に下がる……ふ、夫婦の営みい?!……あ、朝っぱらからなんてことしてんのよ疾風！とにかく離れなさいよ！」

「断る。誰も私と疾風を引き離すことはできないからな……さあ疾風、もう少し営みを続けようか」

「ち、ちよ？二人とも引つ張らないでください。千切れる？ちぎれますから!?(ろ、老師。こういう時はどうしたらよいのですか?)」

両腕をぐいぐい引つ張り合う二人をよそに遥か彼方、五老峰にいる大恩ある師《童虎》に問う……しかし答えは帰つてこず、爽やかな朝の空気に疾風の悲鳴が響き渡った……

★★★★★★

「……相変わらずですね疾風は……」

「……キリくん」

ため息をつきながら三人の様子を見ていた霧也に声がかけられた。水色の髪を風になびかせながら立つのはIS学園最強にして生徒会長、更識楯無の姿……しかし霧也はナニも答えない

「……七年ぶりだよね……」

「……」

「誘拐されたかんちゃんを助けてくれたのキリくんなんだよね？学園に現れた襲撃者や、あの雲から救出して治療して私を助けてくれたのも……」

「……」

「………答えてよ。ねえ……キリく……」

「………前にも言いましたが私はボルフオッグ。GGG諜報部責任者です。私を通してあなた方が知る人と重ねるのはやめてください」

抑揚の無く、淡々と言葉を紡ぐ霧也……しかし楯無は風なびく白いマ

フラーを手にして声を漏らす

「じゃあ、なんでこのマフラーを持っているの？私とかんちゃんがキリくんの誕生日にあげたのを持っているの？お願い、答えて……キリくん」

「……………このマフラーは死んだ犬神霧也から貰ったのです……」

「え？」

「……………僕はもうじき死ぬ、だから君がコレを受け取って。もしカナンちゃん、カナねえちゃんにボルフォッグが会ったら……約束守れなくてごめん』と伝えてくれと。気になるようでしたらコレはあなた方が持っていた方が相応しいでしょう……」

マフラーを取り、楯無に押しつけるように渡し、印字を切り瞬く間に姿を消す霧也……

「……………嘘つき……《瞬转身》の術……キリくんしか使えない術だって知っているんだから……」

小さく呟いた楯無はマフラーを大事に持ち歩き出した……その瞳からはボルフォッグが七年前に死んだ幼なじみ《犬神霧也》本人だと確信を得たともとれる意志を見せながら

★★★★★

《GGG日本》本部。宇宙への足掛かりとしての宇宙開発公団が置かれる人工島《ギガフロート》の海底部に併設された此処では各勇者I Sサポート特殊艦六機を有し、速やかに世界各地へと向かうことが可能な施設でもある

「グツモーニング諸君」

「大河長官？今日は休暇じゃ無かったのかの？」

「そうだったんだが、ルネとユキはマドカくんにべったりでね……でもマドカくんは最初に比べると明るくなってよかったよ」

「博士、G―ISS―07《アリエス》の整備とシュバルツエア・ハーゼ隊のシュバルツエア・ヴァイクにGバリアシステム実装完了しました…あ、大河長官!」

「落ち着きたまえ、ユーノ・スクライア隊員。君のことはオウマ先生から優秀な空間認識、量子認識能力を用いた瞬間創世システムの優秀なスタッフと聞かされているよ。改めてようこそGGG日本本部へ」

「は、はい…」

握手するユーノと大河長官：現在、本部にドイツ連邦より研修配属されたシュバルツエアハーゼ隊の三機へGSライドを組み込み作業を担当していたユーノは獅童博士の兄オウマ・獅童の勧めもあり《三式空中ISS研究所》のメインスタッフとなっていた

「まさか、篠ノ之博士がGGGに参加してるなんて思ってもいませんでした、それに伝説のID5だったなんて…生身でミサイルを粉碎したシルバーピューマー、落下する衛星を五分で分解するブルーレオン、何でも真つ二つのブラックウオルフ、あらゆるコンピュータのプロテクトを数秒でとくホワイトラビット、即断、即決。チタンヘッドドライバーで相手をなぎ倒すゴールドタイガー…」

「まあ百聞は一見にしかず。若いころのワシ等もやんちゃをしてた頃だったからの…さて、そろそろシャツセルから…」

鳴り響いた警報に穏やかな空気から一転、緊張感がメインオーダールームに満ち、正面スクリーンに映像が投影され言葉を失う。無数の竜巻がシンガポールの街を蹂躪していく光景

「博士! コレはまさか気象兵器か!!」

「間違いない。コレは中国で確認されたモノより強化されておる…長官!」

「ウム! 直ちにGGG機動ISS部隊出動だ、メンバーは燐、疾風、そし

てラウラ君のシュバルツエアハーゼ隊：サポート艦は三段飛行甲板
I S 空母で燐と疾風をI S 学園で合流次第、現地へ！」

「三段飛行甲板I S 空母発進準備、三段飛行甲板I S 空母発進準備
！！」

GGGメンテスタッフが区画から蜘蛛の子を散らすように走り去る。同時に区画に分厚いシャッターが断続的に閉じへキサゴンから切り離され、そのまま三段飛行甲板I S 空母は海面へ急浮上。そのまま空へジェットエンジン全開で空を駆ける

途中、燐と疾風（なぜかボロボロ）、ラウラとI S 学園上空で合流。オペレーションルームで作戦ミーティングを束と火麻がはじめる

「今回、シンガポールに現れたバイオネットの気象兵器（ガンザン）の被害および逃げ遅れた民間人救出。そしてガンザンの機能停止と排除が目的だ」

「ラウラちゃんと黒うさ隊のみんなは、疾風君と逃げ遅れた民間人救出。リツ君はガンザンの足止めお願いね：シャルちゃんもガンザンI S の反応無かったたたって言うけど無理しちゃ絶ツツ対ダメだからね！」

「気、肝に銘じます……」

「もし破ったら……こ、この束さんと一緒にお風呂に入っ
て貰うからね!!」

「ゴホン！お前ら作戦前にいちゃつくのやめろよ」

「……クラリツサ、一緒に風呂とは？」

「隊長、古来より男女が一緒に風呂に入ると言えばただ一つです。営
みをうまく進める前戯であります！」

「なるほど……だから営みがうまくいかなかったのだな：疾風、今度一
緒に」

「ぜ、全力でお断りします！」

などのやりとりで緊張感がゆるむ。今回はドイツ連邦より研修配属されたラウラ率いるシュバルツエアハーゼ隊、GGG機動IS部隊との初出勤もあつて緊張気味だった空気が和む、やがてシンガポールへ近づくと三段飛行甲板IS空母中央が大きく開くと3とかかれたシャッターが開く

「ガオファー、ステルスガオーⅢ装着モード…いきますー！」

弾かれたように格納エリアからシンガポールへ飛翔するガオファー《ステルスガオーⅢ》装備モード、ミラーカタパルト内では疾風《IS風龍》を展開、瞬く間にミラー粒子がコーティング、同時にシンガポール市内へ射出、ラウラ率いるシュバルツエアハーゼ隊も続いていく

「疾風、私とクラリツサは民間人の避難誘導および救出に向かう」

「わかりました。私と雷龍は寸断され取り残された避難民救出に向かいます。ボーデヴィツヒさん、くれぐれも気をつけてください」

「わかった…また、あとでな…：…疾風も気をつけろ」

ラウラに無言で頷くとプライベートチャンネルを閉じ、疾風は胸のダイヤルを動かしシャオダンジイをコール、ハイパーセンサーで分断された橋に取り残された避難民へ圧縮空気を送り身体を包み込み、エアクッションを展開し安全な場所へ運ぶ。しかし巨大な瓦礫が背後から迫るも稲妻が粉碎。少し離れた場所にはティガオ4にあげた超高压雷撃で崩れ落ちたビルの外壁を砕く雷龍

『気をつけろよ疾風。あの気象兵器は前に戦った奴とは別もんだ！』

「わかっている、今は逃げ遅れた民間人を安全な場所に誘導を最優先します。雷龍はボーデヴィツヒさんのサポートをー！」

『わかっているよ…：…今、向かうぜ』

デンジャンホーに乗り移動する雷龍を見送るとエアクッションを広域展開、まるでソナーのように広がる風と共に安全な場所に移動させ、疾風は次のエリアへ移動した頃、分厚い雲の上空に身を隠すように無数の竜巻と豪雨をもたらしていくガンザンの前にガオファー《ス

テルスガオーⅢ≫装備モードが対峙する

「これが気象兵器ガンザン！これ以上は好きにはさせない！！」

すぐさま、ウルテクスラスター全開で迫るガオファーはドリルガオーⅡをコールし装着勢いよく回転するドリルで貫こうとする：しかし分厚い装甲は傷一つつかず弾かれるように後退する。しかし諦めず胸部リングジェネレータを解放、ファントムリングをドリル先端に展開と同時に回転速度が上がる

「ファントムリング！プラスッツ！ドリルファアアアントオオオム！！」

光輪を纏ったドリルが接触、そのまま砕き貫き内部メカを破壊しながら反対方向へ出るガオファー、同時に火を噴きゆつくりと海へ落ちていく

「いまだ！ガオーマシン！！」

隣の叫びが響くと山間部からライナーガオーⅡが線路を滑空するよう飛翔、分厚い雲の切れ間から黒いステルス戦闘機《ステルスガオーⅢ》、ガオファーから分離した《ドリルガオーⅡ》が片方とドッキングし旋回する

★★★★★

「火麻さん！リツ君からファイナルフュージョン要請シグナルきたよ！」

「わかった！長官！！」

『ウム！ファイナルフュージョン承認！！』

「了解！ファイナルフュージョン……………プラグラアアアアムツツドラアアアイブ！！」

赤く点滅するパネルを叩き割ると同時に、プロテクト解除。インストールされ表示が赤く明滅する

— G A O F I G H G A R —

何時もならばプログラムリングが周囲に展開、リングを各ガオーマシンが走る：見慣れた光景が起こらない。それどころかF・F用プログラムリングが起動していない、エラー表示のみが明滅している

「な、何で、確かにプログラムドライブしたのに……!?!」

★★★★★★

「ファイナルフュージョンが出来ない?…何でだ!」

突然の事に戸惑う燐、ガオファアのハイパーセンサーが背後から迫る機影探知を告げる音が響く：それを目にした燐の動きが止まる。眼前には白亜のISにも似た機体の名前を口にした

「あ、あれはバイオネットに奪われたガイゴー!」

金色の胸部装甲に施されたスリットに光が走ると同時にガオーマシン各機がガオファアから離れていく光景に声を失う。考える暇も与えないかのように身体に衝撃が走る。背後に目を向けた燐の視界には複数の未確認ISが囲むように展開するそれに見覚えがあった

「あの機体は……八年前に父さんと母さん、モジュール01のみんなを殺した、コード《ゲシユペンスト》……まさかバイオネットだったのか!!」

ギリツと拳を握りしめるも、今は気象兵器ガンザンを安全な場所で機能停止、破壊をしなければ。そのためにガオーマシンをどうにかしなければと動いた時だ

『十二余所見してやがんだあ?バ・イ・オ・ダ・イ・ン・R I N!』

声が響くと同時に背後に激しい衝撃、たまらず体制を崩した燐に

コード《ゲシユペンスト》がスプリットミサイル、M90アサルトマシンガンを一斉掃射、無防備状態で為すすべもなく撃たれ続け、強固な装甲がひび割れ、遂に碎けISスーツを貫通。夥しい血が朱に染め垂れ落ちていく

「グアアアア!!」

『おお、いいねえトレヴィアアアアアン！最高の声だな！ボイスレコーダにはしっかりと記録しとけよ……ガイゴー』

『り、リョウカ、カ、カ、カ……リン……』

集中砲火を受けながらもガイゴの声がサイボーグである隣の耳に届く……その声は八年前、モジュール01で母と共に死んだ人物と同じモノ、薄れていく意識に蘇るのは細切れに切り刻まれた父の最期の姿。そして金色の胸部装甲が真ん中から開き見えたモノ

『…………リン……』

彩り様々なケーブルに繋がれた人間の頭部……《獅童ライ》が虚ろな瞳を向け微かに唇が震える

「そんな……ウソだ……父さんはモジュール01で、オレの目の前で!!」

『喜んで貰えたみたいだな？ そうだ、感動の再会って奴だ！キヒヒッ嬉しいよな？もしかして感動のあまり声もでないってか？……だったら出させてやるよ……こいつは六年前の研究所をぶっ壊された分だ！受け取りな!!』

「ぐ、アアア！」

何も無い場所から複数のミサイルが右足の装甲を砕く……ISスーツは焼けただれ異臭が立ち込める

『やつと声を出したか。これはオヤジの周りをコソコソ嗅ぎ回ったクソ忍びのせいで株価を下がった分だ!』

「ウワアアア!」

右肩のウルテクスラスターが光に包まれドロドロに赤熱化、大爆発を起こし右肩の肉が抉れ血が吹き出す…力なく落ちていく燐…だが何かに頭がつかまれミシミシとひびが広がっていく中、グニヤリと風景が歪みだし、青を基調とした勇者にも似たロボット…全身装甲の I S 《ファイバード》がついに姿を見せた

「グ、グアツ」

『どうした?その程度かバイオダイナミック?失敗作風情がバイオネットに逆らうんじゃないよ…アンツ!?答えろよ。オラ、答えろよ出来損ないのモブが!!答えろよ出来損ない!!』

拳が何度も、何度も胴体を捉え殴る。胸部装甲リングジェネレーターは砕け、限界を超えたダメージにより勢いよく血を吐き出す燐…すでにシールドエネルギーは一桁切り、維持危険域を超えているのに関わらず瞳から戦意は失われていない燐を忌々しくみる…

『……気に入らない目だな…千年余り前に俺を裏切った《兄弟》とナニもねえ《ボイド》に飛ばしたガンバスター擬きのと似てやがる……もうあきた…帰るぞガイゴ、ゲシュペンスト……』

無造作に放り捨て背を向けるファイバード、だがゆつくりと振り返るその手にはフレイムソードが握られている

『……さて、念には念を押ししておくか……手向けにコレをくれてやるよ!俺様のカッコいい必殺技であの世にいつてこいやああ!フレイムソード、チャージアップ!フルバーストオオオ!!』

加速しながら炎を纏った剣…フレイムソードの刃が落ちていく燐、ガオファアの身体を捉え右斜め上段に切り払いキンツと刃を収め、背

を向けると爆発。そのまま海面に水柱が立ち治まると真っ赤な血が浮かび上がった

『……………さて、不良品は処分完了…残りは雑魚だけだ…赤子の首をひねるぐらい簡単だから後回しにすつか…クヒツ!』

赤く染まる海面を一瞥するとファイバードはガイゴー、奪ったガオーマシン、ゲシユペンストを引き連れまるで凱旋するかのよう悠々と空へと舞い上がり溶け込むようにその場から姿を消した

★★★★★

「リツ君!しつかりして!リツ君!!」

「燐!目を開けて……………お願い」

「いかん、瞳孔反応が鈍い!緊急オペレーションを急げ!」

ストレッチャーに乗せられ長い廊下を急がせる医療スタッフ、その隣には連絡を受けたシャルロットと束の姿…そのまま二人は特殊ユニットベース《弾丸X》内にある処置室に入るとアジャスト、各体調整システム調整と同時平行で傷の処置をはじめ獅童レイジ博士、束

シンガポール市内の災害支援および、救出を終えた疾風、ラウラ、シユバルツエアハーゼ隊がみたのは血に染まる海面に力なく浮かぶ、息も絶え絶えの燐の姿…応急処置をしながら急ぎGGG日本へ帰還し《弾丸X》内《X》ルームにある処置室へと燐は運び込まれた
六時間後。処置室のランプが消えるも予断は許されなかった…

『長官、燐の治療はおわったぞい…』

「そうか、束くとシャルロットくんは?」

『…シャルロットくんはGSTOONのアジャストを、束くんは細胞抑制システム調整を継続して貰っておる…ガオファアが機能停止寸前まで燐の細胞抑制システムを維持しておらんかったら燐は…』

死んでいた、喉元までにでかかった言葉を飲み込むレイジに無言で頷くと口を開いた

「……機械は治すことは出来るが、たった一つの命は治すことは出来ない……ガオファアは燐を必死に守ってくれたのだな。博士は引き続き三人で治療を継続してくれ」

『了解じゃ……』

サブモニターを切り、そのままメインオーダールームからセカンドオーダールームへと移動した大河、そこには諜報部、機動IS部隊、ラウラ率いるシュバルツエアハーゼ隊の面々を前に深く息を吸い口を開いた

「諸君も知っての通り、燐がバイオネットの上級幹部と交戦、瀕死の重傷をおい今治療中だ。しかし必ず生還し元気な姿を見せてくれると信じている。何故なら燐は《勇者》だからだ！」

大河の力強い言葉にセカンドオーダールームのメンバー全員が頷く……ラウラ、クラリツサはGGG配属が決まってからGGGアーカイブズを閲覧し、燐……いやGGG機動IS部隊の『絶対に諦めない』『前へと進む姿勢』を見てきた

GGG機動IS部隊はまさに勇者と呼ぶにふさわしいと認めていた彼女達も頷くと、諜報部主任《犬神霧也》が正面スクリーン近くに立つ

「……大河長官、これより地球防衛会議より承認されたID5アーカイブズの封印を解除します。これから見せるのはGGG設立に深く関わる事件です……」

スクリーンに映されたのは衛星機動上に浮かぶ国連宇宙開発機構と各国政府の技術の粋とIS本来の運用を目指した《モジュール01》……しかしノイズが混じり、モジュール01の外壁が爆発。周囲に

黒い装甲に赤いバイザーを輝かせ構えた銃、背部からミサイルが火を噴く

そして、青と黒を基調とした全身装甲のISが現れ大きくうがたれた隔壁へ黒い装甲のISを引き連れて数十分間、悲鳴と助けを求める通信音声が続く…そして

『キヒヤハハハ！クソ下らない夢なんざ金にならないんだよ!!フレイルムソード、チャージアップ！フルバーストオオ!!』

瞬く間に炎にも似た光がモジュール01を切り裂き、数秒で閃光に包まれ爆散。辺りに無数の肉片、隔壁の残骸が大気圏へ落下する中、青と黒を基調とした全身装甲のISと黒い装甲のISは辺りに溶け込むように消えた所で映像は途切れノイズが流れるのを啞然となるシユバルツエアハーゼ隊とは違い、機動IS部隊メンバーは無言でみている

「……これは八年前に起きたモジュール01の事件の顛末です。今回、隣に重傷を負わせた全身装甲のISと八年前の全身装甲のISは映像解析の結果、同一のモノと判明しました。ガオファアのライブラリに記録された音声とも合致しています」

「つまり結論から言うとだ、八年前の事件はバイオネットが関わっていたと言うわけだ…」

「…本日を持ち、我々GGG機動IS部隊は、各支部との連絡を密にし未確認IS、コード《ファイバード》をバイオネットのゾンダーISと同等の脅威として捉え、遭遇した場合は、撃破もしくは捕縛を前提とし活動する。無論、奪われたガオーマシン奪還も考慮し行動する」

言い切ろうとした時、再びアラートが鳴り響く。レイジの代理としてオフィサーシートに座るユーノは正面スクリーンに映像を出力する。映したされたのは陰陽の太極図にも似た光が空いっぱい紋様を展開、やがてガラスが砕けるように割れ光と共に現れた姿に、この場にいるメンバーに緊張が走った

青と黒の全身装甲のIS：《ファイバード》が《GGG日本》本部
近海に姿を見せ飛翔している



『なんだ、ここは？ 亀山さんの姿も見えない…みた感じ日本みたいだな…』

青と黒の全身装甲のIS、《ファイバード》は全周波数で呼びかけるも応答が無い事に不安を感じながら、周囲をサーチした時、真下の海面が盛り上がり紫色の潜水艦《多次元諜報用IS潜水艦》が姿を見せ、カタパルトが開き、上昇すると一人の少年が姿を見せた

「……………見つけましたよ…七年ぶりですね…この日を待っていましたよ。ファイバードオオオオ!!」

白髪をゆらゆら揺らし憎悪の眼差しを向け《犬神霧也》の音が響いた

第十七話 奪われたガオーマシン!!

了

第十八話 異世界より訪れし者、奪われし者との邂逅

『ダメだ、通信が繋がらな……異世界？いや平行世界だから周波数が違うのか？』

ー……………少しいいでしょうか？ー

全領域通信で呼びかけるも応答がない。とりあえず移動しようとした青に黒の全身装甲のIS《ファイバード》：不動統夜に耳に声が響く、真下をに目を向けると海に浮かぶ紫色の潜水艦。その独特なフォルムに見覚えがあった

(あれはGGGの多次元諜報用潜水艦？まさか勇者王の世界か？それにしても何か小さいな……………多次元諜報用潜水艦にはボルフォックがいるはず。話のわかる奴だったな)

ー……………聞こえてますよね……ー

『ああ聞こえてるけど……………』

ー……………ひとつお尋ねます。あなたの纏っているのはファイバードですね？ー

『そうだけど……………それを聞いてどうす……………』

通信の先にいる相手にそう答える統夜に怒気にも似た殺気が襲いかかり身震いした時、紫の影が躍り出るといきなり切りつけてきた。が寸前でフレイムソードで防ぎ火花が舞い散る

『お、おいーいきなりナニしゃがる!!』

「……………其の刃、其の姿、其の声、間違いありません……………七年ぶりです。ファイバード!!」

シルバームーンでギリギリツ！と音を鳴らしフレイムソードの刃を擦らせ、ISボルフォックを纏った霧也の怒りに満ちた叫びが海面に響き渡った…

第十八話 異世界より訪れし者、奪われし者との邂逅

『く、まて！人の話を聞け！聞けつたら!!』

「……………よくもヌケヌケとそんな事がよく言えますね…ジェットワツパー!!」

ジェットワツパーが右腕装甲から射出、それをフレイムソードで切り払うファイバード…突然の攻撃に困惑しながらも通信で呼びかける…しかし

「……………その程度の攻撃は俺様には通用しない?…私をなめているのですか!」

激昂し、両手に構えたシルバームーンが銀色に輝き、勢いよく投げつけてくるのを回避する…がハイパーセンサーに新たな機影反応、最大望遠で映されたのは三段飛行甲板空母、海面からは水陸両用整備装甲車が浮上している

「生まれファイバード!こちらはGGG機動IS部隊所属IS氷竜だ、君には撃破もしくは捕縛する事になっている。私たちは君とは無駄な争いはしたくない…投降していただけませんか?…セシリアさんは後方で待機をお願いします」

「わかりました。もしもの時は私が凍也さんの援護します…欧州連合、いえイギリスGGG所属として完璧に」

『……………おい、僕の援護は?』

『(氷竜?隣にいるのはセシリア、あの赤いのは炎竜?どうみたってISサイズだよな?勇者王の世界じゃないのか?)……わかったっていいたいけど!…その前に、コイツを止めてくれ!じゃないと武装解除も出来ないだろうが!!』

ようやく話を通じる相手が来たと安堵する統夜…殺気をあふれ出

させる霧也ことISボルフォックを止めるよう頼む、しかし予想もしない答えが帰ってきた

『……………《誰がおまえ等みたいな出来損ないなんぎの言葉に従うかよ、失敗作のスクラップ共が何人来ようが俺様に勝てる訳ないんだよ？ わかったかスクラップ!!》だ？……………もういつペン言ってみろやゴラア!!』

「……………落ち着け炎竜、捕獲用ペンシルランチャー用意。セシリアさんはファイバードの牽制と霧也の援護をお願いします!」

「はい!」

炎竜、氷竜をツートップ、セシリアのブルーティアーズ三機が分散。ファイバードと斬り合う霧也ことISボルフォックを囲むように三角形みたいに配置、飛翔しながらペンシルランチャーをファイバードの間接部へ狙いを定め撃ってくる

『こつちの言葉が通じないのかよ!』

舌打ちしながら回避していくファイバード…なぜGGG機動IS部隊が自身に攻撃? (主に霧也) してくるのか理由すらわからない…その戦いをみる二つの影が在ることに気づけないでいた

「おうおう、やってるなくクヒッ! フリール、通信障害は継続しろよ。せめて俺の身代わりになってくれよファイバードいや、不動統夜。そうしたら俺様が色々動きやすくなるからな……………それに墮淫の書か、面白い能力だな……………《強奪》してみっかなアヒッ!」

「牙檻様…不動統夜の声も最高に興奮しますう……焦る声は堪らなくテンションフォルテッシモ! 捕まえて解剖がしたいなく麻酔なしで皮膚を、筋肉を、神経を…内蔵を切り刻んで私のモノを入れて暖かい血と香り、血管と筋肉の纏わりつく温もりに入れたと思うと…ハアッ! ハアッ! ハアハアハアハアッ……………シンッ! ふふ、凄く絶頂しまし

たあああ…」

「おいおい、そんな興奮するなって…ち、俺様のパチモンのクセに粘るな…」

―牙儘様、システムXNの調整および座標固定終わりました―

「わかった。フリールここはおまえ達に任せる。フランスでの計画発動まで時間を稼げ…俺はラ・ギアスに必要なモノを取りに行く……ゾンダーISは五つまで使用を許可する……あとエルザの《Z・L》処置も終わらせておけ」

「了解しました牙儘様！…このフリールめにおまかせを!!」

仰々しく頭を下げるフリールを残し、《システムXN》を使い転移する牙儘…その場には青い装甲に背中マウントされた巨大砲が目立つ全身装甲のIS《サーベラス・イクナイト》を纏うフリール・ルコック。その背後には無数のアンテナが浮かんでいる

どうやらコレが統夜の通信を傍受、内容を全く違うモノへ変えGG機動IS部隊へ送っているようだ

「牙儘様特製…《指向性通信阻害言語変更》システムは万全であります！さあ、聞かせておくれ我がバイオネット総帥のイミテーション《不動統夜》。君の悲鳴を……む、起ってしまったか」

装甲越しには見えないが、いきり立つ自身のを想像し不動統夜の声に快楽を見いだすバイオネット上級幹部《アルケミスタ第一位》フリール・ルコックの眼前では…

『く、振り切れない！』

『逃げんなよ、逃げてんじゃぬえよ！セシリア!!』

「もう、人使いがあらいですわ！行きなさいブルーティアーズ！」

距離を取ろうとするとブルーティアーズの精密射撃による光弾が雨のように降り注ぐ、間隙を縫いながらペンシルランチャーを構えたIS氷竜、炎竜?…三機とも一定の距離を保ちながら統夜を包囲、飛翔する

三角形の陣形…通称《トライアングル》は1980年頃、アメリカ陸軍《エイランド・ラーク大佐》率いる特殊チームがあみだした戦技。一定感覚の距離を保ちながら相手を包囲、集中砲火を浴び無力化する。この戦法は大規模部隊に対し三方向からの攻撃を大部隊が包囲していると誤認、混乱させる効果もある事から軍の必須高度習得戦技能として上げられていた

本来は地上戦のみの戦技なのだが、GGG日本本部所属、火麻参謀の対ゾンダーIS戦におよびバイオネットAT兵器への有効な戦技と提言され改善と昇華により再び脚光を浴びたのだった

海の満ち引きのように距離を取る三機の捕縛用特殊弾が装甲をかすめ、更に霧也のシルバームーンの斬撃を捌く統夜から疲労が見え始めた

『(…外部オープン回線も通じないのか!く、ここは一旦逃げるしかない) ……ファルコンウイング!!』

まばゆい光がファイバードから発せられ間近でシルバームーンで切り結んでいた霧也の視界が奪われる。一気にスラスタ全開で離脱を試みるも違和感を感じみるとファルコンウイングへと形態移行していない。それどころかエラー表示が各種ウインドウに赤く点滅している、いったいナニがと思った瞬間鈍い衝撃が背中から響く機体表示には間接部への異常、肉眼でみるとトリモチにも似た液体が染み込み瞬く間に全身駆動部を固めていく中、自身の首に冷たい何かが当てられる

「…動かない方がいいですよ。ファイバード…:…アナタに降りていた命令は捕縛もしくは撃破です。このまま大人しくしていただきますが…」

『グアッ!』

「……ファイバードは解除させていただきます。本部に着くまで少し眠っててください」

ファイバード解除と同時にみぞへの重い拳が突き刺さり、統夜は意識を手放す寸前みたのは憎悪が込められた霧也の血のように赤い瞳だった

—————
—————

《GGG日本》本部、同メインオーダールーム

「では、不動君はこの世界とは違う平行世界から来たと言うのだね?」
「そうなるな。でもいいのか大河長官?ここはGGGにとって心臓部になるメインオーダールームなんだろう、怪しき満載な自称平行世界から来た得体のしれない奴を連れてきていいのか?しかも手錠も無しで?」

「君の言うことはまちがいないじやろうて」

あれから一時間後、医務室で意識を取り戻した統夜。簡単な検査を終え招かれたのはメインオーダールーム。実際にみると広いと感じるよりもさらに驚いたのが本物の大河幸太郎と火麻激の姿。しかし獅子王麗雄博士がいなく《リリカルなのは》のユーノが定位置に座っていた事で平行世界、正確に言えば勇者王とISが別作品が融合した世界だと確信した統夜。本物の大河幸太郎に会えた事に少しうれしかったりするのを胸に秘めながら、ようやく話が出来た人間に出逢えたことで安心して自らの事を話していくと、背後から声が響いた
「実際に君が現れる寸前に未知のエネルギー、そして通常じゃ考えられんほどの空間干渉ベクトライズを確認したからの………君があのファイバードの操縦者かの?あ、自己紹介がまだじゃったのワシは

獅童レイジじゃ」

「(獅童?獅子王麗雄じゃないのか?じゃあ獅子王凱は居ないのか?)
…ああ、俺は不動統夜だ…」

「こちらこそよろしくじゃ。長官、ようやく燐が峠をこしたぞい」

「本当か!博士!!」

「あとは細胞抑制システムおよび生体パーツの中和に半日といったところじゃ。程なく意識はめざめるじゃろうて…だが問題が二つじゃ」

正面スクリーンに映されたのは装着前のガオファア。至る所が砕けちりGリキッドが絶えることなく床を濡らさしている

「ファイバードの攻撃を受けたガオファアのダメージレベルは大破認定ギリギリで辛うじて保つとる、現段階での早期自己修復は望めん…
そして」

「バイオネットに奪われたガオーマシン…ステスルガオーⅢ、ライナーガオーⅡ、ドリルガオーⅡか…だが燐にしかコール出来ないはずだったよな?なのにコントロールを奪ったアレはモーディワープで開発、しかしモーディワープはメタンハイドレードが気化、爆発により消滅したことで中断したガイゴ…ソイツが何故?」

(ガオーマシンが強奪?燐?ガオファア?...ギヤレオンは居ないのか?それにバイオネット…ゾンダリアンおろか原種もないのはわかった。会話から判断するとこの世界にいるファイバードのせいで俺はこんな目に!どこの何奴だ!!)

「博士、恐らくなんですけど燐の生体認証を誤認してガイゴーにコントロールを奪われたんじゃ」

「……ユーノ君の予想通りじゃ…あのガイゴーには、ガイゴーには
………」

スクリーンの映像が切り替わり、見えたモノを目にした大河、火麻、

ユーノ：そして統夜の息も止まる

「ガイゴーにはワシの息子、モジュール01で奴らに殺された獅童ライを生体ユニットに組み込んだるんじゃああ!!」

無数のケーブルにつながれた人の頭部：虚ろな瞳を向ける獅童ライを前に叫ぶ。その拳から血がにじみ出していた

ーーーーー

「……………バイオネット、今から八十年前に創設された国際規模の犯罪組織。主に各分野において優秀な頭脳を持ちながらその危険思想から学会から追放された科学者達で結成されている：第三国、紛争地域に獣化兵器《ゾアティックウエポン》気象兵器開発：アドヴァンスドチルドレン、それらをベースにしたツインデュアルカインド……………ただけイかれてるんだよバイオネットは」

深夜、部屋で統夜はGGG、その前身に当たるID5のライブラリを閲覧している：元の世界に戻る手段が無い今、大河の言葉もありGGG日本本部にある職員寮を与えられ情報端末および施設の散策も認められていた、あまりの待遇の良さに驚き戸惑うのを察したのか

ーん？拘束でもされると思ったかい。本当ならば私の家へ泊めたいのだが、部屋が空いてなくなね…しばらく不便はするが情報端末および施設は自由に使ってくれー

施設内の端末使用IDを手渡してくれた大河の好意に甘え、現在バイオネットの成り立ち、目的を自分なりに調べていた…がある項目で手が止まる

「オーボス……………ダ・ガーンがこの世界にいるのか？」

ーテレビをごろんの皆さん……………この危機を救えるのは皆さんの……………です！ 私たちの星・地球を救えるのは、私たちの……………なのです！ 国境を越えて、地球を信じてください。《伝説の力》を信じるのです……………私たちはこれまで、自分たちの利害だけを追い求め、

あまりにも母なる地球をないがしろにしてきました……今、私たちに
は、心を一つにする必要があります。今こそ、想い、願いを共にする
必要があるのです……もう一度言います。『星の運命を共にする者た
ちよ……星と想いを共にせよ。星と願いを共にせよ……黄金の光に
集いきて、新たな道を照らすであらう……』これが、伝説の言葉で
すー

ノイズ混じりの映像にニュースキャスターの女性が呼びかける姿、
大地が裂けていく中へ勇者が飛び込みつなぎ止める中、白い服？を着
た少年の姿

ー………ダ・ガン！………

小さい光がボロボロの勇者にあつまり、形容しがたい黒い何かを倒
し、光が世界にあふれた所で終わる。今から三十数年前に起きた事件
…その時期にバイオネットは活動を休止、有名な科学者が失踪してい
た事に引っかけかりを覚えた時、気配を感じ振り返った

「……………」

肩あたりまで切りそろえられた白髪、整った顔に血の色よりも赤い
瞳、紺色の学生服に身を包んだ霧也が音もなく立つ姿…静かに椅子を
立つ統夜をジイツと見ている

「俺に何のようだ？」

「…七年前、あなたは私の生まれた里を滅ぼした」

「な、なに言ってるんだ？七年前っていうか、俺はこの世界にたまたま
来ただけって……」

「……今こうして、対峙しているのは我が師アスマタ、里の皆の導きに
違いありません………必滅しなさいファイバード…不動統夜!!」

ゆらりと手のひらに指を当てる…いやスルリと入っていき引き
抜くと大小様々な数珠が現れ、音を響かせながら数珠をふるう姿から
黄金の輝きをみた

「……六道輪廻（りくどうりんね）……」

「うわああ!!」

暗く深い闇へ落ちていく統夜……その瞳に映されたのは地獄絵図に身をこぼわらせるも耳に静かな声が響く

―今からあなたに、もつとも相応しい世界に落とします!!―

「う、うわああ!」

―修羅界!常に争いの絶えない世界!休むまもなく争い戦う世界!!―

血煙まう世界で戦い続ける統夜、その足下には死体の山、しかし周囲にはそれを上回る敵が襲いかかる。が再び浮遊感におそわれ辺りが様変わりする

―畜生界!本能のまま生きた者が獣と生まれ変わる苦難の世界!―

―餓鬼界!貪欲な性質を持った報いとして落ちる場所、口にするのは血膿、やがて醜き餓鬼とかす!―

地獄界!現世で悪行を成した者が落ち身を焼かれ鬼共に喰われ続ける!

!!
―人界!人としてのカルマに縛られる世界!善悪定まらぬ世界!!―

様々な地獄界を見せられ精神が擦り切れ、肉体も蝕んでいく……統夜の前に光が広がる

「天界！極楽！人界より優れるといわれます。しかしいつでも他界へとおとされる輪廻免れぬ神々の領域！！」

神々しい世界…だが瞬く目に地獄へ落ちる最中、統夜は信じられないモノを目にする

《—————！》

肉が焦げ、声にもならない声をあげ身を地獄の炎に焼かれ続ける女性…あの日、白騎士事件で自らをかばい亡くなった母親の姿に消え失せそうな意識が覚醒、剣山のような岩肌を掴みさげんだ

「か、母さん！今助けるから！！」

岩肌を駆け上がるよう登り、手を伸ばし助けようとするも空を掴むようにすり抜けていく

「無駄です……ここは地獄界、霊体のあなたが叫ぼうが呼ぼうが彼女の耳には届きません」

「なんで、なんで母さんがこんな事に！」

「……すべては、あなたが過去に犯した罪によるもの……一人の女性の心を操り、身体も心もボロボロにした罪、そしてある女性の弱みを握り恫喝し、命を弄ぶ邪悪な力を持った罪を持つあなたが産み落とした罪で、来世に生まれ変わる筈だった彼女に罪を償わせたのです」

「そ、それは…確かに俺は束とセシリアの時は仕方なかった……今はもうやっていな……」

「……………オーム！！」

数珠がふるわれた瞬間、統夜の身体が近くの岩肌へ叩きつけられた

「口ではなんとでも言えます。その内にある命を弄び、心と体を壊

す《墮淫の書》の契約の力を行使すればするほど、彼女の罪は重くなり来世に生まれ変わることは先になります…」

「…お、俺のせい…母さんが来世に転生出来ないのは…」

「罪の重さがわかりましたか…私や、隣達に、あなた方バイオネットが行った罪が鼠算式に増やしていく…もはや語るのはやめにします…ここでアナタを葬ります!!」

瞬く間に世界が書き換わる…太蔵曼荼羅図が覆う様に、本能的に身体が強張る統夜の目に数珠を奮う霧世の背後に影をみる…あらゆる邪を滅する不動明王、邪を喰らい己が身で浄化する孔雀明王、そして大日如来の姿…

「お、おまえは神、いや仏の生まれ変わりなのか!」

「…さあ…受けなさい。我が師アスミタより受け継いだ乙女座バルゴ最大の奥義《天舞宝輪》!」

第十八話 異世界より訪れし者、奪われし者との邂逅

了

第十八・五話 不協和音―双龍の決断―

「……………触覚剥奪」

「うわあああ!?!」

仏の世界《太歳曼陀羅》が辺りを埋め尽くす中、静かに声が数珠を振るう音と共に響く…乙女座《バルゴ》のアスミタの後継者《犬神霧也》の天舞宝燐を受け五感の一つ《触覚》を奪われる統夜

「…私や疾風、凍也、弾…そして燐が受けた苦しみはこんなモノではありません…あなたの罪の大きさを」

「俺はお前の里や燐って奴に何も…俺がやった罪って!」

「これを見てまだいえますか…」

曼陀羅界の一部が切り替わり見えた光景に体を奮わした…今までがまるで映画のコマ割りフィルムが激流のように流れ溢れ出した。統夜しか知らない事を何故霧也が知っているのか？

その理由は一つ。犬神の里を滅ぼしたバイオネットの手により脳…正確に言うとう霧也の持つ《読心》能力が原始脳に当たる部分にあることを突き止めた沙華堂牙儘、フリール・ルコックの手で開頭され打ち込まれた《特殊電極》によるさらなる能力強化により《リミビットチャンネル》が覚醒。他人の記憶、性格には世界中の生命体の記憶が常に流れ込む。対象者の記憶にチューニング、リーディングした結果だった

「……………味覚剥奪」

「はうーあああ…!?!」

数珠が再び振るわれた瞬間、舌にしびれにも似た何かを感じたのを最後に声がなくなる…霧也は静かに口を開いた

「今、あなたに残されたのは三感、聴覚、視覚、嗅覚だけ。自らが犯した罪の重さを知らず生き、他者を不幸にし続けた……さあ自身の罪を残り三感を失う間に悔いなさい……」

「!!!」

声も出せず身体の触覚、味覚を失った統夜の残された五感は一感のみ、このまま技を受ければ廃人になる。必死に打開策を模索するも浮かばないなか、無慈悲に数珠が振るわれたその時、太蔵曼陀羅界が砕け血と死臭が漂う世界《冥界》へと戻る、同時に統夜の剥奪された触覚、味覚が戻り膝をついた

「……天舞宝輪が破られた?」

攻防一体の乙女座バルゴの最大奥義《天舞宝輪》。破るには二つしかない。黄金聖闘士三人一体の女神アテナにより封印された禁断の闘法《アテナ・エクスクラメーション》か、もしくは《神》……前者はまずない、何故なら黄金聖闘士はこの場には自分しかない。後者の可能性しかない

その時、巨大な小宇宙が遥彼方……先の未来から送られてくる光が冥界に集まり二人の前に降り霧也は無意識に膝をつき頭を垂れた

腰まで届くような美しい髪に優しい笑みを浮かべ右手に黄金の杖《ニケ》を持つ白いドレスを纏う女性を前に統夜は思わず声を漏らした

「た、束?」

『……不動統夜さん、残念ながら私はアナタの知る篠ノ之束ではありません……若き乙女座バルゴのアスミタの継承者。犬神霧也、あなたは彼になぜ天舞宝輪をかけるのです。彼の話に耳を傾けましたか?』

「ア、アテナ……彼は悪しき力を持って数多くの人々を苦しめ……」

『霧也。あなたの力ならば善か悪か解るはずです……彼の本質を見極めるのです……』

…柔らかな笑みを向け霧也に諭しながら束？から安らぎにも満ちた、すべてを包むような不思議な暖かさを伴った光が包むと麻痺していた感覚が回復していく再び統夜の頭に声が響く

『……今から四年後の未来から《ある事》を確かめに意識と小宇宙をとばしここまで来ました…』

『ある事？』

『…私の時代での聖戦を左右する黄金聖闘士、彼が聖衣を返還した理由を!……不動統夜さん。少し事情が変わりました……早くこの冥界から現世へ霧也と共に戻りなさい』

『ま、まってくれ…か、母さ……』

黄金の杖《ニケ》から光が溢れ包まれ二人の姿が消えると、束は無限地獄で業火にやかれる女性に杖をかざす。炎が消え光に包まれ瞬く間に焼けただれた肌が治っていく、まだ目を覚まさない彼女に神秘の輝きを秘めた女神を模した《聖衣》、いや《神衣（カムイ）》を装着させた時、様々な記憶が流れ込んできた

『……あなたは自ら望んでこの冥界に来たわけでは……姿をみせたらどうですか？』

異様な空気に気づいた束の周りに黒い影が無数現れる…黄金の杖が光り輝き瞬く間に霧散していく中、どこからともなく声が響いた

―篠ノ之束…いや女神アテナ。その魂を地上へ連れ帰させるわけにはいかない……我らが神《沙華堂牙檻》様に刃向かう縁者は未来永劫苦しませるのが我々の定め―

『……それはあなたがたの身勝手な理屈にすぎません。この方は十分に苦しんだ。死んでなおも無限地獄に止まらせ苦しみを与えるのは間違えています』

「……ならば力尽くでもその魂を返させてもらおうかあああああ!!」

無数の影が躍り出ると一つの形へなる。束…聖闘士たちが守護する女神アテナは黄金の杖《ニケ》をかざし防ぐと同時に統夜の母を不思議な光に包む

『……写し身である私ではあなたを本来の場所へ送ることができません。一時的に《Gクリスタル》に匿います……アテナの神衣(カムイ)、彼女をお願いします』

「逃すかああああ!!」

怨念に満ちた叫びが冥界に響くと同時に光が溢れ、やがて消え去った頃には黒い影も女神アテナの姿はどこにもなかった

第十八・五話 不協和音―双龍の決断―

「これは一体どういうことかね。霧也君」

「……………」

深夜のGGGメインオーダールームに大河の声が響く。その視線の先にはGGG諜報部主任《犬神霧也》、そして異世界から次元跳躍しGGGに保護されている不動統夜。そして火麻参謀、獅童博士、研究開発部副主任ユーノ、機動IS部隊第二小隊長ラウラ、クラリツサ、竜崎疾風、凍也の姿。やはり家に泊めようと統夜と連絡するも繋がらない事に不安を覚えたに大河は娘たちをマドカに任せGGG本部宿舎内に向かい、割り当てた部屋に入りみたのは魂が抜けたように倒れた統夜、結跏趺坐した霧也。急ぎ医務室へ連れて行こうとしたが二人の意識が覚醒、事態の異様さにただ事ならぬと判断し、聞くも霧也は一切答えなかった

「霧也。君は統夜君に何をしたのか……」

大河の言葉は鈍い音にかき消された。自分達の目の前で統夜が思

い切り霧也の顔を殴り、その勢いで吹き飛んだ霧也。ゆらりと立ち上がり憎しみの目を向けるその目を真正面から統夜は受け止め構えを解いた

「これから先お前がどう思おうとお前の勝手だ。だがな、俺はこれでお前を許すつもりだ」

「ふざけないで下さい!?!あなたのした行為がどんなものか、理解しているのですか!!」

「ああそうだな。確かに俺がした事は最低だろうな。だがな、それを言ったらお前はどうかんだ?」

「・・・どういう事ですか?」

憎しみの目で睨みつけながら、統夜を霧也は見ていた。だがしかし、質問の答えが分からず不思議そうにしていた。

「もしも、俺がお前と同じだったら? 同じ苦しみを持っていて、同じ理由で攻撃されて、もしも止める人間がいなくて相手が死んで、もしもそれが敵の策力だったらどうするつもりだ?」

「そのようなこ『あつたらと言ったはずだ』・・・」

「もしそうだったら、お前も俺も『この世界とは無関係な人間』を殺した事になる。ただ相手と『似ている』、同じような『思考を持っている』ってだけで殺されたんじゃ、何の意味も無いからな」

「「・・・」」

「俺としてはお前への制裁はこれでおく。それと、GGGのメンバー全員に悪いけど、俺はこのバカのおかげで死に掛けたので、追加で『俺がこの世界の歴史や最近のIS学園側の事件等を見て、俺が知っている方面の情報の揭示』をしない事にしました」

「「「・・・は?」」」

これにはGGGの面々も不思議そうな顔をした。『情報の揭示』をしないというのは分かるが、この『世界の歴史とIS学園側の事件』を見てと言ったのもあり、意味が分からないからだ。

「正式には貴方達の生きているこの世界の歴史で関与しているだろうと思う『存在』と、IS学園で起きた『織斑一夏の変化した姿の名前とその総称』と、おまけでこの世界の未来で起きる可能性が高いだろ

う『ある特殊な存在情報』も掲示しない?と云っているんです。貴方達の部下の独断専行によって何の関係も無い赤の他人を殺しかけたという、管理不行き届きと言う事でそうさせてもらいます。俺が自分の意志でそちらに掲示するようなものは別ですが、それ以外では一切話しません」

「未来で起こる可能性?不動統夜君、君はわたし達、いやこの世界でなにが起こる事を知っているというのかね?」

「……ええ、あなた達の未ら……」

大河に呼び止められ応えようとした統夜の言葉は、メインオーダーームに響いたアラートにかき消され獅童博士、ユーノはすぐさま状況を確認するためキーをたたく

正面スクリーンに映されたのは無数の蛇が髪のようにうねらせる全長約15メートルもあるカメラ:街を蹂躪し進む先にあるのはGG中国がおかれている科学院航空星際所。そこへまっすぐに向かう姿にメインオーダーームにいるメンバーに戦慄が走る

「素粒子Z0反応確認!間違いないありませんゾンダーISです!!」

「GG中国、ヤン司令からも支援要請が来ています!」

「ただちにGG機動IS部隊出動せよ!メンバー編成は火麻参謀、疾風、凍也、ラウラ君率いるシュヴァルツエア・ハーゼ隊。三段飛行甲板空母、三式空中研究所を緊急発進!ユーノ君、千冬君はメインオーダーームに待機!中国へ急行せよ!!」

「……了解!……」

大河の号令の元、先ほどとは打って変わり出動用意するメンバー。しかし霧也だけ何もいわれていない……

「霧也。君には引き続き更織家令嬢の護衛を頼む……あと」

霧也に近づき軽く耳打ちすると目を見開く、確認しようとするも大河は中国政府高官とのホットラインが入り事態収拾に向けての細か

い調整に入っている。ちらりと統夜を目を向けそのままメインオー
ダールームから姿を消した

(……………おかしい、あんなゾンダーは原作にはいない……………)

原作に無いゾンダーに胸騒ぎを感じる統夜をよそに三段飛行甲板
空母、三式空中研究所が緊急発進、そのまま一路中国へ進路を取った
頃。GGG中国がある科学院航空星際所より離れた場所では中国軍
戦車大隊が足止めをすべく砲撃を開始していた

「戦車隊！目標の足止めを最優先だ！」

「た、隊長！このままでは突破されます！星際所から増援が到着……………」

『ゾ、ゾンダアアアアアアア!!』

頭部から伸びた無数の蛇が戦車隊からの砲撃を防ぎ戦車に絡みつ
き振り回しそのまま地面へ叩きつけようと振り回す、中にいる操縦士
が死を覚悟する……………が次の瞬間何かが飛来、巻き付いた蛇を切り払い
戦車をつかむ影

「しつかりなさい！まだ諦めたらダメよ!!」

「凰鈴音代表候補？何故ここに！」

「本日付けでGGG中国支部《科学院航空星際所》所属《凰鈴音》よ、
後数分したら日本から機動IS部隊が到着するから、私たちが持ちこ
たえさせるわよ」

「GGG日本…機動IS部隊が来てくれるのか！各隊員、勇者たちが
到着するまで持ちこたえさせるぞ！」

「「「オウ！」」」

GGG日本：機動IS部隊が来てくれる。それだけで沈んでいた
気力が再び勢いを取り戻した：勇者ISを駆る彼らの活躍は各GG
G支部、そして年端もいかぬ少年達の勇氣ある姿と命を守ろうとする
姿は軍でも知らぬモノはない。そんな中、鳳鈴音は昨日：急遽本国か
ら帰還命令を受けGGG中国でのヤン司令との会話を思い出した

―鳳鈴音代表候補、急に呼び出してすまない。知つての通り我が中
国にもGGG支部置かれることになった、それに伴い科学院航空星際
所はGGGへ編入される鳳鈴音代表候補もGGG機動IS部隊への
参入が決まった―

―は、はい。GGG中国の名に恥じないよう地球防衛に尽力します
！

―ああ、君の活躍に期待している……………少しいいか―

―は、はい―

―……………GGG日本機動IS部隊に竜崎疾風、竜崎凍也がいるのは
本当かね？―

竜崎兄弟のことを訪ねるヤン司令：…いると答えると少し表情が変
わる。嬉しさと悲しみを帯びた眼差し。以前にバイオネットの気象
兵器によるテロを防いだ未確認IS《撃龍神》との接触した際に記録
されていた声とヘッドギアに隠れているモノのわずかに見えた顔を
見て聞いた時にもみせた

確かヤン司令には死に別れた《テラフォーミング・テクノロニクス》
の権威であった妻と双子の息子がいたことを思い出す：もしかした
ら疾風と凍也はヤン司令の：だがあくまでも憶測に過ぎないと鈴は
振り払う。それに深く聞くのは上官に対して失礼だ。でも聞いてみ
たい気持ちもある

悩むうちにGバリアシステム搭載の立ち会いしてほしいと連絡が
入りうやむやになってしまった：今は自分たちの後ろにある街を守

ることに神経を集中する

『ゾ、ゾンダアアアアアアア!?!』

戦車隊の集中砲火に加え、龍砲による援護砲撃に進行速度を徐々に遅れ砲火により煙に包まれた。が煙に紛れ無数の蛇型ミサイルが戦車数台に着弾、いや融合し蛇をもした戦車へ変わり味方であるハズの戦車隊へ砲火を浴びせる

「や、やめなさい! 柳隊長、早く攻撃を止めて!!」

『ダメだ。コントロールが効かない!!』

『くそ、止まれ! 撃つな!!』

敵味方に別れ混戦の状況をあざ笑うかのようにキメラゾンダーIS? は鈴へ狙いを定めミサイルを撃つ。かわそつと瞬時加速、ジグザク飛行するも追尾してくる

「く、しつこい! きやつ!」

あらぬ方向からの砲撃、見ると蛇型戦車数台からの砲撃だと気づくもスラストーに損傷警告、姿勢制御を必死に行う鈴に再び砲火が迫る『うおおおおあああああ!?!』

雄叫びがこだますると無数の雷が雨のように降り注ぎミサイルを撃破していく中、地面に大穴をあける黄色い影に驚く鈴の身体がふわりと風がふく。緑の装甲に身を包んだ少年の顔を見て頬が赤く染まる

「雷龍、いい加減着地のコツをおぼえさい。遅れてすいませんGGG日本機動IS部隊《風龍》これより防衛行動に入ります! 街の方は兄が民間人の避難誘導を始めています」

「ま、またせすぎよバカ……でも来てくれてありがとう疾風、あと雷龍も」

『なんかついであって感じ何だけどなくまあ今はあの蛇モドキを弱らせてコアをえぐり抜こ……』

再びミサイルが襲いかかる…しかし三条の閃光にすべて撃破される、見るとシユヴァルツェアハーゼ隊の面々の姿…しかしラウラだけはゆっくりと疾風に近づくと口を開いた

「疾風、私の前で浮気とはいただけいな…」

「イ、イヤデスネ、コレはその…」

だらだらと冷や汗を滝のように流す疾風。ドイツの冷水と畏れられたラウラの言葉からひしひしと怒気を感じている…

「……まあ、今回は疾風特製《杏仁豆腐》で手を打つとしよう。さあいくぞ鈴、クラリツサ、雷龍」

内心ホツとする疾風はIS雷龍の背中にあるミキサータンクからフォンダオダンで牽制。雷龍はラウラと共に蛇型戦車へ接近、鈴の龍砲が動きを止め、ラウラ、クラリツサがプラズマソードで切り裂き搭乗者を救出、雷龍の電撃で完全に破壊していくと同時にシンパレート値が三段飛行甲板空母内にいる束の前で上昇していく

「85、89……100！シンメトリカルドッキングいけるよハツ君！！」

「『シンメトリカルツ！ドッキンググッ!!』」

シンパレート値100を超えた雷龍（スタンドアローンモード）、風龍がウルテクスラスター全開で飛翔、各部装甲がパージ。雷と風がまらう中で疾風の身体へ装着。レイドウーンが胸につくと額のGストロークが輝く。右腕にシャオダンジイ、左腕にデンジャンホーから風と雷をあふれさせながら叫んだ

「『撃ツ龍ウウ神ツ!!』」

「クラリツサは疾風の援護を。鈴はワタシと一緒に先制をかける！合
わせろ!!」

「誰に言ってるのよ! あん……ラウラこそあたしにあわせない!!」

螺旋状に錐もみ機動。あの一件以降疾風を巡る恋のライバルと
なった二人の息はピタリとあい見事な連携を見せ真正面へ向かうラ
ウラ、鈴。それぞれ龍砲とレールガンが火を噴く。不可視の砲撃と
レールガンが顔面に着弾。視界を防ぐと同時にクラリツサ、疾風が挟
撃を仕掛ける。煙が立ち上らせながらゆっくりと顔を上げたキメラ
ゾンダーISの目がクラリツサをとらえた

「な!? か、 軀が動かな……た、 隊長……」

キメラゾンダーISの瞳が輝いた瞬間、クラリツサが自身の愛機
《シュヴァルツェア・ヴァイク》が石化し落ちていく。地面へ当たる寸
前で疾風が抱きかかえ鈴、ラウラと合流し距離をとる

「しつかりしろ! クラリツサ!! 返事をしろ!!」

「な、 なんなのよアイツは!? ISが搭乗者ごと石化するなんてあり得
ないわ!」

『二人とも落ち着け……あのゾンダーISは今までのとはナニかが
違う……まるで神話に出てくるメデューサみたいだ』

絶対防御で守られているはずのISが石化する…異様な事態に三
段飛行甲板空母の火麻参謀、メインオーダールームで状況をみていた
面々の表情が驚きの色に染まる。困惑する二人を落ち着かせた疾風
は石化したクラリツサを預けた

『鈴、ラウラ。今すぐクラリツサをつれて三段飛行甲板空母に引き上

げるんだ』

「な、なんでなの？それにひとりじゃアイツからコアを」

「……鈴、疾風の言うとおりにするんだ。今の私たちでは勝てる確率は少ない…かえって足手まといになる。クラリツサのことも心配だ」
「でも疾風まで石になったら…」

『大丈夫だ。心配するなつて…さあ速くいくんだ。獅童博士が対抗策を考えてくれるはずだからな』

諭すように声をかけると無言で頷く二人はクラリツサをかかえながら何度も何度も振り返りながら三段飛行甲板空母が待機している空域に向かうのを見届けるとキメラゾンダーIIS改め、メデューサゾンダーIISと相対する

『……………でてこいよ！いんだろ？ドクターウエスト』

「よく気づいたであゝるーさすがは我が子《アドバンスドチルドレン》にして《ツインデュアルカインド》の片割れであゝる!!」

『ぎけるな！オレたちはお前達、《バイオネットの子》じゃない!!』

「別に照れなくても良いではなくいでゝすかゝ」

風と雷が荒れ狂わせ叫ぶ疾風、それに対して陽気にくるくるとメデューサゾンダーIISの頭の上で回りながらぴたりと止まり笑顔をさせるバイオネット、上級幹部《アルケミスタ》ドクターウエスト…疾風を見る目には狂気に満ちている

「まあ、世間話はこのままでしてえ…のんびりしてていいのかなあ？」

『何のことだ？』

「さつき石になった彼女、あと30分したら完全に死んじゃうよおゝ

ん？なぜって顔してるねえ〜この新しい商品は我らの総帥様がぶち殺したゴルゴン三姉妹を祖体にしてるのである！速く倒さないと……ホンモノの石になっちゃうよおん♪」

ゴルゴン三姉妹。ギリシア神話に登場する化け物姉妹：見たものを石に変える魔眼を持ち髪が蛇、下半身が大蛇のマガモノ。メデューサは英雄ペルセウスに首を跳ねられ討ち果たされた、しかし残る二姉妹は行方知れず。目の前にいるゾンダーISの素体に使われているのは二姉妹の片割れ。神話のマガモノをゾンダーにしたこともだが、それ以上に石にされたクラリツサの命が三十分持たない事に疾風は焦り始めた

（神話のマガモノ：以前に老師から《神話級のマガモノは黄金聖闘士でも討滅は困難》と聞いたことがある。一刻も速くヤツを倒さなければクラリツサさんの命が、いや…この先にある街で避難誘導をしている凍也達にも危険が及ぶ）

「シンキングタイムは終わりでありますか？さあ行きなさいエウリピョア！久々にテストをしてあげるであゝる!!」

「ク！」

メデューサゾンダーの瞳が開き赤く光る、その場からウルテクスラストアで離れ飛翔する、先ほどまでいた場所にあった木々が石化。蛇型ミサイルが蜘蛛の子を散らすように襲いかかる。シャオダンジイから超圧縮空気弾を放ち撃破、その隙を狙い攻撃を仕掛ける疾風に見開かれた瞳から赤い光が輝く、とっさにデンジャンホーを楯替わりにして後ろに回り込み軀をひねると同時に蹴りを放とうとした。しかし蛇の髪をかき分け二つ目の顔が現れ怪しく光った

「うわっ！」

慌てて飛翔するも左足に違和感。みると緑色の装甲が石へ変わり

バランスを崩し地面へ落ちる疾風…あの時、僅かに目を合わせただけで石になった事に驚く姿ににんまりと笑みを浮かべ『次はどこかな』次はどこかな』と歌を歌っているドクターウエスト
(左足は完全に石化している…どうすれば…:教師)

「よそ見はいけなくなっであゝる！」

「ゾンダアアアアアアア!!」

『な、うぐわあああああああ?!!』

いつの間にかに背後をとっていたメデューサゾンダーI Sはメカメカしい尻尾を使い疾風《撃龍神》を締め上げたまらず声を上げる。各部装甲に亀裂が走り警告を示すメッセージが響く。ゆっくりと身体を自身の眼前まで近づけ完全に石にするべく瞳を開こうとしたその時

「疾風ええー！」

疾風の耳に声が届く。同時に締め上げていた尻尾が切り裂かれ、解放された疾風をガシツと抱える二つの影…

『り、鈴?それにラウラ?三段飛行甲板空母に戻ったんじゃ?それより何で此処に戻ってきたんだ!』

「何って助けに来たのよ。それに左足が石になってるじゃない。無理しないでって言ったのに」

「…一人で二人を相手にするのは戦術的に不利だ…それに苦戦する嫁を助けないで何が夫だ…」

『だからって!』

「ぞ、ゾンダアアアアアア!!」

雄叫びと共に迫るメデューサーゾンダーISの目がカツと見開かれた…左足が石化しウルテクスラスターすらも先ほどの攻撃で損壊。ほぼ無防備のラウラ、鈴を守るために動かぬ体にむち打つ…しかし二つの何かが疾風の視界をふさぐ。二つの何か、それは鈴とラウラがまるで楯になるように立ち石化していく姿に声を上げた

「な、なにをしてるんだ!鈴、ラウラ!!なんでこんな事を!!」

「…前にバイオネットのテロが起きた時、竜巻に飲まれそうになって諦めかけてた…でも疾風は諦めなかったばかりかあたしを助けてくれた…だから…今度…は…」

「…あの日、ゾンダーになったわたしを…真つ暗なアソコから手をとって助け出してくれた…今度はわたしいや…わたし達がおまえ…を…守…る」

完全に石化し最後まで聞き取れなかった…しかし疾風の耳、いや心にははつきりと響いた。自分を守るために二人が楯となり石化した…ギリギリと拳を握りしめ血が滲む

「安っぽい!安っぽすぎるであゝる!甘っちよろい三文芝居は…反吐がで…」

「…黙れ!お前に…二人の何がわかる!!」

「まだまだ減らず口が言えるみたいですね〜でも今の状況をみるであゝる!このまま仲良く石化するであゝる」

ドクターウエストの高笑いにも似た勝利宣言が響く。だが疾風の耳には入っていない。ただ石化した二人…ラウラ、鈴を見ながら初めて出会った日を思い出していた

頭に浮かぶのは二人の様々な顔…特に皆といるときの笑顔…ゆっくりと目を閉じやがて開いた目には澄んだ瞳…決意と覚悟の色を見

てビクツと震えた

『……ドクターウエスト、俺にはまだ覚悟が足りなかったようだ……その結果が今の状況を招いてしまった……だが宣言しよう。石にされた三人、そしてオレの後ろにある街の皆を守る……』

「な、なにをする気で……」

狼狽えるドクターウエストをよそに、疾風は背を向けると右手に装着された《シャオダンジイ》を格納、あらわになった手をゆつくりと顔に近づけた直後、水をくぐもった音が静かに響く、その足下には血が滴り落ち振り返った。まぶたは堅く閉ざされ、血が涙のように溢れ出す姿にドクターウエストは身震いした……理解できなかったのだ

「な、なにをやっているのである！まさか！エウリピュアの石化を逃れるために目を潰した？気は確かであるのですか！」

『オレは正気だ……さあかかってこい！ゾンダーISS!!』

「な、なら望み通りにするである！エウリピュア！ヤツを殺せ!!」

『ゾンダアアアアアア!!』

『ぐ、くあ!』

再生を終えた尻尾で何度も叩きつけ、蛇型ミサイルをこれでもかと言わんばかりに浴びせるエウリピュアゾンダーISS。疾風は光無き世界の中であらゆる方向から来る攻撃に耐えながら反撃するもむなしく空を切る……出血により意識が薄れていくも全身からみなぎる闘志は激しさを増し両足に力を込め拳を握り立つ姿は三段飛行甲板空母、三式空中研究所、メインオーダールームにいる面々も目が釘付けになる

（な、なんなんだよ。何で彼処まで出来んだ……あのままじゃ不味いだ

ろ!!)

攻撃を受け続けながらも立つ疾風の姿と原作にないゾンダーに困惑する統夜。装甲が砕け散らせながら何度目かになる攻撃を受け宙を舞い地面へ落ちる疾風。もう立つな、誰もが皆そう思った

ー『ぐ、ぐうう……ま、まだだ……』ー

「博士！速く疾風のところに凍也たちを!!」

「わかつとる、まだ避難が終わらん事には動かせられん……バイオネットめ、神話の怪物まで蘇らせるとは……」

三段飛行甲板空母で指揮を取る火麻参謀の言葉が響く中、モニターリングしている束の雰囲気少し変わっていることに誰も気づかない。ようやく避難誘導を終えたとの報が届いた時、トドメを誘うとエウリュピアゾンダーISが全身から蛇型ミサイル、そして尻尾を前へ突き出し高速回転させ突っ込んでくる

(どこからくる……急がないとラウラ、鈴、クラリツサさんが!)

暗闇の中、相手の気配を探る疾風……焦りはじめたその時。黄金の杖を手にした女性？が光と共に現れ暗闇を吹き飛ばした……晴れ渡った先には無数のミサイルと高速回転する尻尾を突き出し迫るエウリュピアゾンダーISの姿とコアをはつきりとらえた

(コ、これは……幻?)

……血を流しすぎて見えた幻かもしれない。だが暖かな光は疾風に真実だと確信させるには充分、ボロボロの軀の奥から生命から生まれる宇宙、小宇宙(コスモ)が最大限に今、燃え上がる!!

『見えた！ウオオオオ!!唸れ疾風ツ！轟け雷光ツ！双(シャアアアア
ンツ)頭(トウオオツ)龍(ロオオオンツ!)ツ!!』

「バ、バカな！こんな力はツインデュアルカインドには付与してない

であ~~~~る~~~~い、ぎゃあああああ~~~~」

「ぞ、ゾンダアアアアア!?」

深緑と黄金の鱗を輝かせる双龍……IS撃龍神最大の必殺技《双頭龍》がドクターウエストを丸飲みにし全身の骨という骨をかみ砕き、メデューサゾンダーISの強固な身体を貫きすすむ。内部を貪り喰い体表に躍り出るやいなや額にあるコアを貫き通しえぐり取ると残された身体は爆発、あとにはボロボロになった疾風こと撃龍神がコアを手に立つ姿

「……う、わたしは一体」

「あたし、石になったのに」

エウリュピアゾンダーISを倒したことで、石化が解けた二人は疾風の姿を探す。少し離れた場所に立つのを見つけた二人は駆け寄る……だが顔を見て声を失う、堅く閉ざされた脛からは血が流れ深緑と黄色の装甲を朱に染め手に持つゾンダーISコアにシーリング処置を施し終え疾風が二人に顔をむけた

『鈴? ラウラ? ……石化は解けたみたいだな……どこも怪我ないか?』

「は、疾風……お前、目を!!」

「ま、まさかあたしたちを助けるために……」

口元を手でおさえ呆然となる二人にただ優しく穏やかな笑みを向ける……だが目を押さえ苦しみだし数分後、避難誘導を終えた凍也達はすぐさまGGG中国、科学院航空星際所内にある病院へ疾風を運び込んだ

偶然なのかドイツ連邦からGGG中国へ来訪していたスコルピオン総帥、腹心にして世界的に有名な医学博士でもあるヘルガ博士がおりすぐさま緊急手術がおこなわれた

「我が祖国ドイツ連邦を救った竜崎女史の息、いや勇者を必ず救わねばならない。皆の力を貸してくれ……これからオペを開始する。脈拍不安定、出血多量によるショック症状に近い。すぐさま輸血の用意を」

「は、はい！ダメです型が一致しません!!彼の血はRH（―）です」

『……なら私の血を使うといい』

「…ヤ、ヤン司令?ですが…」

『事態は一刻を争う。限界まで私から採血しろ…急げ』

「わ、わかりました」

採血ルームからヤン司令の血液が送られ手術台で治療を受ける疾風へと輸血。やがてバイタルグラフは安定しまるで精密機械以上に繊細にヘルガの手により治療が続けられていく中、手術室の外では検査を終えた凍也、鈴、ラウラ、シユバルツエア・ハーゼ隊、戦車大隊の隊長の姿があった。皆が思うのは疾風の安否だけだった

やがて手術室のランプが消え扉が開き目を包帯で巻いた疾風がベッドに眠る姿に皆が安堵の表情を浮かべる。最後に出てきたヘルガ博士はマスクを外しゆつくりと口を開いた

「竜崎疾風、彼の命には別状はない……ただ、目の方は二度と光を取り戻すことは無い。万が一奇跡が起きない限り『一生』を誰かの手に引かれないと生活は難しいだろう」

「う、うそ…冗談よね……冗談だつて言つてよ!」

「ヘルガ博士、嘘だと、嘘だといつてくれ!お願いだ疾風は私たちを助けるために光を失ってしまった。何か方法を!」

二人に詰め寄られるヘルガ博士…しかし目を伏せるのを見てラウラ、鈴は本当のことだと悟る。力なく座り込むと一目をはばからず大

粒の涙を床へと落とし手術室前に泣く声が木霊した

☆☆☆☆☆☆☆☆

「お願いだ！君の力をオレに貸してくれ!!」

「な、ナニしてんだよ！そんなこといわれても…」

「途中まで連れて行ってくれただけでいいんだ。彼処にはオレの大事な仲間たちがバイオネットと戦ってるんだ。現場にいたら放り投げられてもいい、だからお願いだ!」

……GG本部のメタルロッカールーム、その中心で全身の至る所に包帯を巻き、血を滲ませながら土下座し懇願する燐の前には異世界から来た不動統夜の姿。力を貸してほしいと何度も言葉を口にする姿に、いやそれ以上に驚くべきモノに言葉を失っていた

『……………』

土下座する燐の背後に不思議な輝きを持つ鎧らしきモノを纏い立つ女性の姿…無限地獄で苦しみ続けている不動統夜の母。その表情は悲しみと怒りが垣間見え、何かを訴えるようにも見えた

第十八・五話 不協和音―双龍の決断―

了

第十九話 黒い鋼の悪魔

バイオネットによるガオーマシン強奪、姿を見せた総帥《沙華堂牙藍》の手で燐が瀕死の重傷を負いファイバードへの撃墜もしくは確保がGGGで決定した直後、異世界から来訪した《不動統夜》少年。ISファイバードを身に纏っていた為にバイオネットと誤解したGGG機動IS部隊により攻撃を受け《諜報部主任》犬神霧也に気を失われ本部へ、事情を聞いた大河、メインオーダールームスタッフ承認のもと帰る方法が見つかるまで保護されることとなった

バイオネットの成り立ちと歴史を閲覧する統夜に一族を滅ぼした本人と勘違いした霧也に魂ごと冥界へ、そこで統夜が犯した罪を変わりに受ける母の姿に驚愕。乙女座バルゴの奥義《天舞宝輪》により危機に陥るも四年後の未来から女神アテナ降臨により窮地を脱する。しかし霧也の行為により《この世界で未来に起こりうる事象》を教えないと大河をはじめとしたメインオーダールームスタッフの前で発言直後、GGG中国にゾンダー出現。現地に向かった疾風、凍也、ラウラは鈴と合流。

しかしゾンダーISの石化能力に苦戦しながら自らを守るために楯となった二人を見て、この先にあるラウラ、鈴、背後の街にすむ人々の《未来》を守るために自らの目を潰した疾風、苦戦を強いる撃龍神の前に《黄金の杖を持つ美しい女性》の不思議な光により、敵の姿をとらえ《未来を守る》強い意志を込められた双頭龍がコアをえぐり抜き勝利を得たのだった

第十九話 黒い鋼の悪魔

ーガオーマシン強奪から三日目ー

GGG中国がおかれているここ、科学院航空星際所内にある総合医療施設《龍》。ドイツ連邦が誇る医療技術、中国の古来から誇る鍼灸薬学を融合を目的として設立されている

ゾンダーISとの戦闘で自ら目を貫き勝利を得た疾風が運び込ま

れ二日目、医局長室ではヤン司令、ヘルガ博士がカルテと治療経過を日本にいる大河とのリアルタイム通信で伝えていた

『…では疾風君は二度と光が戻らないと』

「そうだ、治療と同時平行で診察したが彼の視神経は深く傷ついている。視神経修復は我がドイツ連邦医療技術、ボーデヴィツヒ少佐に使われたオーダン・ルージュ用のナノマシンですらも修復は不可能だ」

「ヘルガ博士、神経修復技術に関してはドイツ連邦医療技術が最先端を走り不可能はないと聞いたが」

「……ヤン司令、大河長官、まずはコレを見てもらいたい」

軽快にキーを押すヘルガ博士の前には視神経を模したモデルが投影、ある箇所をズームする…

「彼の視神経、いや全神経はバイオネットの手によるナノレベル、遺伝子レベルでの改造がされ我々の知る神経組織とは根本的概念から違う……うかつに治療を施せば視力回復どころか命に関わ…」

『…命と引き替えになど私は承認できん！』

大河の力強い言葉に無言で頷くヘルガ博士、しかしヤン司令だけは静かに席をたち部屋を出る…向かうのは疾風が眠る病室。しかし途中で人影が目に入る

「ぐ……は、はあ……」

病院着に身を包んだ疾風…這い蹲りながら手を伸ばし向かうのは施設の出口。おぼつかない足取りで歩く…が足がもつれ倒れそうになる寸前で誰かに抱きかかえられた

「無茶をするな…君は病人なのだぞ」

「誰かわかりませんが、ありがとうございます…ですが私の力を必要

とする仲間が…」

「体調が万全でない状態で行ってどうする…たとえ合流したとしても迷惑をかけるのが目に見える。今は休み身体を治すこと、それが今の君がやるべき事だ」

ヤン司令の正論に何も言えず黙り込む疾風…彼の言葉から不思議な懐かしさを感じてながら意識は途絶えぐったりとするのを見て安堵する

「…いつまで見てる気だヘルガ」

「気づいていたか…やはり彼は竜崎女史とよく似ている…誰かの為に己の身を犠牲にする姿も含めて」

「…」

「…名乗ってやらないのか？ヤン、君が…」

「止める。乙女を見殺しにした私がいまさら『父』と名乗る資格などない…失礼するヘルガ」

「…我がドイツの最大の恩人…『竜崎乙女』女史が惚れるわけだ…不器用なまでにまつすぐなお前に…」

「あの人、軍人だけどスツゴく不器用でまつすぐで…この子達の名前を考えてエネルギー制御式を何回も間違えて…『廬山の龍神』様に名前をわざわざ伺いをたてにいったの。山登りが苦手なのに…双子なんだけどどっちかわからないのに男の子の名前を…」

膨らんだお腹を愛おしく撫で惚れ気全開で話すテラフオーミングテクノロニクス権威にしてヤン司令の妻『竜崎乙女』の言葉…

本来なら産まれた子供たちと普通の穏やかな日々をおくりネクストフロンティアへの第一歩『惑星開発用IS』を発表するはずだった。しかしバイオネットの歪んだ悪意が全てを壊した…夫の立場と未来

を守るため、生まれたばかりの二人を連れ姿を消した乙女は八年後に逃亡先のイギリスでドクター・ウエストの卑劣な手にかかり命を落とした

バイオネットの危険性、対策を政府高官に進言していたヤンの耳に入り深く後悔した。息子たちは生きていると信じ必死に努力を重ね軍内部での発言権を得て疾風達が捕らわれているバイオネット研究所への突入策を提言、しかし却下されヤンはID5へ国家への背進と取れる情報流出をきめ一年後、ようやく救出された事に喜んだ。だが乙女を見殺し、一人に地獄を味あわせてしまったケジメとして《父親》と名乗るのを止めた……気絶した疾風を背負い歩くヤンの姿は紛れもなく息子を思う一人の父親の背中をヘルガはみた

それから三日後の朝、回診に来たヘルガ、ヤンがみたのはもぬけの空となったベッド：枕元にはドイツ語と中国語でそれぞれ書かれた封筒が添えられていた、封を破り見た内容

ーGGG機動IS部隊所属、竜崎疾風の療養の為《五老峰》へ連れて行きます：勝手な判断をお許しく下さいー

GGG中国、科学院航空星際所所属《凰鈴音》

GGGドイツ、シユヴアルツエア・ハーゼ隊所属

《ラウラ・ボーデヴィツヒ》特務少佐

すぐさま連れ戻そうとするヘルガを静かに手で制したヤン

「なぜ止めるヤン。彼はまだ完治しては」

「これでいい。三人が向かった五老峰には《あの方が》いる……ヘルガも名前を聞いたことはあるはず」

「…まさか老師《童虎》がおられるのか！」

「老師ならば、現代医学をも超えた治療法をご存じのはず。ラウラ特務少佐、凰鈴音少尉。彼をまかせたぞ」

五老峰へ向かっている二人に息子《竜崎疾風》を託す敬礼するヤン、ヘルガも同じ気持ちで静かに敬礼した

頃

「疾風、そろそろ五老峰につく…だが老師とはどんな方だ？」

「…老師は私に人としての生き方とはなにか、そして成すべき事。人として大事な事を教えていただき鍛えていただいた私の師です」

「老師って…廬山の龍神様よね…その人なら目を治す方法を知ってるの？」

「…はい、以前に話で聴いたことがあるのです。自らの光を閉ざし仲間たちを救い、様々な戦いを経て遂には光を取り戻した聖闘士…私の兄弟子《紫龍》兄者の話を」

聖闘士（セイント）。聞き慣れない言葉に疑問をもちつらウラに抱き抱えられながらわかりやすく話す疾風。やがて二人は五老峰の入り口へと降り立つ。二人に支えられながら険しい道のりを歩き出し始めた

そこで二人は知ることになる…疾風…竜崎兄弟の呪われた過去、残酷な運命を……

「…よつと、久しぶりだな五老峰にくんのは……元気にしてつかかな老師、それに疾風《親友》」

疾風達とは別方向から切り立った岩肌を蹴りながら移動しつつやう少年。その背中にはボロボロの布に巻かれた何かから《黄金》の光が漏れたことに気づかずやがて姿は見えなくなつた

☆☆☆☆☆☆

(ガオーマシン強奪から10日目)

GGG日本本部では疾風の戦線離脱により生じた戦力不足が深刻化していた。機動IS部隊で残るのは疾風の兄《竜崎凍也》そして超竜神、研究開発部門副主任ユーノ・スクライアのリエス、そして諜報部主任《犬神霧也》のボルフォッグ…しかしリエス、正確には《創

生』システムのバージョンアップを含めたフルメンテナンス。犬神霧
也は先の件での行動により懲罰を含めガオーマシン搜索任務から外
され、現在は更識家令嬢護衛とは《別任務》を言い渡されてい実質、機
動I S部隊には凍也と炎竜しかない。事態を重くみた地球防衛会
議、同議長ロゼは新たな支援部隊設立に向けての会議を開き、それに
大河も出席し二、三日GGG日本本部を離れていた
「……………」

本部上層にある宇宙開発公団、その臨海部にある砂浜で一人物思い
にふけるのは、異世界から来た少年《不動統夜》：潮風と海鳥の泣く
声が響く中、脳裏に浮かぶのは霧也の手で《あの世》。正確には《冥界》
に魂を跳ばされ見た光景

地獄の業火に身を焼かれ苦しむ母親の姿：彼自身が持つ《墮淫の
書》を使い続け犯してきた罪すべてを受け無限地獄の中で最も罪の重
い《煉獄》に落とされていた

統夜の知る知己、亀山一夏の養父《亀山玄武》の知り合いである幻
想郷で地獄を管轄《四季映姫》は名前は知るのみの存在であり《大神
ゼウス》に並ぶ神《冥王ハーデス》の力、高位神格の相手では助け出
すことも不可能

それ以上に自らの犯してきた罪を霧也に見せられ迷い、苦しんでい
た：…こんな自分がファイバードを纏っていいのか？罪を犯し結果、母
を地獄で苦しませるような自分に：考えれば考えるほど答えは出ず。
さらに深まっていきループする

「どうすれば…どうしたらよかったんだ……………」

あの時、先に起こるであろう未来の出来事を言えば：竜崎兄弟の弟
《疾風》は失明せずに済んだかも知れない。3日前にメインオーダー
ルームで中国からのリアルタイム通信で大河と会話していた疾風が
統夜がいることに気づき話をしたいと言ってきた

…緊張しながらも恨み言をいわれるのかと思っていたが意外な言
葉が耳に入った

「私は恨んでいませんよ…憐を含めた私たちは常に死を覚悟して戦いに赴くようにしています。光は失いましたが大事なモノを守る事ができました」

「だ、大事なモノ…」

「…今を生きる人々の明るい希望に満ちた未来を…さつきも言いましたが気に病むことはありません」

包帯で目を隠し話す疾風の言葉からも恨みや怒りも感じられない。それどころか逆に統夜を心配する感情が見えた…自身よりも他人を思いやる優しさに何も言えずメインオーダールームを後にし5日過ぎるも悩みは深まっていく

『…答えてやろうか不動統夜?』

とっぜん響いた声と風を切る音…本能的に砂浜を蹴り飛び退くと手裏剣?にも似た何か突き刺る

『かわすなんてすごい、すごいぞ…褒めてやるよ……紛い物の癖にな』

「…な、なに……っ!」

声が出た方向には全身装甲の《黒いIS》統夜がよく知るモノ、自らが初めて生み出したIS《ゲシュペンスト》と寸分違わない。明らかな殺意をバイザー越しに感じファイバードを展開するも…だが地獄で苦しむ母の姿が脳裏に浮かび手が止まる

『おやおや、自慢のファイバードは出さないのか?いや出せないが正解か…紛い物(フェイカー)、なんつてな!!』

「うわっ!」

プラズマカッターを展開、大きく袈裟切るもかわされるが逆手に構えた手が肩に触れ他のを感じながらも、その声と動きに統夜は覚えがあった。GGGに保護された当日に閲覧したGGGアーカイブズに

映像と共に記録されていたモーシヨンパターン、音声：すべてのピースがはまり怒りにわなわな震えだした

「お前はファイバード…バイオネット総帥か！」

『大正解！さすがはオレ様の紛い物だなくしかしまあこうも事が上手く運ぶなんてな…アヒャー！』

「ちっ！」

プラズマカッターで大きく風払うも跳躍、着地下のを見逃さず切りかかる、すべて紙一重でかわす統夜に自慢げに語り始めた

『お前がこの世界に来ることは千年前からわかってたんだよ。オレ様と同じスペシャルなチート転生者でISファイバードにグラヴィオン、ゲシユペンストを作れるって知った時は驚いたなあ。しかもI Sーインフィニット・ストラトスーが嫌いなところを含めてそっくりなことにな。たがなオレ様は《紛い物》なんか認めねえ…そのために色々仕込んでたんだ。そのうち一つがクソ忍者の里を迅雷の無人テストもかねてなガキ…確か犬神霧也一人残して滅ぼしたんだよ…目の前で両親を殺した憎い憎い憎い憎いファイバードへの恨みを植えつけて…後はわかるよなあ？不動統夜あ？』

「……………俺を犬神霧也に殺させるために仕組んだのか！」

『ま、それもある…お前の性格上、一度でも敵対したら相手が信じ歩み寄ろうとしても容赦なく切り捨てるだろ？あの糞ババアが産みだしたGGの面子に対して不信任を植え付けるのが目的だったから…旨い具合に手のひらで踊ってくれたお陰で護衛もなく、自慢のファイバードを展開できないお前を殺す事が出来る……まあゲシユペンストじゃ味気ないからな……来いファイバード』

ゲシユペンストと入れ替わるようにファイバードを展開、その姿から邪悪な思念が溢れるのを肌で感じる一方で何かを感じ取る

（やめろ、やめてくれ……もう人を殺したくない……命を奪いたくない……）

たどたどしい懇願にも似た悲痛な声：統夜は知っていた、いや転生する前に見ていた勇者シリーズ《太陽の勇者ファイバード》、火鳥勇太郎の苦悶に満ちた声に驚愕するのを見て自慢げに語り出した

『オレ様のカッコイイファイバードの声を聞いたのか：お前が使う紛い物と違って真正銘本物のファイバードだ。まあ最初は魂はなかったが偶々、宇宙警備隊本部を見つけたくなく跡形もなく壊滅させて捉えたファイバードの魂をコアに定着させたんだよ……人を殺す度に聞こえる音楽（苦痛の悲鳴）は讚美歌だったぜ。カッコイイオレ様に相応しい交響楽ツ！カッコイイだろ不動統夜!!』

クルクル回りながらフレイムソードを展開、構え自慢する沙華堂牙鑑にフツフツと怒りが沸き起こる。自分を罫にはめ不信感を植え付け、さらには憧れていた太陽の勇者ファイバードの魂を汚し続けた事は許せない

……しかし展開しようにも統夜の脳裏に身を焼かれる母の姿が浮かび手が止まるのを構いなしに凶刃が迫る……が白銀色の光が防いだ

「お、おまえは……」

「……」

紺色の学生服に白髪に鋭く突き刺さるような赤い瞳をファイバードに向けながらフレイムソードをシルバーバムーンで受け、統夜の前に立つのはこの世界に迷い込んだ初日に攻撃を受け自身を気絶させたGGG 諜報部主任《犬神霧也》：大河長官から別任務を受けて離れていたはず。なぜここに？疑問に思う統夜をよそにファイバードが忌々しそうに叫んだ

『……邪魔すんなクソ忍者……ははくん、紛いモノ……不動統夜にトドメを刺しにきたのか……憎いもんなあ』

「……ガンドーベル、ガングルー、各機システムチェンジ!! 一斉攻撃!!」

ガンドーベルの胸部バルカンからミラー粒子弾、ガングルーのメリケンサック状の武器《アイアンネイル》の左右からの攻撃は統夜ではなくファイバードへ吸い込まれるように直撃、自身が攻撃されるとは思ってもいなかった牙髷は後ろへ吹き飛ばされるのを目にした統夜も驚いていた

「……何をしているのですか、早くGGG本部いえメインオーダールームへ急ぎ避難をしてください!!」

「…何のつもりだ犬神霧也」

自らを再起不能にしかけた犬神霧也の行動に不信感を露わにする統夜…何故、この場に居て自分を守るのかが理解できなかった

「…アナタが私を信じないのはわかっています…これから先、私を信じなくて構いません。ですがアナタを護るよう頼んだGGG大河長官、未だ目覚めない燐。疾風、凍也、ユーノ、東さん。GGGのみんなだけ信じてください…」

「た、大河さんがお前にオレを護るように？」

『や、やりやがったなクソ忍者！』

霧也の言葉を遮り、怒りの炎を燃やしフレイムキャノンを撃つファイバード…狙うのはもちろん統夜。しかし二人の姿がかき消すように消える

『ドコへ消えた！クソ忍者！紛い者!!』

「……私はココです!!犬神流忍術！疾風狼牙!!」

太陽を背に姿を見せると、シルバームーン、シルバークロスを投げ
る嵐をまとった狼が牙をむき襲いかかる。しかし牙檻はフレイム
キヤノンで撃ち落とし、なにもない背後へ剣を構えた

『バレバレなんだよ。受けてみな？飛天御剣流・九頭龍閃!!』

「な、ぐ、ぐあああ!!」

円を描くように放たれた九つの斬撃が襲いかかり学生服を切り裂
かれ血が辺りに舞わせなが受け身を取り土誇りにまみれながら、ふら
ふら立ち上がる

『俺様の九頭龍閃を受けてよく立ち上がったなクソ忍者……その腕
とりミビツドチャンネルのおかげか？d h i a m o n ・ r a p l u s
(デイモン・ラプラス)?』

「私をその名前で呼ぶな……」

拳を握りしめる霧也の腕、手首の付け根、肘から何かがジャキンと
飛び出す…銀色の幅広の刃《単分子ブレイド》、斬られた腕からバチバ
チと火花が散らせながら対峙する…しかしファイバードはフレイム
ソードを納めた

『……やくめた。……ここでお前を倒した所で華やかさが全く無いからな
くオレ様の用意した最高の舞台で待つてやる。またな不動統夜、クソ
忍者……』

いつの間にかにコールしたGリヴォルヴァーをこめかみに押し当
て迷わず引き金を引く。轟音と共に頭が吹き飛びファイバードは地
面へ倒れる…いや寸前で姿が消え血溜まりと装甲の破片のみ残され
た

「き、消えた?…いったいどうなってるんだ!?!」

「……おそらく空間転移したので……ぐ?!」

ぐらりと膝をつく霧也、その瞳から真っ赤な血が涙のように流れ落
ちていくのを目にし言葉を失う統夜…やがてゆつくりと口を開いた

「……はあ、はあ……お願いがあります。私が奴をリーディングし得られた事実をメインオーダールームにいる獅童博士、束さん、火麻さんに……伝え……て……ください……手を」

差し出された血とGリキッドに濡れ皮膚の下からメカニズムを覗かせた手を見て逡巡する……自分をあんな目に合わせた張本人を信じていいのかを、しかし血涙を流す瞳から尋常なら無い事態が起きる事を知り得た目に動かされた

「………わかった。手を握ればいいんだな」

その言葉に頷く霧也の手を握った瞬間、統夜の脳裏に様々なイメージが流れ込み膨大な情報の海に漂った同じ頃、メインオーダールームは喧騒に包まれていた。

「アフリカにガイゴーが現れただ!?!」

「間違いない、ガイゴーに使われとるGSライド反応は他のGISシリーズとは違う。ある意味個性をもっておるからの……参謀、ワシと束くん、そしてシャルくん、凍也くんと共に三段飛行甲板空母、三式空中研究所でアフリカへ向かう……ユーノくんはメインオーダールームで万が一に備えつつ、燐、不動くんを頼む」

「わかりました。では三段飛行甲板空母、三式空中研究所をアフリカへ緊急発進準備します」

ユーノをメインオーダールームに残し、火麻、束、凍也は三段飛行甲板空母、獅童博士、シャルは三式空中研究所へ乗り込むとアナウンスが響き、ヘキサゴンから切り離され海面へ浮上と同時に空へ舞い上がり、ウルテクスラスター全開で一路アフリカへ進路を取る

(………燐)

小さくなつていくGGG本部にガラス越しで眺めるシャル、意識が目覚めない燐を残していく不安もあった、しかしガイゴーがアフリカに現れたということはゾンダーも出現する可能性も捨てきれない。レイジからの頼みに頷き同行することを決めたシャルは嫌な胸騒ぎを感じていた

(……………何だろ。すごく嫌な……………ううん、わからないけど何か起きる気がする)

拭いきれない不安に身震いするシャル、一方、束はガイゴーに対して複雑な想いを秘めていた

(ライ先生、なんでこんな事に……………バイオネットは何でわたしから大事な人を奪うの……………許せないよ……………絶対に許さない)

恩師であり、誰にも認められず全てに飽きてしまった自分を認め新しい視野を広げ家族のように親しく付き合いをしてくれたライ、マヤを1日たりとも忘れていなかった束……………燐を暗殺用サイボーグへ改造し全てを奪ったバイオネットへの怒りがこみ上げらせながらアフリカへ向かうGGG機動IS部隊を乗せた二隻は蒼い空の彼方へ消えると同時にメインオーダールームへ気絶した霧也を肩に抱えながら飛び込んできた

「ユーノ！」

「不動くん？それに霧也……………いつたい何があった……………」

「今から説明する、それより火麻参謀、獅童博士は！」

「それが、さっきアフリカにガイゴーが現れたから三段飛行甲板空母と三式空中研究所で現地に向かったんだ。デユノアさんと束さんも一緒に」

「なんだって！今すぐ通信を繋ぐんだ……………このままだと」

「わ、わかったよ、通信を繋ぐよ……………メインオーダールームより三段飛行甲板空母、三式空中研究所、応答してください……………つ、通信が繋がらない!?レーザー通信に、コレも繋がらない……………」

「ち、オレに貸してみろ……量子通信、超空間通信も……まさかバイオネットの仕業か!!」

「正解、正解である！さすがは総帥のイミテーションなだけはある!!」

甲高い声が響き、メインスクリーンにノイズ混じりにある人物が映し出された。特徴的な髪型に、肩に掛けたギターをかき鳴らす女性：《ドクターウエスト》が狂気に満ちた瞳を向け歓喜している

「そ、そんなドクターウエストは疾風が」

「我が輩が、あの失敗作如きに殺されると？アハハハハハハ！傑作でありますなあ！バイオネットの子が親に勝てるわけないである！！」

(……バイオネットの子？俺が知る限り竜崎疾風、凍也は……)

「ま、無駄話しはココまでにするである。我らが総帥の偉大なる計画を全世界に発するのである!!」

☆☆☆☆☆☆☆☆

同時刻、地球防衛会議場

「ですから！彼は被害者なのです！バイオネットの策に利用されたと！私は何度も申し上げているはずです!!」

「しかし、彼がバイオネットとの関わりを持つ可能性はある……これ以上彼、確か《不動統夜》を庇うのであれば我々、地球防衛会議はGGGの即時解体を議決するのも可能なのだよ……大河くん？」

「ですから、私、いえGGGは彼を守る義務があります!!」

支援部隊設立会議のはずが査問会へ様変わりし、GGG長官大河は何度も声を上げ異世界からの迷い人である《不動統夜》を庇護する姿勢に、地球防衛会議議員にしてトオミネ・コーポレーションCEO《トオミネ・タケル》は淡々と揚げ足を取るような言葉を投げかける
「ふう…世の中奇麗事だけでは回らないのだよ…何時までも正義の味方《ID5》でいる気かね？無駄に金ばかり喰うだけの虫のGGG？まあ、叶いもしない夢などに無駄な金をかける宇宙開発公団ならではの回答ととらえてもかまわないか？」

「無駄ではありません！我々宇宙開発公団、いえGGGは人類の未来と先人達が刻んだ《叡智》は決して無駄では無いのです！」

議員席から身を乗り出し、遠峰タケルに対し反論する大河。しかし周りの地球防衛会議議員の反応は様々だ…いや明らかにおかしい。それに口ゼ議長の姿も見えない

話はこのまま平行線をたどろうとした、その時。中央メインスクリーンに光が灯りノイズ混じりに音声が響いた

「…全世界各国首脳、および国連《地球防衛会議》常任理事議員、GGGに告げる、我々はバイオネット―

「バ、バイオネット!？」

今まで、表舞台に現れることなく、影で様々な謀を巡らし人々を不幸に陥れ第三国へ組織が産み出した兵器を与え内紛を拡大、膨大な利益を基に拡大した負の存在《バイオネット》。それがすべての衛星通信に介入し、こうして姿を見せた事に驚きを隠せない大河

「……バイオネット総帥として、我が理想を阻みしGGGに対して宣戦布告する！手始めにココ《アフリカ》の《開放点》を開放させる！！」

「か、開放点だと！」

「なぜバイオネットが開放点の場所を!？」

「開放点の位置は旧GDEファイルの極秘事項の筈だぞ！」

「すぐに高杉元帥に連絡をつなげ！」

「刮目せよ世界、我が姿を！偉大なる神の姿を！……その瞳に、記憶に、遺伝子に焼き付けよ!!我が名はしー」

アフリカ大陸を背景に宣言するファイバード。全身装甲越しに声高らかに、全世界に向け発信宣言し終えたところでジャックされた通信は途絶え回復、啞然とする地球防衛会議議員達、遠峰タケルはゆっくりと大河をみた

「さて、GGG大河長官…コレはどういうことかね？先の映像をみる限りバイオネット総帥は、君が保護している《不動統夜》が所持しているIS《ファイバード》にしかみえなかったのだが？これ以上底いたてをするならば…」

「まってください！コレがバイオネットの策謀だとわからないのですか!!こうしている間に《開放点》が開かれれば地球が…三十数年前と同じ事に」

「話を逸らそうとするとは見苦しいな、大河長官…い」

「何をしているんだい」

さらに追い打ちを掛けようとした遠峰タケルの声が背後から響い

た声に遮られ、動揺する議員達のざわめきもやみ、視線が一方向に注がれた

「ロゼ議長、遅いお着きで（ババア！何故ココにいる！！しくじったのか？迅雷共は!?!）」

「少し道が混んでたんで遅れてしまつてすまないね…今日はGGG支援部隊設立に向けての議題だつてはず。それがGGG解散議案になつているのは可笑しいんじゃないかねえ遠峰ボウズ？わたしに説明をしてもらえると嬉しいんだが。ソレより今はバイオネットがアフリカの開放点を開こうとしている事に対して議論する必要があるね」

ベージュ色のスーツに身を包み、強い光を湛えた瞳を向ける国連事務総長、地球防衛会議議長《ロゼ・アプロヴァール》の言葉に頷く他の議員達。スクリーンを展開しカツカツと壇上へ上がり席へ座ると、空気が一変する

「幸太郎、さつき日本本部から緊急通信があつた。アフリカにNEOに保管されバイオネットに強奪されたガイゴウが現れたと。三式空中研究所、三段飛行甲板空母が現地に向かつているそうだ…」

「ロゼ議長、私はコレより現地に…」

「話は最後まで聞くんた、アフリカに向かうには一時間以上かかる。それにこの一報を最後に通信阻害されている…信じて待つんだ、幸太郎」

「ですが！」

「それに今、日本本部には強力な助っ人が《伯爵》が向かつている…燐坊達の為に力を貸すために」

（伯爵？まさか……………奴か!!）

「…彼が…………世界の富の三分の一を有するサンジェルマン卿が…」

大河の声に力強いまなざしを向け頷くロゼ：《サンジェルマン》の名を聞きわなわな震え出す遠峰タケルをよそに議会をまとめあげバイオネットに対して現状でできる最善の方法を模索した頃、アフリカに到着した三段飛行甲板空母、三式空中研究所はウルテクブースターを解除し、途中で合流したセシリアと共に凍也、炎竜はガイゴ―探索を始めていた

「GSリアクション関知できず。これよりキリマンジャロ周辺に探索エリアを広げます」

『わかったわい、ワシ等も広域探索を引き続き継続する。聞こえてるかのセシリアくん』

「は、はい。獅童博士」

『今回は急な参加要請をして本当にすまんかったの…』

「い、いえ、イギリスGGG代表として当然ですわ。本部より送られてきた《ウルテク・Gビット》のテストも兼ねてますし」

『本来なら君用に入念に調整をするんじゃないが、なにぶん時間が無くての…最終的な調整は実戦込みになるがの』

「大丈夫ですわ。ウルテク・Gビット、必ず使いこなして見せますわ」

そう告げると、三式空中研究所と通信を閉じ空高くそびえるキリマンジャロ周辺へ飛翔するブルーティアーズの左右にはイギリスGGGで開発された量子通信遠隔操作浮遊広域防護機動楯《ウルテク・Gビット》が推進部から淡い緑光を光らせる

（ウルテク・Gビット。イギリスGGG主導で開発された新装備…わ

たくしのブルーティアーズとは違って広域防護を目的とした装備…)

「どうかしましたか？」

「い、いえ、何でもありませんわ…あの凍也さん…」

「大丈夫ですよセシリアさん。疾風なら必ず元気になって戻ってきます…燐との約束ですから」

「燐さんとの約束？」

「……ええ」

セシリアの問いに頷く凍也…IS氷竜とツートップ、ボックスに炎竜(スタンドアローン・モード)がアフリカの空を風を切り飛ぶ。各種センサーを最大レンジで展開しながら会話していく

(凍也さん、無理してますわね…でも約束って)

約束という単語に興味を持つセシリア、GGGに配属されてから燐、疾風、凍也、霧也、炎竜、雷龍と共に行動する中、強い結束力を度々みていた。もしかしたら《約束》が関わっているのではないかと考える一方で羨ましさを感じた時、GSリアクションが反応する

「凍也さん！ガイゴのGSライド反応を確認しました」

「！場所はどこですかセシリアさん」

「AGM97ポイント……キリマンジャロの麓ですわ」

『でかしたぜセシリア！すぐに獅童じいさんに連絡だ』

「ご心配なく、もうすでに送りしましたわ炎竜。では参りませうか…凍也さん、炎竜」

力強く頷き、三人は飛行機雲を生みながら現地へ向かう。連絡を受けた三式空中研究所、三段飛行甲板空母も雲の切れ目からその弾丸にも似た姿を見せ併走するように向かい、到着した

「ラ、ライ……………」

「せ、先生……………」

そこにはガイゴー《アクティブ・モード》がウルテクスラスターを光らせながら滞空し待つ姿…その胸部装甲は大きく開かれ無数のケーブルに繋がれた《獅童ライ》の頭部…うつろな瞳を向け微かに誰に語りかけることもなく唇が動いた

『……………プ、プラン……………B…移行……………アナライズ……………』

装甲が閉じ、スリットに光《化学物質》が周囲環境に適した物質合成が始まった瞬間、光の粒子が三式空中研究所、三段飛行甲板空母を包み込んだ瞬間、光の雨が降り注いだ

「第三エンジン被弾！」

「い、いったいなにが！」

「わかったよ火麻さん、あの光はミラー粒子を瞬間生成したものだよ…それに粒子間相互反発作用を利用して撃ち出してる」

「ヤツら、ミラー粒子技術を再現した!？」

GGGが誇る超技術《ミラー粒子》。コレは宇宙開発において有用な技術として生み出されたモノ。しかも極秘技術であるそれを再現したガイゴーに驚く火麻。しかし二人、束とレイジは顔をうつむかせ声が漏れた

「火麻くん、再現できて当然なんじゃよ…ミラー粒子技術を発案したのは…発案したのは」

「リックくんのお父さんが、宇宙へ…ネクストフロンティアへ向かうために生み出したの……」

二人の絞り出すような発言に驚きを隠せない火麻。その間にも光の雨《ミラー粒子の雨》が二隻へ降り注ぐ…地球上で最高の強度を誇るレーザーコーティングG装甲でも長くは耐えきれない

「東さん！火麻参謀…ミラー粒子技術を使うとは…」

『やばいぞ！装甲が持たないぜ！』

「凍也さん！私に任せてください…ウルテク・Gビッド展開！おゆきなさい!!」

セシリアの声に背後に浮遊していた菱形の機体《ウルテクGビッド》が変則的起動と共に三段飛行甲板、三式空中研究所の周りを飛翔、緑色に発光する先端から光があふれシールドが形成。ミラー粒子弾を防いでいく

「ウルテク・Gビッドをあのように使うなんて、さすがはオルコットくん、凍也くんが見込んだだけはあるかの」

『レイジ先生、キリマンジャロ周辺から異常なエネルギー波動を検知してるよ…コレってまさか!!』

「こ、コレは…まさか、この場所は…間違いはない、プラネット・エナジー開放ポイントじゃあああああああ!!」

キリマンジャロの麓に広がる大地が揺らぎ、動物達は危険を感じ安全な場所へ駆け出していく…ミラー粒子弾を降り注がせるガイゴ―から離れた場所、開放ポイント周辺が揺らぎ、何かが姿を表した

『よくやってるなガイゴ―。GGGも今頃はオヤジが解散決議に邪魔なババアに迅雷を向かわせたはず…さあ始めるか…1000年前の続きを…アヒヤアア』

開放点活性化装置のスイッチを入れ、数秒で大地が揺るぎはじめたのを満足そうに見ながらガイゴ―、三段飛行甲板空母、三式空中研究所をみた

『ククク、俺様の改良した開放点活性化装置はオーボスが使っていたのを新しく造ったからな。あと90分でアフリカは……ヒヤハハハハハハハハハ』

狂気の込められた叫びがこだまする……しかし、彼は知らない……この地、天高くそびえる霊峰《キリマンジャロ》に眠る存在《氷の獅子》を

ー……………シドオーリン……………ー

氷の獅子の声、それは光を越えGGG本部《G・クリスタル》ルームで眠り続け意識の海に漂う《獅童燐》の心に届く

ーだれだ……ー

ー……………シドオーリン……………酋長、と、同じ心、持つ……星の命……あぶない……………シドオーリン……………目を覚ます……ー

片言で語りかける黄金の光が見せたのは、ガイゴ―の攻撃を受け苦戦するGGGメンバー、凍也、炎竜、セシリアが二隻を守りながら攻撃をするもミラー粒子弾幕に遮られ、眼下に広大な大地が震え、動物達が安全な場所へと駆け出していく

ー……………シドオーリン……………命を……………星に住む命をー

黄金の光が消えた瞬間、燐の眼が開かれ上半身を起こしながら点滴、検査器具を外し立ち上がりとうとする……しかし崩れるようにベッド

から落ち、身体に激痛が走る

「ぐ、はあ、はあ……………」

痛みに耐えながら病院着を脱ぎ捨てる。腕と胸に巻かれた包帯に血が滲むのも気にせずIDスーツ、冷却コートを肩に掛けGクリスタルルームから壁に身を任せるように歩き出しながらGGGアーカイブズ、多次元諜報潜水艦から意識を失っている間の状況を確認するべくデータリンクを始める。もう一人のファイバード…で異世界から迷い込んだ《不動統夜》、霧也の起こした不祥事、自分が抜けた穴を埋める為に戦うも失明した疾風…戦力が枯渇したままGGGが三式空中研究所、三段飛行甲板空母でアフリカに向かった事

肩で大きく息を吐き、ダンつと壁を殴りつけた…自分もつと早くに意識を取り戻してれば、こんな事態にならなかったはず。しかし今はアフリカで最悪な事態が起こりつつある

なんとかしてアフリカへ向かわなければならぬ。やがてメインオーダールームの入り口にたどり着こうとした燐の耳に聞き慣れた声が響いた

「刮目せよ世界、我が姿を！偉大なる神の姿を！…………その瞳に、記憶に、遺伝子に焼き付けよ！！我がバイオネットを讃えよ！！」

「以上で我らが偉大な総帥様の宣言は終わりであります…………我らが総統様のお声はしびれる、あこがれる…」

「お前ら、狂ってやがる…………俺をハメるためだけこんな事するなんてな」

「—そうのおおおお通ります！ですがそれは総帥のイミテーションであるアナタにも…………—」

「ドクターウエスト！」

ドクターウエストの言葉を遮るように響いた声、統也、ユーノが振り返りみたのは息も絶え絶え、包帯から血をにじませながらも立つ少

年の姿。ゆつくりと二人の間を抜けメインスクリーンをにらんだ

「おやおや、総帥様の剣を受け生きていたとは……さすがはバイオネットの元《最高傑作》バイオダイナーリン」

「……あいにく、オレはまだ死ねないんでね。お前たちバイオネットの野望を叩き潰すまではな!!」

(……バイオダイナーリン(リン)?まさか、この世界の獅子王凱、いや勇者王はコイツなのか……)

「あひ、アヒヤハハハハハ!!笑わせる、笑わせてくれるのでありますね〜でも、コレがアナタと最後の会話になると寂しいものです……開放点が解放されれば我々のバイオネットの大勝利であります」

「開放点だと……お前たち、まさか!」

「……そのとおおおおお!おっとおお、時間がないのであるからか失礼するであああある!!」

「待て!ドクターウエスト!?……うっああ」

メインスクリーンからドクターウエストが消え、叫ぶもぐらりと身体が崩れ落ちそうになる隣、寸前でユーノが肩を貸し支えた

「わ、悪いユーノ……」

「別にいいよ。意識が目覚めたばかりで傷も治ってないのにムチャは」

「い、いまは、そんな状況じゃないんだ……開放点が完全に開くまでの時間を、そしてアフリカまでの所要時間を頼めるかな」

「ま、まさかアフリカに行くの！ムチャだよ。アフリカに今から向かうには今からだど2時間…それに開放点解放まで予測時間は」

カタカタと空間投影ディスプレイに開放点解放時までの時間が示された：《90》分。三式空中研究所、三段飛行甲板空母で三十分。現在、GG本部には同等の空中艦はない。例えあつたとしても待ちかまえて居るであろうガイゴの前に、ガオーマシンも無く修復率30%のガオファーでは存分に力を発揮できない：打つ手無し、そうユーノの心に浮かんだ時、燐は驚くべき行動をとる

「お願いだ！君の力をオレに貸してくれ!!」

「な、ナニしてんだよ！いきなり、そんなこといわれても…」

「……途中まで連れて行ってくれるだけでいいんだ。彼処にはオレの大事な仲間たちがバイオネットと戦ってるんだ。現場にいたら放り投げてくれてもいい、だからお願いだ！」

…冷たい床に手をあて、全身の至る所に包帯を巻き、血を滲ませながら土下座し懇願する燐…力を貸してほしいと何度も言葉を口にする姿に驚き狼狽える

「…君が霧世のしたこと、オレ達GGを信じろれなくなってるのは知っている…でも今だけは力を貸してほしい…」

「(な、なんなんだコイツ…なんで初めてあつた相手に土下座までして頼むんだ…自分の身体がボロボロなくせに…顔を知らない他人の為に命をはるなんて…)や、やめろ、頭をあげろつたら」

「……二十数年前に彼ら《ダ・ガン》達に託された地球を、そこに住む人たちの命と未来を守るための力をオレ…いやGGに貸してく

れ……頼む！」

燐の姿、言葉から必死の想いをかんじる統夜……しかし、脳裏に初日に受けた攻撃、霧也の天舞宝輪で五感のうち地獄で苦しむ母親の姿がフラッシュバックし、心が頑なになろうとした時、燐の後ろに光が集まり現れた姿に息をのんだ

(か、母さん……なんで)

「統夜……この子の力になってあげて……この世界に訪れたのは偶然じゃないの。私が統夜を呼んだの」

(え?)

「今のままじゃ、統夜の世界にいる《あの敵》には勝てない。この子達にあつて統夜に無いものを知って欲しいから呼んだの……時間は無いわ……お願い、この子の力になってあげて……」

僅かに笑みを浮かべながら、統夜を抱きしめ耳元でなにかを囁いてふわりと、優しいぬくもりを残して風のように消えた……微かに残る母の温もりと言葉は頑なになった心をほぐした

「頭をあげろつたら……今の状況は俺だつてわかる……現状をみたら間違いないくやばいってのは……」

「なら……」

「力を貸したいのは本当だ。でもアフリカに行くには、ウルテクスラストアーに準ずる推進システム搭載した空母が必要不可欠。しかも《開放点》が解放されるまで90分以内で到達、解放を阻止するための戦力は圧倒的に不足している。力を貸そうにも不」

「可能だ」

不可能……と言いかけた時、凜とした声が響く……コツコツと靴の鳴る音と共に現れたのは黒のモーニングスーツに身を包み、緑色の宝石が嵌められたステッキを右手に持つ薄紫色の髪が目立つ青年の姿。

統夜は彼を知っている…転生前に見ていたアニメ《超重神グラヴィオン》の登場する武装戦隊アースガルツを率い、世界の三分の一の富を持つ大富豪

「……ク、クライン・サンドマン」

思わず漏らした言葉に《彼》はゆっくりと目を向ける、わずかな戸惑いの色を見せながら土下座をする燐の肩に手を添え立ち上がらせた

「サ、サンジェルマン伯爵？なぜ日本に」

「久しぶりだな燐…今までの経緯は理解した。ユーノ・スクライアくん、いきなりですまないが《ミラーカタパルト》、整備エリアを借りさせていただいてかまわないかね」

「は、はい…サンジェルマン伯爵」

「そう硬くならなくていい…今は一刻を争う。私からもささやかながら力を貸そう……トリア、重力子とウルテクスラスターを、デイカは霧也をマニージマシンへ治療を頼む…」

『わかりましたサンジェルマン様！』

「霧也様の治療は私たち医療メイド隊にお任せください。さあ、こちらに」

「あ、ああ（……な、なんでトリア、デイカまでいんだよ……この世界は超重神グラヴィオンの世界も融合してるのか？）」

笑顔で気絶した霧也を手慣れた様子でいつの間にかに用意したマニージマシンへ座らせるデイカ、スパナ片手に笑顔で答えるトリアに困惑しながらも、サンジェルマン…サンドマンへ目を向ける

「どうかしたかね、不動統夜くん」

「な、なぜ俺の名前を…」

「今は一刻を争う。君とはあとでゆっくり紅茶を飲みながら語り合いたい…今なすべきことがあるのではないのかね…君にしか出来ないことが」

サンジェルマン伯爵の言葉が心に響く…統夜はその場から駆け出した。向かうは整備エリア。

「さあ、みんな！ウルテクスラスターと重力子エンジンの最終マッチング作業。ガオファアを仕上げるわよ!!」

「「「はいー」」」」

メイド隊、GGGメカニック隊の声が響く。ミラーカタパルトには試作型弾道整備強襲艦《アマノシラホコ》。その周りで各々が持ちうる技術、経験をフル動員する…一人一人の力は弱い、しかし集まれば、強い結束と勇気を生み出す

地球に危機が迫る中でも、絶望の色はいつさい無い、それどころか希望の炎を燃やし、未来を信じ行動する姿と場の空気に統夜は一瞬、圧倒されるも気を取り直しトリアに歩み寄った

「俺にも協力させてくれ、分担した方がはかどるからさ。ガオファアに関しては何に任せてくれないか」

「ん、いいよ。君にガオファアは任せた。システムやハード周りは手が開いてるメイド、GGGメカニックのみんなが手伝うから」

「あ、ああ」

ガオファアがある一画に着くと、すぐさま機体状況を確認する。その現状に思わず目を疑う

(レーザーコーティングG装甲、推進系は修復50%。内部フレームは…ひどいな。動けたとしても10分経たない内に機体がバラバラだ……ならコレを使うしかない)

「みんな聞いてくれ。今から言うガオーマシンの予備パーツと補修材を集めてきてくれ。リストは各パーツ事にみんなの端末に送ってある」

送られてきたリストに目を通したメイド隊、GGGメカニックは数秒もしないうちに揃えて来た。それを各種工作機がフル動員しチームごとに組み上がると統夜の前に集められ、HMDとVGを装着し操作。各部パーツが接続、駆動部、フレーム、最後に装甲が付くと見たこと無い三機が姿を見せた。そこにガオファー装着のためにきたIDアーマ姿の燐も今までのGGGメカとは違う概念で生み出された二つに驚く

「こ、これはISのパッケージか？」

「違うな。コイツはアシストマシン《ブレイブナイト》だ。今のガオファーはガオーマシンが無い。その上、完全に修復されていないガオファーの防御力向上と機能強化に特化したヤツだ……詳しい説明とアジャスタは」

「ウルテクスラスター、重力子バーニア調整準備終わったよ！」

「十分で完了。さ、最短記録更新したよ…ガオファーとアシストマシーン三機積み込み急いで！開放点解放まで60分！気合い入れて送り出すわよ!!」

「了解！」「」

「…あまり時間がないか。いくぞ燐…おまえの仲間が待っているア

フリカへ」

「あ、ああ……ありがとう不動くん」

感極まった声を漏らす燐、完成した三機、ガオファア燐、アシストマシン最終調整とマッチングに付き合うために統夜、GGG整備班、整備メイド隊が乗り込みリニアシートに座ると同時にカウントが始まる

―試作型弾道整備強襲艦《アマツ》、ミラーカタパルトへ―

試作型弾道整備艦《アマツ》……サンジェルマンファンデーションが開発した艦。地球と宇宙を繋ぐ往還資材運搬およびステーション組み立て設置を目的とし開発されていた

しかし重力子バーニアの調整に時間がかかり、お蔵入り仕掛けていたがGGG整備班のウルテクスラスターを組み込むことで制御に成功し、いまアフリカで苦戦するGGGメンバー救出のために燐、統夜、GGG整備班と整備メイド隊が今、飛び立つ！

メンテキャリアが移動し、巨大なミラーカタパルトに固定、何層にも閉じられた上部隔壁が開き光が差し込む中、増設されたウルテクスラスターと重力子バーニアに火が入る

―隔壁解放確認、弾道計算完了……ミラーコーティング……完了！最終安全装置解除！試作型弾道整備強襲艦《アマツ》緊急射出!!―

電子反発作用により、試作型弾道整備強襲艦《アマツ》の巨大な体躯が音速を超えミラーカタパルトから射出、宇宙開発公団の建設中の第2ギガフロート中央から弾かれるように風を切り、雲を貫くと瞬く間に大気圏を抜け衛星軌道に乗る。その時間わずか十数分。無重力の海を泳ぎながらゆつくりと傾き、眼下に広がる大陸……アフリカへと

落ちながらウルテクスラストアー、重力子バーニアが稼働と同時に再び分厚い大気圏へと突入。やがて赤い点となり消えていった

☆☆☆☆☆☆☆☆

「くそ、ミラー粒子弾の雨が止まんねえ!!」

「早くしなければ、開放点が開放されてしまう…束くん、ポイントの特定を」

「わかってるよ。ココをこうして、ああして……コレだ!!」

「ウルテク・Gビットが…」

「炎竜！セシリアの援護に!!」

「わかってるよ！」

あれから50分余りが経過した。ミラー粒子弾の雨から三段飛行甲板空母、三式空中研究所を守るために防御シールドを展開するウルテクGビットから火花が散り、外装には亀裂がはしり限界を迎えようとしている…《開放点》の正確な位置を探す束、レイジ、凍也、炎竜は弾かれた粒子弾を森に落ちないように撃ち落とし防ぐのに手一杯の状況、三段飛行甲板空母第一カタパルトが開く

すらつとした手足に、緑色のクリスタルが配置され、背中には六枚の緑光を輝かせた翼が開かせながら今まで見たことの無いISをまとうプラチナブロンドをなびかせ強い意志を湛えた瞳、凜とした少女の姿に束は慌てて声を上げた

『待つてシャルちゃん！GIS—XX《セラフ》はまだ未完成なんだよ!!』

「そんなこといつてる場合じゃないよ。みんなが戦っているのに僕一

人なにもしないってこと出来ないよ！」

『ダメだよ！まだシャルちゃん用にGパワーの調整が……！前方に超高密度、ミラー粒子弾確認!!』

「ウルテクGビット！シールド最大出力!!お願い持ちこたえて!!」

高密度に圧倒的な破壊力を秘めたミラー粒子弾、それを防ぐウルテクGビット……しかし、長時間の使用とテストが十分でない状態。不可視のシールドがきしみ発生器が火を噴き、ガラスが割れるように砕け散った

凍也、炎竜、セシリア、東、火麻、レイジ……三段飛行甲板空母、三式空中研究所にミラー粒子弾が迫る

(……燐！)

ミラーカタパルト内にいるシャルは、この場にはおらず、意識不明の燐の名前を心の中で叫んだ

『おおおおお！プロテクトオオオ！ギガツ！クロオオオオオオ!!』

叫びと共に、眩い閃光がミラー粒子弾を幾重にも走り瞬く間にはじけ消えた……余りのことに啞然となる一同……その前には見たことの無い未確認のIS。よく見ると装甲の隙間から見慣れたパーツがあることに気づく

『……………みんな、無事か!』

両肩にドリル、赤と黒の装甲に身を包んだガオファアの声……レイジ、火麻、凍也、セシリア、炎竜は知っている

「り、リッ君……リッ君なの!!」

「間違いないよ。燐……良かった……でもどうやってアフリカに？」

『サンジェルマン伯爵と統夜くんが貸してくれたんだ…二人の力がなかったらココまで来れなかった…凍也、炎竜、オルコットさん、みんなを守ってくれてありがとう…今から反撃に移る！いくぞみんな！！』

「「「了解！／わかりましたわ／オウ！／よっしやああ／わかったよ！！」「」「」」

今までとは違い、力強く答える一同…燐、ガオファー復活は皆の戦意を掻き立て再び勇気の炎を燃え上がらせた

『三式空中研究所は安全空域に。凍也、炎竜はオルコットさんを三段飛行甲板空母に収容後、開放点を探索を頼む！オレは……ガイゴートの相手をする!!』

『待つてリツ君！ガイゴーは…』

『……………ごめん、束さん…オレがやらなければならないんだ……………いくぞ！ガイゴー!!』

ウルテクスラスター前回で右腕部分にフロントムクローを展開、殴りかかる…しかしガイゴーもクローを展開し防ぎ火花を散らす中、燐は機体の装甲越しに父ライの姿を重ねていた

(……………父さん……………)

クロー、拳、蹴りを繰り出すも防がれる度、何度も心の中で父さんと呼ぶ燐…しかしアラートがなる

(……………残り五分を切った、何とかしてガオーマシンを召還させないと……………)

焦りを内心に秘める燐…数分前に交わした統夜との会話を思い出していた

ー燐、この三機のアシストマシンはお前のガオファーを防御面、

攻撃面での強化に振り分けてある…コイツでガイゴの攻撃からガオファーを守り抜きながらガオーマシンを奪還するー

ーす、すごいな…各部クリアランスも問題ないし、プログラムリングも使えるのか…ー

ーただ、問題もある…アシストマシンを装備出来るのは十分強、十分過ぎたらガオファーとアシストマシンは強制分離してしまう…ソレまでにガイゴにわざとガオーマシンを呼び出させてコントロールを奪回、ガオファイガーにFFして開放点解放を食い止めるしかない…あと他に質問はあるか？ー

ー…：質問というか統夜くん、君にお礼が言いたいんだー

ーお礼？ー

ー霧也の闇を祓ってくれた事かな…本当ならオレがやるはずだったんだ…君に迷惑をかけて本当にすまなかったー

ーもうすんだことだ…それよりあと五分したらつく。カタパルトに向かったらどうだー

ー…あ、そうだった…じゃあまた後で…ー

(…：…ガイゴにガオーマシン召還させてコントロール奪回…難しいかな…でも統夜くんがオレやGGの為に作ったアシストマシンを無駄にはしないし、父さんも助け出す！だから痛いけど我慢して父さん!!)

『はああああー』

GSライドが焔の意志に伝えるように出力を上げ、信念を乗せ回転回し蹴りがガイゴの頭に決まり、ぐらりと体制が崩れ、それを逃さ

ずムーンサルトを決めようとした瞬間、背後の空間が揺らぐ

『アヒヤハハハハハハハハ！まだ生きていたのか。今度こそ息の根を止めてやる、試作品！フレイルムソード!!』

邪悪な意志を湛えた双眸を輝かせ、ガオファアーwithアシストマシーン装備に背後からファイバードの刃が迫り切り裂く寸前、別な刃が防ぎ火花が散る…その刃の先には青と黒の全身装甲、赤いヘッドギアに金色のアンテナ、緑の双眸を輝かせるIS、もう一体のファイバードが現れた事に驚きを隠せないGGGメンバー

『て、手前、不動統夜かあああああ！ファイバードを装備できねえハズだ!!』

『……さあな、憐！コイツはオレが相手をする、ガイゴーがあれを呼び出すぞ!!』

『……………ガ、ガオーマシン……………コール』

統夜の声を耳にし、振り返ると同時にガオーマシンを召喚したガイゴー…ライナーガオーII、ドリルガオーII、ステルスガオーIIIが周囲を飛び交う

(……………チャンスは一度きり)

胸部スリットに光が集まり始めるガイゴー…ガオーマシンの動きが変わろうとした瞬間、ウルテクスラスタースラスター全開で接近、そのまま組み付いた

『?!。!?』

『いまだ！プログラムリング展開……………』

プログラムリングがリングジェネレーターから走り、ガオーマシンのコントロールがガイゴーからガオファアーへ移行し始め引き寄せられていく

……持ちこたえてくれガオファー！アシストマシン）

アシストマシン分離……そして開放点解放までのタイムリミットも刻み、コントロール奪回八割にせまりはじめた

『……………ガオーマシン…不正アクセス確認…………パターンFF強制起動…………アナライズ…………シナプス榴弾』

『な、うわあああ!!』

胸部スリットから精製された無数のシナプス榴弾の零距离を受け、力がゆるんだガオファーの拘束を振り払い高く飛翔するガイゴ…そしてガオーマシンが吸い寄せられ光に包まれた

『……………フ、ファイナル…………フ、フュージョン』

胸部スリットから光が溢れ擬似プログラムリングが形成、その上を走るガオーマシン。まずはドリルガオーIIが装着、内部シリンダーが縮み固定、ライナーガオーIIの補助ロケット切り離しと同時にガイゴー腕部分が背後に移動。そのまま滑り込み逆噴射と同時にロック。最後にステルスガオーIIIが背面に逆噴、駆動部に接続、火花を散らしながらエンジンブロックが肩から伸びた肘にドッキング、シャッターが開き拳がガツガツと飛び出す

最後に黒のヘッドギアがガイゴー頭部に装着されアンテナ中央にGストーンがせり上がりマスクが装着…光無き相貌に赤い光が灯る

『……………あ、ああ…………アレは!』

『アヒヤハハハハハハハ！見たか！コレがバイオネットの新たな商品！《Gストーン》搭載IS……………ガオガイゴーだあああああ!!』

…………それは邪悪なる力、その姿は黒き鋼の悪魔

命をもてあそぶバイオネットが生み出した悪意の象徴

罪なき命を身体に宿した悪魔の名

その名も『ガオガイゴー』

『…………アナライズ、ファントムリング形成……………ブロウクン・ファントム』

胸部スリットに集まった光が光輪を形成、そのまま中心めがけ撃ち抜き飛ばした。狙いはもちろんガオファア…それに気づき回避運動を取ろうとする燐、しかし動きが止まりプログラムリングを展開した

『ウオオオオオ！プロテクトリング！プロテクト・ギガツ！クロオオオオオオオオ!!』

光輪《ファントムリング》をまとった拳とプロテクトギガクローがぶつかり合う…あたりの空気が震え放電現象が起きアシストマシンに守られたガオファアのフレームがギシギシ悲鳴を上げる

『バカ…なにをやってるんだ燐！何でよけないんだ!!時間がなくなるぞ』

『…………ぐ、統夜くん、オレたちの足元を見るんだ…』

苦悶の声をあげる燐の足元、統夜の目に映ったのは逃げ遅れたキリン、ヌー、ライオン、シマウマの姿…燐が回避しなかった理由、それは逃げ遅れた動物たちを守る為だった。アシストマシン表面に火花が散り内部のガオファアをまとう燐の身体の表面をヌルリとした何か、ふさがりかけた傷口が開き隙間を抜け滴り落ちていく

『…な、なんで動物たちがいるんだ!』

『…た、例え彼らは言葉を話すことができなくても、オレたちと容姿が

違っても、同じ命を授かり生きている…今を精一杯生きているんだ…命は光り輝くんだ…オレはもう目の前で無慈悲に命を奪われていくのを見たくない!!』

燐の叫びにGSライドが出力を上げ少しずつブロウクンファントムを押し返していく…統夜は驚いていた燐のガオファアは自身の纏うファイバードとは明らかに性能差がある、絶対的な防御を誇るオリハルコンより遥かに強度が劣る装甲しか持たない筈なのに、ファイナルフュージョンしたガイゴー、ガオガイゴーと拮抗している

『オラアアア!余所見してんじゃねえよ!!飛天御剣流・龍翔閃!!』

『ぐ、なぜ飛天御剣流を使える!!』

『ああ、あの裏切り者から奪い取ったんだよ…』

『奪い取った…?!』

『俺様はな、転生特典で他の転生者から特典を《強奪》できるんだよ………良いのを見せてやるよ………コレなくくんだ?』

ファイバードの空いている手に出現したのは分厚い本、その本が何かを統夜は本能的に悟り力を確認し愕然となったのを見て邪悪な眼差しを向けながら目を細めた

『ま、まさか俺の特典を!』

『YES、YES、YES、YES!さつき触った時に奪わせて貰ったぜ…転生特典《墮淫の書》すごいなあコレ、最初に契約をしようとする相手と賭けを行い、それに勝利した場合発動する、負けた場合は対戦相手に対しては何も行えないように契約し服従させた相手の身体をさまざまな行為が出来るように都合の良いように改造、また避妊

具のような扱いも出来て、逆に排卵を誘発させて孕ませたり出来んのか……俺ならこう変更も出来るんだよ《契約を結んだ相手にありとあらゆる命令を与える》。コイツはどんなに次元が離れていようとも絶対尊守の命令が出来るようにな……ん？亀山一夏、面白いヤツに劣化版を渡してるのか……そうだな。試しに最近お前が契約した相手に《墮淫の書》で命令してやるか』

ファイバードこと沙華堂牙濫はページヲパラパラ捲り、手を止め目を細めた先には《深月真夜（みづきまや）》、その力の詳細まで事細かに記されていた

『（深月真夜か……死を予知する力か）……さて、どんな命令にするかな……街中で不良共にまわされるようにするか、それとも《名も無き鳥》に向かわせてやられまくるか』

『やめろー！』

『アヒヤハハハハハハ!!おお、怖い、怖い……お前も人のこと言えないだろ？母親の復讐のためにあっちの世界の篠ノ之束を墮淫の書使ってめちやくちやにやったんだろ？女尊男婢主義の女どもなんか精神崩壊させるまでなあ？この世界が滅んだら不動統夜、次はおまえの世界だ』

『ふざけるな！確かに俺は復讐の為にそれを使った……でもな俺の世界も、この世界もおまえの好きにはさせない!!』

再び互いに切り結ぶ統夜、伽藍……そんな中、燐のガオファーは遂に限界を迎えようとしていた、しかし動こうとしない。理由は足元、そこには逃げ遅れた動物たちが居たからだ

『……は、早く逃げるんだ……グ、グウウウウ』

『やめてリツ君！ガオファアはもう限界だよ!!』

アラートが響き、遂にアシストマシンが強制的に分離、プロテクトギガクローが消えブロウクンファントムがガオファアに直撃、嫌な音が辺りに響かせ砕け散る装甲、ウルテクスラスターから火が噴き墜落していくガオファア

『ぐ、動いてくれ…このまま落ちたら動物たちが…命が…：ガオファア、おまえは命を守るために生まれたんだ…だから動いてくれ！』

『リツ君！火麻さん、凍也くんを』

『ダメだ、まだ開放点が見つからねえ!!』

(お願い、誰か燐を助けて!!)

血を吐きながら叫ぶ燐…その叫びは足元にいるキリン、ヌー、ライオン、シマウマ、フラミンゴ…達に届く…ライオンが燐に目を向け瞳を閉じ、それにつられるようにキリン、ヌー、シマウマ、フラミンゴ達も目を閉じた時、その身体から光が立ち上る、それは離れた場所からも上がり、それに反応するかのよう燐の左腕に埋め込まれたオリジナルGストーン《VII》からまばゆい光が溢れ、集まった黄金の光は天高くそびえる山《キリマンジャロ》に鎮座する氷の獅子に集まり光と共に消え、遙か彼方にあるGGG本部、最重要エリアにある《Gクリスタル》が鳴動、クリスタル中心から獅子の雄叫びと共に何かが隔壁を貫き光を超えた速さで瞬く間にアフリカに到達、三式空中研究所、三段飛行甲板空母を抜け、キリマンジャロから現れた光と共に墜落していくガオファアを飲み込んだ

ーシドオーリンー

ーき、君は…ー

『……順番が逆なのか(なんだ、ガイガーから別なエネルギーを感じる……わからないが、力があふれてくる)』

(な、なんで、Gの封印が解けたの!!)

(ありがとう。ギャレオン……燐、負けないで!!)

『いくぞガイゴ―、いやガオガイゴ―!!』

様々な思惑を孕みながらガオ―マシン強奪から端を発した事件は
終わりの時を迎えようとしていた

第十九話 黒い鋼の悪魔

了

第二十話 弾効の剣！勇者王復活！

俺様の紛いモノ、不動統夜と剣を切り結びながら見たのはISサイズのライオン？を纏った出来損ない（サイボーグ）：胸にライオン？だっせえつたらありやしない。ファイバード、ゴツドΣグラヴィオン、グレートバーン・ガーンみたいにカツコよくいかした武器の一つも装備していないようだな…

ーガイゴー、いやガオガイゴー。あのライオンもどきと出来損ない（失敗作）を殺せ…：親であるお前の手でなー

ーリ、リヨヨヨヨ…：カカかい…：GARAN様…：ー

まるで壊れかけのラジオだなあ、まあ、仕方ないかフリールがあんだけいじくり回したらなあ、電極百本ぶち刺して記憶を読み出しすんの無理矢理な神経接続で壊れかけてるからなあ

まあ、結果としてオヤジの会社《遠峰コーポレーション》が国連に売り込む《OGIS》の生体ユニットのテスト機としてデータは十分とれたからいいか。あの時の出来損ないの驚いた顔は最高だったなあ

ククク
ククク
そんな時の映像を見せたらフリールの奴は何度もイってたからなくククク

まあ、俺様からの最後の手向けだ。親に殺されちまいな？元バイオネット最高傑作《バイオダイナイン》（出来損ない）。どのみちあと数分したら解放点が完全に開く。アフリカ大陸は壊滅、人的および経済的損失も計り知れない被害を紛い物《不動統夜》に罪を擦り付けて、コイツを庇おうと地球防衛会議で擁護する忌々しいID5…クソ大河は根回ししされてることに気づいてない。念のために迅雷とゲシュペンストをロゼのババアを殺しに向かわせた。後ろ盾の無いGGは全責任を取る形で解散に追い込めるし、まさに一石二鳥。間違

いなく俺様の勝利だ

まあ、俺が本気を出すまでもなくな…さあ、楽しもうじゃないか

『よそ見すんなよ紛い物（不動統夜）!!飛天御剣流《龍翔閃》!!』

『ち！（剣戟が重い）』

この世界が俺様、バイオネットに敗北する特等席に招いてやったんだからな？楽しまないと損だぜ？

第二十話 弾劾の剣！勇者王復活!!

「束くん！アレはまさか!?!」

「……………ありえないよ。なんで《G》、ジエネシツクのコアがリツ君に……………止めなきや、早く止めないとリツ君が!!」

GIS—00《ガイガー》を見てオペレーターシートから思わず立ち上がる。私が作った破壊神《G》（ジエネシツク）のコアをまとったリツ君の姿…もし《ジエネシツクマシン》を呼び出したら……………リツ君が!?!

「だいじょうぶだよ」

「え？シャルちゃん？」

カタパルトに居たはずのシャルちゃんが隣にいる？いつの間に来たの？って思ったことより大丈夫ってどういう事なのかな

「……………まだ《目覚めの時》じゃないよ。僕たちはいま出来る事をやろう、今の燐に必要な大事な事を」

淡い緑の光を輝かせながら笑みを浮かべるシャルちゃんの言葉から、なぜかわからないけど安心する……………それに…マヤさんの姿とだぶって見えたんだ

ー東ちゃん。わたしに何かあったら燐を…おねがいねー

あの日、Gクリスタルの前で遊び疲れたリツ君を優しく抱きながら話してくれたマヤさんと…

「わ、わかったよ……でもシャルちゃんも力を貸してね」

「僕に出来ることなら何でもするよ……燐を、ううん、守りたいから《この世界》に住む皆を」

……なんだろマヤさんと姿が重なる…でも今はシャルちゃんの言うとおりに出来ることをやらなきゃ

わたしはシートに座るとキーを指で叩いてく……今のリツ君に必要な《力》を。待つててリツ君！

『ガ・オーン…いやギャレオン、いくぞ！』

ーガ・オーン、わかったー

腰部スラスター全開でガオガイゴー、父さんに接近する。それに気づいたのか、拳を構えブロウクン・ファントムを撃ちはなつてきた。ファントムリングに触れれば機体はバラバラになる。軽く身体をひねりリボルバー・イグニッションでジグザグ飛行していく

『すごい、ガオファアよりも反応が早い！それ以上に力が溢れてくる！！』

数年前に束さんが生み出した最強最悪の破壊神のコアを担うすべてのGISシリーズの原点《G》…初めて動いた筈なのに身体にフィットして思う通りに動く。でも今はガオガイゴーから父さんを、プラネットエナジー解放点解放を阻止してアフリカも救う！拳に意識を向けるとガイガークローが展開、一気に間合いを詰めた

『そこだ！ガイガークロー!!』

『……………プ、プロテクトシールド……………』

不可視の光、プロテクトシールドがガイガークローを阻む。やはりガオファイガー同様に使えるのか！

『まだまだあ!!』

ガイガークローを閉じ、拳を構え勢いをつけ再び殴りつけ反動で頭上へ浮くと、そのまま落下し脚と脚に首を架け腰部スラスターを下方に展開と同時にバランスを崩す。狙いはガオガイゴの首の付け根にあるGファイバーとリンカージェルコネクターユニット。そこを破壊すれば操られている父さんを安全に助け出せる。この僅かな隙…首の付け根へガイガークローを突き出した…

『……………プラズマ・ホールド……………』

『な！ウワアアアア!?!』

『燐!』

『余所みたあ、ずいぶん余裕だな？おら！フレイムミサイル!!』

『く!』

プラズマホールドで拘束された燐をみて叫ぶ俺にファイバードから放たれたミサイルを対ミサイルで迎撃、あたりが煙で見えなくなる。フレイムソードを構えあたりを伺いながら奴の気配を探す…バ イオネット総帥、俺を嵌めるだけに今回の事を仕組んだコイツだけは許せない……………ただ、コイツは今まで戦った相手より格上だ油断したら確実に負けるか……………

『おらあ!』

『く!』

煙が切り裂かれる。咄嗟にスラスターを噴かしその場から離れた俺の前には狂気の光を湛えた目を光らせ立つファイバードが残念そうに見ている。いきなり手を軽く叩くと墮淫の書を手にパラパラ捲る

『よくかわしたなあ…紛い者。少し盛り上げてやるよ……墮淫の書に契約せし者《深月真夜》に命ずる。これより《名も無き島》へ向かい男達に身を捧げよ』

『……今、なんて言った』

『え？きこえなかったのか？ならもう一度聞かせてやるよ……墮淫の書に契約せし者《深月真夜》に命ず……』

『お前がその名前を軽々しく呼ぶな！』

『へえ、そんなに大事なのか？この女が……よく見るといい女だな……なんなら俺様の肉…おおっと、今のは危なかったな』

『ふざけるな。おまえだけは…俺の手で斬る……』

裂帛の気合いを込めフレイムソードで斬りつける…ちとせの真名は心を許した相手にのみ呼ぶことを許される、それを軽々しく、さらに名も無き島に向かって犯されるだ？怒りがふつつ湧き上がるのを感じながらも冷静になりながら八双の方を取りながら逆袈裟、切り払いを様々な角度から仕掛ける

『……なんなら斬ってみるよ？…速くしないと、お前の大事な大事な《真夜ちゆわああん》が犯されちまうぜ。ほ、よつと、あらよと』
ふざけた口調を言いながらで紙一重でかわされていく……ならこれとはと、フレイムミサイルに時差式着弾設定を加え、連続発射と同時に離れヤツの身体へ時差式で迫るのを見ながらバレルロールしながらフレイムキャノンを一斉に撃つ

『(……怒り狂うと思ったが意外と冷静だな…

すこし本気を出さないとな)……甘いな！フレイムキャノン・ブラスターモード!!』

着弾寸前でフレイムキャノンから持続力の長いビームで風払った

…内部に相当手を加えてるのがわかった…解放点も気になる。それ以上に奪われた墮淫の書を取り戻さなければ取り返しのつかないことになる

早く決着をつけなければ、この世界が終わってしまう

「リツ君！」

「博士、何とかなんねえのか！」

「……《G》、いやガイガーだけでは勝てん……せめてガオーマシンさえあれば…クツ」

ーグ、グアアアアア!!ー

プラズマホールドで拘束された隣の苦しみに似た叫びがスクリーンから響く、ファイナルフュージョンしたガイゴー、ガオガイゴーには手も足も出んのはわかっておる。それにガオーマシンがあつたとしてもファイナルフュージョンプログラムを一から組み直さなければならぬ

彼が造つたアシストマシンは強制解除時にシステムエラーを起こしておる……打つ手は無いのか

ーまだ、方法はあるー

三式空中研究所に声が響いた。この声はまさか……スクリーンを見るとアフリカに向かう高速で向かう物体…いやコレには見覚えがあると感じた時、スクリーンに映し出された薄紫色の髪の青年の姿をみて獅童博士は勢いよく立ち上がった

「サ、サンジェルマン伯爵！なぜココに!？」

ー話はあとだ獅童博士。GGG中国より預かった希望をこれより
《若き獅子》へ送ろうー

「ま、まさか!」

青年、サンジェルマン伯爵の後ろには三機の機影…をみてすぐさま
レイジ博士は三段飛行甲板空母へ通信をつないだ

『グ、グウウウ』

プラズマホールドから逃れようとするけど力が入らない。無理な
のか?父さんも、アフリカも…守ることも出来ないのか?解放点活性
化装置を凍也達とオルコットさんが見つけ、攻撃を仕掛けるも未知の
フィールドに阻まれ攻撃が通らない。超竜神にシンメトリカルドッ
キングしウルテクビーム一斉掃射してフィールドを貫いたけど半減
され効果が無い…という暗号通信に焦り始めた

ーシドオーリン、しつかりする。あきらめるな………?リン、ナ
ニカが来るー

ガ・オーンの声と同時だった、黒い影がガオガイゴーへ体当たりを
仕掛け、たまらず体勢を崩しプラズマホールドの拘束が解けた。あの
黒い影はステルスガオー?今度は別方向から二つの影…ライナーガ
オー、ドリルガオーが現れた

『こ、これは旧ガオーマシン?確か中国の宇宙ステーションでハイ
パーレーザーコーティング実験してたハズ!』

ーリツ君、聞こえる!ー

『束さん?このガオーマシンは?』

ーサンジェルマンさんが中国、GGG中国に掛け合ってくれたん

だー

『サンジェルマン伯爵が？じゃあこのガオーマシンを使ってファイナルフュージョンを』

ーそのガオーマシンは整備は万全だけどファイナル・フュージョン・プログラムを一から作らないといけないの…それにガイガーと旧ガオーマシンとのファイナルフュージョン成功率が…レイジ先生とわたしがサポートプログラムを組めば40%になるんだけど…でもー

途切れた束さんの言葉の先はわかる。成功率が30%が意味するのも。でも今はファイナルフュージョンをしなければ現状を打破する事が出来ない…だから

『たとえば成功率が40%しかなくても、束さん、ファイナルフュージョンをさせてくれ！』

ーで、でも……………

『時間がないんだ！解放点開放リミットまであと五分余りないんだ。凍也、炎竜、オルコットさんたちが解放点活性化装置を見つけ出したけど、破壊するのに時間がかかる…この状況を打破するにはファイナルフュージョンしかないんだ』

ー束くん、燐を信じよう。ワシらが作っサポートプログラム、さらに成功率を上げるためにシャルロットくんの力も借りたい、いいかの？ー

ーハ、ハイ、僕の方でよければー

「燐、一人一人が100%の成功率、サポートプログラムが40%、なら獅童博士、篠ノ之、デユノア、燐のを合わせて80%、残り20%は勇気とガッツで補え！」

『参謀……束さん、シャル、じいちや《リン、オレもいる》……ガ・オーン、俺に皆の勇気を貸してくれ！……ガオーマシン!!』

アフリカの分厚い雲を突き破り現れたのはステルス戦闘機……ステルスガオー、大地を貫き瓦礫を押しつけ現れたドリルガオー、ライナーガオーが姿をあらわす

三段飛行甲板空母の中央司令室の扉が開き、薄紫色の髪にモーニングスーツ姿の青年《サンジェルマン伯爵》が静かに入り右手に構えた緑色の宝石がはめられ金細工がめだつロッドを優雅に振るい構えた「我が親友《大河幸太郎》、アプロヴァール事務総長にかわり私が宣言しよう……ファイナルフュージョン承認!!」

華麗に振るわれたロッドに詰められた宝石に《G》の幾何学紋様が輝くと共に桜の花びらが軽やかに舞う……一瞬呆けるシャル、束、レイジ……反面、激は軽く頭を抑えながら気を取り直した

「了解、シャルちゃん一緒にやるよ！ファイナルフュージョン……」

「う、うん……」「プログラムツドラアアアアアアイブ!!」「」

声をシャルちゃんと合わせ一緒に振り下ろされた拳は、赤く明滅するセーフティーパネルを割り緑色に輝く……

「サポートプログラム起動！シャル君、束君、頼んだぞ」

レイジさんの言葉に強く頷きシャルちゃんにHUDをかぶらせて意識を集中させスクリーンに移るリツ君がファイナルフュージョンが成功することを強く願ったんだ

頑張つて、リツ君……わたしとシャルちゃんが全力でサポートする

から

☆☆☆☆☆☆

『ファイナルツ！フュージョオオオオン!!』

左右腰アーマからEMTを放出、回転しながらフィールド形成する。そこに三機のガオーマシンがフィールドを抜け俺の周りを旋回する、まずはドリルガオーが脚へ装着、内部でシリンダーがせり上がりロツキング、背部に肩部装甲とガイガークロウが背中に移動、ライナーガオーが左肩にふれた瞬間量子化反対側に再構成され制動がかり固定された

……合体プログラムが無いのに等しいのに関わらず、問題なくドツキングが出るのか。それはレイジ、束がリアルタイムでファイナルフュージョンプログラムを作成インストール、さらには

「束さん、ライナーガオードツキング0.5秒後にステルスガオーのロツキング時間を二秒に、突入角を二度さげて！」

「二秒！突入角修正やってみる!!」

シャルロツトの持つ技能《ラピッドスイッチ》を応用したガオーマシンドツキング時のタイムラグと侵入角度。さらにはGストーンを介して燐の感覚を読み伝えることで最高の精度を維持していたからだ

(……………僕は燐を信じてるから、だから精一杯サポートするから……だから頑張つて燐)

ステルスガオーが背面にと現れ肩部装甲をクランクロック、両脇からライオンのたてがみ状のパーツがせり出し装着と共にギヤレオンの瞳が輝く、エンジンブロックが火花と共にせり上がり燐の腕をおおうとインテークシャッターが開き拳が勢いよく飛び出し、最後にヘッドギアがつき額の中央にGストーンがせり上がりGの幾何学紋様が

輝いた

『ガアアオツ！』

両拳を激しく打ちつけ、緑光のプラズマがほとばしった

『ガアアアアイツ！』

両腕を交差、E M Tフィールドが軋み

『ガアアアアツ！！』

雄叫びと共にE M Tフィールドが霧散、現れたのは黒き鋼のI S
……

三十数年前に地球を守った勇者の一人《ガオーン》の魂宿るガイガー、ファイナルフュージョンプログラムを構築したシャルロット、東、レイジ、サンジェルマン伯爵が手配した旧ガオーマシンと一人一人の知恵と勇氣により生まれたファイナルフュージョンする事で復活した人類の新たな希望

その名も勇者王ガオガイガー！！

「ファ、ファイナルフュージョン成功したよ！！」

「よっしやあああ！／＼成功じゃああああ！！」

黒い装甲に力強い意思を感じながら堂々とした佇まいに、僕は胸が高鳴る……良かった、本当に良かった、周りの皆も喜んでる、サンジェルマン伯爵さんも笑みを浮かべてる

「篠ノ之！ダイバイディングドライバー射出！！」

「了解！ダイバイディングドライバー、キットNo. 01、イミッショ
ン！！」

東の後ろに現れたパンチユニット、それを思いっきり叩くと、三段

飛行甲板空母から銀色のナニカが飛び出していく

「ねえ東、デイベイディングドライバーを何に使うの？」

「ん？それはみてからのお楽しみだよシャルちゃん」

満面の笑みを浮かべた東、何が起きるのか気になって

正面スクリーンに目を向け、デイベイディングドライバーを装着した燐の動きを一緒に見守った

☆☆☆☆☆

『目標……追尾……ブロウクンファントム』

『く！凍也達がいるのは……アソコか、ウオオオ！デイベイディンググッ！ドライバアアア!!』

俺にブロウクンファントムを撃つ父さんの攻撃をかいくぐり、凍也達がいる方向にデイベイディングドライバーを叩きつけた……何発も銃を撃つ音が響きシリンダーが軋む。アフリカの大地に真っ直ぐ光が伸びる。解放点活性化装置へ攻撃を仕掛ける凍也……超竜神が俺の意図に気づいてオルコットさんと共に離れた瞬間、レプリケーションフィールドにより大地が別れ瞬く間に直径10キロの円形に広がりアレステイングフィールドで固定された戦闘フィールドが生まれ、その中に解放点活性化装置が勢いよく落ちていく。

『うまくいったな燐、いきますよセシリアさん。ウルテクビーム一斉掃射!!』

「任せてください。おゆきなさいブルーティアーズ!!」

ラダートンファア、クレーン、両腕部砲口からウルテクビーム、オルコットさんのブルーティアーズがプラネットエナジーから供給していたシールドは消失した解放点活性化装置の厚い外郭を貫く。やがて爆発四散したと同時にアフリカ大陸中で起きていた噴火、地震が嘘のようにおさまった

（俺様が用意した解放点活性化装置を……出来損ないのバイオデザイン

達がやったのか！)

解放点活性化装置がアフリカの大地に空いた大穴に墮ち破壊され
歯軋りする…あの出来損ないのISにガオーマシンがあったことは
知らなかった。日本から短時間で到達したこともだがガオーマシン
を用意するのは不可能だ…まさか…アイツ等がGGGに力を!?

『ハアアアッ!』

『チヨイサアアア!つとアブねえ』

今はアイツ等の事を考えるより、目の前のコイツを何とかするか
…あのライオンもどきを解析したら第三世代に毛が生えたぐらい
のスペックしかない。第四世代のガオガイゴーなら簡単に倒せる
それに、まだGGGをつぶす手はあるしな…俺様の勝利は間違いな
い。不動統夜(紛いモノ)、おとなしく罪を被ってGGGと共に滅びな
様々な方向から切りかかる刃を交わしながら墮淫の書に意識を集
中する、次は誰を送ってやるかなあ?

『……………も…目標確認……………これより殲滅……………す、す、す、る』

『父さん……………くー!』

DDモードを解除と同時にデイベイディングフィールドに俺、遅れ
て父さん…ガオガイゴーが降りた。右腕を構えると回転と同
時に光輪《ファントムリング》が形成される

俺も右腕を構え回転、Gエネルギーを限界まで高め狙いを定めた

『ブrouクンッ!マグナアム!!』

『……………ブrouクンファントム……………』

叫び声と同時だった…撃ち出された俺のブrouクンマグナムとブ

ロウクンファントムが途中でぶつかりあたりにはブrouクンエネルギーとGエネルギーから生まれる放電と風が巻き起こる……ブrouクンファントムはブrouクンマグナムの強化版、威力は桁違いだ。でも俺は父さんを助け出す！そして一刻も早く統夜君に加勢をしなければならんだ！

『……目標内部に高エネルギー反応……』

『ウオオオオオ!!』

ー……命の宝石、の、力があがっていく……ー

押され気味だったブrouクンマグナムがブrouクンファントムを押し返す。身体の奥から力が溢れていくオリジナルGストーン《Ⅰ》を組み込んだGSライドと俺の腕にある《Ⅶ》が共鳴しているのを感じた瞬間、ブrouクンファントムをリングを破壊しながら弾き返した。背部バーニア全開で一気に間合いを詰めドリルニーで回転膝蹴りを決め、追い討ちをかけようとした瞬間、ガオガイゴの胸が開いた

『……り、燐……痛いよ……燐』

『!!』

無数のケーブルに繋がれた父さんが苦しそうにつぶやく……一瞬、動きが止まる。すぐに胸が閉じお返しとばかりにドリルニーが顔面へ跳び蹴りの要領で入る……ふらふらしながら意識を保たせ再びガオガイゴを見た

……ある構えを取っている。見覚えがある構え……ヘルアンドヘブンの構えを

『まさか、ヘルアンドヘブンを……』

あの構えは間違いない……今までバイオネットとの戦いでゾンダーISコアを抉り抜いたガオファイガーの大技……奪われたガオーマシンとファイナルフュージョンしたガイゴー……ガオガイゴーもできるのか……もし放てたとしても父さんの命が！

ーシンドオーリン、あのままだと、リンのお父さん、もたない………

ガ・オーンの言う通りヘルアンドヘブンのエネルギーに父さんは耐えきれない……なら、救うにはコレしかない！

『ヘルッ！アンドッ！ヘブン!!』

両腕を力強く交差し叫ぶ、父さん……ガオガイゴーもヘルアンドヘブンを放つ構えを取った……旧ガオーマシンでファイナルフュージョンした俺、GIS-00ガオガイガー、ガオファイガー用ガオーマシンとファイナルフュージョンしたガオガイゴー

出力と装甲、基本性能はあっちの方が上だ……でも俺は負けない!!

『ゲム・ギル・ガン・ゴー・グフオ……ムンツ!!』

『……ゲム・ギル・ガン・ゴー・グフオ………』

呪文を唱えながら攻撃のGエネルギー、防御のGエネルギー溢れさせる右手と左手を徐々に近づけ胸の前で突きだした形で組んだ瞬間、二つの緑色の竜巻《EMT》が発生、あまりの余波に空気が震えダイバイディングフィールドの地表がめくれあがる

『ウオオオオオオ!』

『目標確認……ゲ、ゲ、ゲ、撃破………』

荒れ狂う緑の竜巻：その中を背部バーニア全開で突き進む俺《ガオガイガー》と父さん《ガオガイガー》の拳が火花を散らしつつかり合いEMTが弾け飛んだ。

『グ、グウウウー！』

『も、目標腕部に破損確認、し、し、し、し、最大出力で……粉砕する』

Gパワーがぶつかり合いエネルギーが放電現象を起こし、腕に激しい痛み、さらには装甲に亀裂が走る：全身に広がる痛みを耐えながら力を込めていく……俺の力は命を奪うモノじゃない……命を救う為の力だ

『…………ウオオオオオ!!』

『目標のエネルギー、急上昇…………け、計測…………フ、フノウ…………』

『ウアアアアア！ムン…………セヤアアア!!』

ガオガイガーの拳を砕きながら、首もとにあるGファイバーとリンカージュールコネクターを掴み握りつぶす。同時にプロテクトエネルギーで父さんとガイガーを保護した瞬間、ガオーマシンに罅が大きく広がり爆発四散した

『『燐！』』

「獅童さん！」

『…………凍也、オルコットさん、俺なら平気だ…………父さんも…………』

解放点活性化装置を破壊し、援護に着てくれた凍也、オルコットさんがホットした表情を浮かべる。父さん……ガイガーを抱きかかえな

がら二人に近づく……そのまま父さんを三式空中研究所へ送るように頼むと、上空へ目を向ける……統夜君のファイバードとバイオネットのファイバードが激しく切り結んでいる

『ガ・オーン、もう少しだけ力を貸してくれるかな?』

ーわかった、シドオーリンー

……スラスターに意識を集中、ゆつくりと上昇するガオガイガーのダメージエツクをする。右腕および左腕装甲ダメージ大、リフレクシオンアーマも機能しない……旧ガオーマシンじゃヘルアンドヘブンに耐えきれなかったんだ

でも今は統夜君を助けにいかなければ、スラスター出力を上げ向かおうとした時、金属音と共に何かが横切る、視線の先には弧を描きながら落ちていく剣……再び二人に目を向けると剣を失った統夜君、剣を構え迫るバイオネットのファイバード……

平行世界から迷い込んで、バイオネットの企みに利用され戦いに巻き込まれただけなのに、俺やGGGの皆に護るための力を貸してくれた……

………俺はいやGGGは全力で統夜君を守らなければならぬ!! スラスター出力をさらに上げるけど、刃が迫る、何か手はないのか!!

脳裏に《巨大な剣》のイメージが浮かんだ次の瞬間、二人の間に眩いばかりの光が突然現れた

ー数分前………

『あらよ、とほいさ……ドコ狙ってんだ? 早くしないと、早くしないと《真夜》ちゅわああんが犯されちゃうぞ?』

『………何度も言うが、その名前を軽々しく呼ぶな!!』

また真夜の名前を呼んだ：コイツに何度も切りかかる、そのたびにふざけた動きでかわしていく。いや、そうじゃない。俺の動きを完全に読みながら受けた刃を滑らせ流してる

『なんで剣が当たらないって思ってるだろ？ 答えは簡単だ《エルザ》から定期的にお前に関する事細かな詳細な情報を聞いたからだ。フレイムミサイル、フレイムキャノンの使用頻度の比率から、剣を使う際の癖と神谷活心流の目録も含めてな。だ・か・ら・えい♪♪』

『うわー！』

鏢競り合う力が抜け、思わず前のめりに倒れた時、右腕に衝撃が走る。同時にフレイムソードが手から勢いよく弧を描き下へ落ちていく：みると手首に近い装甲が切られている、各武装アイコンを開くとエラーの文字で赤く染まつてる、あの防壁を数秒で突破したのか!?

『さすがに硬いな、だが自慢の武器も使えないな？ 何故って顔だな。お前のフレイムソードが未知の金属で出来た特別製であるように、俺様のフレイムソードも特別製でな。一兆桁のアルゴリズム解析と防壁突破を可能とするシステムを内蔵してるんだよ。俺様にコレを使わせたのは《三人目》だ。さてコレでチェックメイトだ紛いモノ：解放点活性化装置はぶっ壊されガオガイゴーもやられたみたいだが、オマエだけはゆるさねえ……武器も使えないまま死ぬ紛いモノオオオオオオ!!』

手も足も出ない：最終装甲に使われているオリハルコンで防げたとしてもただではすまない。火器管制システム再起動まで内蔵火器は使えない。刃が俺に迫ろうとした時、眩いばかりの光があふれた

『な、なんだ！ウワツ!?!』

アイツを吹き飛ばした光はやがて収束、一振りの巨大な剣が俺の前に現れた：息をのむような美しい造形、神秘さを溢れ出す圧倒的な存在感の剣に嵌められた宝石が淡く輝いた

まるで俺に《自分を使え》といつてるみたいだ：恐る恐る柄を握ると不思議な、例えるなら太陽の暖かさが身体中を駆け巡った時、頭に声が響いた

―この剣の名は超重弾劾剣―

突然、光に満ちた空間に立つ俺に再び声が響く

―美しき戦女神に託された金属を用いて生み出した神剣……使い手の傷を癒やし秘めた力と正の力をも無限に増幅する……聖なる衣にも使われたアルカナオリハルコンを用いた超重弾劾剣を君に託す……―

声が途絶え、気がつくとき再び元の場所に戻っていた：同時に凄まじいまでの殺気が浴びせられ、目を向けた先にはアイツが憎悪の光を湛えた瞳で睨みつけていた

『その剣を紛いモノが何故持っている！まさか、まさか……アヒヤハハハハハ……そう言うことかジーク、ヒューギ！GGGと手を組みやがったなあああ!!』

ゴウツ！と闇よりも黒い炎を燃え上がらせ、フレイムソードに指を添え纏わせていく……大きく上段に構え振りかぶった、ヤバいと感じよけた。次の瞬間《黒い衝撃波》が今まで俺がいた場所を飲み込んだ：ぽつかりと空が無くなり、黒い大穴が空いている
もし避けなかったら……冷や汗が流れた

『……もう遊びはおしまいだ（ドライアスの野郎には悪いが本気で

やらせて貰う)……死ね不動統夜!!』

再び、黒い炎がフレイムソードに集まり牙突の構えを取るバイオネット総帥……今までのふぎけた態度は消え、濃厚な殺気を込め一気に突こうとした時だ。緑色の竜巻が奴の身体を飲み込んだ

『な、なんだ！身体が動かん!!テメェか！出来損ない!!』

身動きできずもがくヤツの視線を追う、そこには燐、いやガオガイガーの姿。しかもヘルアンドヘブンの時に使用するEMTトルネードをボロボロの腕から火花を散らしながら維持している……

『い、いまだッ！統夜君!!』

必死の表情で叫ぶ燐……無言でうなずき剣《超重弾劾剣》を大きく肩まで水平に構え力を注いだ……次の瞬間身体中に凄まじいまでの力が溢れ出す……あの声がまた響いてくる

――怒りも、憎しみもすべて忘我の彼方へ……君の心に秘めた力を形に剣に込め解き放つのだ――

……心に秘めた力、浮かぶのはすべてを断ち切る刃の姿をイメージし一気に突く、赤よりも明るい炎が剣を中心に渦巻き、ヤツをとらえたEMTトルネードと合わさりさらに締め上げる……怒りも、憎しみも無いまっさらな意識と共に空を駆け、勢いをつけたまま上段袈裟に切り払い抜けた

『ギ、ギアアアアアアアアアアアアアアア!?!』

EMTトルネードと赤い炎に包まれ爆発、叫びが木霊する。あたりに立ち込めた煙が晴れ見えたのは右肩から下半身を切り落とされ血

を溢れ出させ浮かぶヤツの姿。背後にそびえるキリマンジャロの山肌が大きく抉れ、さらに空すら切れ《スキマ》にも似た空間が切り口から見える。な、なんなんだ、この剣は？一歩間違えたら冷や汗を流した……いつの間にかに戻った墮淫の書の存在を身体の内を感じながらヤツを見据えた

『はあ、はあ、やりやがったな不動統夜！出来損ないのバイオダイ……いや獅童燐!!』

コ、コイツ、本当に人間か？あの傷でまだ生きてる……信じられないと思う。自分の頭を撃ち抜いても生きてるのを間近に見た以上、こいつは不死身だということがわかる

それに何か切り札を隠してるみたいだ。もし俺の予想通りならヤツが考えてることは一つしかない

『ふふ、残念だったな不動統夜、お前は一つ忘れてないか？世界中からお前は捕獲もしくは撃墜命令が出てることを？しかもアフリカの解放点活性化に、ガイゴ―強奪犯人だ。ソレをかばうGGGは終わりなんだよ！俺様の勝ちだ』

「お前、馬鹿だろ？俺の容疑はお前のおかげで綺麗さっぱり存在しないって事に気づいてないのか？」

『なんだと？そんな事あるわけがねえだろうが!!!』

「どうせお前のことだ。バイオネットの総帥であるお前がガオガイゴ―を宣伝する為に表舞台に出て世界中にライブで流してたんだろ？だがこの場には燐のガオファーとGGGを助けた俺がいる。つまりは世界中の人間はどう思うかわかるよな？」

『…ま、まさかてめえ!!』

「そうさ。俺の狙いは最初から『お前が表舞台に出て来ること』だ。解放点を開いてアフリカ大陸を壊滅させた責任をGGGになすりつけ、GGG機動IS部隊の要であるガオファーを倒してガオガイゴ―の

宣伝したかったんだろうが、詰めが甘かったな？」

『だ、だが、てめえが俺様と同じ転生者、紛い物なものには代わりはねえ!!』

「…違うな。俺がISが嫌いなのは『俺の大切な母親を殺した』、『それを利用してしようとした一部の人間の思考』が原因だ。俺自身ISを造った東に対してのは俺と東との間で色々あったが終えてるし、残りの人生俺がどうしようかと俺と俺の周りの勝手だ。お前のように『夢を奪いたい』『世界を壊したい』だけでIS嫌いなお前とは根本的に違う」

『ぐ』

「俺がお前の紛い物なら、勝手に言ってる。最初から違う人間、同じ転生者ってのは変わらない。でもな《想い》も《覚悟》も俺はお前とは違う！紛い物なんかじゃやない。不動統夜と言う別の世界で生きている一人の人間だ!!」

俺の言葉に黙り込む…だが様子が変わり身体が小さく震えだし狂ったように笑い出した…気でも狂ったのか？

『……あははは。あはははははははははは……ふう、すつきりした……確かに俺様の詰めが甘かった。今回はGGGに勝ちを譲ってやる。不動統夜、お前に良いモノを見せてやるよ』

ゆっくりと俺に近づき止まると、ゆっくりと頭部装甲に手をかけた。乾いた音と共に露わになった顔を見て息が止まる

『……驚いたか？……驚いたよなあ？……あばよ不動統夜…お前の世界でまた会おう……今度は本気でやり合おうぜ』

再び装甲を戻したヤツはそのままこめかみに銃口を押し当て迷わず引き金を引いた…血しぶきが舞い、鈍い音が響きかき消すように姿が消えた

『統夜君、何があったんだ？』

『い、いや何でもない……とりあえず三段飛行甲板空母に戻るぞ…お

『前も酷いケガしてるみたいだしな』

心配する燐に何でもないといい、三段飛行甲板空母に向かおうとした俺は背後から迫る影に気づかなかった…影の正体は切り払った奴の左半身がフレイムソードを構え音もなく迫り大きく振りかざした

ハイパーセンサーに反応…気がついた時には俺と燐に向け黒い炎が纏われた剣が振るわれようとした時、影が割り込んだ

何かが切り裂かれる音、飛び散る緑色混じりの液体…俺も燐もをあまりの光景に声すらも出せない…何故なら目の前には半壊したガイゴー…胸部装甲が破られ生命維持用ナノケーブルが焼き切れ血塗れになった燐の父親がゆっくりと目を開けた

『だ、大丈夫かな…ふ、二人とも…ケ、ケガは…は、は、は、は、な、な…』

『と、父さん…父さん!!ブrouクンマグナアム!!』

ヤツの左半身めがけブrouクンマグナムが叩き込まれ、碎くと同時に爆散したのも見届けず構わず燐は父親を抱きかかえた…

『父さん!気をしっかりもって…早く、血を止めなきゃ…生命維持ケーブルを予備バイパスに…リンカージェルを』

『……り、燐……もういいんだ……』

『な、なに言ってるんだよ父さん、そんなこといわないですよ、生きるのを諦めないですよ……やつと会えたのに……』

『……燐、泣くな……私は嬉しいんだ……こうやって大きくなった燐を一目見ることが出来た…これ以上にうれしいことは…ない……それに私の命はもう持たないんだ。そうだろ父さん?』

―……………ああ、すまん、ライ……………ワシがもつと早くに気づいておれば……………すまん、ワシが目を離さなければこんな事には―

―いいんだ…父さん…―

三式空中研究所から届いたレイジ博士の痛々しいまでの言葉が燐の心に深く突き刺さる……………もし俺が今の燐と同じ、肉親や仲間と戦う状況になつたらと想うと身震いした

『き、君……………少しいいかな……………燐の力になってくれたのは君だね?』

『あ、ああ……………もうしゃべらない方がいい』

『言わせてくれないかな……………燐を……………助けてくれてありが……………とう……………燐、私は、ワ……………タシ……………は』

それっきり言葉は途絶えた…燐は顔を俯かせながらゆっくりガイゴ―を抱きかかえた…

『……………帰ろう父さん……………』

顔が見えないが、だいたいはわかった……………何なんだよこんな再会で、こんな別れ方つてないだろ…父親を抱きかかえ三段飛行甲板空母に向かう姿は痛々しすぎるまでの悲壮感があふれている

『みんな待つてるから……………父さんを……………』

…三段飛行甲板空母のカタパルトについた瞬間、突然の脱力感に目の前が真っ暗になるのを感じながら意識を失った

第二十話 弾劾の剣！勇者王復活！！

了

GIS-00《G》ガイガーおよびガオガイガー。ボ
ルフオツグ、超竜神、撃龍神紹介。AI技術設定

GIS-00《G》ガイガー

世代：第？世代

全高：3.0メートル

重量：1.5トン

装甲材質：G・A・O装甲

武装：ガイガークロー

動力源：G・GS-ride

最大速度：M2〜4

バリア形式：G・バリア

7年前、バイオネットに恩師獅童ライ、マヤ、燐が死んだと知り怒り
りと憎しみを込めGクリスタル内に自然精製されていた七つのオリ
ジナルGストーンI〜VIを用い製作された対バイオネット殲滅破壊
神《G》の中核を担うISで、すべてのGISシリーズの原型である
基本性能は後に製作されたガオファアをも上回り最大の特徴はオ
リジナルGストーンを用いたG・GS-ride、装甲材質にG・
A・O装甲（後述に詳細を記載）、ギャレオンへの変形機構を有してい
る

燐は初めて装着したのに関わらず最高の同調率をはじき出した：
自身の命を繋ぐオリジナルGストーンVIIとIとの共鳴によるものだ

とGGG科学陣は結論づけている

コアには三十数年前に地球を救った勇者の一人《ガ・オーン》が宿る

GIS-00《G》ギャレオン（ガ・オーン）

世代：第？世代

全高：1. 2メートル

重量：2. 5トン

装甲材質：G・A・O装甲

装備：ギャレオンファンング、ギャレオンクロー

動力形式：G・GS-ride

装甲材質：G・A・O装甲

最大速度：計測不能

ガイガーのもう一つの姿、自立行動形態モード……本来は装着者のコールに呼び出されるまでGクリスタル内に待機、移動、戦闘のみの簡単な機能しか有してなかった

しかしアフリカ大陸での戦いで三十数年前、地球を救い眠りについていた勇者の一人《ガ・オーン》が焔に力を貸すためにギャレオンと融合、様々な運用が可能になった

なおガ・オーンの声は焔、東、シャルの三人しか聞くことが出来ない、ギャレオンⅡガ・オーンは《シドオーリン》と呼んでいる……ガ・

オーン復活は地球の意志《オーリン》と焔に何かしら関係があるかもしれない

戦いが無いときは、夜天教会、IS学園で待機擬態《タレらいおん》(イメージ的にはハルヒちゃんの憂鬱に登場したむげんらいおん)モードで過ごしている。その愛らしさから生徒たちから教師陣からは癒やし、子供たちからマスコットの存在として可愛がられている

…三十数年前は海底とかにいたりした寂しがり屋のガ・オーンにとつて天国かも

G—IS—00《Re》ガオガイガー

新生したガオーマシンとガイガーがファイナルフュージョンする事で完成する新たな勇者王

G—IS—01Fガオファイガー、ガオファイアー運用で得られた実働、戦闘データ移植と操縦者である焔の意見を元に《サンジェルマン・ファウンデーション》整備メイド隊長主任トリア、《GGG》メカニックス副主任《竜崎凍也》と共に完成させた

本機は外見上アフリカでファイナルフュージョン時のガオガイガーとは変わらないが内部メカニクスは最新のものが採用されている。ガオファイガーに採用されていた《フロントムリング》、《ウォールリング》を両腕手首部にリング発生機関を内蔵、ステルスガオーに搭載された強化型ウルテクエンジンは白式の雪片式型の展開装甲を参考に飛行、ヘルアンドヘヴン使用時にのみ上下左右に翼を開くように展開、通常時は装甲内に収まり通常エンジンに切り替わる方式に、ドリルニーはガオファイガーの機構を継承、サンジェルマン伯爵より提供された《重力子技術》採用によりG—IS—01Fガオファイガーのドリルニー(インパクトの瞬間、重力子コーティングされ爆発的な伸縮をする)より大幅な性能アップを獲得した

G—IS—00《Re》GAOGAIGAR

世代：第2・9世代

固定装備

ブロウクンファントム

プロテクトウォール

ドリルニー×2

プラズマホールド

動力形式：G | G S | r i d e + G | R e a c t o r | d r i v e
装甲材質：G A O 装甲 + ハイパーレーザーコーティングG装甲

単一仕様

ヘルアンドヘヴン

強化型ヘルアンドヘヴン

???

封印仕様

《X》

特殊ツール

デイメンジョンプライヤー

デイバイディングドライバー

????????

(GGG日本本部で開発完了)

(GGGフランス主導で開発中)

(建造計画見直し中)

????????????
G—IS—02 《ボルフォッグ》

日本政府内閣調査室、ロシア政府との技術提携で完成した諜報、索敵、要人警護特化型G—IS。

本来は宇宙でのデブリの移動を感知、軌道予測等を主眼におかれていた多機能観測用ISにGSライド、両政府から提供された特殊技術を組み込まれ他のG—ISシリーズよりも早く起動し犬神霧也へ手渡された。装着時にF40ベースのパトカーのシルエツトが浮かび各部へ装着。外観はボルフォッグに限りなく近い

G—IS—02 《ボルフォッグ》

世代：第二世代

全高：2.2メートル

動力：G—Stone—ride

装甲材質：レーザーコーティングスーパーG装甲
装備

シルバームーン×2

ジェットワツパー×2

特殊装備

ホログラフィック・カモフラージュ

内蔵ミラーコーティング

フォッグガス

プロジェクション・ビーム

特殊サポートマシン

G—AM—01：ガンドールベル

G—AM—02：ガングルー

G—IS—02 《ビッグボルフオッグ》

G—IS—02 《ボルフオッグ》の《三位一体》のコールにより特殊サポートマシンG—AM—01ガンドールベル、02ガングルーと合体する事で生まれ、ボルフオッグ時に使用した装備に加え、ガンドールベル、ガングルーのも追加により戦闘能力は大幅に上昇。合体、分離を繰り返す《超分身殺法》、ミラー粒子を高速で回転し撃つ《大回転魔弾》、ミラーコーティングしたシルバームーン、シルバークロスを構え相手を斬る《大回転魔断》など多彩な技を持つ
霧也自身の忍術も応用している

G—IS—02 《ビッグボルフオッグ》

世代：第三世代

全高：3.2メートル

動力：G—Stone—ride

装甲材質：レーザーコーティングスーパーG装甲

装備

シルバームーン

シルバークロス

4000マグナム

ムラサメソード

ジェットワッパ―

超分身殺法

特殊装備

内蔵ミラーコーティング

単一仕様

《大回転魔断》／《大回転魔弾》

ビッグボルフォッグ時のみ仕様可能な二種類の単一仕様《必殺技》。音声入力により発動する攻撃から防御にも使える万能技であるが消費も激しいため使いどころが難しいとされているが霧也自身《忍び》としての技量により問題なく使える

G―IS―03 《炎竜》／《氷竜》

日本政府直属秘密防衛組織《現GGG》が中国科学院航空星際所《ヤン司令》から提供された《惑星開発》ISの基礎設計データにレスキュー装備、分離機能を加え開発した特殊災害救助用G―IS

本機最大の特徴はチェンジング・アーマーシステムおよび独立機動形態（スタンドアローン）。災害状況に併せ《炎竜》もしくは《氷竜》へアーマーチェンジし対応するが通常は《炎竜》（スタンドアローン）とのツーマンセルで行動する

余談だが、アーマーシステムを切り替えると人格が変わるのは超A I 《炎竜》（竜崎ハヤテ）へ委譲している為。

なぜこの仕様になっているかに関しては風と雷（後編）前書きで明らかにされている

G―IS―03 《炎竜》

全高：3メートル

動力：G―Stone―ride

装甲材質：レーザーコーティングスーパーG装甲
装備

メルティングガン

メルティングライフル

チエストウオーマー

パワーラダー／ラダートンファー

特殊装備

ミラーシールド

管制人格：《炎竜》（竜崎ハヤテの魂がコア意識として移植されている。その経緯に関しては本編、風と雷を参照）

G―I S―03 《氷竜》

全高：3メートル

動力：G―Stone―ride

装甲材質：レーザーコーティングスーパーG装甲

装備

フリージングガン

フリージングライフル

チエストスリラー

パワークレーン／クレイントンファー

G―I S―03 S 《超竜神》

竜崎凍矢と超AI《炎竜》（竜崎ハヤテ）がシンパレート値が100%を超え人機一体《シンメトリカルドッキング》することで誕生する
合体G―I S

凍也、炎竜の二つのGSライドの相乗効果により、瞬間的出力ならばG-I S-O I F 《ガオファイガー》に匹敵。中、長距離戦闘支援及び戦闘区域における災害救助活動。そして爆発や電磁波のエネルギーを相殺、二次被害を防ぐワンオフアビリティ《イレイザーヘッド》を使える唯一のG-I S

超竜神時は凍也、炎竜がミックスされた人格となり熱いながらも冷静に行動をとる、一人称は《私》

G-I S-O 3 S 《超竜神》

全高：3.5メートル

世代：第三世代

動力：G-Stone-ride

装甲材質：レーザーコーティングスーパーG装甲

装備

ダブルガン

ダブルライフル／ダブルトンプアー

単一仕様：イレイザーヘッド

イレイザーヘッド×L!!射出!!の音声入力により認証され、爆発および電磁エネルギーの!規模に応じサイズを変更でき、しかも使用回数は無限。だが反動が大きく最大使用回数は50が限界とされている

秘匿機能

?????

G—I S—04 《風龍》／《雷龍》

竜崎疾風専用I S。カテゴリーとしては2. 8世代に相当し先に開発されたG—I S—03 《氷竜》／《炎竜》のデータと宇宙開発公団と中国科学院航空星際所《ヤン司令》、今は亡きテラフオーミング・テクノロクス権威であった妻とともに共同開発された《惑星地球化》用I S（炎竜、氷竜も同じ基礎設計データにレスキュー装備と分離機能を実装し完成されている）設計データをを用いて生み出された

出力は炎竜、氷竜よりも高く風龍は風を、雷龍は雷をあやつりで災害支援から戦闘までこなせ実質上、GGG機動I S部隊の要となっている

G—I S—04 《風龍》

世代：第二・五世代

全高：三メートル

動力：G—Stone—ride

装甲材質：レーザーコーティングスーパージ装甲

装備：シャオダンジイ

フォンダン

特殊装備：

ティガオ1（空を飛ぶ）

ティガオ2（フォン・ダオ・ダン《高圧縮空気弾》龍砲の基礎理論を応用している）

ティガオ3（風のシールドを形成、エアクッションなどで被災者を安全な場所へ誘導する）

ティガオ4（竜巻を生み出し相手にぶつけるまたは瓦礫撤去にも多用する）

G—ISS—04 《雷龍》

世代：第二・五世代

全高：3メートル

動力：G—Stone—ride

装甲材質：レーザーコーティングスーパーG装甲

管制人格：雷龍（竜崎トウヤの魂がISSコアに移植されている）

装備

エレキガン

デンジャンホー 《電磁荷台》

ティガオ1：デンジャンホー下部に発生させたイオノクラフトに使い乗って空を飛ぶ。

ティガオ2：レイ・ドゥーン

ティガオ3：電磁シールド形成、およびエネルギー制御。暴走した機関などの沈静化に使われる

ティガオ4：ヴァン・レイ。指先から超高出力の電撃を放射、崩れ落ちた瓦礫を破砕可能

G—ISS—04 《擊龍神》

風龍、雷龍のシンパレート値が100%を超えた時《シンメトリカ・ドッキング》で誕生する合体G—ISS。その力はGGG機動ISS部隊が誇る《勇者王ガオファイガー》に次ぐ実力を持ちゾンダーISSコア抽出が可能な必殺技《双頭龍—シャントウロン—》を自在に使いこなす

《擊龍神》時の人格は疾風、雷龍をミックスし冷静かつ荒々しさを持ち、一人称は《俺》とよぶ

G—ISS—04S 《擊龍神》

世代：第三世代

全高：3.5メートル

動力：G—Stone—ride

装甲材質：レーザーコーティングスーパーG装甲

装備

攪拌槽《ジャオダンジイ》

電磁荷台《デンジャンホー》

単一仕様：双頭龍—シャントウロン—

—唸れ疾風ウウツ！、轟け雷光オツ！—の掛け声（音声入力）と共に、限界までに高めた風と雷のエネルギー状の龍を放つ技。ゾンダーIS核抽出が可能なほか、超竜神を乗せ移動させたり、一種のバリアとして利用し濡れた土砂を乾かせ彼方へと運ぶことも出来る。それ以上に疾風の持つ力も上乘せされている

秘匿機能

???????

超AI《炎竜》（竜崎ハヤテ）／《雷龍》（竜崎トウヤ）

バイオネットのプロジェクト・Dのツインデュアルカインド施術により生まれた竜崎凍也、疾風の弟…

正確には竜崎凍也、疾風の互いの左脳交換および脳内インパルスに反応しエネルギーを生み出すリンカー Jewel を骨髄に移植する事で誕生した。肉体無き魂を一つの肉体に宿し凍也は発火と凍結能力、疾風は電撃、風を操る異能発現した

しかし、一つの肉体に二つの異能に強い魂は徐々に弊害をもたらし

自我崩壊寸前にまで陥り駆けた時、ID5の手で燐、弾、霧也とともに救出されたさい時間もなかった。二人を救うにはどちらかを超AI：正確にはISCコアへ宿らす方法しかない状況下で、兄を救うためにハヤテ、トウヤは自らの魂をISCコアへ移植されることを望み、無情報サーキットGストーンを組み込んだGISコアへと移植。IS炎竜、雷龍へと生まれ変わった

のちにその事を知った疾風、凍也は涙した：燐、弾、霧也を含めたメンバーはかけがえのない命を持つ人間、仲間、友として接している

疾風、凍也：超竜神、撃龍神へのシンメトリカルドッキングは互いの人格を文字通り一つに統合、二人が持つ異能がフルで発揮できる反面、1日に三回以上のシンメトリカルドッキングは互いの人格に膨大な負荷と異能制御へのストレスが蓄積。意識の喪失か最悪の場合、どちらか片方の人格が完全に消滅するリスクを背負っている

次に新たに開示された関連用語

G・A・O装甲

正式名称：Genesis Arcana Reichalkon Armour

すべてのG―ISシリーズの原形にして最強最悪の破壊神G―IS―00《G（ジェネシック）》に採用されている超絶装甲

???が秘匿していた《アルカナ・オリハルコン》を入手した束の手により、粒子レベルにまで細分化したGストーンを鑄込み精練することで生まれた特殊装甲、特性としてはベースに使われた《アルカナ・オリハルコン》の強度はそのまま、封入された粒子サイズの《Gストーン》、《オリジナルGストーン》と装着者の勇気に強く反応し理論上、宇

宙いや《銀河系》ひとつを軽く破壊出来るだけのエネルギーを生み出す

…その危険性を示唆され《Gクリスタル》にG A O装甲を用いられた《G》、装甲技術を封印。機体データのみを用いデッドコピー機であるG—I S—O I F《ガオフアイガー》、各勇者I Sにもスピンオフされた技術が流用されている

ガオーマシンの《ガオー》は《G A O装甲》から取られている…

アルカナ・オリハルコン（神秘鋼）

《オリハルコン》以上の強度と靱性をもち不思議な輝きを秘めた金属。武器や防具に用いれば傷を癒やし、纏う者の潜在能力（プラスエネルギー、もしくは小宇宙）を増幅。特に邪悪な思念（マイナスエネルギー）を霧散させ浄化する力をもつ。

この金属は《戦女神アテナ》を守護する88人の聖闘士が纏う聖衣に使われているが、243年前の《外なる神々》との戦いにおいて半数が死滅、唯一破壊を免れ現存する聖衣は黄金聖衣《12》、白銀《1》、青銅《2》のみしかし文献によると千年前に《ジーク》とその兄《ヒューギ》なる人物に女神アテナが《アルカナ・オリハルコン精錬技術》を伝えたい

アルカナ・オリハルコンで産み出された武具が破損した場合は破損の具合により、所有者の生き血（三分の一）を注ぎ、星砂、ガマニオン（コレも白き翼と勇氣ある者世界原産の希少鉱石）を繋ぎに用いて修復するのが望ましいとされている

東がどのような経緯で入手出来たのかは物語が進に連れ明らかに

第二十一話 訪れた平穩、友の帰還（前編）

朝靄が立ち込める広大な森林に山肌を赤く染め上げ太陽が顔をみせ、ゆつくりと霧が晴れていく

朝露に濡れた草原に風が吹き、森を抜けたさきには不思議な石造りの巨大な城。しかし城にしては建築学、構造的に有り得ない趣を出す城：世界の富の三分の一を有する大富豪にしてサンジェルマン・フアウンデーションCEO 《サンジェルマン》伯爵の居城

その無数にある一室、分厚い絨毯に一人が寝るには大きすぎるベッドに朝日が伸び、そこに眠る少年に光があたり微かにまぶたが動いた
「……………」

ぼうつとする頭で、辺りを見回した少年の目に映るのはささやかながらも装飾が施された机、椅子、かけられた毛布の心地よさに負けそうになりながらゆつくりと身体を起こした時、勇者を思わせる人物を中心に女神たちが祝福するように舞うタペストリーに思わず息をのんだ。少年はこの絵を知っていた：転生前から知っていた《ある作品》に登場する絵を間近で観たことに感動を覚えていた

「気がついたかね」

…夢中になる少年に穏やかかつ、まるで爽やかな風をも想わせるような静かな声と共に扉が開いた。白いシャツに黒のスーツ姿の青年《サンジェルマン伯爵》が近くまで歩いてきた

「サンジェルマン伯爵……………ここは一体」

「私の居城……といえばわかるかね」

統夜も、絵を見ていたのでその可能性があつたなあと思つたのだが、それ以上に大事な事、アフリカがどうなったのか知らない事を思い出し、サンジェルマン伯爵に声をかけた。

ただし、物凄く焦っていたのもあり、サンジェルマン伯爵から落ちて着くように言われてしまったが

「…丸1日寝てたのか…それに身体も軽い」

「……ディカやGGG医療スタッフの診断によると精神的苦痛、心因的なモノ、慣れない環境で極度のストレスが原因ではないかと言っていたが……おそらくは君が霧也から受けた技《天舞宝輪》が原因も大きな一因だ。結果として君は眠れぬ夜を過ごしてきた」

「……そうだ…」

「……すまなかった不動統夜くん…君が《転移》してきた事は知っていたが、《彼等》が不穏な動きをしていると《シヨウヨウ》から聴き対処に追われていた……君からみたら私の言葉は言い訳に過ぎないが」

「あ、頭を上げてくれ……もう済んだことだ」

スツと目を閉じ頭を下げたサンジェルマン伯爵に慌てる統夜、最近眠れなかった理由は霧也の力で冥界へ飛ばされ、煉獄の炎で焼かれる母《不動あやめ》、《天舞宝輪》による苦痛と不眠。目を閉じる度に炎に焼かれる母の姿が浮かび寝付けず、GGGの理念にあったマシンの設計データ制作で気を紛らわしてきたのもあった。

…しかし、それ以上に気になることがあった。バイオネット総帥との戦いにおいて聞いた《ある単語》。今まで暗躍していたバイオネットが表に出てくると同時に現れた《サンジェルマン伯爵》。バラバラのピースが集まり形をなしていく。すこし迷いながら思い切つて聞いてみることにした

「すこし話は変わりますが……あなたはバイオネット総帥と顔見知りなんですか？」

「……なぜ、そう想うのかね？」

「……バイオネット総帥が勝手にバラした。《ジーク》、《ヒューギ》、そして伯爵の名前《サンジェルマン》は俺の知る知識（グラヴィオン）と一致している……いや少なからず僅かな差違がありますけどね」

「……あの僅かな会話から、答えに辿りついたのは君で《三人目》だ……心身共に優れない状態で《彼》とよくあそこまで戦えたね」

「……確かに今考えるとよくできたな……あいつってそんなに強くないのかバイオネットの総帥？」

「……………」

……地球の守護神ガメラでもある亀山玄武を師にもち、その弟子4人、幻想郷のメンバー。さらにはゴジラ・バトラ・モスラ、統夜より実力が遥かに格上の人？達と自身の能力を制御する特訓をつけて貰えたのもあつた統夜はさらに続けた

「……一応会社の社長になる為の英才教育も受けてましたし、その影響もあると思いますよ。何しろ昔は白騎士事件を起こし、俺の母親を殺した篠ノ之束を恨んで、憎んで、篠ノ之束しか造れないはずのISCコアを製造して、束を捕まえて裏社会に売り飛ばそうとしたほどの極悪人でもありますからね」

「……極悪人？君がかね」

「ええ。俺は隣達GGGのように『正義』を掲げるつもりはありませんよ。社長と研究所の所長の肩書きを持っている人間だと、時に『悪』を行なう必要がありますからね。まあそれでも『外道』にはならないつもりですけど」

これに関しては仕方が無い。経営状況次第では、リストラ、各種経費カットとかで、色々としなければいけない。結果として他人から罵倒され、罵られようが『悪』を行なう必要がある

それを含ませながら話す統夜の言葉を聞き、サンジェルマン伯爵はゆっくりと口を開いた

「……………ならば私は《永遠の咎人》だ。《沙華堂牙監》を千年前に討つ事も叶わず《我が友》と引き換えに生き延びてしまうだけには止まらず世界を混沌へ向かわせてしまった私達兄弟は……………話しがそれてしまったね。少しだけ訂正させて貰う、ヤツは本来の力《十分の一》しか出していない、いや出せないのだ。そして半分正解で半分誤りがある。私は《クライン・サンドマン》、《ジーク・エリクマイヤー》本人でもないし、ヒューギ兄さんは…本当の兄だ」

「半分誤り？一体どういう……………」

「私とヒューギ兄さんは君と同じ《転生者》だ」

第二十一話 訪れた平穏、友の帰還（前編）

同時刻、サンジェルマン城近隣

「……………」

古びた教会の鐘があたりに響く、ふわりと風が草原を流れ無数の石造りのプレートが地面に置かれた場所…墓石が四方に並ぶ中の一つの前に膝をつき祈る白いコートを纏い目を閉じ祈る少年…獅童燐

《MAYA・SHIDOU：Bone21xx〜21xxdead》

色鮮やかな花が手向けられていたのは、燐の母マヤの墓、そして隣には真新しい墓石

《RAI・SHIDOU：Bone20xx〜21xxdead》

先のガオーマシン強奪の際に現れたガイゴーにバイオネット総帥の卑劣な策により命を弄ばれ組み込まれ、アフリカで救い出すも統夜

と燐をバイオネット総帥の半身からの攻撃から庇い命を落とした父
《獅童ライ》の墓

七年前、宇宙開発実験施設モジュール01で死亡し、離れ離れだった二人はようやく同じ場所で眠りにについている墓の前で膝をつき祈る燐の姿はまるで語りかけているように見えた…

(母さん、父さんを連れてきたよ……………)

……身体から陽炎が揺らめく。燐の体温がみるみる上昇していく。拳はギリギリと握りしめた時、インタークーラコートのスリットから冷却ガスが勢いよく噴出、瞬く間に冷やしていく身体。そのインナーの下にはまだ癒えぬ傷を隠すように包帯が巻かれている

(……………めん…母さん…こんな形で……………めん…父さんを助けられなくて……………めん)

本来なら検査の為にGGG本部に戻らなければならなかった。しかしサンジェルマン・ファンデーションから医療メイド隊、GGG医療スタッフがすでに呼ばれており各種検査とメンテナンスをサンジェルマン城で終え真つ直ぐ向かったのはここだった

母マヤの墓の隣にある新しい墓石はサンジェルマン伯爵が手配したモノ…その下には父の遺体が眠る。しかしマヤの墓には遺体はない、代わりに愛用していた品々が納められている

モジュール01が消滅した日、母マヤが光に包まれ跡形もなく消え去った

でも遺品が収められた墓にはマヤは眠っている事に間違いない

(父さん、母さん…俺は戦うよ。命をもてあそび奪い、無関係の人たちを不幸にし続けるバイオネットを必ず倒す…こんな《想い》を《誰》にもさせないために…だれかが負うかもしれない、この痛みをしっかりと胸に刻みつけて…だから見守って父さん、母さん)

ゆつくりと目を開き立ち上がる燐…しかし、その瞳が何かをとらえ

た。二人の墓から少し離れた場所に黒い髪を風になびかせかせ立つ
白いワンピース姿の女の子が笑みを浮かべみている…ココには誰も
いないはずと感じた時、風がふき花びらが舞うと少女の姿が消えてい
た

「い、今のは…センサーには反応が無い…気のせいか…」

軽く頭を下げ、コートを翻し歩き出した燐…その背中、瞳からは
バイオネットと戦う強い意志があふれていた

☆☆☆☆☆☆

「東さん、ここって…」

「……………リツ君の大事な人達……………ライ先生とマヤ先生が眠ってるの
……………」

「燐のお父さんとお母さんの…」

「……………うん……………」

…アフリカの戦いが終わってから、東とシャルは統夜をサンジェル
マン・ファンデーション医療メイド隊、GGG医療スタッフと共に診
察、ファイナルフョーションアウトを終えた燐のアジャスタと細胞抑
制システムを終え休む間もなく訪れてた墓地の入り口で帰りを待っ
ている

「……………東さん、なんで燐ばかりこんなに辛い目に遭わなきゃいけ
ないの、こんなのヒドすぎるよ、あんまりだよ……………報われないよ」

「……………いわれない理不尽な暴力を受ける人の《痛み》を強く感じてし
まうんだ。昔はすごく泣き虫で、痛がりで、コンニャクが嫌いで…」

でも、どんなに辛くても戦うことを止めない……私が止めててつて言っても聞いてくれない……だから四年前に決めたんだ。リツくんがやりたいようにやらせてあげたいって」

「……束さんは強いんだね」

「強くなかないよ……私なんかよりリツくん達が世界で一番強いから……それにシャルちゃんも」

「違うよ。ぼくが強いんじゃない……みんなからもらった勇気が強さをくれたんだ。もちろん束さんからね」

「シャルちゃん……」

「あれ？束さん、それにシャルまでどうしてここに？」

声が聞こえ振り返る二人の前にもと変わらない燐が不思議そうにみてる、束とシャルは互いに顔を見合わせ燐の腕に抱きついた。突然の事に驚く燐

「燐を待ってたんだよ」

「うんうん、私もリツくんを待ってたんだ」

「え、そうなんだ……そういや今日はサンジェルマン伯爵領で1日休みもらえたんだっけ、ひさしぶりにアソコに行こう……ん？あれは……統夜君じゃないかな……おっ……い統夜く……ん」

反対側の道から歩いてきた統夜に声をかける燐、それに気づいたのか統夜は三人のいる場所へ歩いてきた

「もう体は平気なのかい？」

「ああ、まあ、最近あまり寝れてなかったしな」

シャルロット・束に腕を組まれながら聞いてきた燐に、サンジェル

マン伯爵経由で俺がぶっ倒れた事を聞いてたらしい。立ち話しも何だし散策しながら原因が睡眠不足だと言ったら驚いていた

「……睡眠不足?どれだけしか寝てなかったんだ統夜君?」

「……霧也の野郎がした《天舞宝輪》だっけ、伯爵から技名を聞いたんだが、それが原因で、な。まあ俺の場合、研究所で色々仕事している側の人間だし、ISや武器作製とかで2日間ほど寝ないで徹夜した事あるから、ある意味慣れてるからな」

「…………ちよつと待て統夜くん、君は技術開発とかの関係の人なの?」
「うん?…………ああ、そう言えば教えてなかったな。俺が使ってるファイバード、武装とかも全部開発したのは俺だぞ?あともう一つの専用機ISグランバードと合体してグレートファイバードにもなれるし、今は手元がないがさらに合体する事で性能をアップさせる支援型ISの開発もウチの研究所でやってるし…………どうした?急に黙り込んで」

俺がそれを言うと、隣達に関しては完全に沈黙し、東に至っては、呆れながらも頬を引きつかせてる

「この話はココまでにしてだ、東。このデータにあるヤツはGGGでも使えるか?」

そう言って統夜は、東にGGGマークの入った端末を手渡した。因みにこの端末、統夜がGGGに色々あつて保護された際、大河長官が統夜に『自分達の世界の事』を知ってもらう為に提供した端末で、GGマークが入っている以外、この世界では普通にある端末である。東も、統夜から手渡された端末内のデータを見ていった。

「ん?どれどれ……………アフリカでリックくんが使ったアシストマシンの完成系データ、もう一機のアシストマシン!?それに別口だけどレスキュー用バスターマシンの概念設計図!?!…………いつの間にコレを!?!」

アシストマシンの、バスターマシンの全データをGGGの理念に基づく救助用ISのデータに目を通しやや興奮しながら聞いてきた東はデータにある概念設計図と運用形態を空間投影スクリーンを無数に展開しながら聞いてきた。

「ガオファアへの追加装備、戦闘力向上にともなって防衛力も……でもバスターマシンとは合体出来ないんだ。でも他のISには支援ユニットとして装備可能……これならいけるよ！リツくんやみんなの力になれるよ!!短期間でこんなに沢山のバリエーションを作り出すなんて……でもいつ作ったの?」

束がそうやってきたので、俺は少し頭を搔きながら事実を話す事にした。

と言うか、燐もシャルロットも束同様に、『教えて欲しい』と言えるような感じだったのも原因だが……

「……霧世の野郎が原因でバイオネットとの戦いまで寝れなかったんだよ、平均5分くらいしか。食事と身体動かしただけ以外の時間で、俺の知っている『この地球を護った戦士達と共に戦った存在をモチーフ』にして設計していたんだが……お前等、どうしたんだ?」
「ご、5分って、それだけで睡眠大丈夫だったの?」

燐が余りの俺の睡眠時間に啞然としていたが、俺からすれば、科学者や開発関係の人間なら『この程度の睡眠時間はそれなりに当たり前だろ』と言ったら、燐や束に思い切り抗議された。

だがしかし、俺の場合は会社の次期後継者としての教育みたいなのが原因なのもあり、平均10分間くらい眠れば十分だし、冗談混じりで、この世界にも存在していたこ○亀の『72時間働けます』の男性を目指していたって言ったら燐たちは呆れた表情で見ている

「統夜くん、いくら何でも少しは身体を労った方がいい。それで身体を壊したら元も子もないんだが」

「いや、俺からすれば燐には言われたくないぞ?お前、縫い合わせた傷が開いてIDスーツから血が垂れて、すぐに輸血しなければヤバかったってサンジェルマン伯爵から聞いたぞ?俺の睡眠時間よりも、お前の方が危険だと思うが、俺達の事なんてこれ以上言ったら、内容自体が五十歩百歩だから辞めようぜ」

「はは、確かにそうかも……でももう平気……っ!」

軽く胸板を押しした瞬間、みるみるうちに顔色が青くなり、汗が吹き出しはじめる燐を見て心の中で盛大にため息をついた…たった1日で治る人間なんてGSの横島ぐらいだぞって言いたくなる

「…へ、平気、平気…こんなのご飯を食べれば何となるし。ちようどいい機会だから一緒に皆でお昼しないか？」

「別にいいが…」

「なら決まりだ…さあ、思い立ったが吉日だ」

つてどこぞの青髪に左頬に三本傷の美食屋みたいな言葉を言い連れてこられたのは古びた教会、よく見ると古い作りながらどこことなく高貴な空気を感じながら教会の前に広がる広場にでると年の頃、八歳から十二歳ぐらいの子どもたちが遊ぶ姿が目に入った、ふと一人の子供がじいっとこちらを見てパアアツト笑顔になった

「りんお兄ちゃんとたばねお姉ちゃんだあああ！」

元気な声が真つ青な空の下で遊ぶ子供たちの耳に入り一気に駆け寄り束と燐に集まり抱きついた。怪我をしてるのに関わらず燐は一人一人に声をかけ頭を撫でている。束も同じようにして同じ目線に間でかがんで笑顔を向けていた

「りんお兄ちゃん、ぼく逆上がりできるようになったよ」

「束お姉ちゃん、みてみて私この前100点取れたよ」

「かけっこで一番とれたよ…スゴいでしょ」

「カケルはカケルはトリアお姉さんのお手伝いしたんだよ」

「燐にいさま、わたし今度、大検合格したんです……将来は宇宙開発公団に……夢を」

「逆上がりができるようになったんだなくエライぞ。カケルはトリアさんのお手伝いか、すごいなあ……大検合格おめでとうなりアン」

「アキちゃんがんばったね。たくさんハクハグしてあげる♪」

子供たちの声に一人、一人しっかり耳を傾ける二人に呆気にとられてると何かに服が引つ張られた……目を向けると小さな子供が少しおどおどしながらみている

「お、おにいさんと、おねえちゃんはりんお兄ちゃんの……と、と、友達？……あ、あの……あの……」

俺は小さな子の目線に合わせるよう少し身体を屈めた。一瞬だけ猛と面影が重なる。そういえば最近IS学園での出来事や研究所での激務、修行が重なり会っていなかった。帰ったら猛と久々に会おうと心の中で決め

「不動統夜つて言います。燐お兄ちゃんと、東お姉ちゃん、そこにいるシャルロットお姉ちゃんと友達なんだ。君の名前は、何て言うんだい？」

そう言つて、笑みを浮かべ小さな子からの返事を待った……みた感じ、引つ込み思案みたいだな。でもまっすぐみながら

「たける……《はつのたける》だよ……トウヤおにいちゃん」

「……!? たけるちゃんか……いい名前だね」

俺に誉められたのが嬉しかったのか満面の笑みを浮かべる「たけ

る」。その隣でシャルロットも俺と同じように子供達と話をしながらあやしていたのだが

「ねえねえ、しやるろつとおねえちゃんは《りんお兄ちゃん》のカノジヨなの？」

「え？ええと……そ、そうだよ（言っちゃった……でも一緒の部屋にいるし裸見られちゃったし……いいよね）」

「ち、ちょシャル？俺はまだつ……タタタツ！束さん？」

「初耳だね。リツくんと付き合ってるなんて……リツくんはわ・た・しのだから

何気ない子どもの言葉に束とシャルロットの視線がぶつかり火花が見え、背後にゆらゆらと変なオーラが見えた、周りの子供達が怯えていたので、隣に軽く耳打する。二人に近づき小声でなんか言うとおさまった

ちなみに隣に『これ以上子供達を怯えさせると、一部を除いて話をしない』と二人に言うよう頼んだからだ。………と言うかだ、何で俺が恋愛系主人公のフォローに回る不憫キャラにならなきゃいけないんだと思う俺を心配した子供達が慰めてくれたので、少し悲しくなった。

「あれ？ザフィーラさんとマニゴールドさん、カルディアさんは？」

「お父さんとマニおじさんはカル兄さんの林檎農園に収穫に出かけてまだかえってきてないんだ」

（ザフィーラ？……他の人は分からないけど、まさか《りりなの》の守

護獣か？まあ名前が似ているだけだよな？」

「マニゴルド先生、収穫を手伝わないのですか？」

「あのなあザファイーラ、オレは国連本部から帰ってきたばかりなんだぞ？ガキんちよどもと遊ぶのはいいが、なんでカルディアの林檎の収穫手伝わないといけねえんだよ」

「おい、お前たち早く手伝えよ。オレが改良した林檎《ミロ》は人気あるんだからな。さて、あとでクツキー達にもお裾分けしてやるか」

「わかったよ、ったく……ロゼばあさんの護衛はろくな事になんねえ（趣味悪い黒いIS…ゲシュペンスト…ゴキブリかつうの…オカマやろうと同じくらいしつけえから積巳気鬼蒼炎で全部魂ごと燃やしたけどよ）……さっさと収穫しようぜ」

広大な敷地に林檎の木が並ぶ中を歩く三人は光速の動きで身を傷つけず手摘みで収穫していく。この林檎は《ミロ》と呼ばれる品種で甘さもだが、実に歯を当てただけで瑞々しい果汁が溢れる喉を潤わす世界に流通するも余りの希少性に高値がつけられていた

☆☆☆☆☆☆☆☆

「じゃあ、お昼誰か作らないと……よし、ひさしぶりに作るかな。東さん、シャル、統夜くんも少しだけ手伝ってくれるかな？かなりの量を作らないといけないから」

—————

—————

—————

「シャル、そっちの鍋の様子を見てアクとりを、東さんは取り分けた

キャベツを軽く湯にくぐらせて」

「あ、ああ……こんな感じでいいのか？」

「ん……上出来だ……粘りもでてるし最高だね」

清潔感あふれる厨房でロールキャベツの下拵えをする俺がナツメグ、涙を流しながらみじん切りした玉ねぎこねた肉だねを一目見てサムズアップする燐……白のコックコートにチーフネクタイ姿で束やシャルロット、俺に的確に指示をしながら二、三品目を作ってる

……しかも洋食なのに関わらず中華包丁で器用に刻み、肉を叩く背中
に《カ〜カカカカカカ！》と笑う悪魔の料理人が見えた

厨房を軽く見回すと、高級レストランに匹敵する調理機材が並びピカピカに磨かれている……こうして料理を作るのはひさしぶりだ……つか何故こうしているかというと、普段子ども達に食事を作るザフィーラ、カルディア、マニゴルドって奴が居ないからだ……

でも、こうやって子ども達の為に料理を作るのは楽しいと感じてるんだが……

「アクはとれた。あとはコレを入れて……シャルの馴染みに深い料理かも」

「え？」

卵白をふんわりと泡立てたそれを流し込み手早く取る……琥珀色の澄み切ったスープが顔を覗かせ湯気から濃厚で食欲をそそる香りに何故かゴクリと喉が鳴る。これはコンソメスープだったのがわかる……

「こ、これって」

「味見してみる？本場の味には負けるかもしれないかも」

「うん……………っ?……………ひつく」

「あ?ごめん!やっぱりくちにあわなかったかな?」

「……………ち、ちがうよ……………懐かしくて……………美味しいよ。」

燐、この味付けは誰から教わったの?」

「母さんから教わったんだ……………前にも言ったけど母さんは日仏クォーターでフランスに長くすんでた時、親友から教わったんだって……………さて、シャルからのお墨付きももらったし次はロールキャベツだ」

「う、うん!」

パアツと笑顔を見せるシャルロットに燐が笑顔で答える燐……………っうか二人とも後ろから抱きつくような形でいる密着しすぎだ!みる俺の後ろでゴゴゴゴ!って音を鳴らしながら羨ましそうに嫉妬のオーラを溢れさせて包丁を持つて笑顔な束が光がない瞳で見てるの気づけよ……………あ?束が動くみたいだ

「……………リックくん。料理に集中しようか?じゃないとO☆H☆A☆N☆A☆S☆H☆Iだよ♪」

「わ、わかたつたから包丁をおいて束さん?さ、さあ残りも頑張つて作ろう束さん!シャル、統夜くん」

……………将来尻に敷かれそう未来が見えた……………それからは目にも止まらない速さで調理を進めていく……………俺がこねた肉だねを束が煮たキャベツに巻き戻しておいたカンピョウで巻き結ぶ、それを先ほどコンソメスープを作る際に使ったブイヨンにトマトを濾したモノをはった鍋へ入れ弱火でかけ蓋を落とした

「ふう、これでよし…統夜くん、次はサラダに合うドレッシングを頼めるかな、材料は目の前の棚の子だな二番目にあるから」

「あ、ああ…これでいいのか？」

棚からオリブオイル、バルサミコ酢、黒胡椒を手にする…ラベルにはサンジェルマン伯爵の家紋が入ってる。色々な分野に手を広げてるのを感じながら適量をボウルへ入れ混ぜていく、その隣で大根を手にした燐が陶器製のおろしを使い大根おろしを作ると、こちらの様子を見計らいレタスとトマト、スプラウトを木皿へもり最後にクルトンをパラパラとふる

「よし、できた…：東さん、シャル、コンソメスープとサラダをみんなのところにもっていつてくれるかな？ロールキャベツとパンは少しでできるからさ」

「はいはい♪東さんにお任せあれ」

「ま、まっつてよ東さん!?!そんなに急いだらこぼれるから!」

元気よく走る東、シャルロットを見送る俺の背後で鈍い音が聞こえる。まさかと思い振り返ると膝をつきながら立とうとする燐…よく見るとコックコートに血が滲んでいる

「はは、すこし張り切りすぎたかな…」

「あんまり無茶するなよ燐…：ほらたてるな？」

手を貸し立たせながら火加減を見る燐を見ながら、サンジェルマン伯爵との会話を思い出していた…

「転生者？サンジェルマン伯爵が…：ヒューギ・ゼラバイアも？」

「そうだ。前世で事故死した私とヒューギ兄さん、巻き添えになった沙華堂は神に頼まれIS世界に転生した。だが時間にズレが起きてしまい今からおよそ千年前…中世ヨーロッパ、フランス王朝初期に来てしまった…」

『大丈夫か?』

『兄さんこそ…あと君も大丈夫?』

『大丈夫だ。もしかして神様が言っていた他の転生者って君たちかな?』

『そうだ。オレの名前はヒューギ、ヒューギ・ゼラバイア、隣にいるのがジーク・エリクマイヤーだ』

『よろしく、僕はジーク・エリクマイヤーだ。君の名前は?』

『沙華堂牙隘だ…同じIS世界に転生したんだ、なかよくやろうぜ。ジーク、ヒューギ(……クヒツ!何がよろしくだ…クソ原作がはじまるまで千年、俺様の計画が狂っちゃった。まあ良いか、コイツら屑共を利用して俺様が楽しく過ごせる世界に作り替えてやる……キヒツ、キヒヒヒヒ)』

「思えば、あの日の出会いは永い戦いの始まりだった…私たちがヤツの本心に気づけなかったのも一因とも言える。その頃から世界中に戦争の機運が高まりを見せた時…沙華堂牙隘は笑ってその様をみていた。彼は危険だと悟り友《ヘリオス・オリンパス》いや《ギリアム・イエーガ》と共に、私は転生特典で貰ったISゴッドΣグラヴィオン、兄はISグレート・バーンガンで奴に戦いを挑んだ…だが敗北しISを奪われてしまい死を覚悟した時、友が命がけで私達二人を

助けヤツと相打ちになったー

『へリオス!』

『にげろ! ジーク、ヒューギ、コイツは私が相手をする!!』

『じゃまをするなよへリオスくお前がどんなに足掻いても俺様には勝てないんだよ。ゲシユペンスト如きで俺様の《冥王》にはなあ? キヒツキヒヒヒ!!』

『……そうかな、わすれたか私がどんな存在かを?』

『貴様! まさか!!』

『へリオス! やめろ! それを使えば君は……』

『……ジーク、ヒューギ……後は頼む……システムXN起動……コード・コキユートス!!』

『じ、次元連結ジョイントが? エネルギが反転? ぎ、ぎやああああああああ!!』

白き冥王を羽交い締めにしたゲシユペンストから不可視の光があふれ空間がゆがみはじめ弾け飛ぶように《この世》から消えるのをただ見ているしか出来なかった

I……我が友へリオス・オリンパスの命と引き替えに救われた私達は奴がいつの日か復活する事を予見していた……それに対しての備えをするべく私はサンジェルマン、兄はガツシユと名前を変え奴が残した戦争の火種を消し、破滅的な事態に陥るのを瀬戸際で防ぎながらサンジェルマン商會を設立した……そして知ってしまったのだ。このI

S世界は原作とは違い多種多様な勢力が存在し破滅から戦う存在《女神アテナの聖闘士》、地球の意志《オーリン》、《アトランティス》……ヘリオスの言葉が真実味をましてきたのだー

『……ジーク、ヒューギ、もし君たちが言っていた事実が本当ならば、この世界は《実験室のフラスコ》だ。本来存在し得ない転生者、私がいることで有り得ない結果が起こりうる可能性が大だ

』

実験室のフラスコ、ヘリオス・オリンパス……その言葉は間違いなくOGのギリアムと同じだ。まさかこの世界に来ていたのか!?

ー永い時をかけ私はサンジェルマン商会の規模を世界中に拡大し、それに伴い各国王族ならびに為政者とのパイプをつなぎ名前をサンジェルマン・ファウンデーションへ変えた。そして八十年前、恐れていた時が来てしまった……奴が遙か彼方の宇宙《ボイド》から帰還したのだ。同時に余りの危険思想を持つてるがゆえに学界から追放された科学者達、最も危険な科学者《リュウノスケ・F・ゾンダー》をスカウトしバイオネットを創設。某国機業を取り込んだ……GGGアーカイブを閲覧した君なら、あとの事は知っているはずだー

……霧也の技をうけてから不眠症一歩手前になりながら、アシストマシーン設計とGGGの理念に添う形での仕様変更をする傍ら、GGGアーカイブを閲覧しバイオネットの成り立ちから世界中の紛争地域へな武器や開発した試作品供与、政府要人の誘拐拉致と洗脳……数えればきりが無い程の悪事の数々は怒りを覚える。もしこいつらが俺の世界に来たらと考えるとゾツとしていた……しかし疑問が俺の中にあつた

今まで公の場に姿を見せなかったサンジェルマン伯爵が表に出てきたのがだ。アフリカでの解放点活性化時にGGG本部に整備メ

イド隊と共に現れ、中国に保管されていた旧ガオーマシンをありとあらゆる手段を使い燐に届けた……バラバラのピースが合わさり一つの結論へと導いた

ーサンジェルマン伯爵、一つ聞いていいですか？今までアナタは表舞台には極力でないようにしていた。なのに関わらずアフリカでの解放点活性化の際に本部に現れ大陸間弾道軌道に到達しアフリカに向かう装備提供を、GGG中国に掛け合って短時間で旧ガオーマシンを手配した……ー

ーなにが言いたいのかね？ー

ー伯爵が表舞台に出た理由……燐の為ですか？ー

これはあくまでも仮定の域を出ない。しかし伯爵はGGG：表舞台に姿を初めて見せ俺の言葉に微かに動揺する伯爵をみて確信した……しかし燐とどんな関係かがと気になった時、伯爵がゆっくりと口を開いた

ー……君の言うとおりだ……ー

わずかな沈黙のあと、目を閉じ苦しげに漏らした伯爵は静かに窓辺にたちながらある方向へ視線を向けた。まるでつられるよう見た先には、伯爵と年老いた白髪混じりの赤髪の老人、その手には生まれたばかりの黒髪の赤子を抱いている姿が収められた写真立て

赤髪の老人は俺がよく知る人物と似てる……いや間違いない。老人は伯爵の兄ヒューギ・ゼラバイア。おかしい、伯爵と同じG因子を永久新陳代謝抑制に回していたはずなのに関わらず年を取っている

それ以上に腕に抱かれている赤子は……って考えてた俺の疑問に答えるよう伯爵は静かに窓を開けはなった

ーヒューギ兄さんが《ガツシュ・ノワール》と名前を変えてからサ

ンジェルマン・ファウンデーシヨンの新たな支社を作るために100年前訪れたフランスで、ある日本人女性と恋に落ち結ばれた…その時G因子の永久新陳代謝抑制を解いた。同じ時を生きる為に…娘が生まれ、そして孫も生まれたが娘は産後の経過が悪く数日後に命を落とし夫も後を追うようこの世を去った。それから一年過ぎた頃、今から40年前、兄さんが私の所へ尋ねてきたー

『ジーク、俺はもう長くない…頼みがある。孫を、マヤの事を見守ってはくれないか？…奴の動きが気にかかるのはわかる…あの子が本当に困った時に力になれるのはお前しかない…頼む』

『頭をあげてくれ兄さん…私も同じ気持ちだ…必ずマヤを守ると約束するよ…』

『すまない、すべてをお前に押しつける形ですまない…ジーク』

ーそれから二年後、ヒューギ兄さんは天へ還った…私は兄との約束通りマヤを見守っていた…兄さん譲りの頭脳、そして若くして生体医学の頂点を極めた、ゆくゆくは世界十大頭脳へ選ばれるのではないかと。さらに学を修めるために日本へ留学したマヤは運命の出会いを果たした。世界十大頭脳の一人息子《獅童ライ》と。年が離れていたが互いの人柄に惹かれ二人は結ばれ元気な男の子が産まれたー

ー……隣…と言うわけかー

ー…だが、私は兄との約束を守りきれなかった、マヤを死なせたばかりか夫のライ、マヤの子である隣に生き地獄を……今まで私達兄弟が奴の影を恐れ放置してきたしわよせが…隣に…ー

☆☆☆☆☆☆☆☆

「統夜くん？急に黙り込んでどうかしたのかい？」

「い、いや何でもない。それよりもう出来たんだろ？はやく運ばないと子供達がお腹をすかせて待ちわびてるぞ」

「そうだった。じゃあいこうか。今日のは力作だよ」

血で汚れたコックコートを脱ぎ、いつものふくに着替えていた燐は手早くカーゴに出来上がったロールキャベツを載せ先を歩いていく姿

サンジェルマン伯爵の兄ヒューギ・ゼラバイアの曾孫だったのには驚いた。だが伯爵からはこの事は胸のうちに隠すようお願いされた、まあいきなり親戚だと言われたら燐が混乱するのが目に見える。本人から秘密にするように頼まれたのもある…それにもう一つ驚くべき事もきいていたからだ

燐はサンジェルマン伯爵の兄ヒューギ・ゼラバイアのG因子を隔世遺伝という形で受け継いでいる。それも二人のをも上回るほどに強力で、今回の検査でさらに強くなってる事もわかった

……もし、この世界が俺が知るギリアム・イエーガ…ヘリオス・オリンパスが言ったように《実験室のフラスコ》…様々なファクターが混在するこの世界に訪れる実験結果は……いや、今は早急に結論をだすわけにはいかない

(……バイオネットの総帥、牙檻の本当の専用機が、伯爵との話し合いで俺の知っているのと違うが《ゼオライマー》な上に、この世界に来たギリアムが所持していた空間と次元転移《システムXN》が敵の手にある上に、システムを完全に性能を引き出す為の《道具》としてギリアムさんは《生きてるって扱い》だろうが、状況的に見てもバイオネットの方が分が良すぎる……)

そう、幾らGGGのバックにサンジェルマン伯爵が就いているとしても、バイオネットの方がどう考えても分が良すぎるのだ。

俺の予想だがバイオネットのパトロンの中には、国連に顔の利く存

在がいる。

それも、GGGの運営そのものを『停止』させる事が出来るほどの存在がいる事は間違いない。

もしもバイオネットが本当の意味でGGGを壊滅させる気なら、今のように真綿で首をめるような真似はせず、一気に刈り取る可能性が高いが、それをしないのは恐らく……

(サンジェルマン伯爵に対しての復讐と、自身の完全回復までの時間稼ぎ、同時に《新たな薬品の投与》か……)

俺はこの《実験室のフラスコ》とも言える世界に、GGGや俺も『この世界に偶然来てしまった』のではなく、さまざまな意思が原因で、俺と言う存在を『この世界に来る事にされた』という事であったならば、俺がこの世界でになってしまった可能性が高いには

(GGGと一緒に牙檻を倒す事。その為の存在として、この世界に呼ばれた可能性か……)

サンジェルマン伯爵には、GGGの上層部(束を除くが)にのみ、俺がこの世界に来る羽目になった理由を語ったが、その可能性が高いとも思いつつも、勇者の背を見ながら、俺は前を見据える事にしておいた。

「統夜くん？やっぱり調子が悪いのかい？」

「い、いや、少し考え事をしてただけだ。冷めないうちに運ぼうぜ」

「ああ、わかってるさ」

た
……明るい笑顔を向け頷いた燐のあとをおうように歩みをすすめた

第二十一話 訪れた平穏、友の帰還(前編)

了

第二十一話（裏） 嘲うモノ達

某所：薄暗い闇が広がる場に無数の魔方陣にも似た円環が輝き、中心から現れたのは一つの影

漆黒のマントに軍服にも似た豪華なスーツ、青みがかった髪、そして顔に機械的なアイマスクを付けた青年。ゆつくりと歩き置かれていた玉座へと身を預けるように座ると、赤、紫、緑、黄色の輝く魔方陣四つ展開した

「ハアハアハアハアハア、おおお牙儘様……御帰還なされましたか」

「マイロード牙儘、馳せ参りました！で、あゝゝゝる！ヤアアア!!」

「ふへヒヤハハゝ、ギムレットここにおりまゝす」

「ウエスト、ギムレット少し静かにしろ……牙儘様の眼前だ」

ハアハア息しながら肥満体の肩を揺らし膝をつくに白衣姿の中年男性《フリール・ルコック》、エレキギターをかき鳴らしクワツと目を見開くハイテンションな口調で話す《ドクター・ウエスト》、ピエロマスクを付け笑い声を上げるギムレット、白衣にスーツ姿の《リユウノスケ・ゾンダー》博士を前にゆつくりと足を組むは、全世界的規模の闇の科学を信奉しあり倫理観を無視、第三国に様々な兵器を売りつけ戦争帮助を行い莫大な利益を上げるバイオネット総帥、沙華堂牙儘は静かに顔を上げみまわした

第二十一話（裏） 嘲う者達

「……………フリール、あのババアがなぜ生きている？迅雷を12機送

り込むよう命じたはずだが？ どういうわけだ？ 散々根回しして抱き混んだ議員に払った金がムダになったんだがな？ ギムレット、オマエには以前に我がバイオネットの障害となる忌々しい《屑転生者》ジークとヒューギの搜索を任せていたな。死んだと報告したよな？」

「ふひ？ 総帥、わ、私は確かに二人の死亡を確認を……………」

「お、おかしいですね。確かにフランスで死亡したと報告を…」

「…………じゃあロゼのババアもジークもなんで生きてんだよおお!! おまえらは何をしてんだゴラアアア!!」

激高し声を震わせ、手のひらを開いたのをみて恐れの色をみせた。光の螺旋が浮かんだ瞬間にフリール・ルコック、ギムレットの身体がふわりと浮かんだ瞬間、ぞうきんを絞り上げるようにねじ曲げられた

「ひ、びきがゆがあ?! や、やめ牙儘ざまあああ?!」

「ふひやあああああ?! ひひやあかがあ?!」

骨が砕け叫び声が木霊し、肉塊同然となった二人から夥しい量の血がしたり落ち床に水だまりのよう広がっていく光景に、リュウノスケ・ゾンダー、ドクターウエストは肝を冷やした

牙儘が二人の身体をねじ曲げ絞り上げる技…対象の周囲空間を文字通り圧搾、死に至らしめる《スパイラル・ブラスト》。ある世界にいた転生者が持っていた特典《強植装甲ガイバーに登場する超獣神将アルカンフェルの力》を奪い取ったモノを行使されれば構成員、上級幹部

であり《…………》化した四人でも、ひとたまり無いのだから

十分過ぎようとした時、虫の居所が悪かった牙儘はようやく気を落ちついたので、ゆつくりと手を閉じる。糸が切れたかのように床へ肉塊同然と化した二人が嫌な水音と共に落ちた

「……フリール、再生次第フランスへ迎え、ゾアティックウエポンの量産体制を整えるようアルベールに指示しろ……いいな」

「あ、あ、わ、わがりまじだ……が、牙儘さまああ……ふひ……ハア、ハア……ウツ!?!」

「ギムレット、貴様は《CROSS GATE―Helios―》を使い、この世界にむかえ。面白い兵器を使ってるヤツ、雨生竜之介を《認識》したからな。クヒヒ、ゾンダーメタルも200程ばらまいとけ……いいな?」

「り、りよ、りよかいデスウ……キヒヒヤハヒバビロン……アヒヤハハフヒハア」

肉塊から血を吹き出しながら再生し答える二人?から目を離し、頭を下げ膝をつくりユウノスケ博士、ドクターウエストへ顔を向け肘をついた

「(ち、喜ばせたただけか。)ウエスト、迅雷…ゲシユペンストシリーズのマテリアル生成は何処まで進んでいる?」

「マイロード牙儘さま! 現在、マテリアルは成長次第、順次に摘出搭載可能なスケジュールであくりまくす! 我がバイオネットが誇る遺伝子操作技術で人為的に《サヴァン症候群児》を生み出し、ゾンダーメタルと有機的結合した制御ユニットとして使うとは、さすがは牙儘さまでくす!!」

歡喜するウエストに口角をつり上げる牙儘。迅雷シリーズ、先のが

オーマシン強奪事件で使用されたガイゴアの制御ユニットとして組み込まれた獅童燐の父、獅童ライのデータを基に、人為的に生み出された《天才症候群の幼生体《E》シリーズ（13前後まで成長させた）》から脳髓から末端神経まで摘出、ゾンダーメタルを合わせ組み込んだ狂気の生体融合IS

《CROSS GATE―Helios―》を使い、戯れに眺めていた世界でフェストウムと戦う機動兵器《ファフナー》、そのパイロット達の出自を知り有効に使えると判断、数あるバイオネット・プロジェクト《G》で確立した《Eシリーズ》の研究成果を下地に生まれた。すでにGTへ数体が試供品として納めらる予定のモノのデータに狂気の眼差しを向ける牙檻……しかしある一覽に目を止めた

天才症候児、ゾンダーメタル適正の低い数人の幼生体と以前にモジュール01で奪い取ったISコアを用いた特殊戦術機動／広域殲滅／強襲型ISシリーズ《アストラナガン、雀武王、デイス・アストラナガン、SRX、エグゼクスバイン、龍虎王、デモンバイン》への高い適合係数に興をひかれるも、最期に表示された幼生体の詳細に目を落とし、ゆつくりとドクターウエストへ視線を向けた

「ウエスト……コレは何だ？」

「牙檻様、何かとは……こ、コレは……」

「……………なぜコイツらを作った？」

「牙檻様、コレはクエルボ博士の管轄でして……」

「クエルボ・セロ……………たしか、《元》世界十大頭脳の一人でプロジェクト・O主任、そしてオマエの配下だったな？」

「い、イエスであります」

静かな口調から滲み出る威圧感に膝をつきながら頭を下げるドクターウエストの耳に信じられない言葉がかけられた

「…………クエルボ・ゼロ、ヤツをプロジェクト・Oから外し、適合体を共々処分しろ」

「が、伽藍さま？ドクタークエルボは、Eシリーズの生み…」

「…………適合体に使われたのは、バイオネットに逆らう失敗作共のDN Aだ。ふざけたことに容姿まで同じだと？あ？冗談にも程があるのかわからないか？Eシリーズの生みの親だとしても度をこえてんのがわかんねえか!?なあ、ドクターウエスト。ヤツをスカウトしてきた貴様には責任をとる義務が生まれた。すぐに処分しろ、出来損ない共々な？」

「イ、イエスであります!!」

肘をつき鋭い眼差しから感じる威圧感にうなずき、ウエストが姿を周りに溶けるように消え、その場には膝をつくりユウノスケ・ゾンダーのみとなった

「…リュウノスケ・ゾンダー、ゾンダーISCコア、してZXシリーズの状況はどうなってる？」

「ゾンダーISCコアは順調に生産は進んでいる。各世界へ売り込める量まであと僅かだ。ただZXシリーズは我々を含めて五しか出来上がってないのが現状だな」

「心臓、肝臓、腸、目、腕だけか…………スケジュールが遅れている…ア

フリカの解放点を利用して製造しようとした計画を、忌々しいGGGと出来損ないの失敗作共、不動統夜が邪魔してくれたせいか……：やってくれたなまがい物《不動統夜》が来なければ」

「ZXシリーズは31全て完成にこぎつけ、GGGの戦力を叩き潰し、世界に我々バイオネットの力を示す作戦も失敗には終わらなかつた……」

「ああ、そうだな……だが、剣を交えてわかつた。不動統夜は見返りと、益が無ければ動かない、正義という下らない感情で動く事をしない自己中心的なヤツだと言う確証を得た。エルザからの調査からも敵も多く作っているようだからな……：わざわざ敵を作るような発言と対応しか出来ない器の小ささが手に取るようにわかつた……：よく社長など出来るモノだ。旋風寺舞人よりも劣るな」

「牙儘様、つぎはどのようにしますか？」

「次の作戦はフリール、ギムレット、ウエストが戻りしだい伝える。オマエは引き続きZXシリーズの完成を急がせろ……：いいな？」

「もちろん、全てはバイオネットのために」

かしづき白衣を翻し消え去るリュウノスケ・ゾンダー博士。一人残された牙儘は仮面の奥の瞳を細め、誰もいないはずの場所へと顔を向けた

「……：いい加減出てきたらどうだ？退屈だろう？」

軽く殺気を込めた声に答えるようにパチパチと、両手を叩きながらスーツに身を包んだ、街ゆく人の十人が十人とも振り返るほどの美貌をもつ女性が柔らかな笑みを向け歩いてきた

普通の人間ならば死ぬ程の牙儘が放つ殺気を、気にしたそぶりすら見せない……異質な女が玉座の前で止まった

「ああ、すまない。私の知り合いがこの世界に《来訪》されたのでね。引き取ろうと思ってきたのだよ」

「……オマエ、ここに来るのは簡単じゃねえはずだが？」

「私は少々特殊でね。これほどまでに《心地が良い場所》なら大歓迎だ。それと、私の名前は《ドライアス》だ。以後、君とは仲良くなりたいと思っっているよ、釈迦堂牙儘」

ドライアスと名乗った女の影、いや背後に不気味な化物のような幻影を見て、《今の自分》では勝てないと判断し玉座の前に立つ女《ドライアス》を見据えた

「あの出来損ないの世界の出身って訳だな。わざわざ助けにでも来たのかドライアス？」

「……ふふ、正確にはあの子を元の世界に戻す為の手助けと言ったところだ。彼がいなければ、私は面白みが無いからね」

フツと笑っているドライアスの言葉の意味が分からない。彼にとつてまがい物《不動統夜》にこそここまで肩入れするのかが分からなかった

しかし、ドライアスは牙儘とは違う方法で、世界に《絶望》を撒き散らすために行動を起こし、そしてここに現れたのだと気づいた

僅に逡巡する牙儘、思考を分割しながらドライアスの提案も面白そうだと思いつながら、ある答えにたどり着いた

(ドライアス……たしかファイバードが倒した宇宙皇帝ドライアスか……居心地がいい空間、人間の姿をしている事からマイナスエネルギーを蓄えるためにこの姿をとっているのかもな……なあ聞こえてるよな、火鳥勇太郎？オマエにとつて懐かしい顔がここに居るぞ？)

(ド、ドライアス！たしかにあのとき、倒したはずだ)

(生憎、生きていたようだな？まあ、お前の倒したドライアスとは同一かはわからないがな……どうだ？今のお前をみたらどう思うだろうな？ファイバードさんよ？カイザーズ、バロン、ガーディオンを冥界に幽閉されてオレのI Sになった姿をな？)

(く、この悪党があああ)

太陽に翼のエンブレムの待機形態から苦悶に満ちた声を心地よく耳にしながら思考を再統一、笑みをうかべるドライアスを見る

(……飛んで火に入る夏の虫と言いたいが、今は剥奪は無理か……逆にオレが喰われてしまうのが目に見えてんな……)

力をヘリオスに封印され十分の一しか出せない牙儘では逆に返り討ちに遭いかねないとわかる。しかし本来の力を取り戻すための力ギ《冥王》は出来上がるまでは時がかかる。剥奪を仕掛ければ逆に喰われてしまう事を本能的に察した

「……ドライアス、あのまがい物が居なければ面白味が無いって言ったな？ならば、オレも色を加えるのを手助けしてやろうか？」

(ドライアス、お前の力はオレ様が本来の力が取り戻すまで……それまでは利用してやる、その時がきたら)

「それはありがたい。早速君の色も貰おう」

即決で、しかも一切迷う素振りすら見せずに、ドライアスは牙儘の言った案件を採用した事に、啞然となった

半世紀以上前、牙儘生み出した《バイオネット》が保有する技術は、この世界にとって完全な異端技術ばかりだ。

転生する前から持っていた知識もだが、転生後に得た特典に加え、1000年前に二人の転生者、ヘリオス・オリンパスの手で宇宙を観測できる地点《ポイド》に飛ばされ、長い年月を掛け地球に帰るまでに無数の惑星、善悪問わず《宇宙警察機構》を含めた組織を滅ぼし、技術や資源を全て強奪し半世紀前によくやく帰ってきた、以降も次元へ

侵攻しなれば実験場的に新兵器開発運用し、滅ぼしては、存在する超技術や資源を搾取してきた。

その牙儘が、目の前で笑みを向けり、ドライアスに対し、別の意味で恐怖の念を抱くのも仕方ないのだろう。ソレを察したのか目を細めた

「ふむ。私が怖いのかね？それもいい感情だ。では私という存在を君に教えよう。そのほうが君も楽だろう」

そして悟った。眼前にドライアスはファイバードの敵《宇宙皇帝ドライアス》ではなく、別の次元に存在する《大暗黒邪神ドライアス》闇の力を愛する邪神だと言うことに。しかし、その世界の勇者達との戦いで敗れ《出来損ない》の世界、それも500年近く昔に来てしまったと

そこから、こいつが仕切っている組織である《GT》という教主を務める一方、完全復活、前以上の存在になるために暗躍している

語られた事実に牙儘、火鳥も唾然としながら、ドライアスの背に浮かんだ異形の姿を幻視した理由と、何故不動統夜へ肩入れするのか、牙儘の提案に迷わず即答したかも分かってしまった

だからこそなのだろう

これほどまでに面白く、自分以上に狂っているとも言える存在と対話し、出来損ないだと思っていた世界にいる事実は、歓喜するしかなかった。

「クク・・・アヒヤハハハハハハハハ、アハハハハハハ」

口角をつり上げ狂気を全身から吹き出させながら玉座から立ち、牙儘は大きな声を出して笑った。半世紀前、いや、1000年前、この世界で転生してから、初めてかも知れない《歓喜》とも言える産声
その狂気がドライアスも心地よいのか、笑みを浮かべている

(沙華堂牙儘、私を利用する腹積もりかも知れないが、そう上手くいくかな：此方の思惑に踊らされている事に気づいてないとはね。いざれ私が完全復活したら…)

(お前を喰ってやる／力を奪ってやる)

思惑を笑顔の下に隠し、笑みを向ける二つの巨悪、バイオネット総帥沙華堂牙儘、GT教主にして邪神ドライアスは手を結んだ：互いの真意を隠したまま、牙儘とドライアスという二つの悪の会合は終わった。

牙儘との話が終った後、ドライアスはこのバイオネットのいる世界を見ていた。自らを見て振り向く男女の視線や、それに伴う負の感情の味を楽しみながら・・・

「(この世界は牙儘(かれ))と彼の組織である《バイオネット》のおかげか、とても気持ちがいい。だがしかし、私の好みでは無い者と手を組むというのも、いい加減に飽きたものだな)」

ドライアスにとって、バイオネットの総帥たる沙華堂牙儘という存在は、自分という存在を完全復活させるにはいい存在であるのだが、それ以外では手を組みたいとも思わない相手だ。例え完全復活のためとはいえど、面倒な仮面を被っての役は面倒だと思っていた。

ドライアスにとって、人間が気にしている自身や他人の美醜や、遺伝子の優劣、男女の差、体力・知力・運動能力といった面は何の意味

も無いことを知っているのだ。

ドライアス自身、今自分がいるあの世界で500年も生き、元の世界でも数千年単位で生き続けてきた。

だからこそなのだ。

ドライアスは今いる世界で何度も《生》と《死》を体験し、そのなかで《人間の持っている可能性》を面白く感じていた。

何故《大暗黒邪神》とも言われた自分が、自分以外の神々から力を授かって、この世で最も弱く、儂く、時には自分以上に下劣な存在《人間》に負けてしまったのかを知りたかった。

500年といえる長き時間で、さまざまな人間達に出会ったドライアスは、何故自分が負けてしまったかという点に関しては分かっていた。

それは神々が力を与えたからでも、自分という存在が弱かったからでも無い

人間は《諦めなかった》だけなのだ。決して最後の最後まで、諦めなかったのだ。

たったそれだけだった。《たった》という言葉にすれば陳腐かもしれないが、人間という存在は未来を、明日というものを自らの手に勝ち取ってきたのだ。

だからこそ、ドライアスは別の意味で人間を観察する事を楽しむ過程で《転生者》なる他の世界に存在する神々の玩具にも出会った

そして、ドライアスが今注目しているのが、牙儘がまがい物と言う、《不動統夜》なのだ。

(牙儘(あれ)は彼を経営者としても無能扱いしていたが、彼は彼なりの方法で会社を運営している。無論敵も多いが、それ以上に味方も多い。彼の資料を少し勝手に改竄してやっただけであの評価。バイオネットの総帥とはいえ、別世界の方面を調べるのは少し下手なようだ

な)

牙儘が持っていた統夜の資料に関しては、一部はドライアスがGTの力で捻じ曲げていたものなのだ。

ドライアスにとって、転生者と呼ばれる存在を知った後、転生者が持っている知識や特典と呼ばれる別世界の能力は面白いものが多く、上手くいけば自分を完全復活させるための期間を短く出来る存在でもあったのだ。

実際、統夜の会社運営は下手かもしれないが、彼自身が《本気》で倒産に追い込んだ会社はあのデユノア社を除けば存在していない。

デユノア社の運営に関してはGTとしてもサタンの栽培以外はどうでもよかった会社だったので、統夜が介入しなくても、何時かは倒産するのは目に見えていた会社だったのだ。

統夜はできるだけリストラ等の人員カットは行なっておらず、どんなに小さなネジのような部品でも扱っている会社に対しても、できるだけ融資等ができるように対応している。

無論相手に発破をかけるために自分から敵をつくるような真似をしているし、会社を無理矢理乗っ取るようなやり方もしているが、相手の会社にいる家族や従業員を考え、下の組織扱いでできるだけ守ろうとしている。

言い方を変えれば、彼は利益を優先する面もあるのだが、逆に損を出しても救いたいと思つた存在は救おうとする存在なのだ。そのやり方は卑怯かもしれないが、彼はそれすらも自身の《罪》として被っている。

だからこそ、彼には敵も多いものの、敵から味方になる者も多い。やり方は甘ちゃんだが、牙儘のように『恐怖』や『死』で忠誠を誓わせ、縛ってはいない

統夜は損をするが、それでも助けてくれる存在もいる。牙儘にはそ

れが無いために、牙髭の手腕が幼稚としか言いようが無いのだ。

この身体の元持ち主である東堂雫（とうどうしずく）も、ただのレズ好きのヤンデレ存在で、喰われたという事以外を除けば、《男に穢された》という絶望でそれなりに得たが、それ以外は『転生先であった』だけの存在だった。

特典もそれなりに今まで以上の面倒がおきなくなるだけで、それ以外を除けば役に立つ部分など無かった。

織斑春樹というのがそれなりに使える駒だというのがわかったので、そのうちに利用するだけ利用して正式に自分の身体にすれば、完全復活は遂げれるが、それでは面白くないのだ。

まあこれから楽しみにしようとしてドライアスは楽しむことにした。自身の持っている《悪》としての最高の舞台を夢見て・・・

バイオネットが暗躍する世界に広がりつつある絶望を味わい人混みの中へと消えていった

第二十二話 訪れた平穩、友の帰還（後編）

「燐兄ちゃん、統夜兄ちゃん、はやく、はやく」

「ごめん、ごめん。少し片づけに時間かかってね…じゃあ、一緒に」

「「「「いただきま〜す」」」」」

手を合わせ元気な声が部屋いっぱいにひびくと、みんながいつせいに食べ始めた。

「ん、おいしく燐兄ちゃんのコンソメスープ」

「パンもふかふかして、柔らか〜い」

「はふ、燐兄ちゃんの作るご飯、おいしいよ」

ははは、久しぶりに作ったけど大成功かな…つと、オレも食べようとしたら、統夜くんがジツと見てる

「……な、なあ燐、そんなに喰えるのか？」

「え？ああ、少し足りないぐらいかな……それよりも早くしないと無くなるよ…」

「そ、そうか……じゃいただきます……うまい!？」

オレの前にある山盛りのパン、土鍋並のグラタン二つ、山盛りサラダ、コンソメスープを見て驚いた顔で聞いてきた。まあ普通じゃないかも知れないけど、これだけ食べないと《喰われる》から。コンソメスープを飲んで感嘆の声を漏らす統夜くんを見てたら、いつの間にか東さんとシャルが両隣に座っていた

「リツくん、ケガしてるよね。ハイ、あくん」

「隣、ロールキャベツたべるよね、はい」

「た、東さん？それにシヤル？大丈夫だから「はい、あくん」
……………うう、あ、あくん」

東さんのコンソメスープを飲んで、シヤルのミートパイを頬張った
……スープが躰に染み渡り、ロールキャベツのキャベツの甘み、肉汁
が溢れる食感……ん、美味しい

第二十一話 訪れた平穩、友の帰還（後編）

「「「「「ちそうさまでした」」」」」

子供達の元気な声が食堂にひびく、席を立つと食器を重ねワゴンに
載せてる

「……………食べた食べた。さて、片付けるかな」

「お、おい、ケガしてるんじゃない……」

「…大丈夫、もう治ったから……ほら、平気さ」

食器を洗うため、包帯を外してみせた。なんか驚いた顔してる。
まあ、この身体になつてからは美味しい食事をとれば大体の傷はすぐ
治る。まあ、たくさん食べないといけないけど

大小様々な食器を分けて水に浸け洗い始め高速乾燥機に入れてふ
たを閉じたながら。みんな残さずきれいにたべてるなあと思った

「燐、この鍋は何処にしまったらいいかな？」

「リツくん、このお皿とナイフ、フォークは？」

「シャル、鍋は左から二番目の棚に置いて、束さん、お皿は四番目のキャビンに、ナイフ、フォーク、スプーンは右から一番最初の引き出しに入れて」

「馴れてるんだな燐」

「ん、よくココには来るんだ……よつと、これでラストだ」

洗い分けた最後の皿を纏めて水から引き上げ、高速乾燥機に入れ、シンク周りをきれいに拭き終えて軽く息をついた。ココの神父で院長のザツファイさん、牧師のマニゴールドさん、カルディアさんがみんなの食事を作るだけあって配置は非常に使いやすいから助かる

「シャル、束さん、統夜くんも手伝ってくれてありがと軽くテイータ……」
「…燐様、サンジェルマン様がお呼びです」……つて咲夜姉さん？」

白のメイドキャップ、イギリス調濃紺のメイド服に身を包み立つのは、サンジェルマン城に勤めるメイド達の長《咲夜》さん。名字はわからないけど伯爵に古くから仕えてるしかわからないけど、夜天教会の子供達からはお姉さんって慕われてて、神出鬼没で呼んだらすぐに来てくれる人だ……

「伯爵がオレを？でも……みんなの」

「ココは私達がメイド隊が引き継ぎます。それと不動統夜様もお招きしたいと申しています」

「俺も？」

「はい、あまりお待たせするといけませんので」

……伯爵が統夜くんに会うのはわかるけど、オレもなんて珍しい。今まで通信や文章でしかやり取りだけしか接点がない

なんでかわからないけど、伯爵はオレに直に会うのを避けていたし……まあ、とにかく咲夜さんの言うとおりに待たせるの失礼だ、シャルと束さんにも説明すると納得したのか子供達と遊びながら待つって言うってくれたから、サンジェルマン城に向かったんだけど

「咲夜さん、ココでいいの？」

「はい、伯爵がこちらにお招きするようにとの言伝をいただいています」

頭を下げる咲夜さんの先には大きく掲げられた《愚裸美温泉》と書かれた看板と湯暖簾が掛かった場所……サンジェルマン城の巨大温泉施設の前にいる

「あ、でも着替えが、それに統夜くんの着替えも用意してないだろ？」

「ああ」

「ご安心を。お召し物ならば、のちほど私どもが用意して参ります。さあご緩りと……伯爵も後ほどお見えになりますから」

「ち、ちよ咲夜さ……あ、もういない……とにかく行くうか……」

「そうだな」

あつというまに咲夜さんの姿が消え肩を落としながら、統夜くんと一緒に脱衣所へ入る、インタークローラーコートを脱いでハンガーにか

け脱ぎ終えタオルをてにし、磨き抜かれた飴色の床に樹木を柱に利用した造りの扉を開け放つた

自然石を利用した広大な石畳、日よけの檜造りの小屋、檜の紹から滾々と湧き出す琥珀色の湯と岩場、風に揺れるる竹林をもつ温泉にオレは目が奪われた

「スゴいな……」

「ああ、とりあえず入るか」

統夜くんの言葉に頷くと手桶に湯をすくい離れた場所で身体へかけた…少しピリピリとするけど心地いいなと思つてると視線を感じる…

「ああ、これ気になる？普段は気のコントロールとコートで冷やしてるから見えないけど、こんな感じで体温があがるとね」

「よく来たね獅童燐くん、不動統夜くん。偶羅美温泉へようこそ」

「サンジェルマン伯爵？」

静など凜とした声が木霊す中、サンジェルマン伯爵が岩肌が目立つ湯屋から姿を見せた…なんかわからないけど…昔から知ってるような感覚にとらわれた

「こうして直に会うのは初めてかな。今まで我が財団の運営を円滑に進めるために必要な手続きにかかりきりになっていてね」

「い、いや…そんなことは」

「咲夜とクツキー、トリアからも度々目に耳にしていた…ID5、GG Gとしてバイオネットとの戦いに身を投じ数多くの人々、アフリカの解放点を守り抜いたことも感謝する」

「頭をあげてください伯爵。今までバイオネットとの戦いも、アフリカ解放点阻止にはココにいる不動統夜君とトリアさん達、力を貸してくれなかったら出来なかった…礼なら彼らにいつてください」

そう、この勝利はサンジェルマン伯爵、東さん、シャルロット、凍也、トリアさん達を始めとしたメイド隊、GG隊員、ガ・オーン、旧ガオーマシン、そして不動統夜くんの力が無ければもぎ取れなかった「そうか、不動統夜くん。改めて君にも礼をいわせてくれ。本当にありがとう」

「あ、先にもいったけどそんなに頭を下げないでくれ…：：：～」

「たしかにそうだ…：：：：：：：：：：：：：：～ゆつくりとこの温泉を楽しもう…：：～この湯はサンジェルマン城の地下から湧出した天然の温泉だ…：：～疲労とキズによく効く」

「じゃあ入るかな、さっそく…」

ゆつくりと掛け湯し、統夜くんも入ろうとした時だ、サンジェルマン伯爵が行く手を阻むように手を出した

「待ちたまえ二人とも…手ぬぐいを湯船に入れるのはマナー違反だ」

「あつ？」

静かに指さされた湯につかりかけた手ぬぐいをみながら、互いに顔を見合わせ笑いだした…伯爵もつられるように笑みを浮かべ。慌て手ぬぐいをたたみ頭に乘せ湯船に浸かる…琥珀色の湯が全身を温め

解すように流れ、湯気がふわりと立ち上った

ソレからしばらくして湯船から上がったオレと統夜くんはサンジェルマン伯爵からコーヒー牛乳を貰い一気飲みして、しばらくして晩餐会（正確には鍋。もちろんGGG隊員、トリアさん達も招いて）で会話を交えながら盛り上がった

そんな時、大河長官が統夜君に話しかけてきた

「不動統夜くん、バイオネット総帥とのやりとりを聞いたのだが…『女尊男卑の女性を精神崩壊させた』とあったのは事実かね？」

「…それに関しては否定しません、今さらだけどやり過ぎたって。でも今は悪夢で見るぐらいにまでにしましたけど」

「だがしかし、精神崩壊はやりすぎじゃろ？」

「ああ、それに関してなんですが」

統夜くんの世界にいる『GT』という組織から、世界情勢、彼が設立した『不動研究所』が有するテクノロジーを狙う各国諜報機関員による情報戦を含めた水面下での攻勢…ソレを聞いたGGGメンバーはやはりと思った

実は最近になってGGGが持つテクノロジーを篡奪しようとするバイオネットとは違う第三国の影が見え隠れしていると諜報部から上がっていた。これらに対しては霧矢を始めとした善忍が対処している（記憶消去なども）

でも流石に精神崩壊は…体温が上がりはじめるのを感じたのかコートが冷却していく。まあ最後まで聞いてみよう

「それに、精神崩壊のネタって、ここでも平気で出来ますよ？あと最初に火麻参謀、謝っておきます」

『『『…おっ』』』』

え？出来るの：回りの皆も驚いてる。でも何で火麻参謀に謝罪したのだろう？統夜君が静かに手を掲げた

「目を瞑って俺が今から言うのを想像して下さい。一応バケツとか紙袋とかを用意したほうがいいですよ。絶対に吐きますから。流石に言う側の俺も気持ち悪いんですから」

「・・・そ、そうなの」

「そりやああまりの気持ち悪さに、SAN値がこれでもかと言う位は行きますからね」

む、そんなにヤバいのかな：GGGの皆も袋を用意して目を瞑った。オレも目をつぶる

「暗い部屋にいて、どこからか光と声が聞こえて来たので目をあけて見ると・・・」

一泊。間を置いた：回りの気配から何が起るのが身構えてるのを感じ身を強張らせた時

「火麻参謀並の黒光りする筋肉をもつピンクのビキニをつけたオカマが自分に向けてウインクをして来た」

『『『『ツ!?♪☒◆※◆☒@*&』』』』』

「その場から逃げようとしたら、今度はその目の前に同じようなマツチョコで、しかもこれでもかと言うくらい股間の膨らみがあるオカマが現れて、抱擁しようとして来た」

な、なんて恐ろしいんだ。さらに紡がれた言葉に目を開けたオレの前にはGGG隊員が膝をつき、倒れ、悶えている何人かいる。ふらつきながら統夜くんをみるとスゴく申し訳ないの顔して、さらに

「そして、扉が見えたのでその扉をあけると、そこには世紀末覇者のような肉体を持ち、ゴスロリの魔法少女衣装で、おまけにネコミミ付きも付いていて、自分に向けて『何処に行くんによ』と言うのが前にいた」

『『『『ギやあぁ~~~~!!』』』』』

ドサツ：…つて音に振り返る：霧矢がビクビクと体を震わせながら倒れている：しかも白目むいて…

「き、霧也!!誰か医務室の人呼んできて!!クツキーさん」

「霧也様、しつかり…早くメデイカルルームに！」

ダメ押しと言わんばかりの言葉に、辛うじて立っていた残りの隊員も体を震わし膝をついている、まさに阿鼻叫喚の地獄絵図…あたりをみると少し顔色が悪い大河長官、火麻参謀、じいちゃん、オレとシャルロットだけしかいない。少し離れた場所にいる伯爵達や、東さんやユーノ、凍也、セシリアさんが向こうにいるから無事だ

「と、統夜くん、君は大丈夫なのかね？」

「う、流石に堪えましたよ…もう二度とやりたくないですね」

「そ、そうじゃのう…すまないのう？とりあえずこの話は終わりじゃ」

さつきのを口にした統夜も少し想像してたみたいだ…足下が少し震えてる？まあ、こんな感じで夜はふけていった

そして翌日、オレは何時ものように朝稽古をするため城から出た…広大な草原を歩いていると巨大な石碑が見えインタークローラーコートを掛け、脚を肩まで広げ目を閉じた…感じるのは風、草木と土、朝露の匂い

「フツ！」

踏み込みと同時に拳が空を切る…風が巻き起こる。調息しながら氣を丹田へ集め全身に行き渡らせていく…

「はっ…せい!!」

肘打ちと同時に膝蹴り、空を舞いながら急降下し蹴りを放つと地面が大きくめくれあがる…氣をさらに練りあげていくとキラキラとした光が全身に浮かんでいる。この感覚を意識しながら踏み込み、穿ち、蹴打、拳打を繰り返す。そのたびに空気が震え稀に破裂音が響く

「よし、そろそろ切りあげるか……!」

肌に感じた強烈な違和感、この気配がするのは空からだ。GGGへコールと同時に固めた拳を構え向けた時、見慣れたモノが広がった

「こ、これは…統夜君が来た時と同じ現象……!?!」

巨大な対極図を中心に無数の幾何学的円環が浮かんで消える中、中心からガラスを割れ感じたことの無い気が溢れだしてくる

氣の奔流に耐え捉えたのは氣の奔流に耐えながら目を向けた先には一人のトサカのような短めの黒髪に優しい翡翠色の眼、革ジャン姿の青年がいた…氣の感じから敵じゃないのはわかった。こちらに氣づいたみたいだ

「ん、人か?……ツ!?!」

なんか驚いてる…まあ、こんな躰見たら仕方ないか。枝からインタークレーターコートを羽織り改めて向きなおって彼をみた。さっきの現れ方は統夜君の時と同じだ

もしかしたらと思ひ話しかけてみる

「あの…もし違つたらすいません。不動統夜君の知り合いですか?」

「統夜を知ってるのか?」

「はい、彼は今、この先にあるサンジェルマン城にGGGの皆といます…オレはGGG機動IS部隊所属《獅童燐》といます」

「オレは亀山玄武。出来ればこの世界について教えてくれないか?」
「この世界についてですか?いいですよ。少し長くなるから歩きながらでかまいませんか、亀山玄武さん」

「ああ」

で、歩きながらでこの世界について…地球規模防衛組織GGG

《ガッツイ・ギャラクシー・ガード》、そしてバイオネット。この世界に統夜君が迷い込んでしまい誤解から霧也との諍い、疾風が視力を失い戦線を離れる中で、アフリカでバイオネットが企んだプラネットエナジー解放を防ぐために力を貸してくれた事も含めて全部を亀山さんに。

「そうか…：燐、君たちと統也が…」

「はい、統夜君が力を貸してくれ無ければアフリカ大陸は…：あ、着きましたよお〜い！統夜くん!!」

サンジェルマン城地下から日本へ戻るために三式空中研究所、三段飛行甲板IS空母、水陸両用IS整備装甲車が資材搬入作業と整備メイド隊の誘導でリフトアップ作業中、大河さん、火麻さん、じいちゃん、束さんと何か話してる統夜君に呼びかけるところこちらを向いた

「燐、どうした…：げ、玄武さん!？」

「統夜、ようやくみつけたぞ」

「燐、彼は?」

大河さんが不思議そう訊ねてきた。彼、亀山玄武さんは統夜君の知り合いで修行中に起きた空間の捻れ?に巻き込まれたと知って様々な世界を探してまわってた事を話した

「てえことは、不動は元の世界に帰れるって事だよな?」

「ふむ、間違いないじやろうて…：不動統夜君がこちらに転移した際の空間干渉ベクトルは亀山玄武君が現れた時と同じ数値じゃ…」

「うん、間違いないよ…：マルチバース間の行き来を可能にするなんて。うんうん、コレならレプトントラベラーに応用出来るよ、先生」

「……………！何故、篠ノ之束が…………」

「あれれ？東さんの事を知ってるのかな？亀山玄武くん？」

ああくやっぱり驚くみたいだ。統夜君の世界にも東さんが居るなら、亀山さんの世界にもいるってことだ。ソレに嫌悪の色と何かを感じてるみたいだ。オレを見た時と同じなんだけど

「ああ、いや…なんでも無い（…全然別人じゃねえか…まともすぎる！…それに篠ノ之束から神の力、幻想郷の龍神よりも遙かな高みに座す神の力が…この世界の篠ノ之束は一体？」）

「どしたの？気分でも悪いの？」

首をかしげる束さんに冷や汗を流してる亀山さん…やっぱりギヤップがありすぎるんだろかな？そうしてるウチに三式空中研究所、三段飛行甲板空母、水陸両用整備装甲車へ必要資材とサンジェルマンファウンデーションからガオーマシンの補修パーツが積み込み完了した。オレ、シャル、束さん、凍也、セシリアさん、じいちゃん、火麻さん、大河さんを初めとしたGGG隊員がずらりと並んだ。視線の先には亀山さん、そして統夜君がいる。大河さんが前へ出た

「不動統夜くん、君の協力でアフリカでのプラネットエナジー解放という未曾有の危機を乗り越えることが出来た。我々GGGは一生忘れなる事は無い…そしてありがとう」

「そんなことは無い…ここに居る全員が力を合わせなければ出来なかったですから…」

「そうかね…だが誓おう、我々GGGは君の世界に危機が訪れた時には必ず助けに来よう…世界は違えど必ず」

「統夜くん、これで帰ってしまうのはなんか寂しいな。もう少し話しをしたかったな…」

「まあ、コレが最期ってわけじゃ無いだろ？その時が来たら、ごちそうを山のように用意してまってるさ…」

「はは、楽しみにしてるよ…いつかバイオネットとの戦いが終わったら。そうだ教会の皆がコレをきみに」

「こ、これは…」

オレが手渡したのは夜天教会の子供達から渡してくれと頼まれた、たどたどし文字が目立つ寄せ書き、画用紙一杯に描かれた統夜君の似顔絵。亀山さんは笑顔を浮かべみてる。大事そうに手にした統夜君の顔にも笑みが浮かんでいる

「……さて、統夜、帰るとするか…」

「はい、燐……またな！」

対極図にもいた幾何学模様が空に広がり、亀山さんとファイバードを展開し纏った統夜君が空へあがる…大河さんをはじめとしたGG隊員全員が見送れる中、二人の姿が陰陽対極図に飲まれ同時に消えた

「行ってしまったね」

「ああ……無事に帰れたかな統夜君」

「大丈夫さ。彼は……」「」「」「勇者だからな」「」

大河さん、火麻さん、じいちゃん、束さん、オレの声はハモった…顔を見合わせ静かに頷き三式空中研究所、三段飛行甲板空母、水陸両用整備装甲車と共に帰還するため空へ浮上、サンジェルマン城をあとにした

ガオーマシン強奪からはじまり、バイオネットによるプラネットエ

ナジー解放を含めた一連の事件《悪夢の十日間》は異世界から来た不動統夜君と共に阻止する事で終わりを迎えた

でも、この時は知らなかった…臨海学校がはじまる前にオレ達GG機動IS部隊が統夜君の世界へ飛ばされ…そしてバイオネットの魔の手が伸びてることを

閑話 光なき双龍、その手をとる乙女

中国奥地、数ある霊峰の中で最も天に近く数多の星が落ちたような轟音が響き、水飛沫が幾多の虹を生む巨大な滝が流れ落ちるココは《五老峰》

凄まじい勢いで落ちる《廬山の大滝》を前に立つ少年、して編み笠を被る小さな老人が座していた

「疾風よ、わかるかの？眼前にある廬山の大滝を……」

「……………」

「……………この五老峰で学んだことを忘れた訳では無かろう……」

「老師…わかりません」

「傷が癒えたとはいえ、光が閉ざされた…自身に残された四感を極限までに研ぎ澄ますのだ……」

編み笠を被る小さな老人…老師に諭された少年…疾風は閉ざされた視覚以外の四感を極限までに研ぎ澄ました…光なき世界に身を置く

ただ感じるのは廬山の大瀧の音、そして大地に立つ感覚、水と緑の匂いを強く感じ取った

一週間前、疾風はラウラ、鈴と共に五老峰へ治療のため、そして師である老師へ再び指導を受けるために戻ってきていた。そして廬山の大瀧の前へ二人に寄り添われ立つと呼びかけた

『老師、竜崎疾風です。どうかお姿をおみせください！ろ…』

『ふおふお、そう声を大きくせんとも聞こえておるぞ、久しぶりじやの疾風よ。知らぬ間に可憐な花を二輪とはすみにおけぬのお。ほっほっほっ』

ふわりと、笑みをむけ杖をつき歩く老師…この地上で神《冥王ハーデス》を討つ為に女神《アテナ》を護る十二人の黄金聖闘士として戦った一人。天秤座《ライブラ》の童虎が降り立つ。二輪の可憐な花といわれ慌てはじめた

『ろ、老師、ラウラと鈴は…そ、そんな…それよりお久しぶりです……あ、あの老師?…』

『して、疾風よ。その目はどうしたのだ?』

『そ、それは……』

『あ、あなたが老師様なのか?お願いだ!私の嫁を助けてくれ!!』

『ちよ、ラウラ、老師様に失礼よ。廬山の老師さま、疾風を、私たちの疾風を助けて…お願いします!!…』

『……ふむ、二人とも話を聞かせてくれるかの?』

疾風を庇うように膝をつき頭を下げるラウラ、鈴のただならぬ雰囲気
気に童虎は二人から話を聞いた。そして目を閉じた

(……まさかゴルゴン三姉妹の一人と戦い、二人と銀髪の乙女の友を救うために目を…疾風よ。お前はココまで我が弟子《紫龍》と同じ行いを。友、そして義の為に戦う…哀しくもあり喜ばしいことであるが)

かつて、己の全てを教え伝え…友の為、女神アテナの為に戦い自ら

傷つく事を厭わない。義を重んじる不器用な弟子《紫龍》と重ね涙した

何よりも疾風を案じ、この霊峰《五老峰》まで来た二輪の花：ラウラ、鈴に紫龍の無事を思い待ち続けた春麗と

しかし、童虎はわかってしまう

たとえ光無くとも、疾風は友の為、未来の為に戦いの場へと戻る事を

その為に、光に頼らない力を手にするためにココへ戻って来た。そして今に至る

(疾風よ：お前は紫龍に似ておる…。なぜこうも似てしまったのじゃ、背にある双龍がそうさせるのかのう：神代の時代にいた天秤座の黄金聖闘士と同じ双龍の証を)

《背に二つ龍を持つ者、真の要となる者なり。星を砕く武具を正しき事に用い、邪悪なる神の望みをも断つ》

神代の時代：聖衣生まれし大陸《アトランティス》で、邪悪な力に？まれた《巨大な亀の守護神》を生まれたばかりの黄金聖衣を纏い《神鳴る力》で殴り殺した《神殺しの獅子》と共に当代の女神アテナに付き従った天秤座の黄金聖闘士の背には猛り狂う《双龍》の証があったと伝えられ以降、歴代天秤座の黄金聖闘士は背に猛々しく、時に優雅な証を持つ者が歴任していた

童虎は前任の天秤座から聞かされていたのを思い出しながら疾風から目を離し、別方向を見ると岩陰から銀髪とツインテールが見え隠れしている

『ラウラ。もう少し詰めなさいよ。老師様にバレるでしょ!?!』

『む？そちらこそ詰める……それよりアレが日本で言うゼンというもののなのか……』

『全然違うから！つたくどこでそんな変なのしつたの？』

『クラリツサからだ。さすがは我が部隊一のヤーパーン通だ、いろいろと為になる。あの滝の前では身体が冷えてしまう。今宵はテルマエで夫として私の肌で暖めてやらねばならんな』

『な、な、なにいつてんのよ!!つて言うかは、は、は、は、肌でつて。う、うらやま……あんたはいろいろすつ飛ばしすぎよ!!あ、あたしだつて疾風と……その……でも最初は痛いし……きれいな夜景の見える場所なら』

『ふむ、それもいいな。しかしヤーパーンには人気の無い公園や、フェスタの日に神殿の裏や中で二人つきりで契るといいと……』

『だ・か・ら！アンタは部下の言葉を真に受けないの!!……それに、いまは』

『……ああ、少し冗談が過ぎたようだ……鈴』

『わかったんならいいわよ……疾風、大丈夫かな』

『……Dr. ヘルガは限りなく0とっていた……でも決めただろう？』

『……もし、光りが戻らなくても。私は……いいえ私たちは』

『疾風を護る。そして帰る場所になるんだから』

轟音と共に流れ落ちる廬山の大瀑布の中の前に立つ疾風の耳に、ラウラと鈴が口にした言葉は聞こえない。しかし天秤座、ライブラの童虎《ドウコ》の耳にハッキリと聞こえ、編み笠と深い皺、髭でわからないが笑みを浮かべる

(……………疾風を護り、帰る場所になるか…………ラウラ、鈴…………ワシがこうして顕界していただけるのも、コレが最後なのかも知れぬ。もしもの時は疾風を頼むぞ…………)

そう、二人に願ったその時だった。強烈で闇よりも深い悪意、この世界に満ちる闇と同じ存在を童虎は感じた時。大瀑布が生み出した激しい流れが削り抜いた水底に置かれた黄金の箱、《天秤座の黄金聖衣櫃》が震えだし光りが溢れ、天秤座の黄金聖衣が姿をあらわすと同時に分解、剣、坤、槍、円盾、トンファー、三節坤が水底にふわりと浮き、先の悪意に警戒するかのようには陣を取り様々な方向へ切っ先を向け動いた

(…………ワシの聖衣が反応した…………また来たのか…………)

邪悪な気配を数ヶ月で何度も感じていた童虎…………だがこの仮初めの躰では黄金聖衣を身に纏うことすら出来ないのだ。齒がゆさを感じるも今は疾風に指導をつけるしかないのだ

「はあ、はあ…………」

「疾風よ、闇の中にて光射さぬ世界で頼りになるは何かの？五老峰で学んだことを思いだせ…………」

「はい、老師」

GGGの仲間たち…………友の元へ戻るために老師にうなずき修業に集中する疾風…………轟々と流れ落ちる廬山の大瀑布の轟音を見に受ける姿

を鈴、ラウラは岩陰から見守るしかない
双龍は再び天翔る日は果たして：

閑話 光なき双龍、その手をとる乙女

了

第二十二・五話 平穩（前編）

「燐、早く早く」

「ち、ちよ!? シャル、あんまり引っぱるなって…」

リニアの改札を抜けたのは、プラチナブロンドの髪を揺らしISS学園制服姿の男女：GGG特別隊員でISS学園に通うシャルロット・レオンリーヌに腕を引っぱられるのはGGG機動ISS部隊所属兼ISS学園生の獅童燐。踏鞴を踏みながらかけてく姿は恋人にも見え、他校の生徒からも好奇の目が向けられている。くるりと回り燐の腕に抱きついた

「もう、早くしないとリニアに乗り遅れちゃうよ?」

「わ、わかったから…だから離れてくれないかな（む、胸が…柔らかくて挟まれてるから!）」

「やだよ。寝坊した燐が悪いんだから♪ペナルティだよ」

有無を言わさないシャルロットの笑顔に押され、体温が上がりドキドキバクバクする燐と共に、乾いた空気音と共にドアが閉まるとゆつくりとリニアが動き出した。久々の休日をもらった二人が向かうのは最近オープンしたばかりの総合商業施設《ディーヴア》。何をしに行くかというと少し時間を巻き戻すことになる

1日前、ISS学園寮での事だった

「ね、ねえ燐…いま、いいかな」

「どうしたんだシャル?こんな遅くに?」

悪夢の10日間、新型サポートISS運用テスト時に現れたゾンダーにより不動統夜君の世界へ転移し帰還したオレたちは報告書を纏め上げGGGへと送り一息ついた時。控えめな声が響きドアを開けるとパジャマ姿のシャルが顔を俯かせもじもじしながら立ってた

「え、えっと…」

空調が効いてるけど夜も遅いし、女の子を立たせるのはいけない。部屋に入れ椅子を勧め冷蔵庫から今朝作ったシヨウ兄直伝水出し緑茶を薩摩切子の器に入れてシャルに出した

「きれいなグラスだね…」

「前に宇宙開発公団の試作シャトルのテストをした時にいったタネガシマの宇宙開発機構の所長さんから貰ったんだ…」

サツマキリコを手にして目を輝かせながらちよこんと椅子に座る…もしかしたら統夜君の世界で知った事がまだ引つかかっているのかもしれない

アフリカで姿を見せたバイオネット総帥、そして不明瞭だったその目的が見えてきた時に統夜君の世界に跳ばされた時に予備知識として釘を刺されながら語られた《勇者王ガオガイガー》の物語で、ゾンダーを浄解する力を持つ《天海護》くんの素性…緑の星の指導者カインの息子だという真実を聞いて、シャルの様子がおかしい。戻って来ても一つ疑問がある。オレの命を繋いでいるGストーンは二十二年前に飛来し着陸したGクリスタル内部からみつかった《七つのGストーン》の一つだ。調査時に行われた外宇宙よりの飛来物で高度な文明を有する知的生命体の存在、元素測定結果によれば5億345年前に構築されたモノで、クリスタル自体が無限情報サーキットであることだけ…内部透過検査では統夜君が言うGは見つからなかった

そしてシャルが持つGストーンのペンダントを調べただけ…別な用途で産みだされたような痕跡と243年前に作られたと旧ID5（GGG前身組織）時代の爺ちゃん達、GGG三式空中研究所スタッフの手で明らかになった

でも22年前にGクリスタルは地球へ落下した。シャルのGストーンペンダントは243年前に作られたモノ…明らかにおかしすぎる？Gクリスタルが無ければ産みだせないはずだし…

「あ、あの燐？…どうしたのなんか悩んでるの？」

「い、いや、なんでもないから…」

心配そうな声にあわてて思考の海から抜ける…Gクリスタル、Gストーンペンダントのことは爺ちゃんにまかせるか。それよりシャルに明るく元気になつて貰いたいし

女の子を元気にする方法ってどうしたらいいか…蓮童師父やレグルスアニキは教えてくれなかったし…女の子を笑顔にする、元気にする方法…オリエなら…あ!?コレだ!!

「……シャル」

「な、なに隣!?!」

「明日、デートしよう!!」

「え、ええ——?!?!?!」

切り子のグラスを持つシャルの手の上に手を重ねた…顔を真っ赤にしながら何度も何度もコクコク頷いて、トントン拍子に待ち合わせ場所と時間を決めて、フラフラと部屋を出て行った…うう、オレ。なんかとんでもないことしたかも。躰が熱くなってきた

もう一回、キンキンに冷えた水風呂（氷点下—24.3°）入って頭を冷やそう!明日は早いし!……入る度にボコボコお湯になるのを繰り返してるうちに眠ってしまったらデート待ち合わせ時間10分前。あわてて私服に着替えて（冷却システム内蔵）、待ち合わせ場所に向かったオレが見たのは

「——隣、遅いよ」

笑顔を向けるシャルがいました…迷わずDO・GE・ZAを敢行。だってスゴく怖かったしひたすら何度も拝むように謝ってたら

「…じゃ、ゆるしてあげる。そのかわり」

「?、な、なに?」

「デ、デートが終わるまで、ぼ、ボクとて、手をつないで!そしたらゆるしてあげる」

「え、ちよっ・シャル、ひ、引っぱらないで?」

……シャルをデートに誘って遅れたのはオレだし……なにより今日は楽しんでくれるようにしなきゃ、そう心に決めりニアの席に座りながら重ねた手を握った

第二十二・五話 平穩（前編）

IS学園より離れた湾岸部にある建設途上海上都市……その海中にあるGGG本部ベイタワー基地。日夜バイオネットの企みを打ち砕き続ける我等が勇者ISおよび六つのエリアの中央ヘキサゴンにあるメタルロッカールーム。

そこでは異世界より訪れた不動統夜によりもたらされた支援ISAライアン、ガンキッド。恐竜型メカダイナドラグーン、《アシストマシーン》、そしてG・ギアレオンの再調査と調整に東、獅童博士、ユーノ、サンジエルマンファウンデーションより派遣されたメイド整備隊が進めていた

「トリアさん、ステルスガオーのウルテクエンジンと展開装甲のクリアランスマツチングをお願いします!」

「ふんふん、よしコレでどうだ!」

端から見れば旧ステルスガオーにしかみえないが。操作すると翼部がスライド、竹が割れるよう展開と収容を繰り返し、ウルテクエンジンユニットが明滅する……メイド整備隊、GGG整備班も息をのんだ

「うん展開時間は問題ないね。んじやドリルガオーいつてみよ♪」

手早くステルスガオアの各種システムバージョンアップ作業を進めるトリアはドリルガオアをまえにし目を耀かせた：視線はすでに金色の螺旋衝角に釘付け息を荒くしながらプログラミングし、最後にキーを軽く叩くとドリルが伸縮と同時に金色に耀き打ち出された。テスト対象に簡単にぶち抜いた

「っしやあー重力子コーティング成功！これぞドリルの醍醐味よ！穿て！貫け！天元突破あああ!!」

ガッツポーズしながらはしゃぐ様にメイド整備隊、GGG整備班も自然と笑みがこぼれる：先の転移事件での技術交換と戦いを共に乗り越えたことで互いの絆は強まり、中には交際を始めたモノも多く、サンジェルマン・ファウンデーションからGGG転属を願いでるメイド整備隊もいるほどだ

「ガオファイガーの戦闘データを移植作業を開始します。トリアさん、休憩をとらないんですか？」

「ふふふ、こんな楽しいことをまえにしたら疲れも吹き飛ばわよ。ソレにサンジェルマン伯爵からも頼まれてるからね……燐様の為に完璧に仕上げないと」

旧ガオーマシンはGGG整備班、サンジェルマンファウンデーション整備メイド隊の手で重力子技術を組み込まれ新生ガオーマシンとして生まれ変わろうとしていた

「青春じゃのうらさて、ダイナ君やGSライドの稼働効率はどうかえ？」

『ギャオ!』

元気よく答える真紅の恐竜に笑みを浮かべ撫でると尻尾を嬉しそうに振る：彼の名はGDA-02ダイナドラグーン。不動統夜によりもたらされたアシストマシンの発展型であり、世界十大頭脳の一

人《獅童レイジ》博士の思考をコピーした超AIにより自立行動も可能な新たなGGGの仲間である。彼には我々が知らない秘密が隠されているが次の機会に明らかになるだろう

「そうか調子はよいかの。不動君には感謝じやのう……束くん、ジェネシ……いやギャレオンはどうかの?」

ダイナドラグーンをなだめながら隣にいる束に声をかけた……無数のフローティングウィンドウを開きながら目にも止まらぬ速さでタイピング、HUDを被りながらメカウサ耳が忙しく動く……レイジの声に手が止まりディスプレイが上へせり上がる

「ギャレオンは異常ないよ……でも」

「でも?なんじゃ?」

「……………私は自立行動を組み込んだ覚えはないのに動いてる。三十数年前に確認されたエネルギーがGストーンに融合してる……あり得ないよ」

「見せてくれるかの……………これは!」

束からみせられた解析結果……ギャレオンの内部透過図にはオリジナルGストーン《I》ISCコア……エネルギー波形が示すのは三十数年前、オーボスから地球を守った星の勇者等が発するエネルギー波形と同じモノだ。自立行動機能を与える前に封印されたG《ジェネシツク》には無かったのだ

顎に手を起き思考の海へ潜るレイジの頭に一つの可能性がうかんだ

(アフリカの解放点、キリマンジャロ、たしか三十数年前に獅子に似た新たな勇者が現れた場所と重なる……まさか!)

「束くん、あくまでワシの推論じゃが……ギャレオンには三十数年前に地球を救った勇者のエネルギー体が宿ってる可能性があるかもしれない

ん…」

「地球を…救った勇者…：あ、ありえないよ？だつたらリツくんにこれ以上ギャレオンを使わせるわけにはガオファアの再設計を」

「しかしのお。ギャレオンとフュージョンした燐のバイタルを見てくれぬかの？」

「え？な、なんで…」

フロートイングウインドウに映されたのはガオファア、ガイガー時のバイタルと細胞抑制指数値…前者と違い明らかに安定している…なにより驚いたのはガオガイガーへF・F《ファイナルフュージョン》後も変わらない数値に目を疑った

「おそらくじゃがギャレオンに宿る地球の勇者が燐の躰を守り、オリジナルGストーン同士が共鳴し抑制システムが強化されてるのかもしれない」

「地球の勇者…リツくんの躰を？」

「そうとしか考えられんわい。まさに人智を超えた力じゃわい…束くん、今はワシラが出来ることをやろう…」

「はい、あ、あの…：レイジ先生、あれは完成したんですか？」

あれ…その問いに振り返りながら手招きする。床が動き出し様々なケーブルにつながれたギャレオンを残し下へ移動していき微かな振動と共に止まり、灯りがついた

二人の前には金…オレンジ色にも似た輝きを持つ巨大なハンマー…あらゆる部分にケーブルが見え嚴重に拘束され静かに鎮座してい

る

「…開発自体は転移事件前に終了しておる…本来はガオファイガー用なんじゃがの…」

「じゃあ直ぐにでも使えるんじゃ…」

「ダメじゃ…重力子技術を使って強化されたガオマシンとFFしたガオガイガー、アシストマシン、ダイナくんがあつたとしても、今の状態の燐が使えば命を…」

「…リツくんの命と引き換えに使わせないよ！」

「…っ…そうじゃの…そうじゃの…」

東の懇願にも似た声が木霊する。苦い表情を浮かべレイジはただうなずくしか出来なかつた…

同時刻…鳴り響く蝉の声、ときおり流れる風が木々の葉を揺らす。燦々と太陽が輝きの下には土塀に囲まれた古い木造寺院…欄干に力強く《厳光寺》と銘打たれる伽羅の中には大仏が座す眼下にGGG長官《大河幸太郎》、そしてスーツにみを包む眼鏡を掛けた壮年の男性が姿を見せた

「久しぶりだなゴールドタイガー…いや今はGGG長官だったか」

「急に呼び立てして申し訳ありません高杉光一郎元す…」

「今日の私は私事で来てるのだが、まあ夏は元帥でも減衰するからね……ん?どうした?」

夏の暑さが一気に氷点下並みの寒い駄洒落に一気に体温が下がった昔から彼、高杉光一郎。現地球防衛機構軍最高司令官にして元帥の座につく切れ者、かつてオーボスとの会談で停戦まで持ち込むほど互角に渡り合った英雄でもある。年を重ねてもその切れは衰えることを知らない

I D 5時代にはバイオネットによるテロを共同作戦を持ちかけ成功に導き、大河幸太郎とは戦友の間柄でもあったのだ

「い、いえ……では高杉さんでかまいませんね……」

「ああ、ソレで私に聞きたいことがあるとは何かな」

飄々としながら板間に座り静かに訊ねる光一郎、大河は衣佇まいを正し面と向かい、発したのは

「三十数年前、この地球をオーボスから救った勇者達、彼等を率いた《隊長》：彼がドコにいるかをおしえてください」

「……」

鹿脅しが鳴り、光一郎は微かに瞳を見開いた……

第二十二・五話 平穩（前編）

了